

宮城県多賀城跡調査研究所年報1992

多賀城跡

宮城県多賀城跡調査研究所



序文

特別史跡多賀城跡附寺跡の調査が開始されてから 32 年、当研究所が昭和 44 年に県立の研究所として設立され、計画的に調査をはじめて 23 年が経過しました。

この間、研究所では、五ヶ年計画を積み重ねる方法で、所定の目的をもって調査を実施してまいりました。その結果、調査の進展にともない多賀城の解明も進み、環境整備事業の促進ともあいまって史跡の保存・活用などその重要性が広く県民をはじめ多くの人々にご理解いただけるようになりました。

平成元年度からは、第 5 次 5 ヶ年計画のもと、東門の南西一帯、多賀城内で最も広く平坦面の確保出来る大畑地区の調査を計画し、この地区における官衙の構成と変遷を解明することとしました。

平成 4 年度は、第 5 次 5 ヶ年計画の第 4 年次に当たり、第 62 次・63 次調査を実施しました。第 62 次調査は大畑地区の南部、第 63 次調査は同地区東門のすぐ南を調査し、大畑地区の官衙が城内で最大の規模をもつこと、平安時代に整備され、発展した様子を解明しました。

本書はその成果をとりまとめたものです。

調査全般にわたり、多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生方並びに文化庁のご指導、多賀城市をはじめ関係各方面の方々の多大のご協力に対し心から感謝申し上げます。

本報告書が東北古代史解明の資料として、広く活用され、遺跡の保護保全に寄与することが出来れば幸いです。

平成 5 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 千 葉 景 一

目 次

I 調査の計画	1
II 第 62・63 次調査	3
1 調査の目的	3
2 調査経過	5
3 発見した遺構と遺物	6
1) 第 62 次調査	6
2) 第 63 次調査	72
4 考察	89
1) 第 62 次調査	89
2) 第 63 次調査	105
5 まとめ	107
III 付章	109
1 関連研究・普及活動	109
2 研究成果刊行物	111
図版	113

例 言

1. 本書は平成 4 年度に実施した多賀城跡第 62 次調査と第 63 次調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査の測量原点は政庁正殿跡(SB150B)の南入側柱列の中央に埋設したコンクリート柱である。原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線の方向は真北に対して 1° 4'00" 東に偏している。
遺構の位置は南北・東西の基準線からの距離で示すこととし、例えば南北の基準線から東 50m の位置は E50 ないし E50m のように記している。
3. 政庁跡の遺構期と瓦の分類基準については宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡—政庁跡本文編一』1982 による。
4. 土色については『新版標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄:1976)を参照した。
5. 本書の作成にあたっては千葉景一・進藤秋輝・丹羽茂・真山悟・柳沢和明・村田晃一の協議・検討を経て、執筆・編集は I・III を進藤、II の第 62 次調査を柳沢、第 63 次調査を真山が担当した。なお、第 62 次調査の漆紙文書については鈴木拓也が執筆した。
また、これらの作業を内海薫・三浦幸子・管野礼子・佐藤良江・鈴木敬子・鈴木文子・佐藤友子・小幡悦子・高橋幹子が援けた。

I. 調査の計画

平成4年度は第5次5か年計画の4年次に当たる。計画では第62次調査が大畑地区、第63次調査が政庁南西前面地区であったが、多賀城市が計画している建物復原整備計画が遅延していることから、政庁南西前面地区を大畑地区に振り替えて実施した。

大畑地区の地形は、城内の最高所にある外郭東門から西の六月坂地区までは平坦で、南へ緩く傾斜しているが、東西200m、南北300mと城内では最も広い平坦地が確保できる。

これまでの調査で、外郭東門から西門に通じると見られる東西道路をはじめ、道路に開く八脚門、その南に展開する掘立式建物群や竪穴住居群、井戸などが相次いで発見され、また、平坦地の広さから、この地区には幾つかの職掌を担う実務官衙ブロックが集合する可能性も想定され、実務官衙の構成単位とその区画施設の解明も課題となった。さらに、第60次調査では9世紀前半にあたるS E2101井戸跡から弘仁～天長年間の紀年銘のある漆紙文書や、木簡が多量の土器と伴出し、土器編年の上でも極めて貴重な資料が得られた。

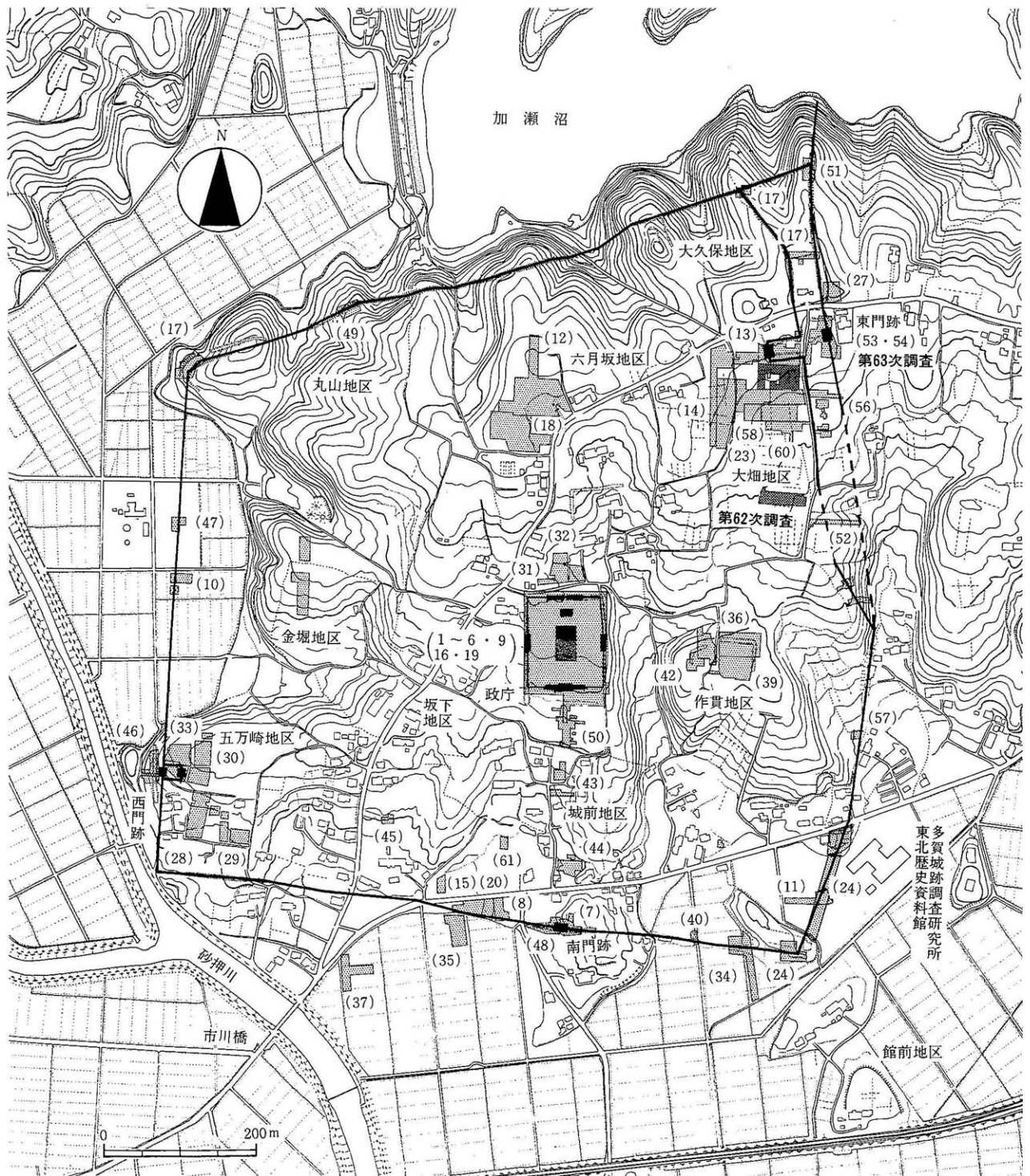
特に、この地区の遺構が8世紀中頃から10世紀にかけて7段階に変遷し、9世紀初頭になってから、整備充実している事実が把握された。このことは、これまで解明していた奈良時代と平安時代での外郭東門の位置変更とも関連して、両方の時代の実務官衙構成の違いという大きな問題を提起するものであった。

そこで、今年度は官衙の南への展開を把握することを目的に第62次調査を、官衙の北端と東門との位置的關係を把握することを目的として第63次調査を実施した。

本年度の調査地区・面積・予算、および第5次5か年計画は表1のとおりである。

年次	発掘調査回数・対象地区	調査面積		予算
平成 元年度	(1)第56次調査 大畑地区北半部	1,550 m ²	2,050 m ²	29,000 千円
	(2)第57次調査 外郭東辺南半部	500 m ²		
平成 2年度	(1)第58次調査 大畑地区中央部	1,470 m ²	2,370 m ²	30,000 千円
	(2)第59次調査 大畑地区中央部東側	900 m ²		
平成 3年度	(1)第60次調査 大畑地区中央部	1,250 m ²	1,350 m ²	30,000 千円
	(2)第61次調査 鴻ノ池地区	100 m ²		
平成 4年度	(1)第62次調査 大畑地区南半部	1,116 m ²	2,766 m ²	38,000 千円
	(2)第63次調査 大畑地区北半部	1,650 m ²		
平成 5年度	(1)第64次調査 大畑地区	1,500 m ²	2,300 m ²	35,000 千円
	(2)第65次調査 城前地区	800 m ²		
合計	10地区		10,070 m ²	163,000 千円

表1 多賀城跡発掘調査第5次5か年計画(平成5年度は計画)



既発掘調査地区
 平成4年度発掘調査地区

第1図 多賀城跡調査実施地区

Ⅱ. 第62・63次調査

1. 調査の目的

【調査対象地】

第62・63次調査は多賀城北東部の大畑地区を対象としている(第1・2図)。本地区は塩竈―総社宮―市川橋を結ぶ道路の南に位置する標高40～50mの緩斜面に立地しており、城内では最高所にある。その広がりには東西300m・南北300mで、東側を外郭東辺に、西側を南から入り込む沢によって画されており、城内最大規模の実務官衙と見られる。

【これまでの調査成果】

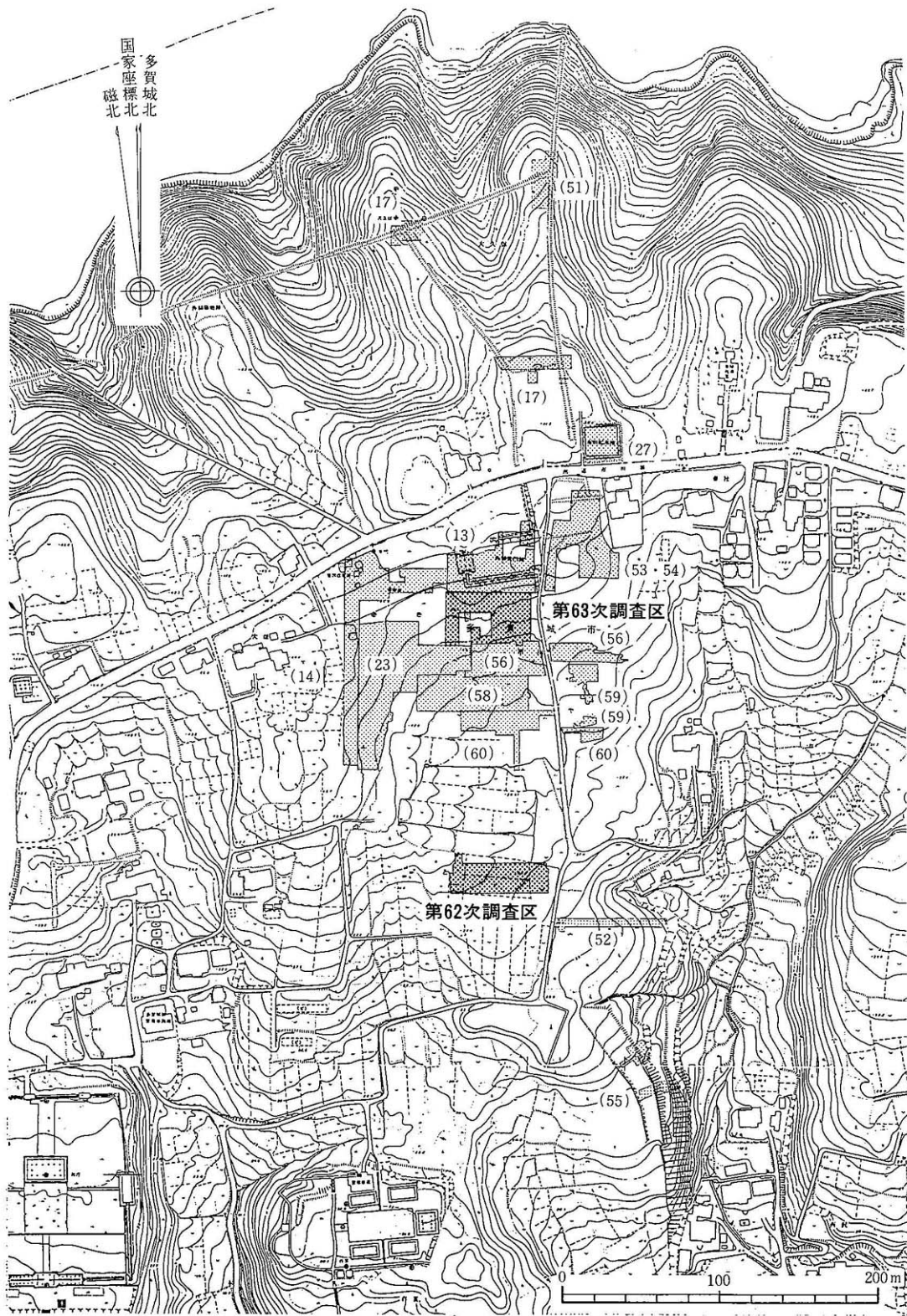
外郭東門地区を含む大畑地区では、これまでに第13・14・23・53・54・56・58～60次調査を実施し、以下の事柄がわかってきている(『多賀城跡調査研究所年報』1971・1974・1987～1991)。

奈良時代の主な遺構にはSF380 築地、SB1762 外郭東門、その南に位置する桁行15間以上、梁行4間の東西廂付きの長大な南北棟、その西側に集中する11軒の竪穴住居跡、さらに西のSB707 八脚門とその南に軒を揃えて並ぶSB807・711 南北棟などがある。奈良時代の建物跡の密度は希薄であるが広範囲にわたって分布し、その一方で竪穴住居跡が集散的に分布する区域もあることが判明している。奈良時代のSB1762 外郭東門とSF380 築地は、宝亀11(780)年の伊治公皆麻呂の乱によって焼失し、これらの修復後に外郭東門・築地が西側へ移され、平安時代のSB307 外郭東門とSF300 築地が新たに造営されている。この後、外郭東門の南側では建物が集中し、何度も建て替えられるようになる。

これらの建物跡などを中心に検討した結果、本地区の実務官衙が8世紀中頃～10世紀前半にかけて機能したものであり、9世紀後半に最も盛行したこと、7時期(A～G期)に区分され、各時期を通じて1～2棟の比較的大規模な建物を中心にいくつかの小規模な建物からなることが明らかとなった。また、平安時代では建物の集中する地域の西側には竪穴住居跡が集中しており、本地区の中で場所の使われ方に違いがあったと考えられている。

【調査の目的】

大畑地区については、実務官衙の広がりや性格の解明を目的として、1989年度の第56次調査以降、第5次5ヶ年計画による継続調査を実施している。本年度はその第4年度にあたり、同地区における実務官衙の南への延びの確認を目的として第62次調査を、また北端の確認を目的として第63次調査を実施した(第2図)。第62次調査では平安時代の外郭東



第2図 第62・63次調査とその周辺の地形図

門の南約 200m の地点に東西 62m×南北 18m、面積 1116 m²の調査区を設定した。一方、第 63 次調査では平安時代の外郭東門のすぐ南、第 56 次調査西地区の北に隣接して、東西 55m×南北 30m、面積 1650 m²の調査区を設定した。

2. 調査の経過

第 62 次調査は 5 月 6 日より開始し、測量基準点と調査区の設定、器材搬入に引き続き、調査区東端から表土除去を開始し、5 月 19 日に終了した。次いで調査区の西端より遺構検出に取り掛かり、6 月 29 日までに主な掘立式建物跡・竪穴住居跡・土壇・溝などを検出した。その結果、調査区西部で S B 2137～2143 建物跡、S I 2150 住居跡、中央部で S B 2144～2146 建物跡、S I 2151～2159 住居跡、S K 2168～2171 土壇、東部で S B 2148・2149 建物跡、S I 2160～2164 住居跡、S K 2178 土壇などを検出した。建物跡が多数検出されたことから、平安時代の外郭東門の南約 200m の地点まで大畑地区の実務官衙が広がり、規模は城内最大と判明した。調査区北東部では表土の下に 2 枚の堆積層があり、これらに覆われて建物跡・住居跡・井戸跡が検出され、残りが良かった。また、中央部の南側も遺構の残りが良く、S I 2153 住居跡はカマド・煙道・煙出しが壊されずに遺存し、S B 2144 建物跡も良好な状態で検出された。ただし中央部の北側と西部は大きく削平され、遺構の残存状況は悪かった。また、S I 2153・2160 住居跡、S K 2167 土壇からは多数の土器が出土し、良好な土器資料が得られた。これらの遺構精査と併行しながら、8 月 4 日より平面図を作成し始め、9 月 10 日までに調査区全体の平面図をほぼ作成し終えた。その後、各住居跡・建物跡の補足調査、写真撮影などを行い、10 月 29 日までに調査を終了した。

一方、第 63 次調査は 8 月 20 日に調査区の設定を行った。そして第 62 次調査の精査を実施する傍ら、8 月 25 日から表土除去を開始し、10 月 8 日から遺構の検出作業に入った。その結果、10 月 21 日にかけて S B 1896 建物跡や柱穴群の他、S I 2209 住居跡が検出され、11 月 11 日までに S I 2110・2111 住居跡や S X 2215 土器埋設遺構が確認された。その間、10 月下旬から S B 1896・2205 建物跡や S I 2209 住居跡などの遺構の掘り下げに入った。このうち S B 2209 建物跡については、その位置が調査区南部から第 56 次調査区にまたがるもので、同次調査段階で推定された建物構造と異なる可能性が高くなったため、11 月初めに確認のための拡張を行った。このような遺構精査と併行しながら、11 月 2 日からは平面図作成を開始し、併せて柱穴の断ち割りを加えた建物の検討とその断面図作成、住居跡その他の補足調査や写真撮影を行い、11 月 30 日に調査を終了した。

なお、9 月 10 日には多賀城跡調査研究指導委員会の現地指導を受け、11 月 12 日に報道

機関に対して第 62・63 次調査の成果を公表し、11 月 14 日に現地説明会を実施した。

3. 発見した遺構と遺物

1) 第 62 次調査

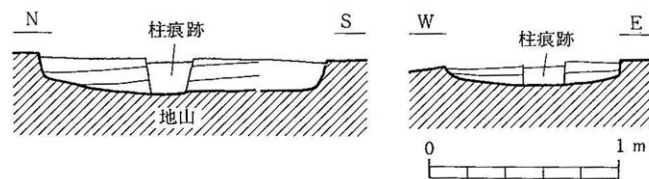
検出した主な遺構には、掘立式建物跡 13 棟、竪穴住居跡 15 軒、井戸跡 2 基があり、この他、多数の溝、土壇、ピットなどを検出した（第 4 図）。ここではこれらの遺構の中で主なものについてこの順に記述する。

なお、調査区の北東部には遺物を含む自然堆積の第 2・3 層が堆積し（第 4・55・61 図）、それ以外では第 1 層（表土）の下が地山面となっている。第 2 層は褐色土で須恵系土器を含み、第 3 層は暗褐色土で須恵系土器を含まない。竪穴住居跡などの主要な遺構は第 3 層に覆われる。地山面は岩盤ないしその風化堆積層で、場所によって地山面は異なるが、以下、両者を区別せず、単に「地山面」と称する。

(1) 掘立式建物跡

SB2137 掘立式建物跡（第 3・5 図）

調査区西端に位置する南北



第 3 図 SB2137 建物跡柱穴断面図

5 間、東西 3 間の南北棟で、東に廂が付く。地山面で身舎

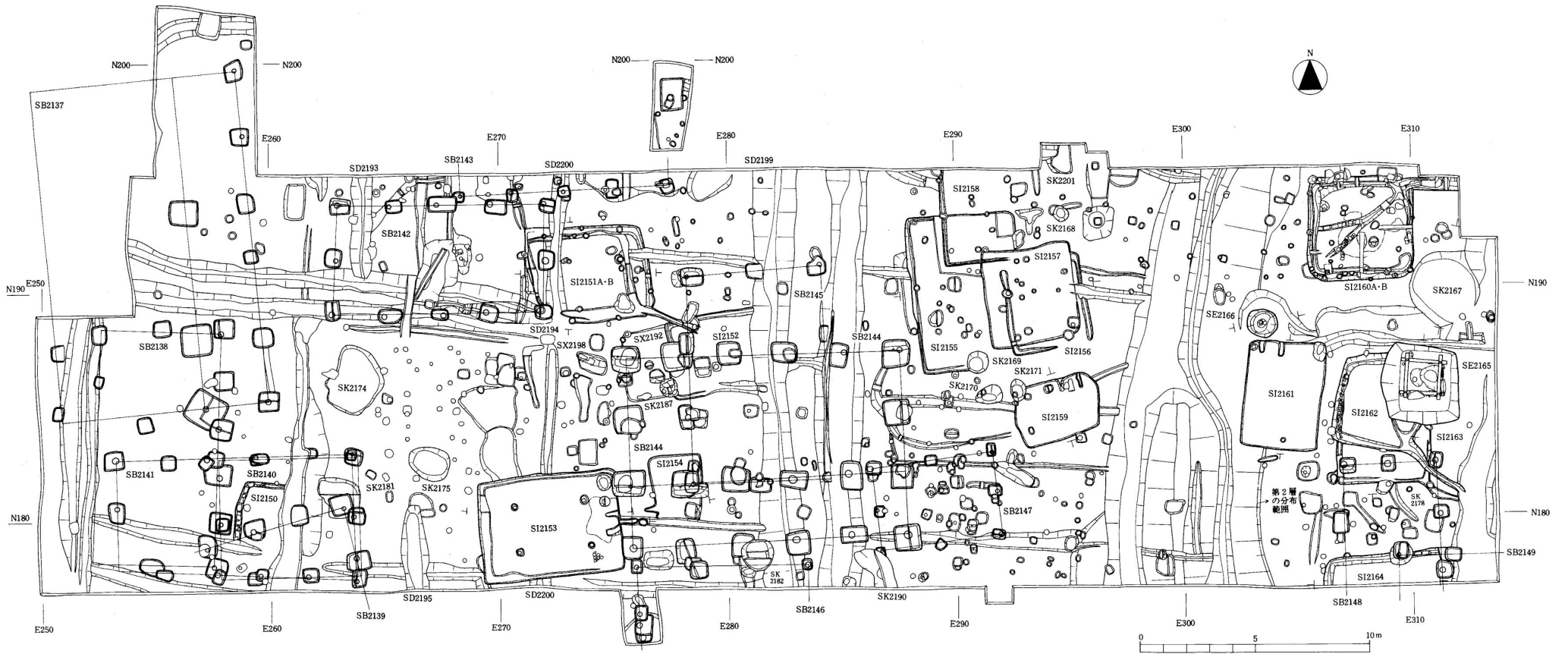
の柱穴 4 ヶ所と廂の柱穴 6 ヶ所を検出し、5 ヶ所で柱痕跡を確認した。柱穴の底面近くまで大きく削平されていたため、検出した柱穴も極めて残りが悪い。SB2138 と重複し、これよりも古い。

平面規模は桁行が廂で総長 14.53m、柱間が北より 2.93m・8.71m(3 間分)・2.89m である。梁行は南妻で見ると身舎の総長が 3.2m 前後と推定され、廂の出が 2.75m である。

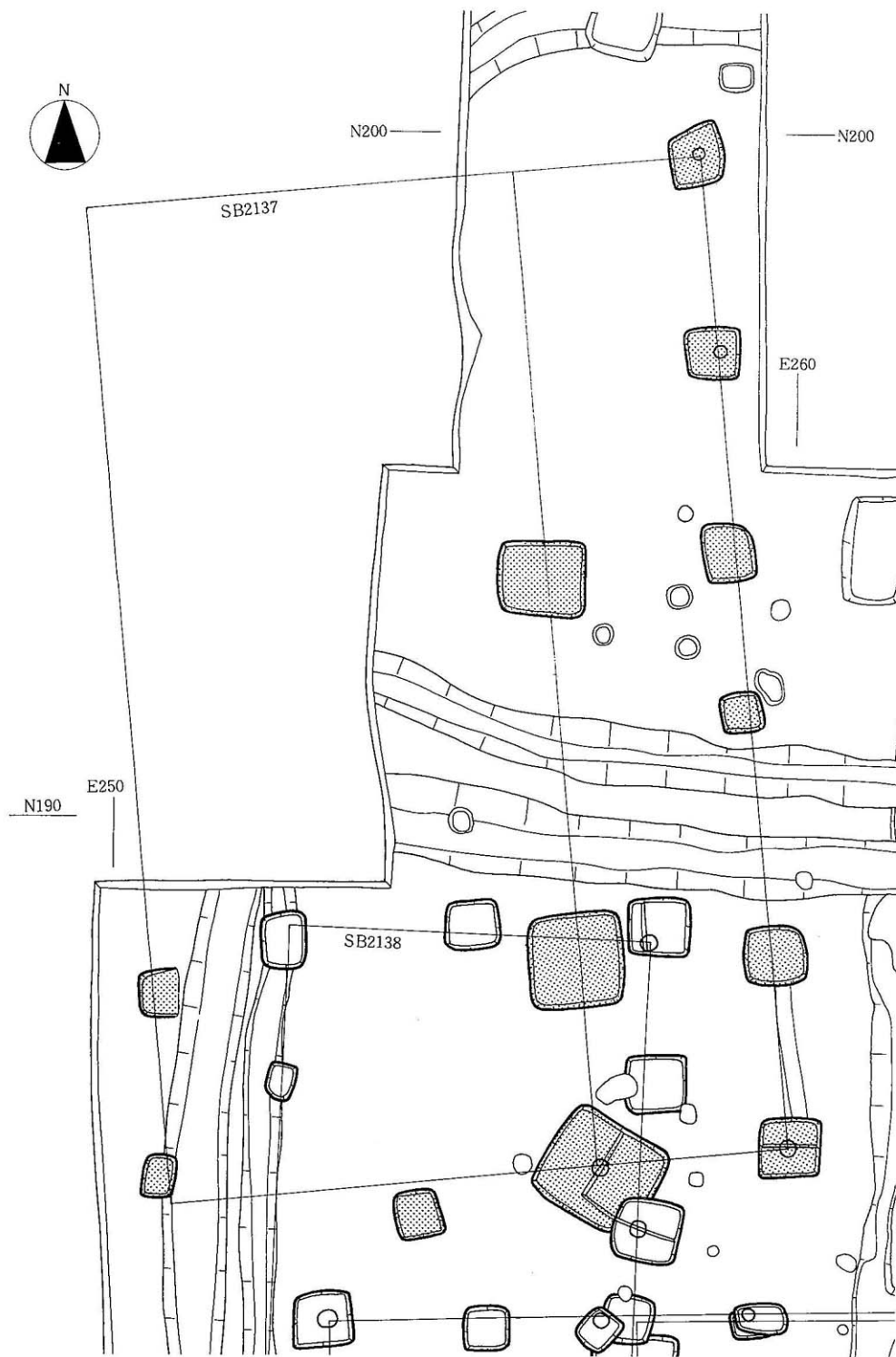
方向は廂で見ると発掘南北基準線に対し北で西に約 5° 偏する。

柱穴は身舎が一辺 1.3m 前後、廂が一辺 0.8m 前後の方形で、身舎南東隅柱穴での深さは約 15cm である。柱穴の埋土は黄褐色粘質土で、1～5mm 前後の風化凝灰岩小ブロックを多量に含み、互層となっている。柱痕跡は径 18～24cm（平均 21cm）である。

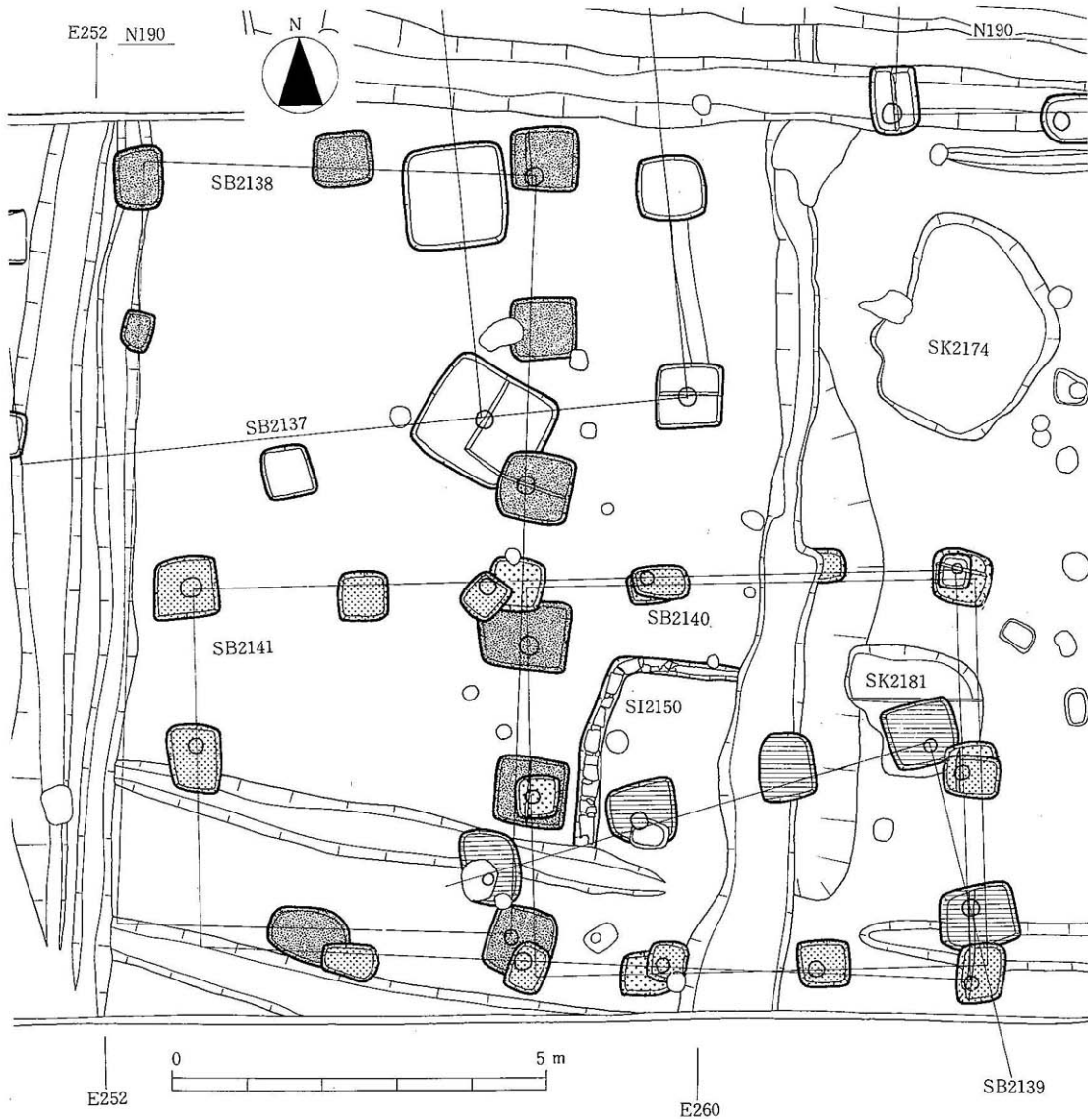
遺物は柱穴から土師器甕、ロクロ調整の土師器高台坏、須恵器甕の破片が少数出土した。



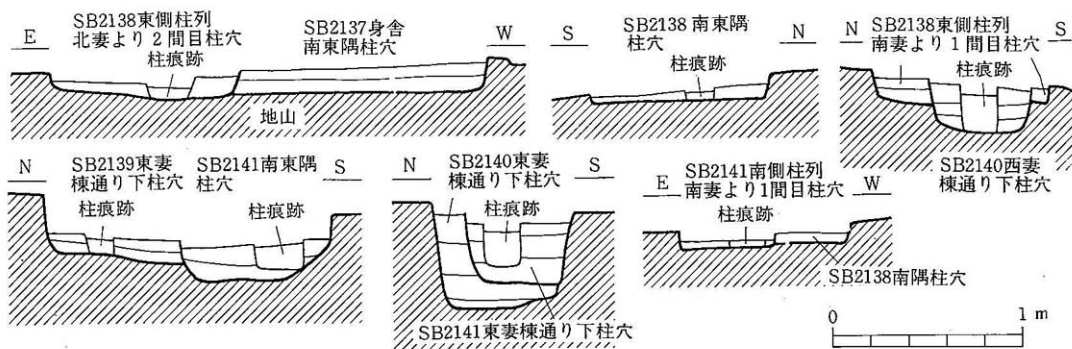
第4図 第62次調査検出遺構全体図



第 5 图 SB2137 建物跡平面图



第6図 SB2138~2141 建物跡、SI2150 住居跡平面図



第7図 SB2138~2141 建物跡柱穴断面図

S B2138 掘立式建物跡 (第6・7図)

調査区西端に位置する南北5間、東西2間の南北棟である。地山面で10ヶ所の柱穴を検出し、4ヶ所で柱痕跡を確認した。上部を大きく削平されていたため、検出した柱穴も極めて残りが悪い。重複状況から見てS B2137よりも新しく、S B2140・2141よりも古い。

平面規模は桁行が東側柱列で総長10.21m、柱間が北より4.12m(2間分)・2.18m・3.91m(2間分)で、梁行が北妻で総長5.4m前後と推定され、等間ならば柱間は約2.7mである。方向は東側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北で東に約2°偏する。柱穴は一辺0.9m前後の方形で、北東隅柱穴での深さは約15cmである。埋土は灰黄褐色粘質土を主体に風化凝灰岩小ブロックを多量に含み、互層となっている。柱痕跡は径20~28(平均24)cmである。

遺物は柱穴からロクロ調整の土師器坏・甕、ヘラ切りの須恵器坏などが少数出土した。

S B2139 掘立式建物跡 (第6・7図)

調査区南西隅に位置する東西3間以上、南北2間以上の東西棟である。地山面で北側柱列と東妻の柱穴の一部を検出し、4ヶ所で柱痕跡を確認した。上部を大きく削平されていたため、検出した柱穴も極めて残りが悪い。重複状況から見てSK2181よりも新しく、SB2140・2141よりも古い。またS I 2150 竪穴住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で東より4.15m(2間分)、約2.20m、梁行が東妻で約2.27mである。方向は北側柱列で見ると発掘東西基準線に対し東で北に約14°偏する。柱穴は一辺0.9m前後の方形で、深さは東妻棟通り下柱穴で約40cmある。柱穴の埋土は黄褐色粘質土を主体に風化凝灰岩ブロックを多量に含み、互層となっている。柱痕跡は径18~26cm(平均23cm)である。

遺物は柱穴からロクロ調整?の土師器甕、須恵器坏・甕、丸瓦の破片が少数出土した。

S B2140 掘立式建物跡 (第6・7図)

調査区南西隅に位置する東西3間、南北2間の東西棟である。地山面で6ヶ所の柱穴を検出し、1ヶ所で柱痕跡を確認した。重複状況から見てS B2138・2139、SK2181よりも新しく、S B2141よりも古い。S I 2150 住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面規模は不明だが、桁行が北側柱列で総長6.1m前後、柱間が等間ならば2m前後、梁行が西妻で総長5.3m前後、柱間が等間ならば2.6m前後と推定される。方向は北側柱列で見ると発掘東西基準線に対し西で南にわずかに偏すると推定される。柱穴は一辺0.8m前後の方形で、深さは東妻棟通り下柱穴で約56cmある。埋土は黄褐色粘質土を主体に風化凝灰岩ブロックを多量に含み、互層となっている。柱痕跡は径18cmである。遺物は出土してない。

SB2141 掘立式建物跡 (第6・7図)

調査区南西隅に位置する東西5間、南北2間の東西棟である。地山面で南西隅柱穴を除く13ヶ所の柱穴を検出し、11ヶ所で柱痕跡を確認した。東妻・北側柱列は比較的残りが良く、西妻・南側柱列は上部を大きく削平されていたため、残りが悪い。SB2140・SK2181と重複し、これらよりも新しい。SI2150住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で総長10.36m、柱間は西より2.44m・1.58m・2.14m・4.22m(2間分)で、梁行が東妻で総長5.53m、柱間は北より2.72m・2.81mである。方向は北側柱列で見ると発掘東西基準線に対し東で北に約1°偏する。柱穴は一辺0.5~0.7m前後の方形で、残りの良い東妻棟通り下柱穴での深さは56cmある。柱穴の埋土は褐色粘質土で、風化凝灰岩ブロックを多量に含み、互層となっている。柱痕跡は径13~27(平均20)cmである。

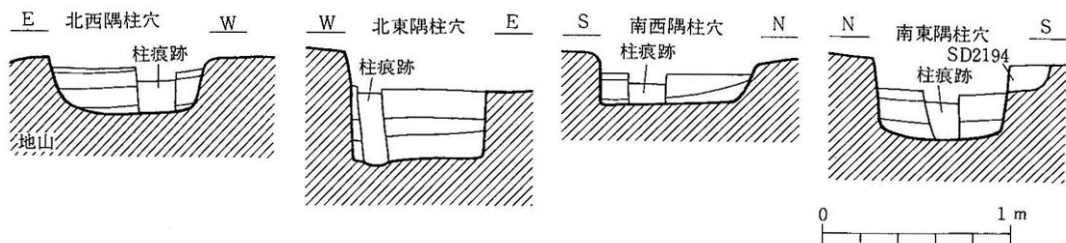
柱穴・柱抜取穴・柱痕跡からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦などが少数出土した。柱抜取穴から出土した土師器坏には底部・体下部をヘラケズリしたものが1点含まれる。

SB2142 掘立式建物跡 (第8・9図)

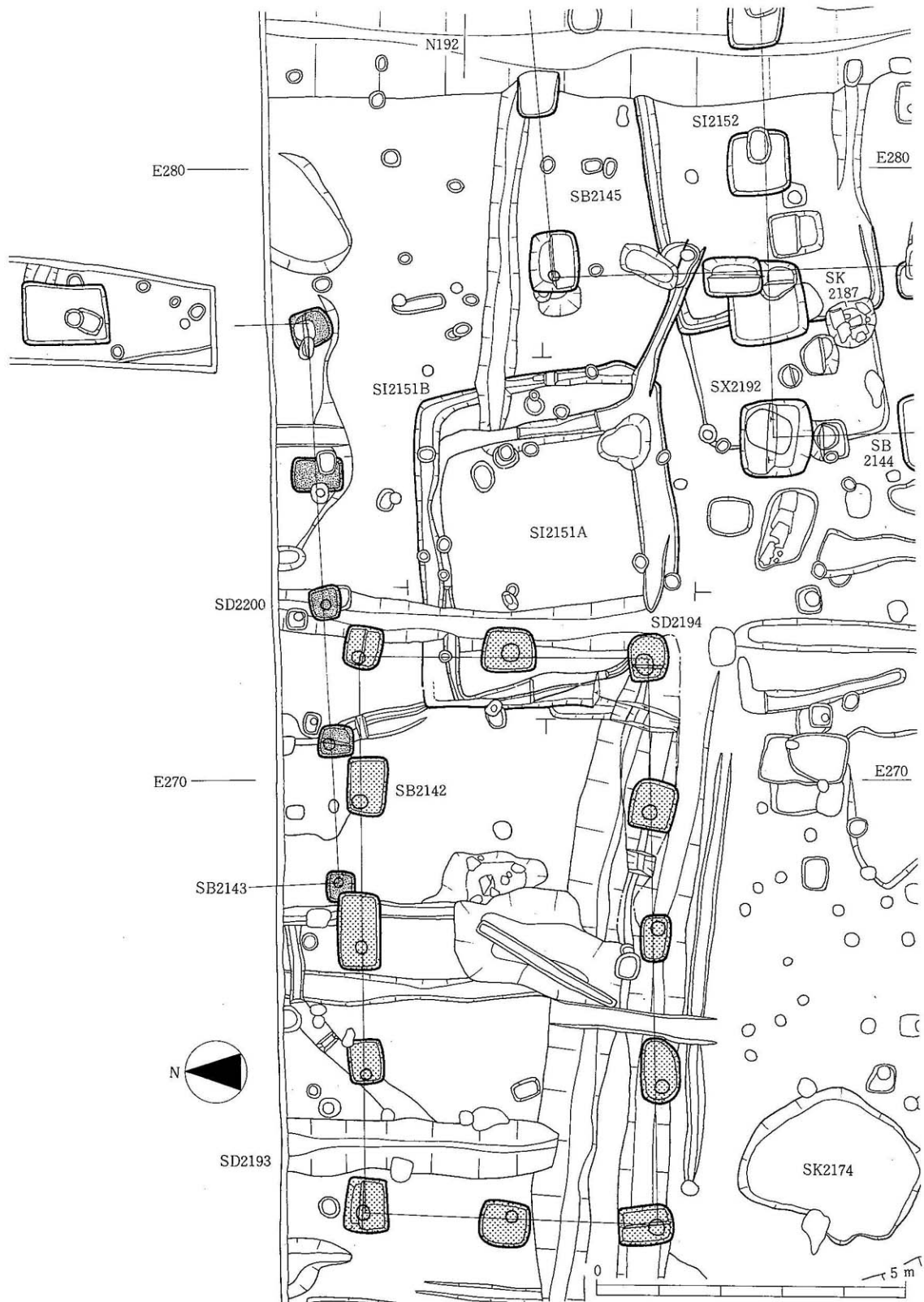
調査区西部の北寄りに位置する東西4間、南北2間の東西棟である。地山面ですべての柱穴を検出し、各柱穴で柱痕跡を確認した。残りは良い。重複状況から見てSI2151堅穴住居跡、SB2143、SD2194溝よりも新しい。

平面規模は桁行が北側柱列で総長9.04m、柱間は西より2.25m・2.05m・2.39m・2.32mで、梁行が東妻で総長4.70m、柱間は北より2.56m・2.17mである。方向は北側柱列で見ると発掘東西基準線とほぼ一致する。柱穴は一辺0.8m前後の方形を基調とし、深さは北東隅の柱穴で約60cmある。柱痕跡は径18~30(平均23)cmである。柱穴の埋土は暗褐色粘質土で、炭・風化凝灰岩ブロックを多量に含み、互層となっている。

遺物は柱穴から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、黒笹90号窯式の灰釉陶器皿(第10図1)、緑釉陶器・、政庁第IV期の平瓦II C類(第10図2)などの平瓦、丸瓦、鉄釘、鉄滓、



第8図 SB2142 建物跡柱穴断面図



第9图 SB2142・2143 建物跡、SI2151・2152 住居跡平面图

柱抜取穴からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵系土器小型坏・坏・皿、柱痕跡から土師器坏・甕、須恵系土器高台坏、灰釉陶器・の破片が少数出土した。このうち柱穴・柱痕跡・柱抜取穴出土の土師器・須恵器坏には回転糸切りのものを含む。

SB2143 掘立式建物跡 (第9・11図)

調査区中央やや西寄りの北部に位置する東西4間、南北2間以上の東西棟である。地山面で南側柱列の柱穴を検出し、3ヶ所で柱痕跡を確認した。重複状況から見てSB2142よりも古い。

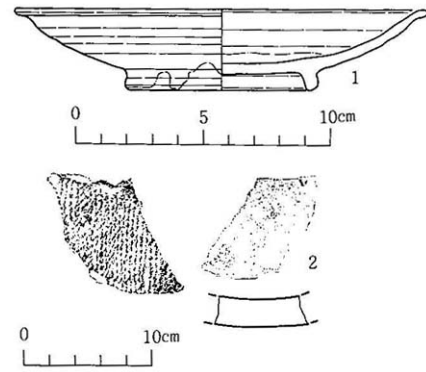
平面規模は桁行が南側柱列で総長9.2m前後と推定され、柱間は西より2間分がそれぞれ2.27m・2.28mである。方向は発掘東西基準線に対し東で北に約2°偏する。柱穴は一辺0.5~0.6m前後の方形で、深さは南側柱列の西妻より1間目柱穴で約70cmある。柱穴の埋土は灰黄褐色粘質土で、地山の黄褐色粘質土・風化凝灰岩ブロックを多量に含み、互層となっている。柱痕跡は径20cm前後である。

柱穴からロクロ調整の土師器坏、土師器甕、ヘラ切りの須恵器坏、須恵器甕、平瓦IA・IIB類の破片などが少数出土した。

SB2144 掘立式建物跡 (第12・13図)

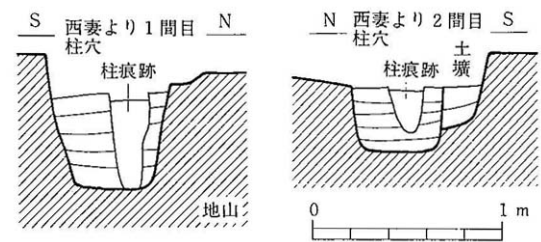
調査区中央南半部に位置する東西5間、南北3間の南廂付きの東西棟である。地山面ですべての柱穴を検出し、20ヶ所のうち11ヶ所で柱抜取穴、12ヶ所で柱痕跡を確認した。重複状況から見てSI2152~2154 竪穴住居跡よりも新しく、SB2145・2146よりも古い。

平面規模は桁行が南側柱列で総長11.98m、柱間は西より7.1m(3間分)・2.47m・2.42mで、身舎の梁行が西妻で総長5.58m、柱間は等間ならば2.79m前後と推定される。廂の出は西妻で2.73mである。方向は南側柱列で見ると発掘東西基準線に対し東で北に約2°偏する。柱穴は身舎が一辺1.0~1.3m前後、廂が一辺1.0m前後の方形で、深さは北西隅柱穴で約1.1m、南廂西妻より1間目柱穴で約0.8mある。柱穴の埋土はにぶい黄褐色粘質土で、地山の明黄褐色粘質土・風化凝灰岩礫を多量に含み、互層となっている。柱痕跡は径22~

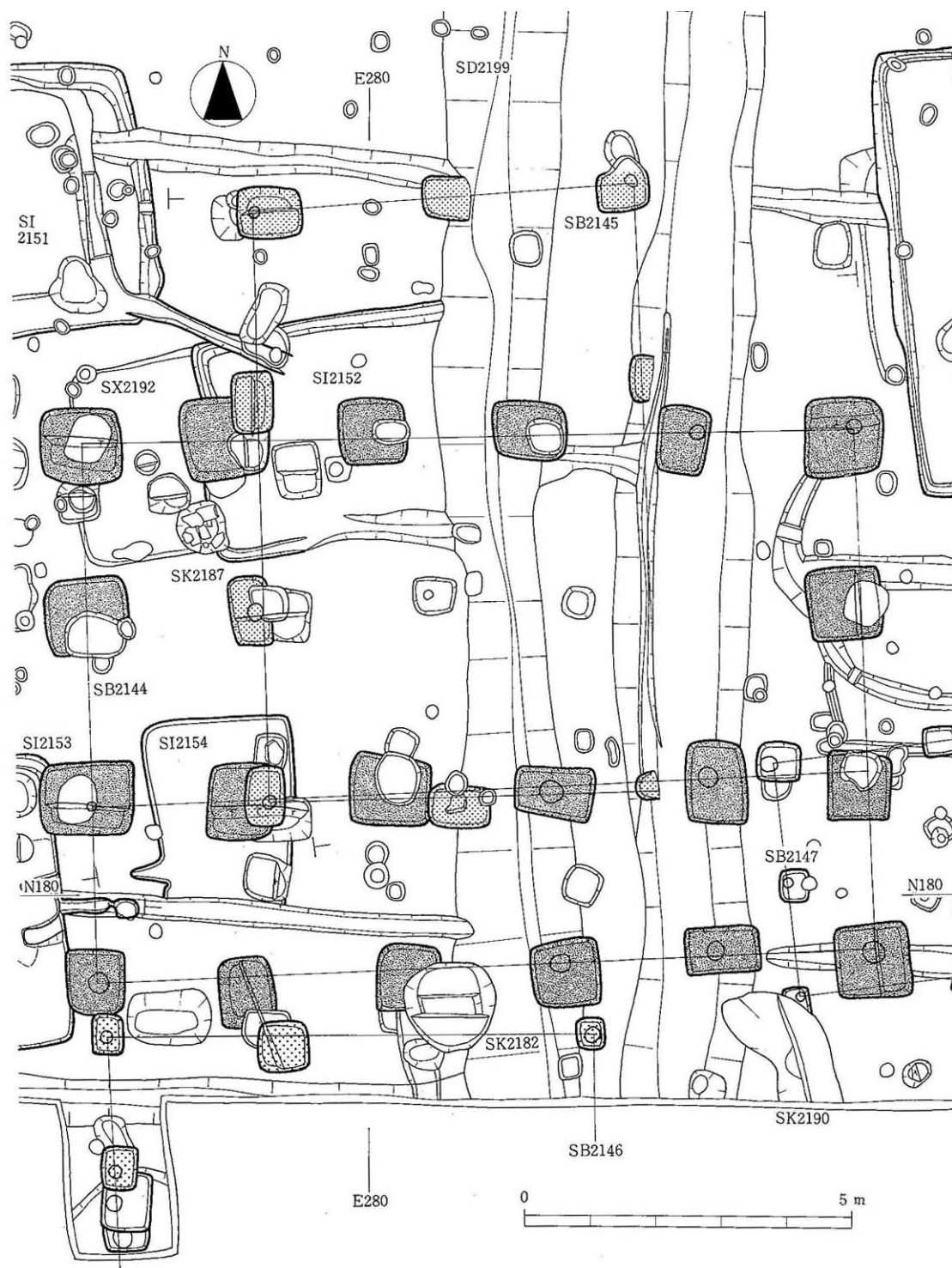


番号	層位	種類	特徴	箱番号
1	堀片	灰釉陶器	黒笹14号式	8591
2	堀片	瓦	II C類 (IV期)	8620

第10図 SB2142 建物跡 (北側柱列西妻より2間目柱穴) 出土遺物



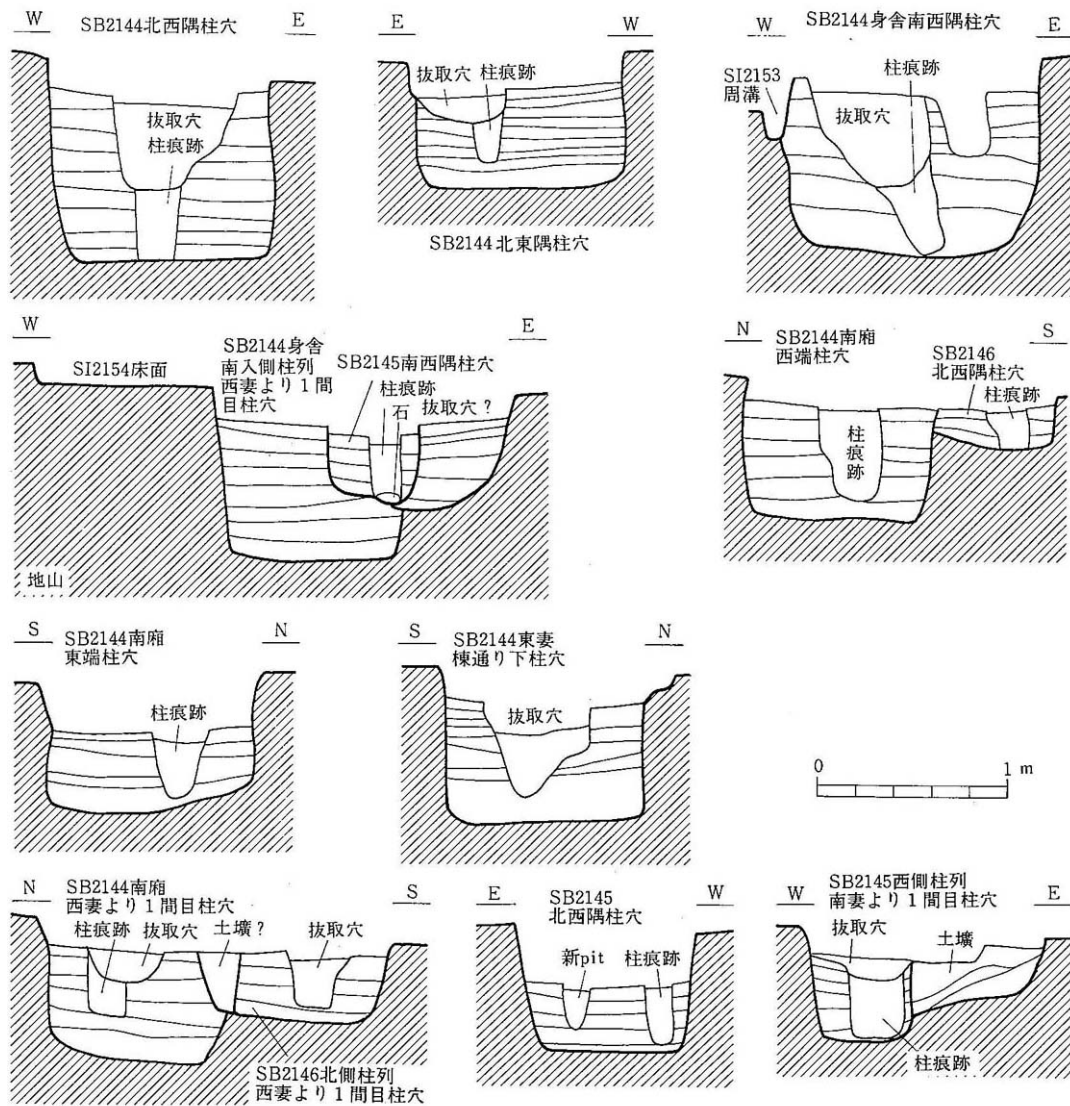
第11図 SB2143 建物跡柱穴断面図



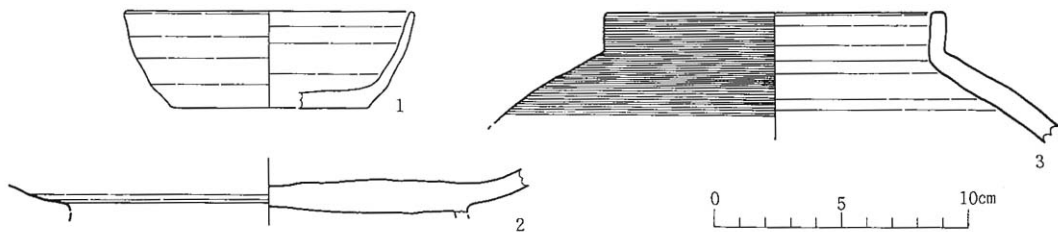
第 12 図 SB2144~2146 建物跡平面図

34 (平均 30) cm である。

柱穴・柱抜取穴・柱痕跡からロクロ調整の土師器坏・甕、へら切りの須恵器坏（第 14 図 1）・盤（第 14 図 2）・甕・短頸壺（第 14 図 3）・蓋、平瓦・丸瓦などの破片が少数出土した。土師器坏の大多数は底部が手持ちないし回転へらケズリされている。また、回転糸切りの土師器・須恵器坏が柱穴より少数出土している。他には柱痕跡から漆パレットに用いられた須恵器坏破片が 1 点、柱穴から鉄滓が少量出土した。



第 13 図 SB2144~2146 建物跡柱穴断面図



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	特徴	箱番号
1	身舎南西隅柱穴柱抜穴	須恵器	坏	Ⅲ	ヘラ切り	8591	3	東妻棟通り 下柱穴掘方	須恵器	短頸壺	かき目	8591
2	身舎南西隅柱穴柱抜穴	須恵器	盤		大型、回転ヘラケズリ	8591						

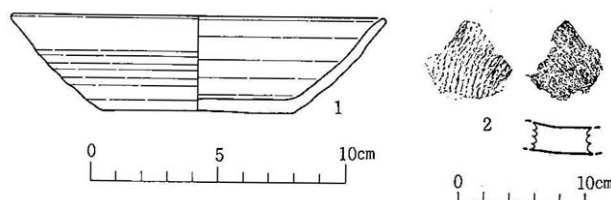
第 14 図 SB2144 掘立式建物跡出土遺物

SB2145 掘立式建物跡 (第 12・13 図)

調査区中央に位置する南北 3 間、東西 2 間の南北棟で、地山面で検出した。東側柱列は後世の溝で壊されて残りが悪く、南妻から 1 間目の柱穴は検出できなかった。他の柱穴はすべて検出し、西側柱列で柱抜取穴、柱痕跡を確認した。重複状況から見て SB2144 よりも新しい。

平面規模は桁行が西側柱列で総長 9.11m、梁行は北妻で総長約 6.0m、桁行・梁行の柱間は等間ならば 1 間がそれぞれ約 3.0m と推定される。方向は西側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北で西に約 2° 偏する。柱穴は 1.0×0.6m 前後の長方形で、深さは北西隅柱穴で約 65cm ある。柱穴の埋土は暗褐色粘質土で、地山粘土を多量に含む層と含まない層の互層となっている。柱痕跡は径 17~20cm である。

柱穴・柱抜取穴・柱痕跡からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、瓦が少数出土した。柱痕跡から出土した須恵器坏には底部が回転糸切りのものがあり (第 15 図 1)、同様の須恵器坏は柱穴からも出土した。柱穴出土の土師器坏にはヘラケズリされたものがある。また柱穴・柱痕跡から出土した平瓦には政庁第 IV 期の平瓦 II C 類が含まれる (第 15 図 2)。なお柱穴よりも新しいピットからは須恵系土器坏が出土した。



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	南妻棟通り下柱穴 柱痕跡	須恵器	坏	IV	回転糸切り	8591
2	南西隅柱穴掘方	瓦	平瓦	II C	政庁第 IV 期	8620

第 15 図 SB2145 建物跡出土遺物

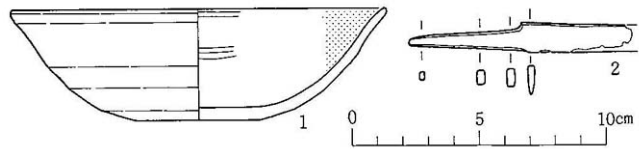
SB2146 掘立式建物跡 (第 12・13 図)

調査区中央南端に位置し、東西 3 間、南北 2 間以上の東西棟と推定される。地山面で北側柱列を検出し、南に拡張して西妻の棟通り下柱穴と推定した位置で柱穴を検出した。北

側柱列の西より1間目柱穴で柱抜取穴、他の3ヶ所の柱穴で柱痕跡を確認した。重複状況から見てSB2144よりも新しく、SK2182よりも古い。また南に拡張して検出した柱穴はこれよりも古い柱穴（規模・構造不明のため未登録）と重複し、これよりも新しい。

平面規模は桁行が北側柱列で総長7.49m、柱間は等間ならば1間が約2.5mと推定され、梁行の柱間は2.02mである。方向は北側柱列で見ると発掘東西基準線とほぼ一致する。柱穴は一辺0.6m前後の方形で、深さは北西隅柱穴で約65cmある。埋土はにぶい黄褐色粘質土の互層となっている。柱痕跡は径19~24cmである。

遺物は柱穴・柱痕跡からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、平瓦、丸瓦の破片などが出土した。このうち、柱穴出土の須恵器坏には底部糸切り後に底部外周と体下部を手持ちヘラケズリしたもの、底部がヘラ切りのもの、柱痕跡出土の土師器坏には底部が回転糸切りのもの（第16図1）がある。他には柱穴から刀子（第16図2）、漆器破片が出土した。



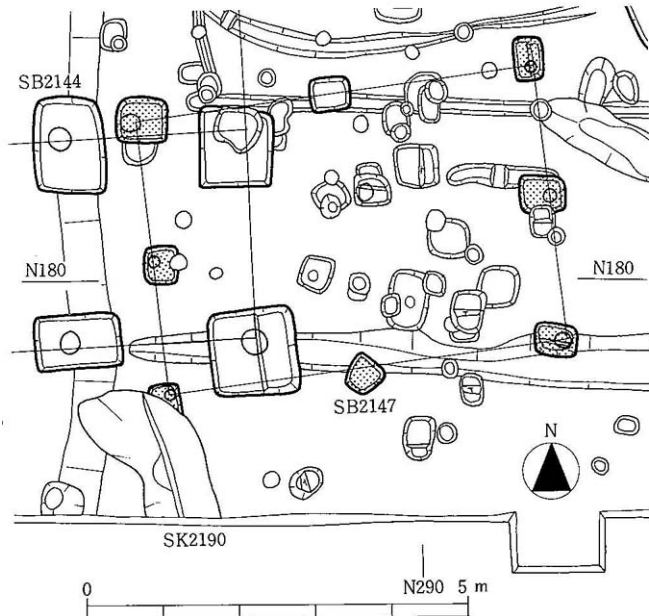
SB2147 掘立式建物跡（第17図）

調査区中央東寄りに位置する東西2間、南北2間の東西棟で、地山面ですべての柱穴を検出し、5ヶ所で柱痕跡を確認した。SK2190と重複してこれよりも古い。またSB2144と重複するが、新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で総長約5.33m、柱間は等間ならば1間が約2.65mと推定され、梁行は東妻で北より1.73m・1.91mである方向は北側柱列で見ると発掘東西基準線に対し東で北に約7°偏する。柱穴は約0.6m前後の方形ないし0.6×0.4m前後の長方形で、深さは北東隅柱穴で約33cmある。柱穴の埋土は褐色土で互層となっている。柱痕跡は径18cm前後である。

番号	層位	種類	器種	特徴	箱番号
1	北東隅柱穴柱痕跡	土師器	坏	回転糸切り	8591
2	北西隅柱穴	鉄製品	刀子	平棟平造り	8622

第16図 SB2146 建物跡出土遺物



第17図 SB2147 建物跡平面図

北西隅柱穴の柱穴よりロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏の破片が少数出土した。このうちロクロ調整の土師器甕には内面黒色処理されたものもある。

S B2148 掘立式建物跡 (第 19・20 図)

調査区南東隅に位置する南北 3 間以上、東西 2 間の南北棟で、地山面、S I 2163・2164 埋土上面で 6 ヶ所の柱穴を検出し、5 ヶ所で柱痕跡を確認した。重複状況から見て S I 2163・2164 よりも新しい。S I 2162 の外延溝とわずかに重複し、新旧関係は確認できなかったが S I 2162 よりも新しい可能性が高い。また、S B2149 と重複するが新旧関係は不明である。なお、西側柱列の北妻より 2 間目柱穴は S I 2164 よりも新しいので確認できたはずだが、埋土がよく似ていたため検出できなかった。

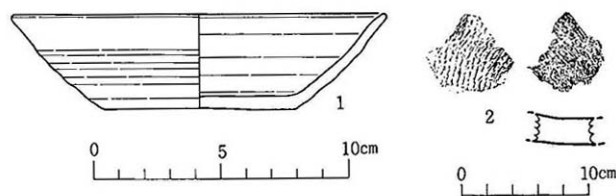
平面規模は桁行の柱間が東側柱列で北より 2.36m・2.49m で、梁行は北妻で西より 1.91m・2.10m である。方向は東側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北が西に約 2° 偏する。柱穴は約 0.7m 前後の方形で、深さは北東隅柱穴で約 30cm ある。埋土は風化凝灰岩小ブロックを多く含むにぶい黄褐色土で、互層となっている。柱痕跡は径 24cm 前後である。

遺物は柱穴からロクロ調整の土師器坏・甕、ヘラ切りの須恵器坏 (第 18 図 1)・甕、平瓦 II B 類、丸瓦、柱痕跡からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、須恵系土器坏、平瓦 II B 類、丸瓦の破片が少量出土した。

S B2149 掘立式建物跡 (第 19・20 図)

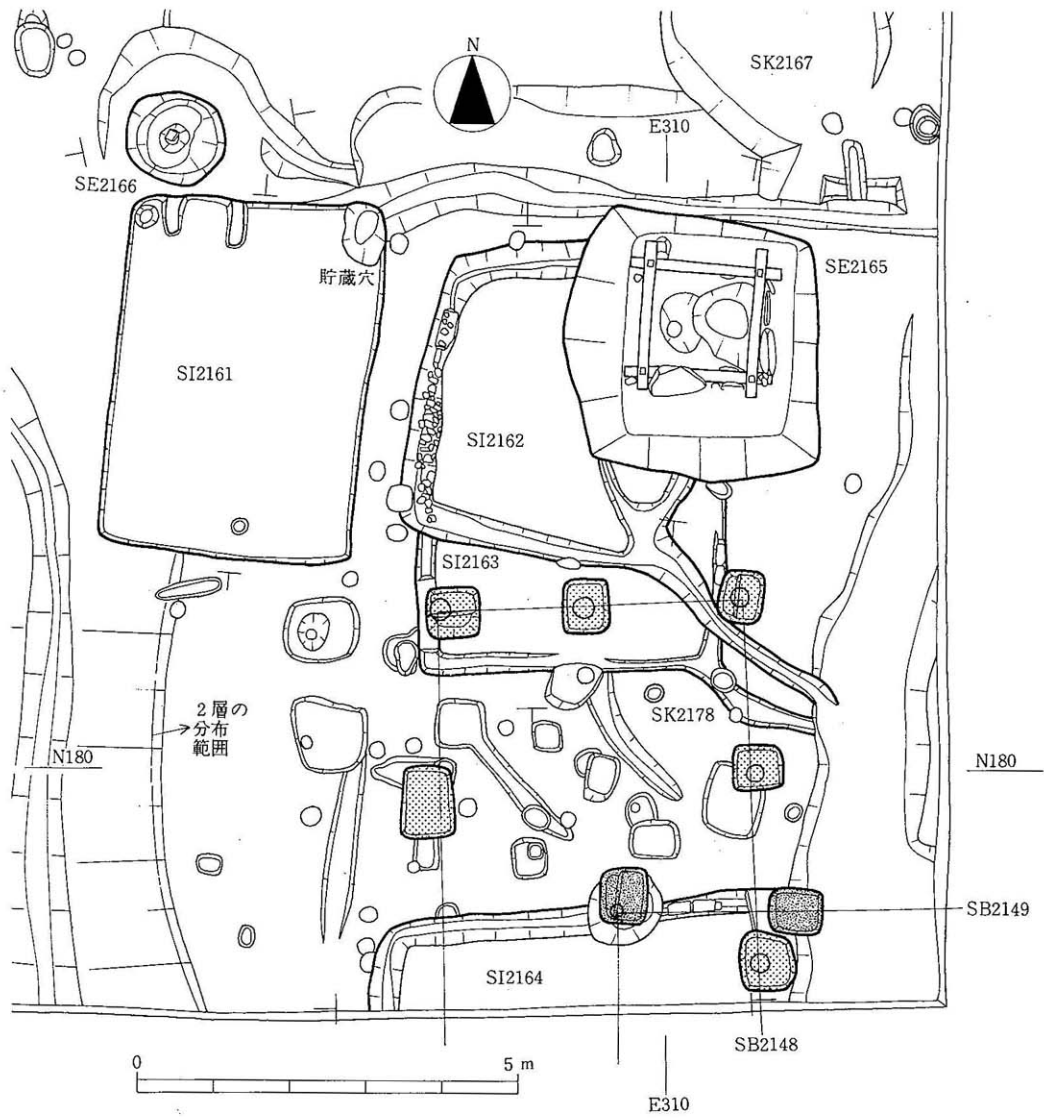
調査区南東隅に位置する東西 2 間以上、南北 1 間以上の建物である。S I 2164 と重複してこれよりも新しい。S B2148 とも重複するが、新旧関係は不明である。地山面・S I 2164 埋土上面で北妻ないし北側柱列にあたる柱穴 2 ヶ所を検出したのみで、方向・規模は不明である。柱穴は約 0.5×0.7m 前後の長方形で、深さは北西隅柱穴で約 50cm ある。埋土は地山黄色粘土ブロックを多く含む褐色粘質土で、互層となっている。

遺物は柱抜取穴からロクロ調整の土師器坏・甕、ヘラ切りの須恵器坏・蓋・甕、政庁第 IV 期の平瓦 II C 類 (第 18 図 2) の破片などが少数出土した。

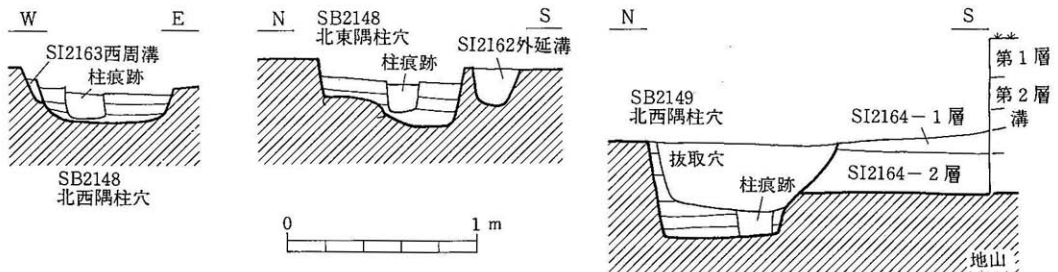


番号	層位	種類	器種	分類	箱番号
1	SB2148 堀方	須恵器	坏	III	8591
2	SB2149 柱抜取穴	瓦	平瓦	II C	8620

第 18 図 SB2148・2149 建物跡出土遺物



第19図 SB2148・2149 建物跡、SI2161~2164 住居跡、SE2165・2166 井戸跡平面図

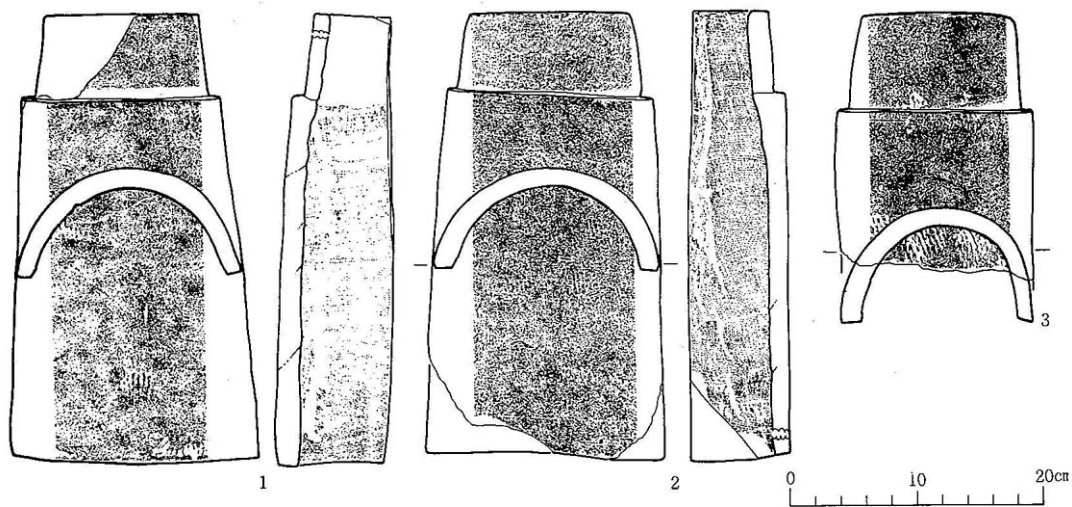


第20図 SB2148・2149 建物跡柱穴断面図

(2) 竪穴住居跡

S I 2150 竪穴住居跡 (第6図)

調査区南西隅に位置し、地山面で北・南側周溝の一部のみを検出した。後世の削平で床面下まで大きく壊され、東半分は新しい溝に壊されて残りは悪い。平面形は方形と推定され、規模は西辺で見ると一辺 2.6m 以上である。周溝は断面U字形、幅 25~30cm、深さ 10cm で、丸瓦を伏せた状態で連結させ、隙間に須恵器甕体部破片や瓦小片を入れ、暗渠としている。暗渠に用いられた丸瓦はいずれも丸瓦ⅡB類 aタイプで、ほぼ完形のものとは玉縁ないし前面を欠いたものがある(第21図1~3)。カマド・柱穴・貼床の有無は不明である。

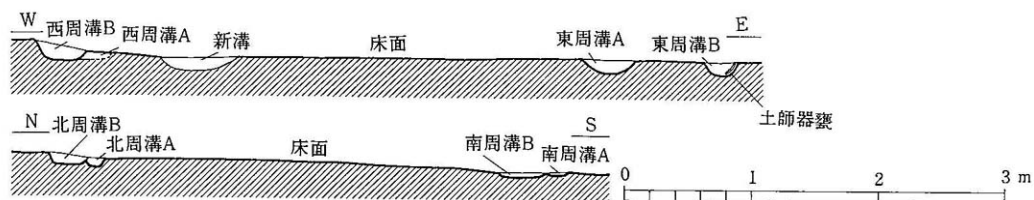


第21図 S I 2150 竪穴住居跡周溝敷設丸瓦

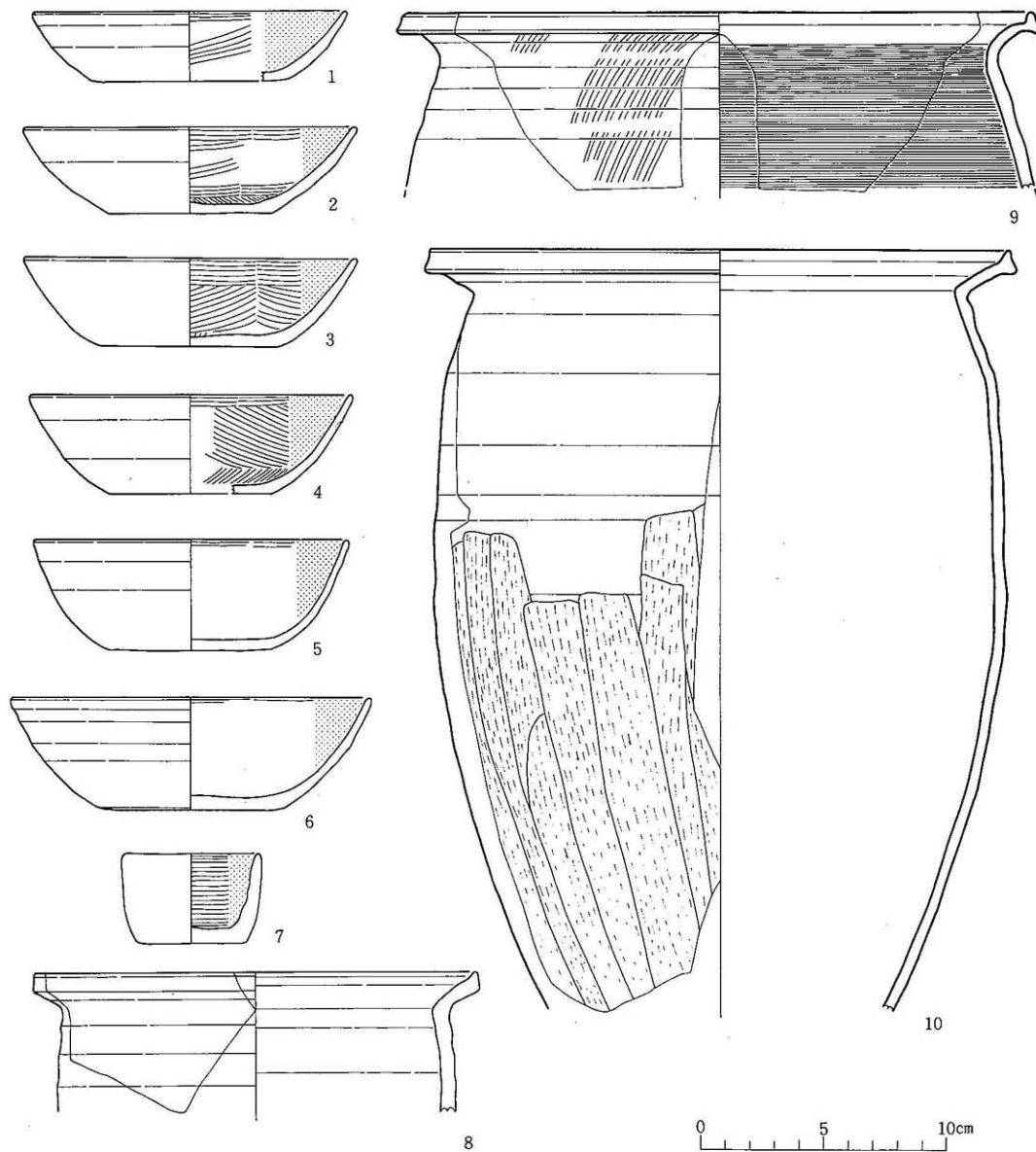
S I 2151A・B 竪穴住居跡 (第9・22図)

調査区中央北寄りに位置し、地山面で検出した。重複状況から見て S I 2152 よりも新しく、S B 2142 よりも古い。残存状況は極めて悪く、周溝・外延溝を検出したのみで、壁は残っていない。新旧2時期の周溝があり、拡張されている。

新旧の住居跡とも平面形は長方形で、南東隅に外延溝が付く。規模は古い S I 2151A の



第22図 S I 2151A・B 竪穴住居跡断面図

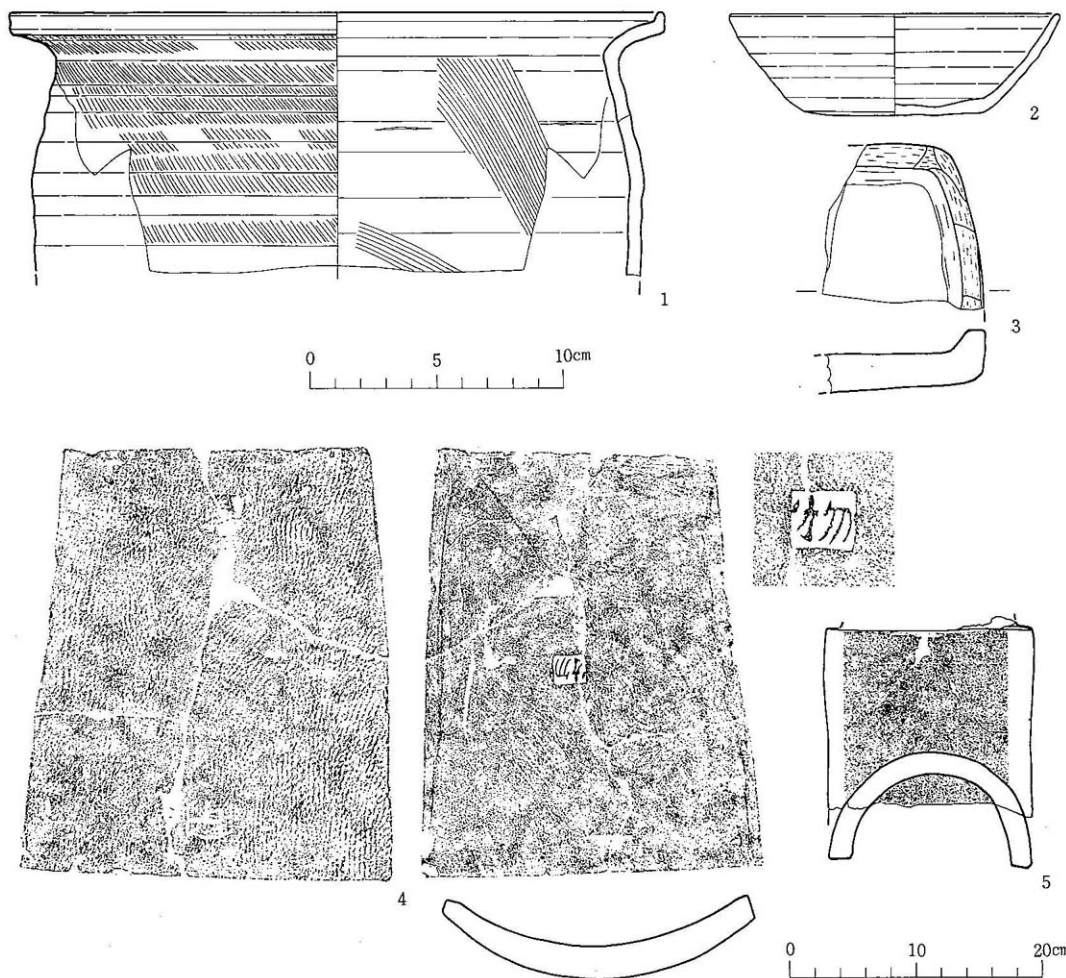


番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	東周溝	土師器	坏	B I	回転ヘラケズリ	8592	6	東周溝	土師器	坏	B I or B II	ヘラケズリ	8592
2	東周溝	土師器	坏	B I	回転ヘラケズリ	8592	7	南周溝	土師器	坏			5592
5	東周溝	土師器	坏	B I or B II	ヘラケズリ	8502	8	東周溝	土師器	甕	B 2		8592
4	東周溝	土師器	坏	B I or B II	ヘラケズリ	8592	9	東周溝	土師器	甕	B 1	外面：叩き→ロクロナデ 内面：回転刷毛目	8592
5	床面	土師器	坏	B I or B II	ヘラケズリ	8592	10	南周溝	土師器	甕	B 1	ロクロナデ→ヘラケズリ	8593

第 23 図 SI2151 竪穴住居跡出土遺物(1)

北辺が4.5m、東辺が3.6mで、新しいS I 2151Bの北辺が5.4m、東辺が4.2mである。方向は北辺で見ると発掘東西基準線に対しいずれも東で北に約10度偏する。床は平坦で、炭化物を含む黄褐色粘質土を2～3cmの厚さで貼床している。カマドの有無は不明で、柱穴はない。新旧の周溝はいずれも断面U字形、幅25cm、深さ10cm前後である。東・南周溝に土師器甕大破片を横に連結して埋めていることから、暗渠であった可能性が高い。外延溝は幅30cm前後、深さ15cm前後で、長さ2.5m検出した。

周溝などからロクロ調整の土師器坏・甕、ヘラ切りの須恵器坏(第24図2)・甕、平瓦、丸瓦などが出土した。土師器坏は底部が大きく、体部が直線的な器形で、ヘラケズリされ



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	南周溝	土師器	甕	B1	叩き→ロクロ調整	8595	4	東周溝	平瓦		II Ba1	刻印「物」A	8616
2	排水溝	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8592	5	南周溝	丸瓦		II Ba		8616
3	床面	硯	風字硯			8592							

第24図 SI2151 竪穴住居跡出土遺物(2)

ている（第 23 図 1～6）。土師器甕はロクロ調整のものが主体で、ロクロを用いないものも少数ある。ロクロ調整の土師器甕には大型の長胴甕（第 23 図 9・10、第 24 図 1）、中型甕（第 23 図 8）があり、前者の中には叩き成形後にロクロ調整したもの（第 23 図 9、第 24 図 1）があり、回転刷毛目も認められる。他には灰釉陶器皿、風字硯（第 24 図 3）、刀子、凝灰岩切石、焼けたイノシシの指・趾骨片などがある。平瓦には刻印「物」Aの押された政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類 a1 タイプ（第 24 図 4）、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類 b タイプなどがあり、丸瓦には丸瓦ⅡB類 a タイプがある。

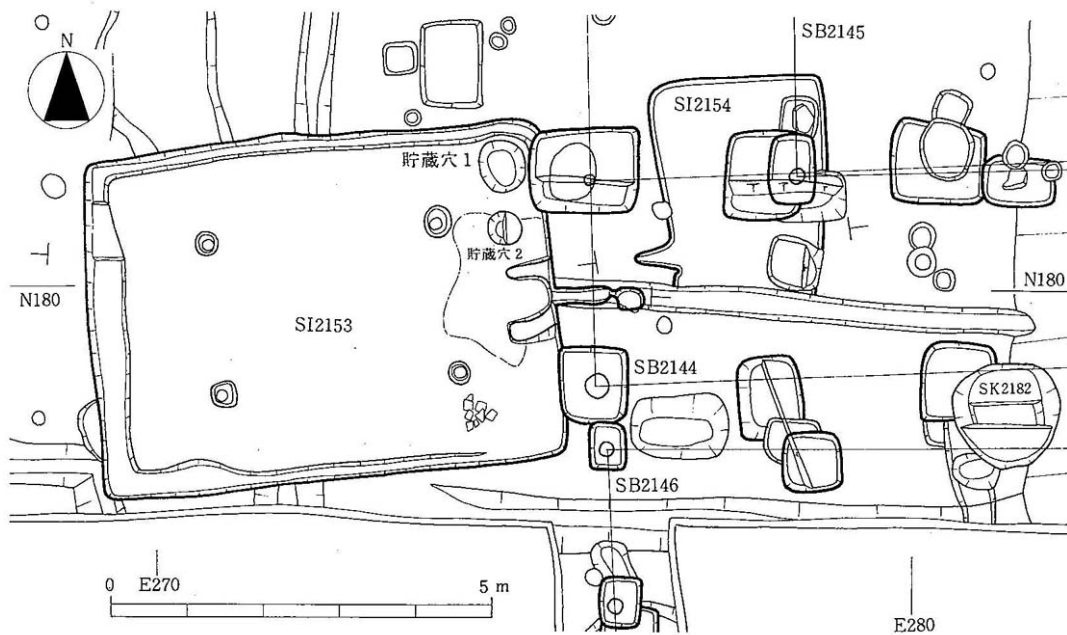
S I 2152 竪穴住居跡（第 9 図）

調査区中央西寄りに位置し、地山面で周溝のみを検出した。床面付近まで削平され、東側は新しい溝に壊され、残存状況は良くない。重複状況から見て S X2192 よりも新しく、S B2144・2145、S I 2151、S K2187、S D2199 よりも古い。

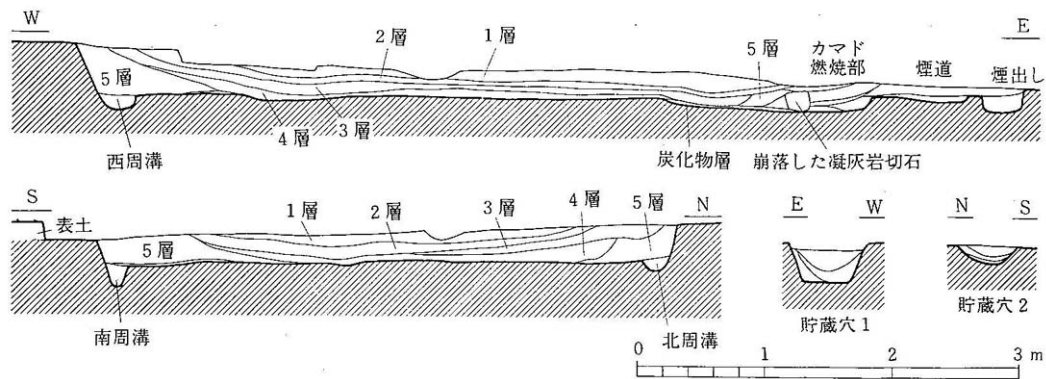
平面形は方形で、大きさは西辺が約 3.4m、北辺が 4.0m 以上である。北辺は発掘東西基準線に対し、東で北に約 15° 偏する。北辺・西辺・東辺には断面 U 字形、幅 20cm 前後、深さ 15cm 前後の周溝が巡る。床は平坦で地山である。出土遺物は土師器甕体部破片 1 点である。

S I 2153 竪穴住居跡（第 25・26 図）

調査区中央南寄りに位置し、地山面で検出した。S B2144、S D2200 と重複していずれよりも古い。



第 25 図 SI2153・2154 竪穴住居跡平面図



第 26 図 SI2153 竪穴住居跡断面図

平面形は長方形で、大きさは東西 6.2m、南北 4.6m である。北辺・南辺は発掘東西基準線に対し、東で北に約 8° 偏する。残存状況は極めて良く、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最大 40cm ある。埋土は明黄褐色粘質土に地山黄褐色粘質土ブロックを多く含み、人為堆積である。床面は平坦で、一部で黄褐色粘土を 2～3cm の厚さで貼床している。

東辺ほぼ中央にはカマドが付設されている。カマドは凝灰岩切石（図版 14-15・16）を焚き口の両側壁および天井部の芯材にして粘土を貼り付けた構造で、天井部・天井部切石は崩落していたが、両側壁は取り払われずに残存していた。カマド燃烧部は幅 60cm、奥行 55cm で、底面と側壁内面は火熱を受けて赤変していた。また、燃烧部中央には支脚に用いられた土師器甕体下半部（第 28 図 3）が底部を下にして残されていた。燃烧部の奥壁高は約 7cm で、煙道部へ続く。煙道部は幅約 30cm、深さ約 12cm で、東に約 0.8m 延び、くびれた先に長径 35cm、短径 30cm、深さ 20cm の煙出しのピットが付く。燃烧部からカマド前面の床面はわずかに窪み、カマド前面の約 2.0×1.0m の範囲に炭化物の薄層があった。

住居中軸線に対して線対称となる位置に支柱穴が 4 本ある。支柱穴の平面形はほぼ円形で、規模は径約 30cm、深さ約 25cm で、柱痕跡の径は約 15cm である。支柱穴の東西の柱間は約 3.1m、南北の柱間は約 2.0m である。

北辺・西辺・南辺には断面 U 字形、幅 20～30cm、深さ約 20cm の周溝が巡る。

北東隅とカマドの北脇に貯蔵穴がある。前者の貯蔵穴 1 は平面形が楕円形で、規模は長径 70cm・短径 60cm・深さ 30cm である。後者の貯蔵穴 2 は平面形が円形で、規模は径 45cm・深さ 14cm である。

床面・堆積層から多くの土器・瓦が出土した。これらの遺物はほぼ同時期に廃棄された可能性が高いことから、層位を区別しないで器種毎に図示した（第 27～31 図）。

土器には土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壺がある。

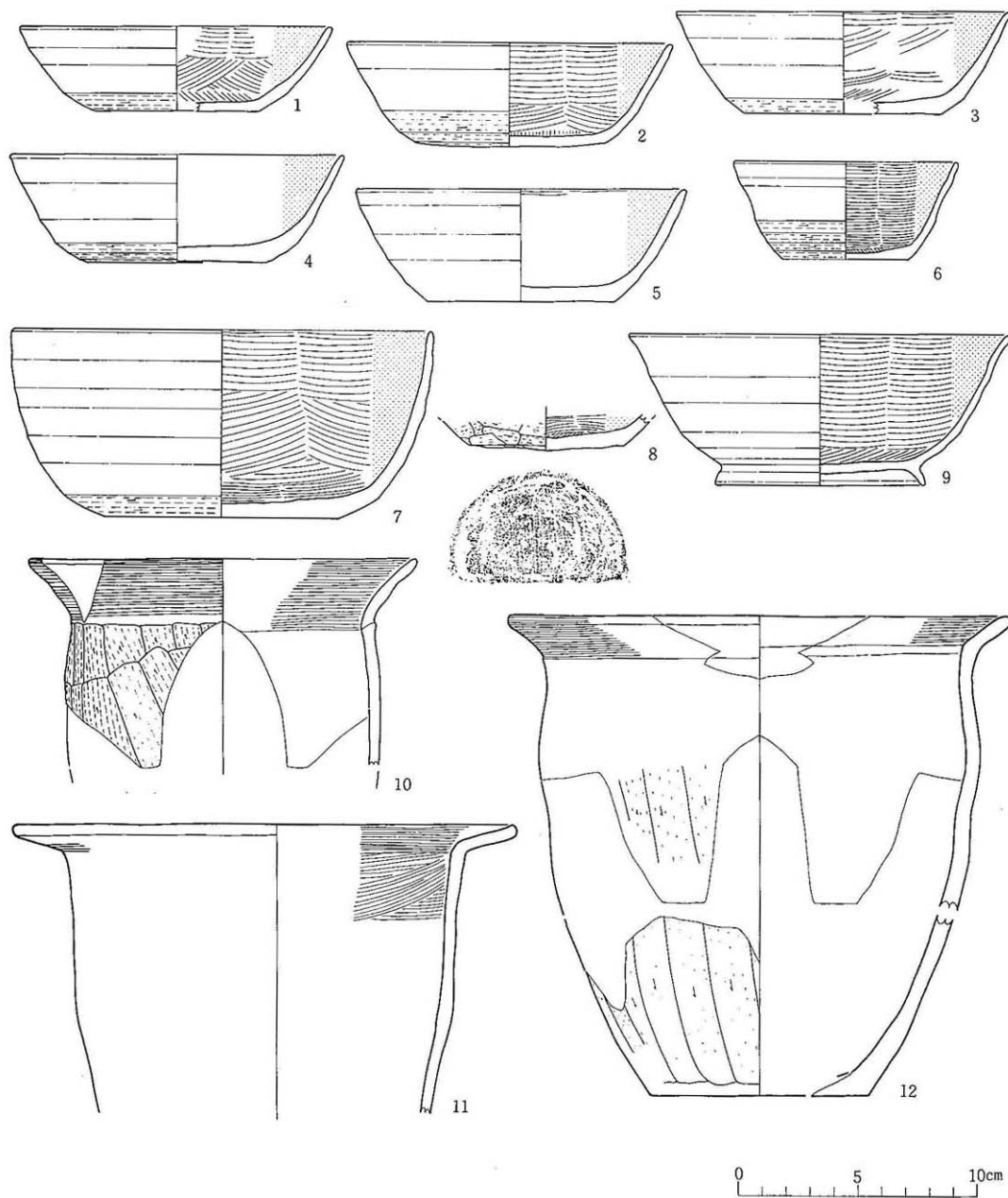
土師器坏はすべてロクロ調整で、埋土 1 層出土の回転糸切りのもの 2 点を除けば、いずれも底部ないし体下部が再調整されている。再調整の区別がわかるものは 16 点で、回転へ

ラケズリが 11 点と多く、手持ちヘラケズリは 5 点、どちらか不明が 12 点ある。また、底部切り離し技法のわかるものには回転糸切りの他、ヘラ切りもわずかに認められる（第 27 図 8）。底部はいずれも大きく、①口径に対する器高の比が 0.27～0.34 前後で体部が直線的に外傾するもの（第 27 図 1～5）、②口径に対する器高の比が 0.4 以上で体部が直線的に外傾するもの（第 27 図 6）、③口径に対する器高の比が 0.4 以上で体部が膨らみ直立気味に立ち上がるもの（第 27 図 7）があり、①が主体を占める。内面は底部を横方向→体下部を斜め方向→口縁部を平行にヘラミガキし、黒色処理している。

土師器高台坏（第 27 図 9）は「ハ」の字状に外に開く低い高台が付き、体部がやや膨らみながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。器厚は約 4mm と薄く、内面のヘラミガキも坏と同様で、丁寧で上手な作りである。

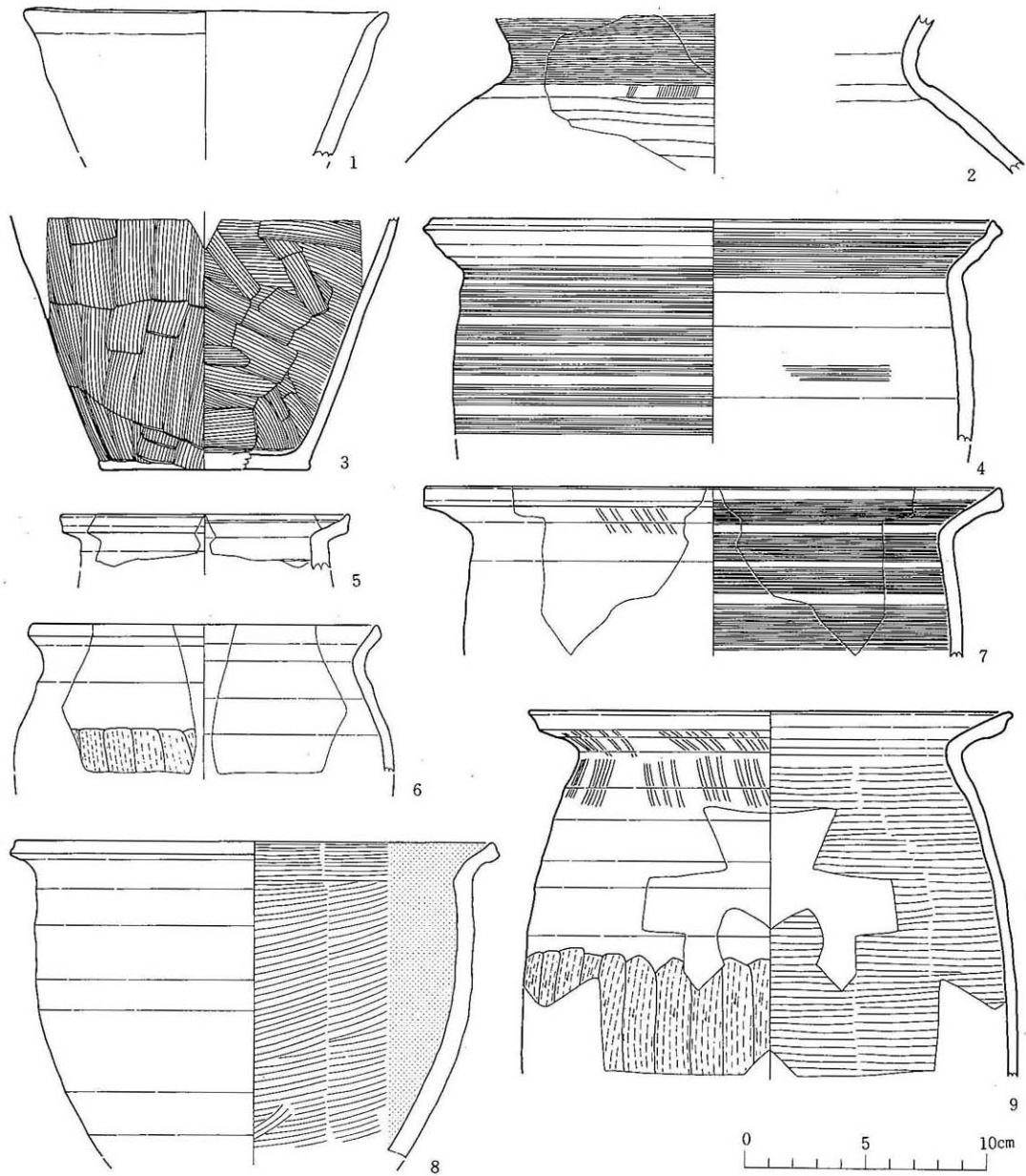
土師器甕にはロクロを使用しないもの（第 27 図 10～12、第 28 図 1～3）とロクロ調整のもの（第 28 図 4～9）がある。ロクロを使用しない甕には長胴のもの（第 27 図 10～12）、球胴のもの（第 28 図 2）、鉢形のもの（第 28 図 1）があり、大きさには口径が 16cm 前後と小型なもの（第 27 図 10、第 28 図 1）と 21cm 前後と大型なもの（第 27 図 11・12、第 28 図 2）がある。いずれも口頸部がヨコナデされ、体部外面は縦方向にヘラケズリされるものが多い。ロクロ調整の甕には口径 12cm 前後の小型のもの（第 28 図 5）、口径 15cm 前後の中型のもの（第 28 図 6）、口径 22cm 前後の大型のもの（第 28 図 4・7～9）がある。大型のものの中には内外面とも回転刷毛目・ロクロナデされるもの（第 28 図 4）、叩き成形後に外面がロクロナデ、内面が回転刷毛目されるもの（第 28 図 7）、叩き成形後に外面がロクロナデ・ヘラケズリ、内面がロクロナデ・平行ヘラミガキ（ロクロ使用？）されるもの（第 28 図 9）、内面がヘラミガキ・黒色処理されるもの（第 28 図 8）があり、製作手法はヴァリエティに富む。一方、小型の甕はロクロナデ、中型の甕はロクロナデ後に外面体下部がヘラケズリされており、製作手法は簡便である。器高が口径よりもやや低い第 28 図 9 を除けば、器形は長胴ないしそれに近い器形の甕と考えられる。

須恵器坏で調整のわかるものは 49 点あり、①ヘラ切り（第 29 図 4～17）が 43 点と主体を占め、②手持ちヘラケズリ（第 29 図 1～3）、③回転糸切り（第 29 図 19）がそれぞれ 3 点ある。①・②は口径に対する底径の比が 0.50～0.62 と大きく、多くは体部が直線的で口縁部がそのまま外傾ないしわずかに外反する。①には口径に対する器高の比が 0.39 と他よりも大きく、口径も大きいもの（第 29 図 18）もある。③は体部が直線的で口縁部がそのまま外傾する点は①・②と同様だが、口径に対する底径の比は 0.43 とやや小さい（③は埋土 1 層・検出面から出土し、他よりも時期的に新しい可能性もある）。なお、第 29 図 1 の底部には「足」、第 29 図 14 の体部には「𪛗」（「斎」の異体字）と墨書されている。



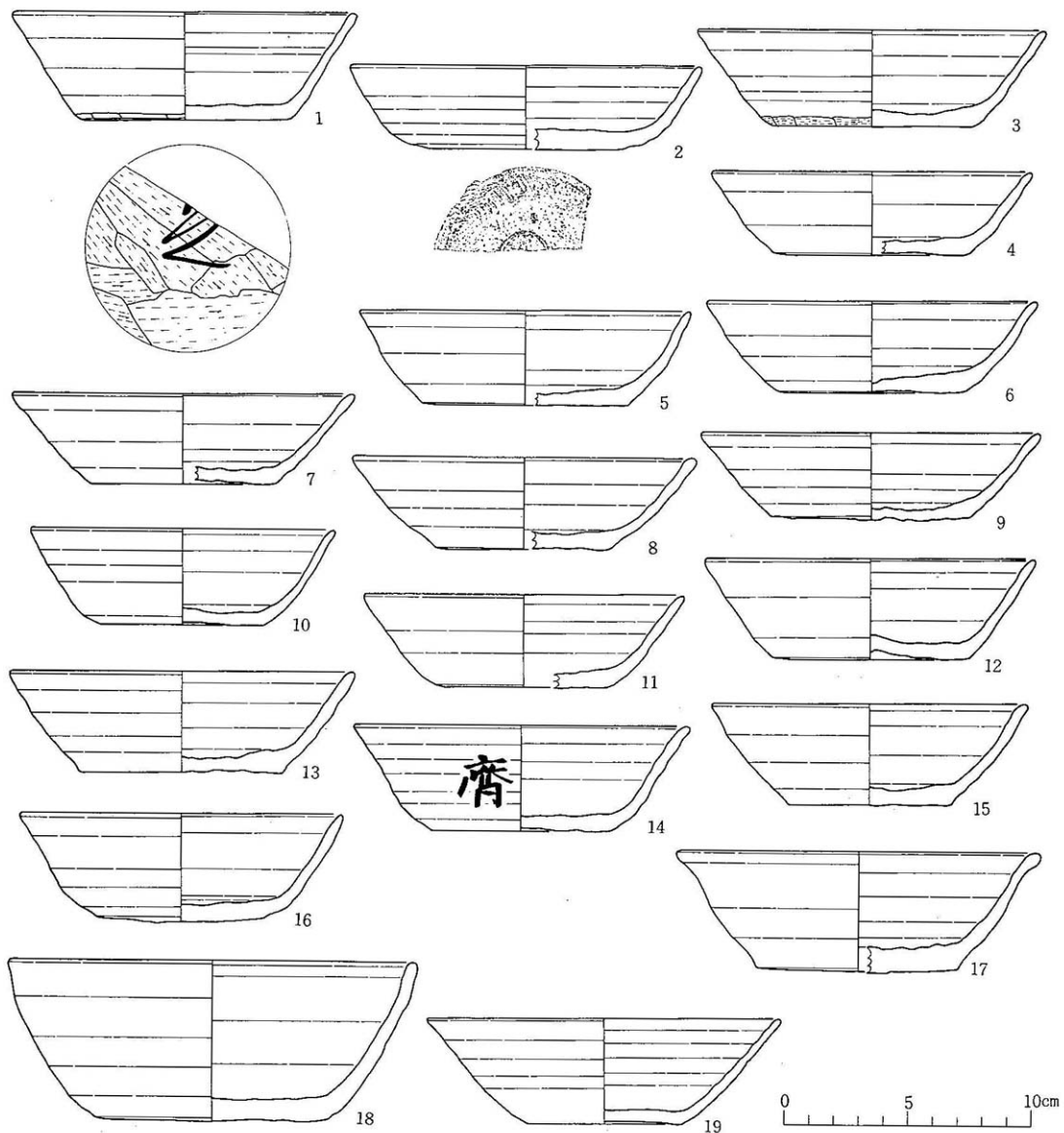
番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	検出面	土師器	坏	BI	回転ヘラケズリ	8595	7	床面	土師器	坏	BI	回転ヘラケズリ	8595
2	3層	土師器	坏	BI	回転ヘラケズリ	8595	8	4層	土師器	坏	BII	ヘラ切り、手持ヘラケズリ	8595
3	2層	土師器	坏	BI	回転ヘラケズリ	8595	9	4層	土師器	高台坏		内面一定方向ミガキ	8595
4	2層	土師器	坏	BI	回転ヘラケズリ	8595	10	カマド	土師器	甕	A1	非ロクロ調整	8596
5	4層	土師器	坏	BI	回転ヘラケズリ	8595	11	5層	土師器	甕	A1	非ロクロ調整	8596
6	4層	土師器	坏	BI	回転ヘラケズリ 胎土に雲母を含む	8595	12	3層	土師器	甕	A1	非ロクロ調整 胎土に雲母を含む	8596

第 27 図 S12157 竪穴住居跡出土遺物(1)



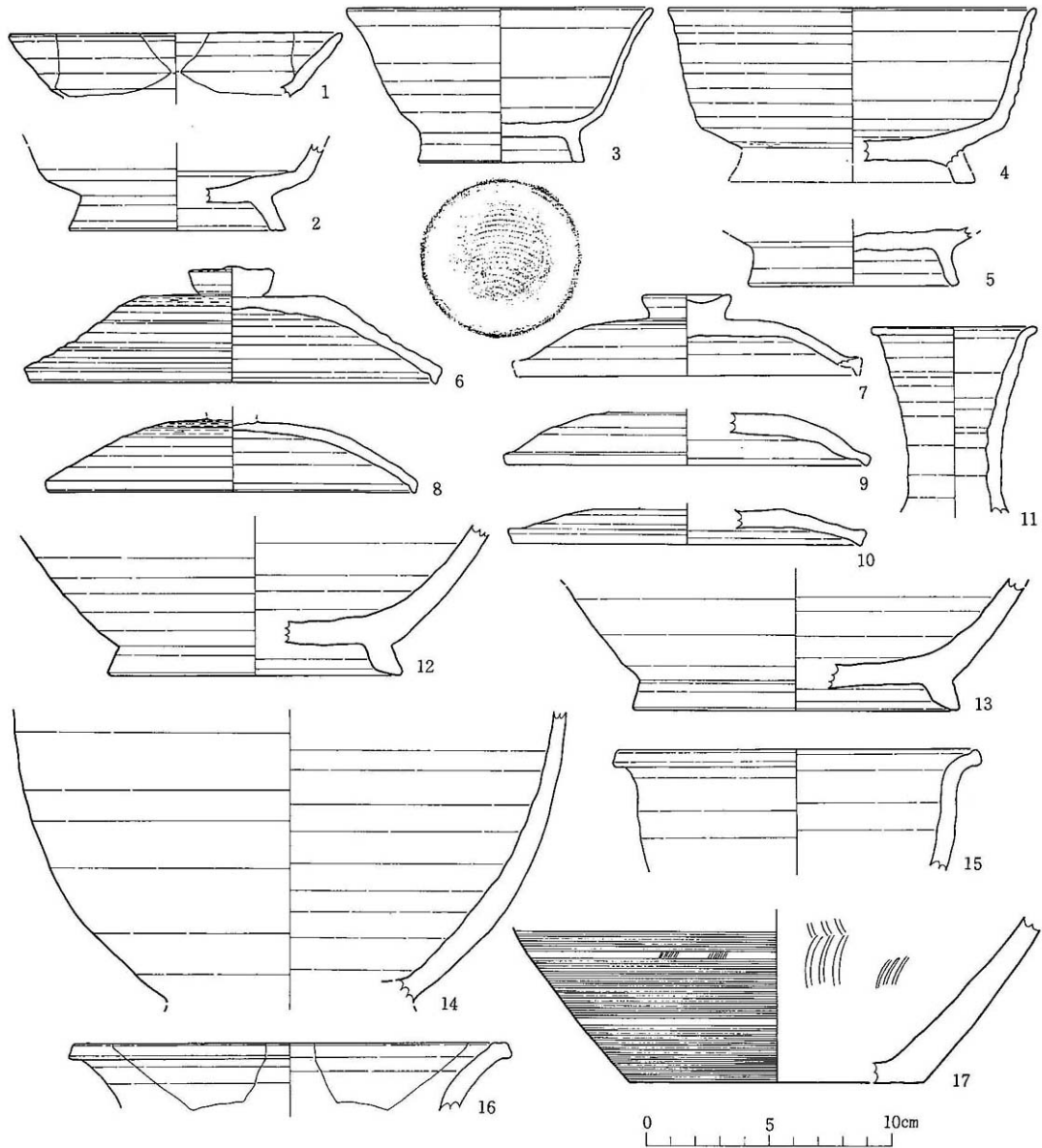
番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	4層	土師器	甕	A4	非ロクロ、鉢形	8596	6	2層	土師器	甕	B2	中型、ロクロ、ケズリ	8596
2	3層	土師器	甕	A3	非ロクロ、球胴	8596	7	2層	土師器	甕	B1	外面：叩き→ロクロナデ 内面：回転刷毛目	8596
3	カマド	土師器	甕	A1	非ロクロ、長胴	8596	8	2層	土師器	甕	B2	ロクロ→内面ミガキ→黒色処理	8596
4	2層	土師器	甕	B1	回転刷毛目	8596	9	2層	土師器	甕	B1	外面：叩き→ロクロ→ケズリ 内面：回転ミガキ	8596
5	3層	土師器	甕	B2	小型、ロクロナデ	8596							

第 29 図 SI2153 竪穴住居跡出土遺物(2)



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	2層	須恵器	坏	II	手持ちヘラケズリ、墨書「足」	8594	11	4層	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594
2	4層	須恵器	坏	II	底部周辺手持ちヘラケズリ	8594	12	2層	須恵器	坏	III	ヘラ切り、火だすき痕	8594
3	4層	須恵器	坏	II	ヘラ切り一体下部手持ちヘラケズリ	8594	13	5層	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594
4	4層	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594	14	2層	須恵器	坏	III	ヘラ切り、体部墨書「齊」	8594
5	2層	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594	15	床面	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594
6	3層	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594	16	3層	須恵器	坏	III	ヘラ切り、火だすき痕	8594
7	5層	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594	17	2層	須恵器	坏	III	ヘラ切り、火だすき痕	8594
8	4層	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594	18	床面	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594
9	床面	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8594	19	1層	須恵器	坏	IV	回転糸切り	8594
10	3層	須恵器	坏	III	ヘラ切り、火だすき痕	8594							

第 29 図 SI2153 竪穴住居跡出土遺物(3)

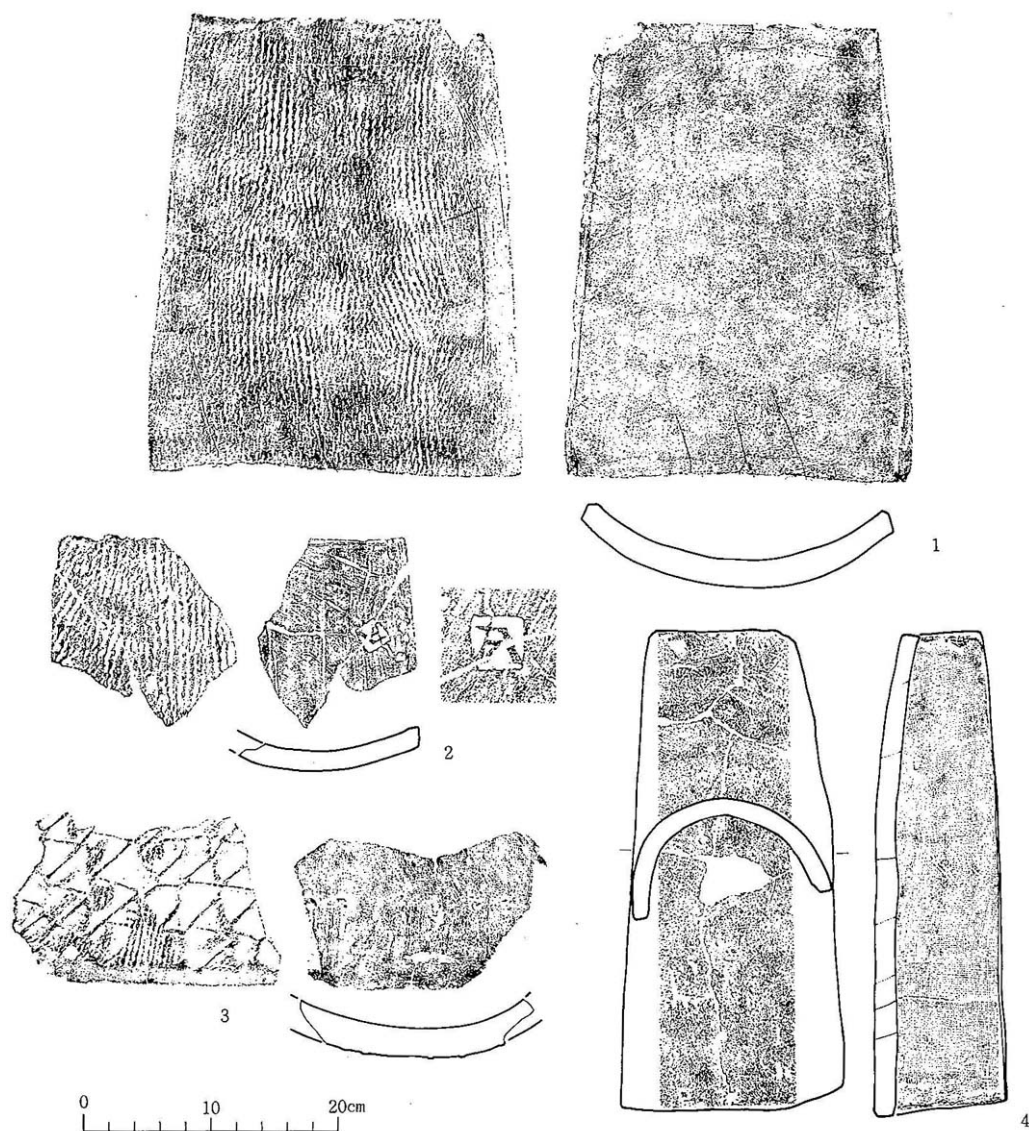


番号	層位	種類	器種	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	特徴	箱番号
1	5層	須恵器			8594	10	床面	須恵器	蓋	端部折れ曲がらない	8595
2	カマド	須恵器	稜塊	底部切り誰し不明	8594	11	3層	須恵器	長頸壺		8595
3	1層	須恵器	高台杯	回転糸切り	8594	12	検出面	須恵器	壺		8595
4	床面	須恵器	稜塊	ヘラ切り	8594	13	検出面	須恵器	壺		8595
5	4層	須恵器		高台杯 or 稜塊	8594	14	2層	須恵器	壺	大戸窯製品?	8595
6	床面	須恵器	蓋	回転ヘラケズリ	8594	15	5層	須恵器	甕	小型	8595
7	4層	須恵器	蓋	回転ヘラケズリ	8594	16	4層	須恵器	甕	大型	8595
8	4層	須恵器	蓋	回転ヘラケズリ、転用硯(内面)	8594	17	1層	須恵器	甕	叩き→かき目	8595
9	2層	須恵器	蓋	転用硯(内面)	8594						

第30図 SI2153 竪穴住居跡出土遺物(4)

須恵器稜・には口縁部が直線的に外傾して器高の低いもの（第30図1・4）、口縁部が外反して器高の高いもの（第30図3）があり、底部の切り離し技法のわかるものには回転糸切り（第30図3）とヘラ切り（第30図4）がある。

須恵器蓋のつまみは低い宝珠形で中央がなだらかに窪むもの（第30図7）と窪まないもの（第30図6）とがあり、口縁部は直角に折り曲げられているものが主体である。外面天



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	貯蔵穴1	瓦	平瓦	II Ba2		8615	3	5層	瓦	平瓦		軒平瓦621に類似	8615
2	5層	瓦	平瓦	II Ba1	刻印「丸」B	8615	4	2層	瓦	丸瓦	II A	政庁第II期	8615

第31図 S12153 竪穴住居跡出土遺物(5)

井部は回転ヘラケズリされている。第30図8・9は硯に転用されている。

須恵器壺はいずれも破片で、長頸壺と考えられる(第30図11~14)。

須恵器甕も全体形状のわかるものはないが、大型のもの(第30図16・17)と小型のもの(第30図15)があり、後者は鉢に近い器形である。

平瓦は政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類 aタイプが主体を占めるが、貯蔵穴1からは政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類 a2タイプが1点(完形)出土している(第31図1)。他には政庁第Ⅱ期の軒平瓦621と同様の平瓦(第31図3)、政庁第Ⅰ期の平瓦ⅡA類が少数ある。丸瓦は有段丸瓦ⅡB類 aタイプが主体を占めるが、無段丸瓦ⅡA類が1点ある。刻印瓦では「丸」Bの平瓦ⅡB類 a1タイプが1点、「占」の有段丸瓦ⅡB類 aタイプが2点あり、いずれも政庁第Ⅱ期に属する。

他の遺物では刀子1点(第32図1)、砥石3点(第32図2)、漆器片2点、漆紙文書3点、漆塊1点、凝灰岩切石2点、同破片37点、ウシまたはウマの大腿骨2点、ウマの上顎歯6本、琥珀片がある。

漆紙文書はいずれも小さな断片で、埋土より出土した。3点ともに文字は左文字で確認され、漆が厚く固着した状態や紙質も類似しているため、本来同一個体であったとみられる。図および写真は、左右を反転させた状態を示したものである。

(1) □□□□□□

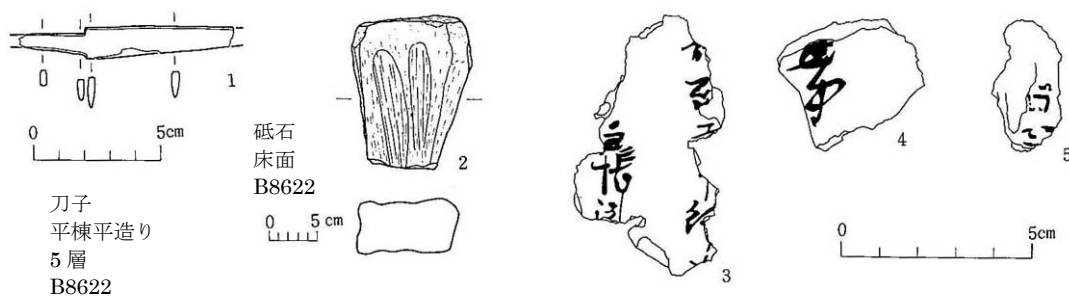
主帳□ (第32図3、図版13-9)

(2) □中 (第32図4、図版13-10)

(3) □□ (第32図5、図版13-11)

(1)の「主帳」は郡もしくは軍団の官人で、四等官の最下位である。

漆塊は小紙片が付着し、紙質・漆の状態から見て、漆紙文書と同一個体と推定される。



第32図 SI2153 竪穴住居跡出土遺物(6)

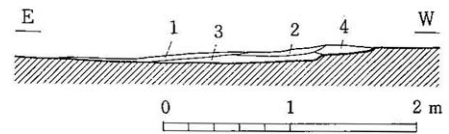
S I 2154 竪穴住居跡 (第25・33図)

調査区中央南寄りに位置し、地山面で検出した。S B 2144・2145 と重複し、いずれよりも古い。

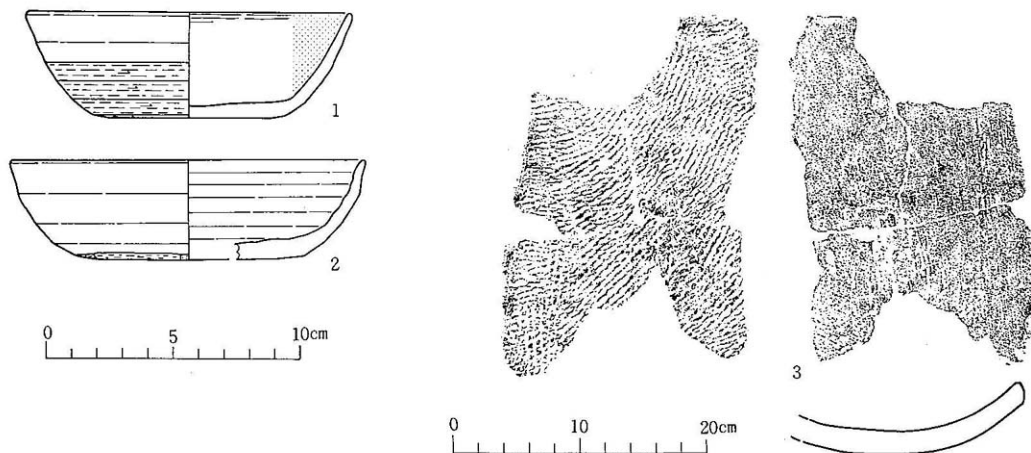
残存状況は極めて悪く、床面までほとんど削平され、最も残りの良い西辺でも壁高は約10cmしかない。平面形は長方形で、規模は東西2.3m以上、南北3.2m

(推定値)である。西辺は発掘南北基準線に対し北で西に約8°偏する。西辺南寄りにカマドが付設され、幅約30cm、深さ約8cmの煙道がさらに西に約0.5m延びる。カマド天井部が崩落し、カマドは壊されていたが、粘土で構築された両側壁の一部が残存している。主柱穴・周溝・貯蔵穴はない。堆積土は人為的に埋められた黄褐色土で、カマド前面では焼土・炭を含む。

出土遺物にはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦の破片が少数ある。土師器坏には底部・体下部を回転ヘラケズリしたもの(第34図1)、須恵器坏には底部を手持ちヘラ削りしたもの(第34図2)があり、いずれも口径に対する底径の比が大きい。平瓦には政庁第II期の平瓦II B類 a1タイプ(第34図3)が含まれている。



第33図 SI2154 住居跡断面図



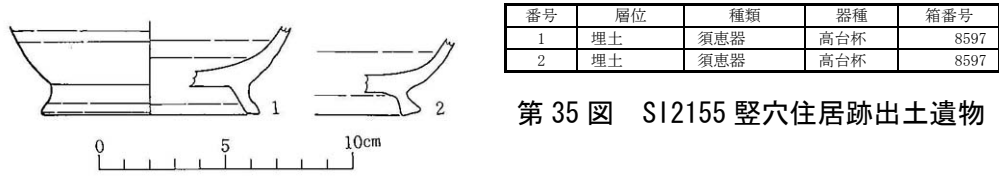
番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	床面	土師器	坏	B I	回転ヘラケズリ	8597	3	床面	瓦	平瓦	II B a1		8617
2	カマド	須恵器	坏	II	手持ちヘラケズリ	8597							

第34図 SI2154 竪穴住居跡出土遺物

S I 2155 竪穴住居跡 (第37・38図)

調査区中央東寄りに位置し、地山面で検出した。重複状況から見てS I 2157・2158、S K2169よりも古い。平面形は長方形で、規模は南北約6.9m、東西約4.8mである。西辺は発掘南北基準線に対し北で西に約7°偏する。壁の立ち上がりは急で、壁高は約15cmある。床は平坦で地山である。カマドの位置は不明である。幅約15~30cm、深さ約6cmの周溝が西辺、北辺・南辺の西半に巡る。堆積土は黄褐色土と褐色土が不均一に混じり、地山小ブロックを多く含むことから、人為堆積と考えられる。

出土遺物にはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台杯（第 35 図）・甕、丸瓦の破片が少数ある。多くは小破片で図示できるものは少ない。



第 35 図 SI2155 竪穴住居跡出土遺物

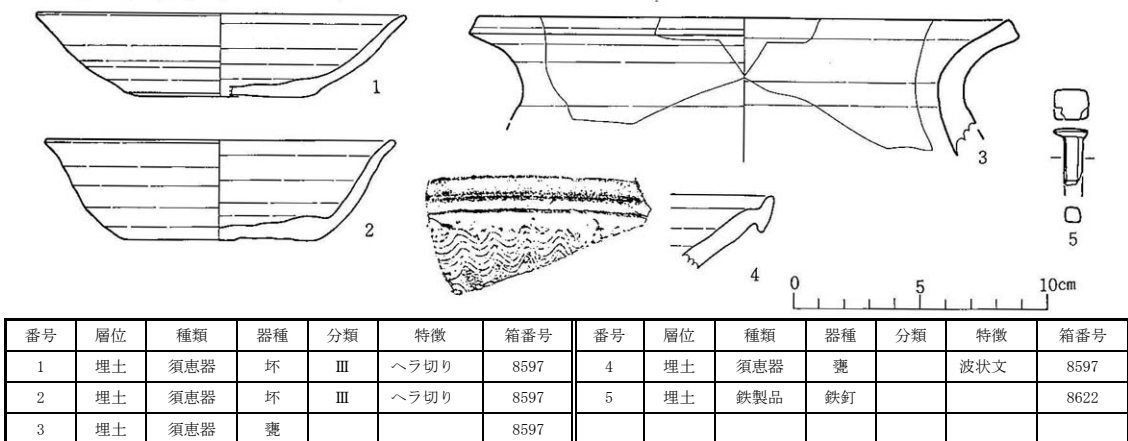
S I 2156 竪穴住居跡（第 37・38 図）

調査区中央東寄りに位置する。S I 2157 と重複してこれよりも古い。残存状況は極めて悪く、地山面・S I 2157 床面下で周溝のみを検出した。平面形は方形で、規模は南北約 4.2m、東西約 3.7m である。西辺は発掘南北基準線に対し北で西に約 7° 偏する。カマドの位置は不明である。幅約 25cm、深さ 10cm 前後の周溝が西辺・東辺に巡り、南辺でも一部検出した。堆積土は黄褐色土と褐色土が不均一に混じり、地山小ブロックを多く含むことから、人為堆積と考えられる。

周溝よりロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏、凝灰岩切石の破片が少数出土したが、多くは小破片で図示できるものはない。

S I 2157 竪穴住居跡（第 37・38 図）

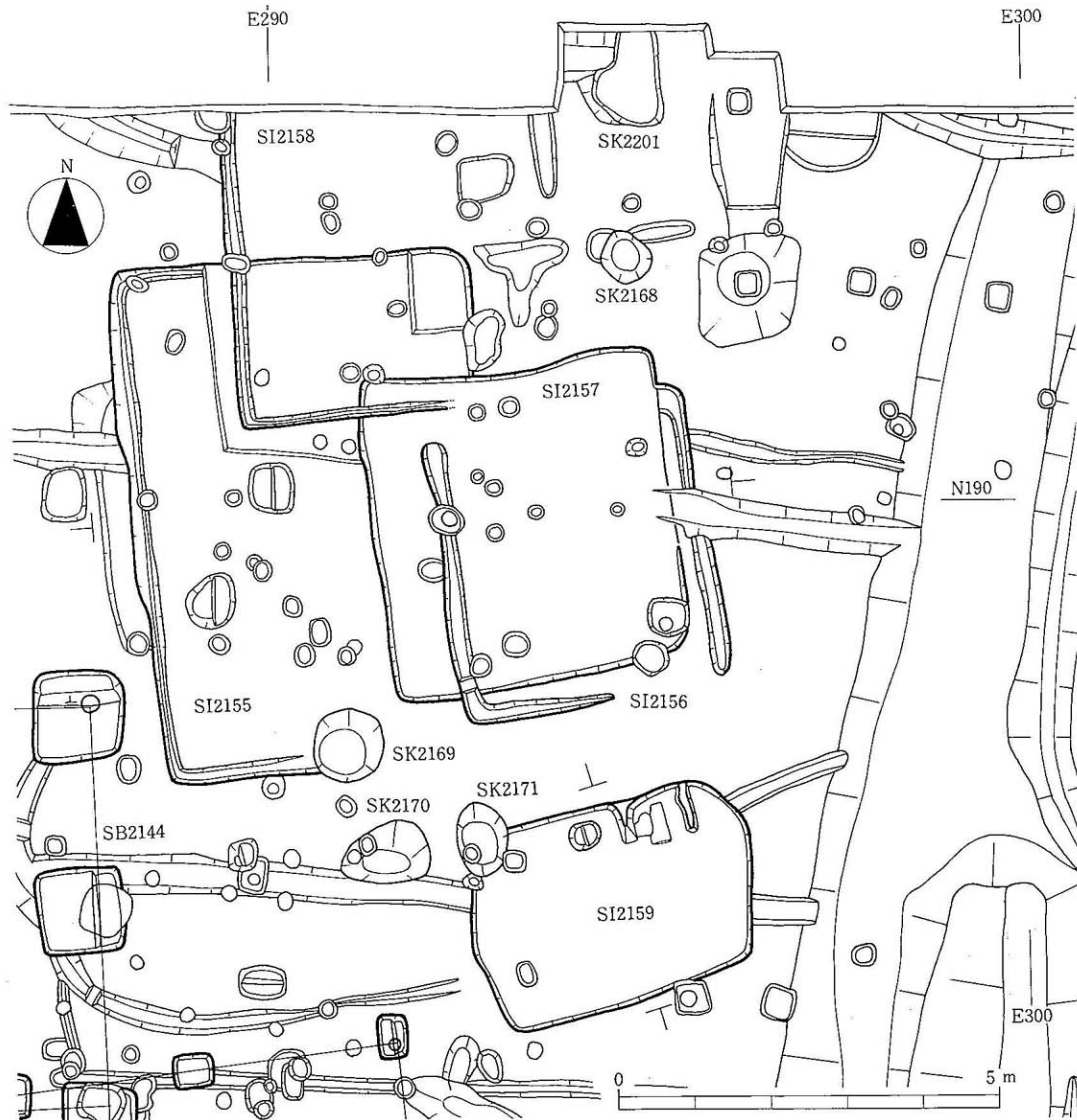
調査区中央東寄りに位置し、地山面・S I 2155 埋土上面で検出した。重複状況から見て S I 2155・2156 よりも新しく、S I 2158 よりも古い。平面形は方形で、規模は南北約 4.2m、東西約 4.0m である。西辺は発掘南北基準線に対し北で西に約 7° 偏する。壁の立ち上がりは急で、最も残りの良い西辺での深さは約 20cm ある。床面は平坦で、黄褐色粘質土を 2～



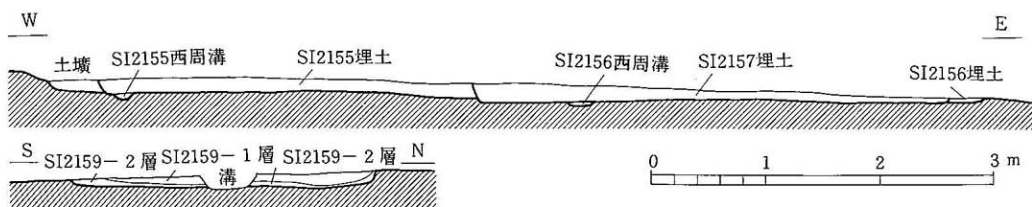
第 36 図 SI2157 竪穴住居跡出土遺物

3 cm の厚さで貼床している。カマドの位置は不明である。堆積土は黄褐色土と褐色土が不均一に混じり、地山小ブロックを多く含むことから、人為堆積と考えられる。

床面・埋土よりロクロ調整の土師器坏・甕、へら切りの須恵器坏（第36図1・2）・高台坏・甕（第36図3・4）、丸瓦、鉄釘（第36図5）、凝灰岩切石などが少数出土した。



第37図 SI2155~2159 竪穴住居跡、SK2169~2171 土壌平面図



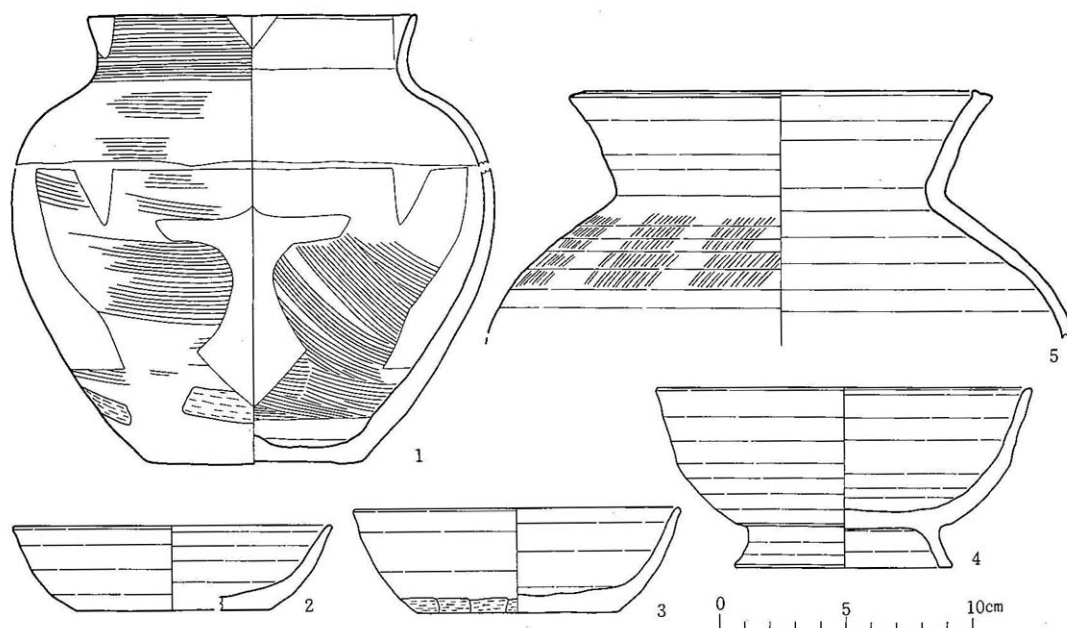
第38図 SI2155~2157・2159 竪穴住居断面図

S I 2158 竪穴住居跡 (第 37 図)

調査区中央東寄りに位置する。S I 2155・2157 と重複し、いずれよりも新しい。床面まで削平され、地山面と S I 2155・2157 埋土上面で周溝のみを検出した。平面形は方形で、規模は東西約 4.5m、南北約 3.4m 以上である。西辺は発掘南北基準線に対し北で西に約 7° 偏する。カマドの位置は不明である。幅 24cm、深さ 10cm の周溝が西辺・南辺に巡り、東辺でも一部検出した。遺物は周溝より須恵器坏破片が 1 点出土したのみである。

S I 2159 竪穴住居跡 (第 37・38 図)

調査区中央東寄りに位置し、地山面で検出した。壁の立ち上がりは急で、残りの良い北辺で壁高は 15cm あるが、上部はかなり削平されていた。平面形は方形で規模は東西約 4.0m、南北約 2.7m である。南辺は発掘東西基準線に対し東が北に約 15° 偏する。床は平坦で地山である。北辺中央東寄りにカマドが付設され、天井部は崩落していたが、粘土で構築された両側壁が残存していた。カマド燃焼部は幅 75cm、奥行 50cm である。煙道・煙出しは検出されなかった。カマド内からは政庁第 II 期の平瓦 II B 類 3 点 (第 40 図) が凸面を上

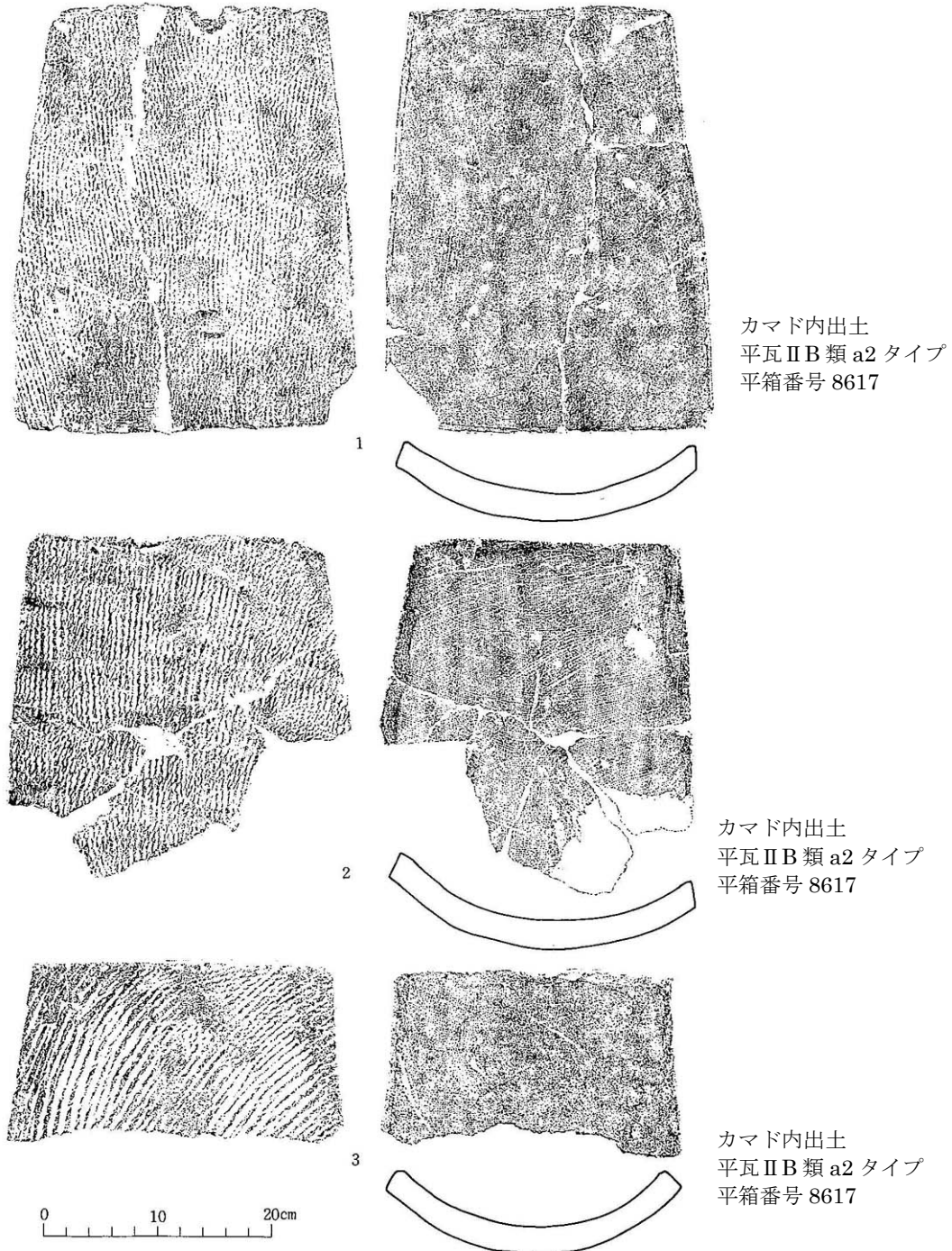


番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	1層	土師器	甕	A3	非ロクロ調整、球胴	8597	4	貯蔵穴	須恵器	高台坏		回転ヘラケズリ、内面下部皮膜状附着物	8597
2	床面	須恵器	坏	II	底部手持ちヘラケズリ	8597	5	床面	須恵器	甕		叩き→ロクロ調整	8597
3	1層	須恵器	坏	II	ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	8597							

第 39 図 S I 2159 竪穴住居跡出土遺物 (1)

して出土し、カマド芯材に用いられたと考えられる凝灰岩切石の破片が多く出土した。貯蔵穴がカマドの西隣に1基ある。平面形は楕円形で、長径40cm、短径35cm、深さ10cmである。

貯蔵穴・床面・埋土より図示できる土器が出土している（第39図）。須恵器高台坏（4）



第40図 SI2159 竪穴住居跡出土遺物(2)

は体部がやや膨らみながら直立気味に立ち上がり、「ハ」の字状に外に開くがっしりした高台が付く。底部の切り離し技法は不明である。須恵器坏には底部が手持ちヘラケズリのもの(2)、底部がヘラ切りで体下部が手持ちヘラケズリのもの(3)があり、いずれも口径に対する底径の比が大きく、体部が直線的な器形である。土師器甕(1)はロクロを使用せず、球胴の壺に近いあまり例のない器形である。外面の調整は口頸部がヨコナデ、体上部がナデ、体下部が部分的なケズリ・ナデで、内面はナデである。他にロクロ調整の土師器坏・甕、ヘラ切りの須恵器坏、須恵器甕(5)などの小破片が少数出土している。

S I 2160A・B 竪穴住居跡 (第41図)

調査区北東隅に位置し、第3層下の地山面で検出した。残存状況は極めて良く、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最大45cmある。内部が補修された後に拡張され、それぞれに焼け面を伴うことから、この住居の使用過程は拡張される前のS I 2160Aと拡張後のS I 2160Bに大別され、S I 2160Aはさらにa・bの2段階に細分される。平面形はいずれも隅丸正方形で、規模はS I 2160Aが東西約4.3m、南北約4.0mで、S I 2160Bが東西約4.6m、南北約4.5mである。南辺はいずれも発掘東西基準線に対し東で北にわずかに偏する。カマドは付設されていない。

〔S I 2160A 住居跡〕

周溝A、暗渠1・2、焼け面1～3を検出した。北東隅からほぼ東に2m以上外延溝が延び、外延溝には新旧2時期がある。各辺に巡る周溝Aは幅28cm、深さ15cm前後で、各辺のコーナー付近に埋め込まれた丸瓦が残存していることから、暗渠であった可能性がある。a段階：当初に構築された段階で、周溝A、暗渠1、外延溝aが設けられ、ほぼ中央には焼け面1を伴う。

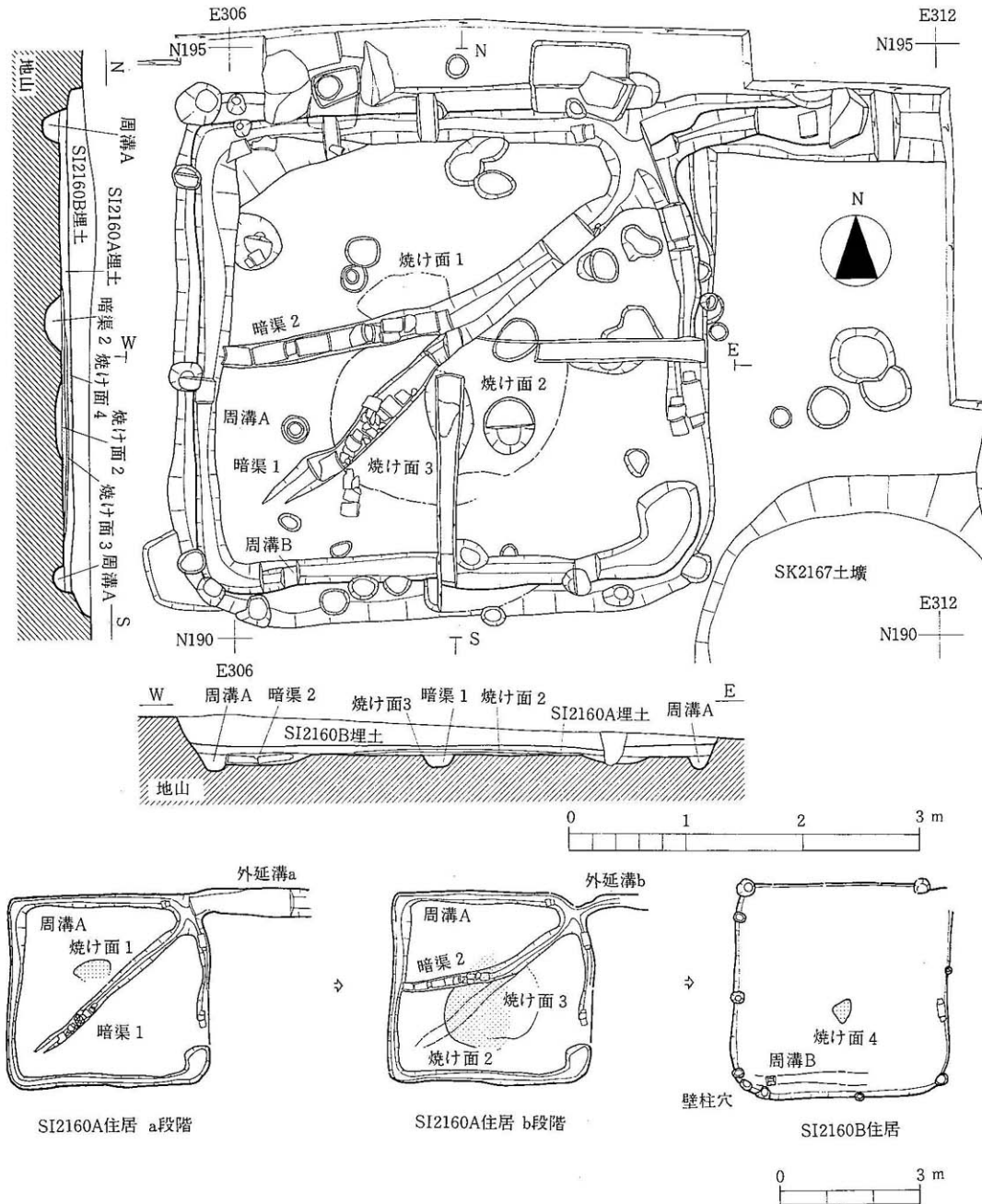
暗渠1は南西隅付近から北東部に向けて住居を横断するように設けられている。北東半分は新しい暗渠2に壊されているが、北東隅で外延溝aに接続していたと考えられる。暗渠1は幅30cm、深さ10cm前後で、丸瓦を伏せた状態で連結し、埋め戻してから貼床している。用いられた丸瓦はいずれも有段丸瓦ⅡB類aタイプで、完形のものとは玉縁ないし先から10cm位を欠いたものがあり、後者が多く用いられている。

外延溝aは幅50cm、深さ40cmである。

焼け面1は住居中央やや北寄りに位置し、床面が直接焼け、固く締まっている。残存する焼け面の範囲は80×40cmである。

b段階：暗渠・外延溝・床面を改修した段階で、暗渠2、外延溝b、焼け面2・3を伴う。周溝Aは改修されていない。

暗渠2は西周溝中央部から北東部に向けて住居を横断するように設けられている。北東半分は古い暗渠1とほぼ重複し、北東隅で外延溝bに接続している。幅25cm、深さ10cm前後で、西半には丸瓦が伏せた状態で連結され、埋め戻されている。用いられた丸瓦はいずれも有段丸瓦ⅡB類aタイプで、完形のものとは玉縁ないし先から10cm位を欠いたものと



第41図 SI2160 竪穴住居跡平面・断面図

があり、前者が多く用いられている。なお、暗渠2の北東半分にも丸瓦が敷設されていた可能性が高く、住居拡張の際に抜かれたと考えられる。また、暗渠1の南西部も暗渠2と同時に機能し続けたと考えられる。

外延溝bは外延溝aと重複して幅が狭くなり、幅30cm、深さ10cm前後である。

焼け面2は住居ほぼ中央に位置する。浅い土壌と暗渠1・2を整地し、その上面約120×90cm以上の範囲が固く焼け締まっている。焼け面3は焼け面2の範囲とほぼ重複し、焼け面2の上を2～3cmの厚さで整地し、その上面約140×120cm以上の範囲が固く焼け締まっている。

住居内の埋土はやや暗い黄褐色土で、地山小ブロックを少量含むことから、人為堆積と考えられる。

【S I 2160B住居跡】

S I 2160Aを拡張した住居で、周溝B、焼け面4を伴う。また、西辺・南辺の壁際には壁柱穴がコーナーと中央の3ヶ所に設けられている。床面はほぼ平坦で、上面に薄い炭化物層が堆積している。

周溝Bは幅20cm、深さ7cmである。南辺で検出したのみだが、東辺中央壁際の丸瓦はこれと同じレベルにあり、東辺にも続いていた可能性が高い。壁柱穴は径25cm、深さ30cm前後である。焼け面4は住居中央にあり、45×40cmの範囲が固く焼け締まっている。

住居内の埋土はにぶい黄褐色土で、自然堆積と考えられる。

床面・周溝・堆積層から土器・瓦などが多数出土した。土器については若干の時期差も認められるため、S I 2160A住居跡床面・暗渠、S I 2160A住居跡堆積層・周溝、S I 2160B住居跡堆積層に分けて図示した(第42～44図)。瓦、鉄製品については量が少ないため、それぞれ種別に図示した(第45・46図)。

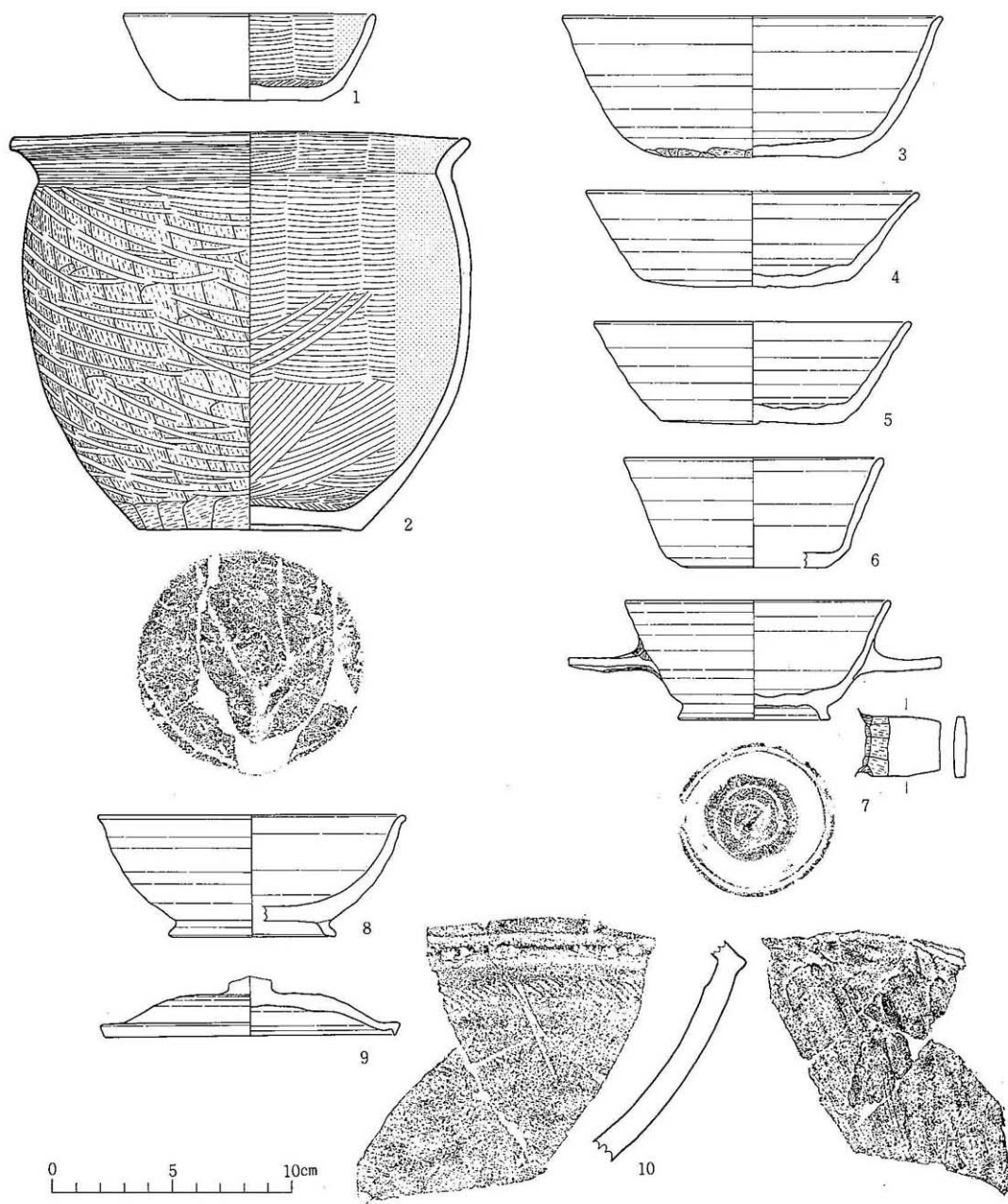
【S I 2160A住居跡床面・暗渠出土遺物】(第42・45図)

土器には土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・双耳坏・蓋・甕・瓶がある。

土師器坏はロクロ調整のものが6点あり、内訳は底部・体下部手持ちヘラケズリ1点(第42図1)、回転ヘラケズリ1点、不明4点である。内面は底部を横方向→体下部を斜め方向→口縁部を平行にヘラミガキし、黒色処理している。

土師器甕にはロクロを使用しないものとロクロ調整のものがあり、後者が多い。前者の第42図2は口径に対して器高がやや大きい球胴の甕で、外面は口頸部がヨコナデ、体部が縦方向にヘラケズリ後に斜方向に間隔を置いてヘラミガキし、内面はヘラミガキ後に黒色処理している。底部には木葉痕が残る。

須恵器坏には底部ヘラ切り(第42図4～6)が5点、手持ちヘラケズリ(第42図3)が



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	床面	土師器	坏	B II	手持ちヘラケズリ	8592	6	床面	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8598
2	床面	土師器	甕	A2	非ロクロ調整・内黒 底部：木葉痕	8593	7	床面	須恵器	双耳坏		ヘラ切り	8598
3	床面	須恵器	坏	II	回転糸切り→底部外 周・体下部手持ちヘラ ケズリ	8598	8	暗渠 1	須恵器	高台坏	III	回転糸切り→ロク ロナデ	8598
4	床面	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8598	9	床面	須恵器	蓋			8598
5	床面	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8598	10	床面	須恵器	瓶		外面：叩き→ロク ロナデ、内面： ナデ	8592

第 42 図 SI2160A 竪穴住居跡床面・暗渠出土土器

1点ある。いずれも底径が大きく、口径に対する底径の比も0.51~0.65と大きい。体部は直線的で、口縁部はそのまま外傾ないしわずかに外反する。やや深い・形のもの（第42図3・6）とそれよりも浅いものがある（第42図4・5）。

須恵器双耳坏（第42図7）は、底部をヘラ切り後に短く外に「ハ」字状に開く高台を付けてその周囲をロクロナデし、体部中央には耳を接合して接合部を手持ちヘラケズリし、その先をナデている。

須恵器高台坏（第42図8）は体部がやや膨らみながら立ち上がり、口縁がわずかに外反する。高台は底部糸切り後に付けられ、短く外に「ハ」字状に開く。

須恵器蓋（第42図9）は低い宝珠形のつまみが付くと推定され、口縁付近で外反して短く折れ曲がる。

瓦では暗渠1から政庁第Ⅰ期の二重弧文軒平瓦511（第45図4）、暗渠2から政庁第Ⅱ期の丸瓦ⅡA類（第45図5）、丸瓦ⅡB類aタイプ（第47図6・8）が出土している。

他には鉄滓・砥石が床面から出土している。

〔S I 2160A住居跡堆積層・周溝・外延溝出土遺物〕（第43・45・46図）

土器には土師器坏・皿・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺・横瓶がある。

土師器坏にはロクロ調整のものが5点あり、内訳は回転ヘラケズリ2点（第43図1・2）、手持ちヘラケズリ1点、不明2点である。内面は底部を横方向→体下部を斜め方向→口縁部を平行にヘラミガキし、黒色処理している。第43図1は底径が大きく、体部がやや膨らみながら立ち上がる器形である。第43図2は底径大きく、・に近い器形で、第43図7の須恵器坏と類似する。

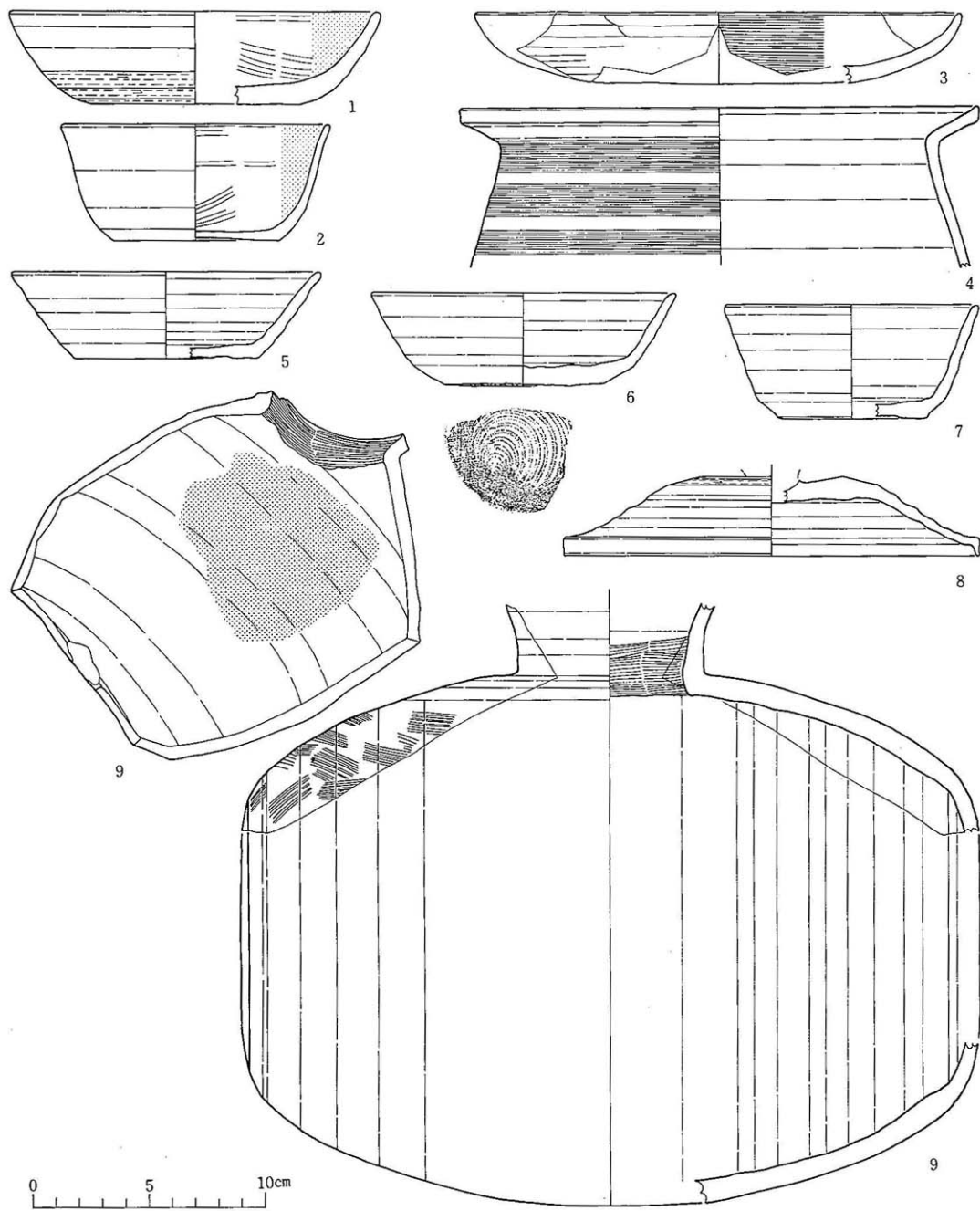
土師器皿（第43図3）はロクロを用いない大皿で、口径は21.5cmと大きい。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整されている。胎土は肌理細かく、黄褐色を呈し、内面も黒色処理されていない。こうした特徴をもつ土師器皿は古代陸奥国で一般的なものとは異なる。畿内の土師器皿に似ており、搬入された土器と考えられる。

土師器甕にはロクロを使用しないものとロクロ調整のものがあり、後者が量的に多い。後者の中には回転刷毛目の認められるものもある（第43図4）。

須恵器坏は4点あり、内訳はヘラ切り3点（第43図5・7）、底部回転糸切り→底部外周のみ手持ちヘラケズリ1点（第43図6）である。いずれも底径が大きく、体部が直線的で口縁部はそのまま外傾する。

須恵器横瓶（第43図9）は口頸部～体上部の破片で、転用硯となっており、内面に研磨痕が明瞭に残る。この横瓶は体部が叩き成形の後、内外面が丁寧にロクロナデされている。

瓦には政庁第Ⅱ期の重圈文軒丸瓦242（第45図3）、政庁第Ⅲ期の細弁蓮花文軒丸瓦310A



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	東周溝 A	土師器	坏	B I	回転ヘラケズリ	8592	6	埋土	須恵器	坏	II	糸切り→底部外周：手持ちヘラケズリ	8598
2	埋土	土師器	坏	B I	回転ヘラケズリ	8592	7	埋土	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8598
3	埋土	土師器	皿		非ロクロ・非内黒畿内産?	8592	8	周溝 A	須恵器	蓋		回転糸切り→回転ヘラケズリ	8598
4	東周溝 A	土師器	甕	B1	ロクロ、回転刷毛目	8592	9	埋土	須恵器	横瓶		平行叩き→ロクロナデ→口頸部接合→ロクロナデ：転用硯	8598
5	東周溝 A	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8596							

第 43 図 SI2160A 竪穴住居跡堆積層・周溝出土土器

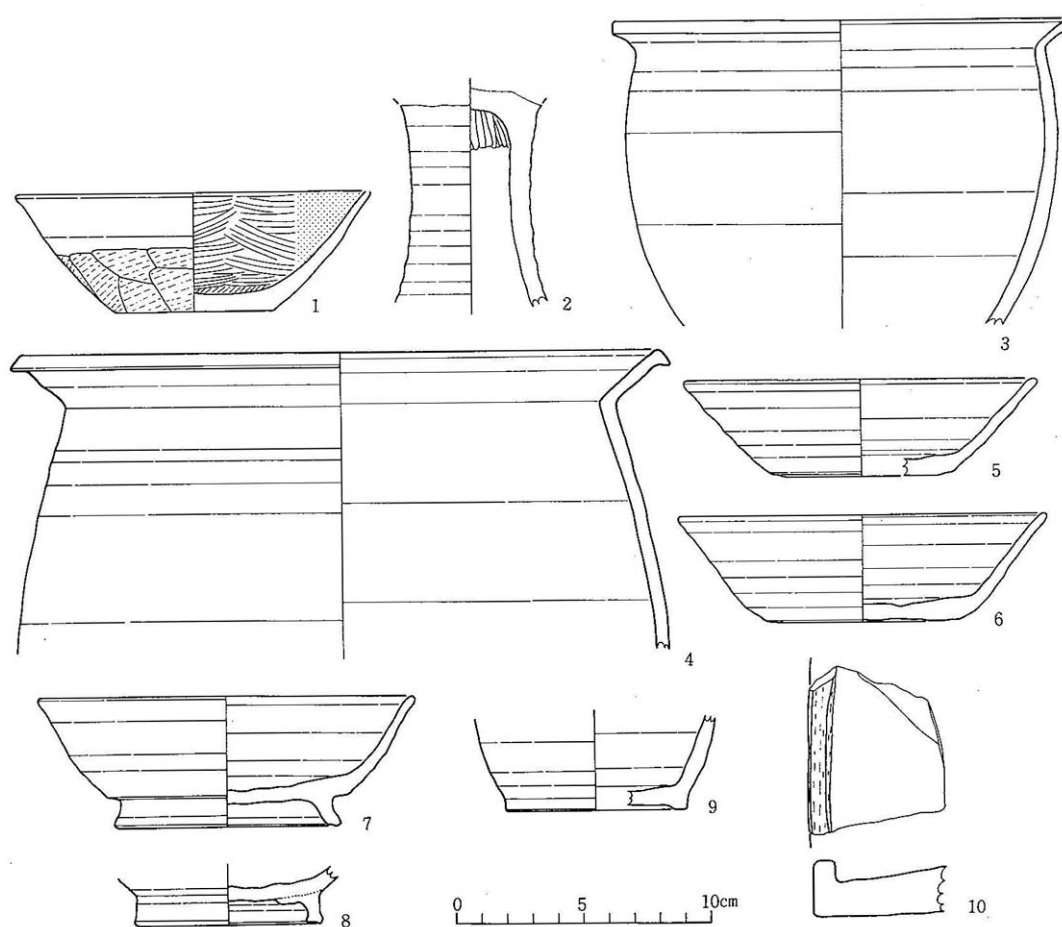
(第45図1)、平瓦ⅡB類、丸瓦ⅡB類aタイプ(第45図7)がある。

他には鉄鎌(第46図1)、鉄滓、砥石、ウマまたはウシの歯、焼骨片などがある。

【S I 2160B住居跡堆積層出土遺物】(第44~46図)

土器には土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壺がある。

土師器坏にはロクロを使用しないものが1点、ロクロ調整のものが16点あり、後者の内訳は底部・体下部手持ちへラケズリ1点(第44図1)、底部糸切り→底部のみ手持ちへラケズリ1点、底部のみ手持ちへラケズリ1点、底部・体下部回転へラケズリ1点、不明12点である。第44図1は底部がやや小さく、体部が直線的な器形で、内面は底部が横方向にへらミガキされている。



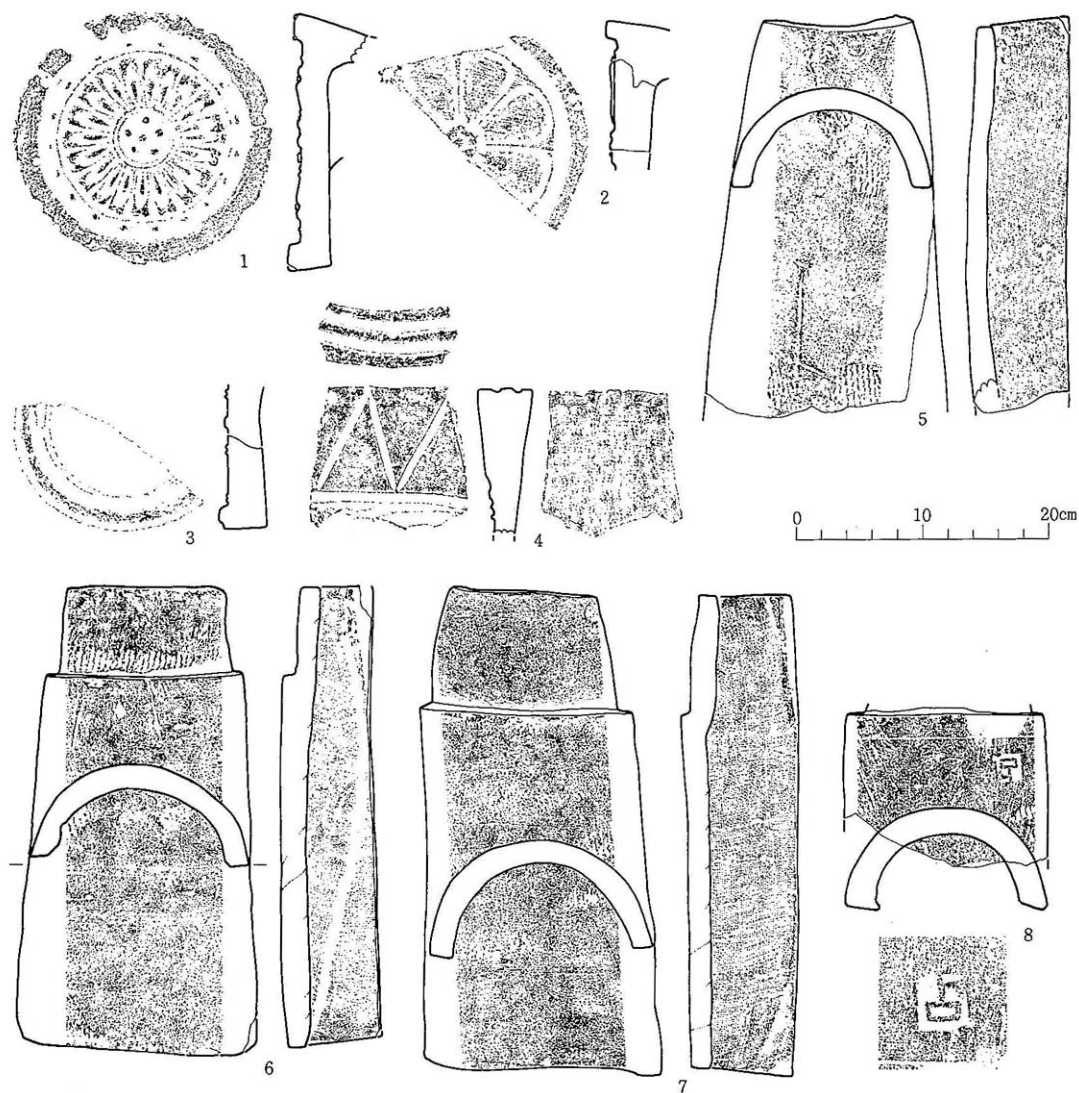
番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	土師器	坏	BⅡ	手持ちへラケズリ	8592	6	須恵器	坏	Ⅲ	へら切り	8596
2	土師器	高坏		ロクロ調整	8592	7	須恵器	高台坏	I	へら切り→ロクロナデ	8598
3	土師器	甕	B2	ロクロ調整	8592	8	須恵器	高台坏		回転糸切り→ロクロナデ	8598
4	土師器	甕	B1	ロクロ調整	8592	9	須恵器	壺		小型	8598
5	須恵器	坏	Ⅲ	へら切り	8598	10	硯	風字硯			8598

第44図 SI2160B 竪穴住居跡堆積層出土土器

土師器高坏は脚部のみで坏部・脚部下半が破損している（第44図2）。

土師器甕はいずれもロクロ調整のもので、口径12cm前後の中型の甕（第44図3）、口径22～26cm前後の大型の甕（第44図4）がある。

須恵器坏は26点あり、すべて底部がへら切りで、底径が大きく（口径に対する底径の比は0.52前後）、体部は直線的で口縁部がそのまま外傾する（第44図5・6）。



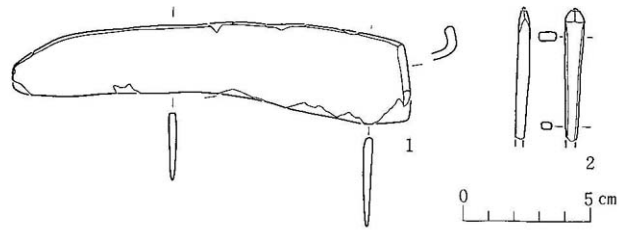
番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	外延溝	瓦	軒丸瓦	310A	細弁蓮花文、Ⅲ期	8612	5	暗渠2	瓦	丸瓦	ⅡA	Ⅱ期	8613
2	B埋土	瓦	軒丸瓦	431	重弁蓮花文、Ⅲ期	8612	6	暗渠2	瓦	丸瓦	ⅡBa		8614
3	A埋土	瓦	軒丸瓦	242	重圏文、Ⅱ期	8612	7	東周溝	瓦	丸瓦	ⅡBa		8612
4	暗渠2	瓦	軒平瓦	511	二重弧文、Ⅰ期	8612	8	暗渠2	瓦	丸瓦	ⅡBa	刻印「占」	8614

第45図 S12160A・B 竪穴住居跡出土瓦

須恵器高台坏には底部がへら切りで「ハ」字状に開く高台の付くもの（第44図7）、回転糸切りで直立気味の高台の付くもの（第44図8）がある。

瓦には政庁第Ⅲ期の重弁蓮花文軒丸瓦431（第45図2）、丸瓦ⅡB類aタイプがある。

この他、風字硯（第44図10）、鉄鎌（第46図2）、不明銅製品小片がある。

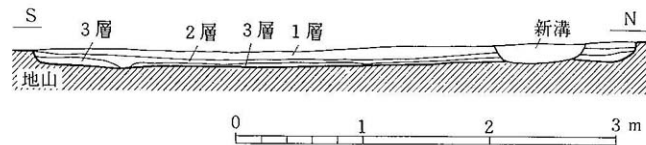


番号	層位	器種	箱番号
1	A 西周溝	鉄鎌	8622
2	B 埋土	鉄鎌	8622

第46図 SI2160A・B 竪穴住居跡出土鉄製品

SI2161 竪穴住居跡（第18・47図）

調査区東部中央に位置し、第3層下の地山面で検出した。残存状況は比較的良く、壁は急に立ち上がり、壁高は最大15cmある。平面形は長方形で、規模は西辺約4.6m、南辺約3.4mである。西辺は発掘東西基準線



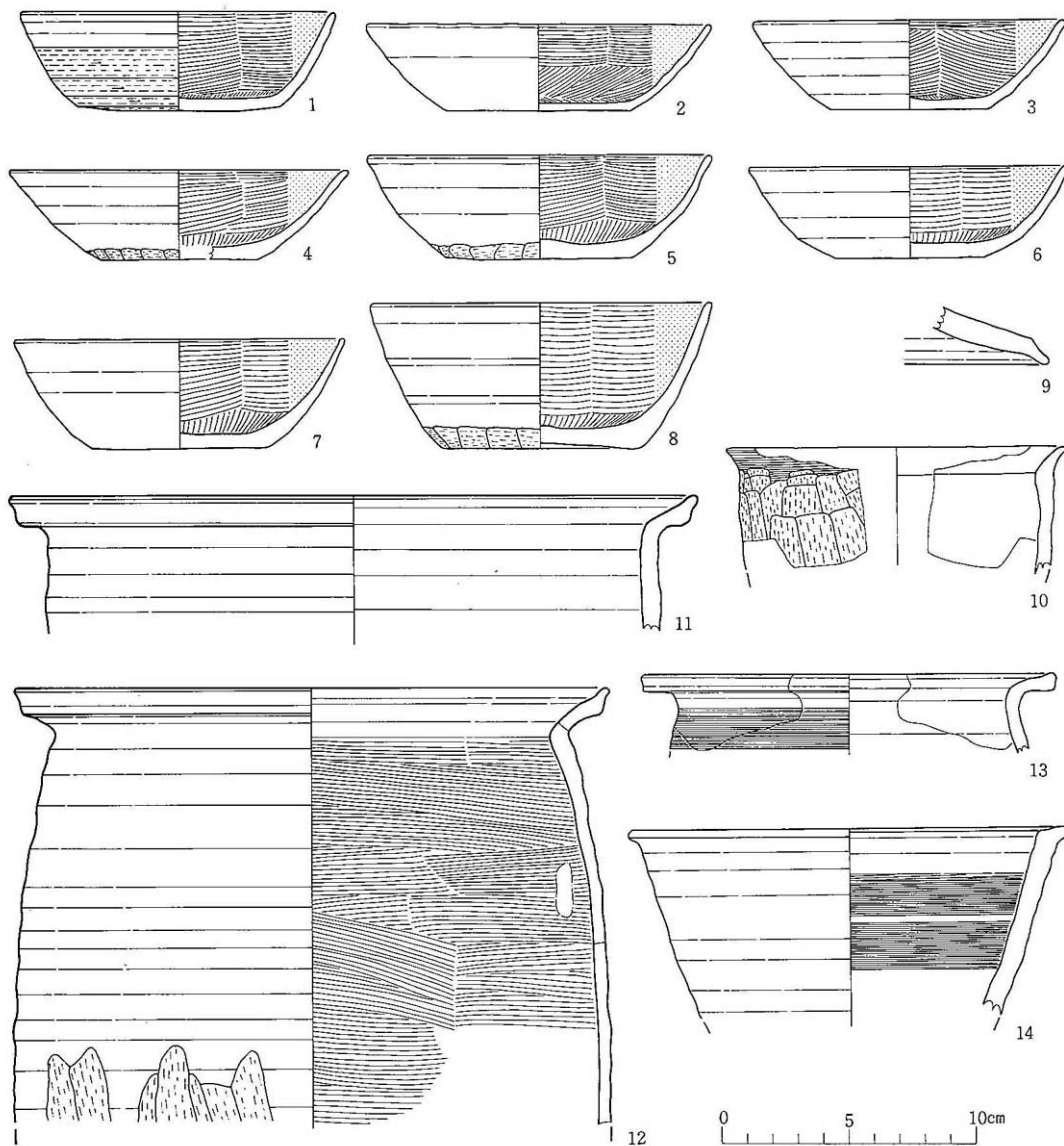
第47図 SI2161 竪穴住居跡断面図

に対し北で東に約5°偏する。床は平坦で、黄褐色粘質土を2～3cmの厚さで部分的に貼床している。カマドは北辺の西寄りに付設されている。粘土で構築されたカマド側壁が取り払われずに残存していたが、煙道・煙出しは検出できなかった。カマド燃焼部は幅62cm、奥行き55cmで、燃焼部内には多量の炭・灰が堆積し、底面は火熱を受け、赤変していた。北東隅には平面形が不整円形で、規模が長径80cm、短径55cm、深さ25cmの貯蔵穴があり、ほぼ完形の土師器長胴甕1点（第49図1）などが出土した。支柱穴・周溝はない。住居内の堆積土は黄褐色土と褐色土が不均一に混じり、地山小ブロックを多く含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物は床面・貯蔵穴・堆積土から出土した（第48～51図）。土器には土師器坏・蓋・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壺がある。

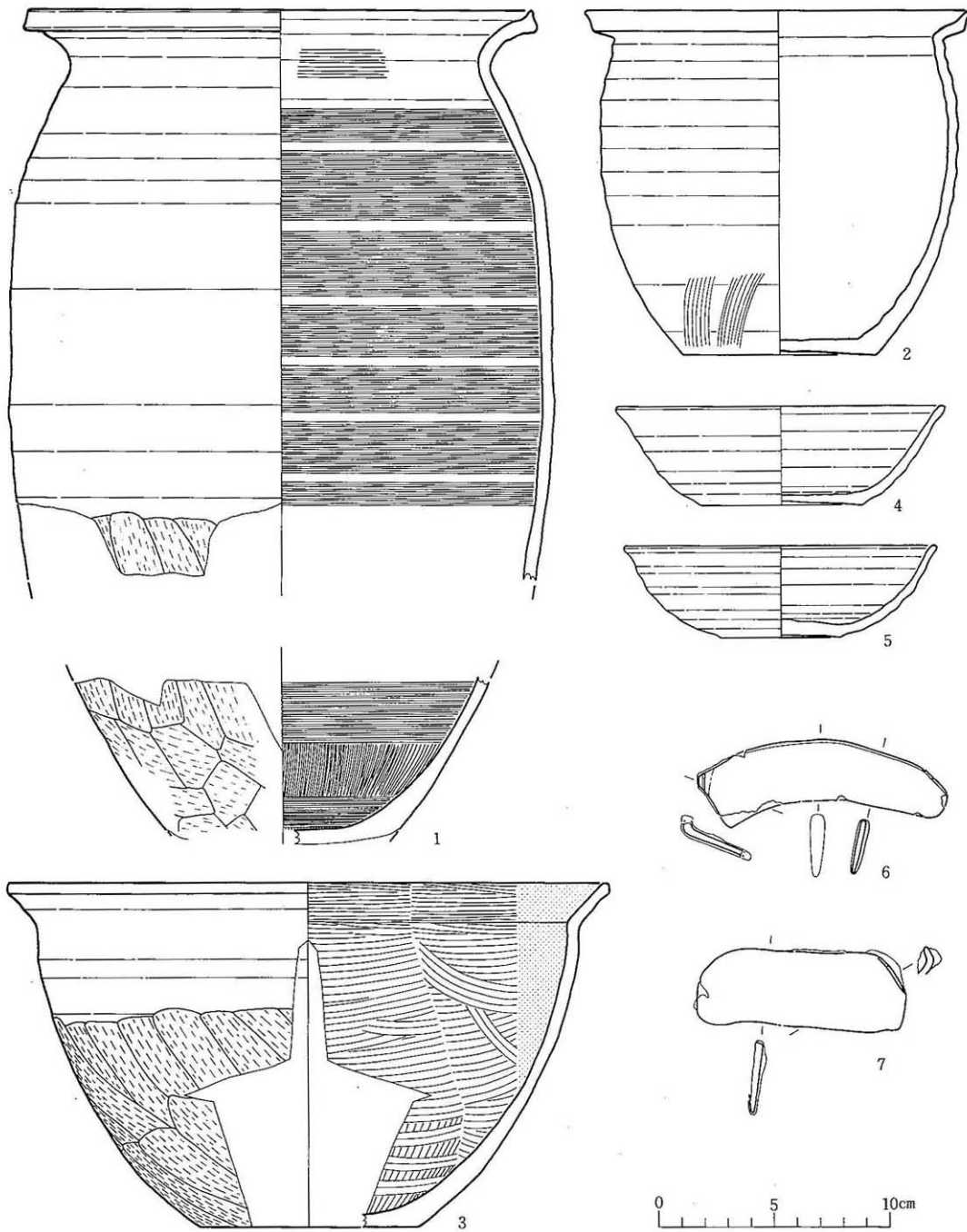
土師器坏はロクロ調整のものが32点あり、手持ちへらケズリ（第48図4～8）が19点と主体を占め、回転へらケズリ（第48図1～3）が8点、回転糸切りが5点と少ない。内面のへらミガキは回転へらケズリのものが横方向、手持ちへらケズリのものが放射状（主体）ないし横方向、回転糸切りのものが放射状である。底部が大きく、体部が直線的で口縁部の外傾するもの（第48図1～4）が多いが、底径がやや小さく、体部がやや膨らみながら立ち上がるもの（第48図6・7）も少数ある。

土師器甕にはロクロを使用しない小型のもの（第50図10）とロクロを使用する大小の



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	床面	土師器	坏	B I	底部・体下半回転ヘラケズリ	8599	8	3層	土師器	坏	B II	回転糸切り→底部外周・体下部手持ちヘラケズリ	8599
2	3層	土師器	坏	B I	回転ヘラケズリ	8599	9	2層	土師器	蓋		ロクロ調整、非内黒	8599
3	床面	土師器	坏	B I	底部のみ回転ヘラケズリ	8599	10	2層	土師器	甕	A1	非ロクロ調整、小型	8599
4	1層	土師器	坏	B II	底部・体下部手持ちヘラケズリ	8599	11	1層	土師器	甕	B1	ロクロ調整、大型	8599
5	床面	土師器	坏	B II	底部・体下部手持ちヘラケズリ	8599	12	2層	土師器	甕	B1	ロクロ調整、大型	8599
6	床面	土師器	坏	B II	底部のみ手持ちヘラケズリ	8599	13	2層	土師器	甕	B3	ロクロ調整、小型、回転刷毛目	8599
7	2層	土師器	坏	B II	手持ちヘラケズリ	8599	14	1層	土師器	甕	B4	ロクロ調整、鉢形、回転刷毛目	8599

第 48 図 SI2161 竪穴住居跡出土遺物(1)



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	土壇1	土師器	甕	B1	ロクロ調整・大型、ケズリ、回転刷毛目	8593	5	3層	須恵器	坏	IV	回転糸切り(右)	8599
2	土壇1	土師器	甕	B2	ロクロ調整、中型	8599	6	カマド	鉄製品	鉄鎌		曲刃、左利き	8622
3	床面	土師器	甕	B4	ロクロ調整、鉢形、内ミガキ、黒色処理	8599	7	カマド	鉄製品	鉄鎌		曲刃、右利き	8622
4	1層	須恵器	坏	IV	回転糸切り(右)	8599							

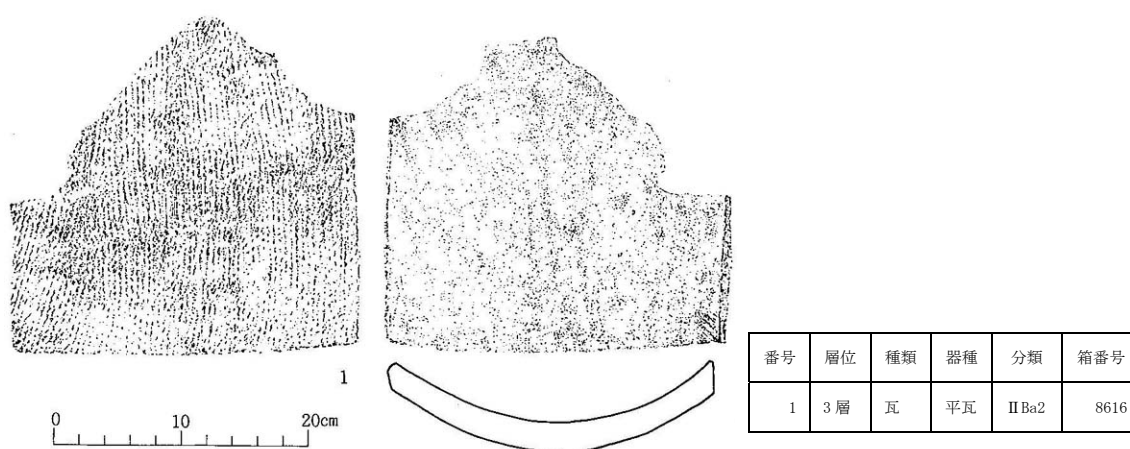
第 49 図 S12161 竪穴住居跡出土遺物(2)

甕（第 48 図 11～14、第 49 図 1～3）がある。後者の中には回転刷毛目が施される長胴ないしそれに近い器形のもの（第 48 図 13、第 49 図 1）、内面が回転刷毛目される鉢形のもの（第 48 図 14）、内面がへらミガキ・黒色処理される鉢形のもの（第 49 図 3）がある。

須恵器坏では底部が糸切りのものが 6 点（第 49 図 4・5）、へら切りのものが 4 点ある。第 49 図 5 は底径が小さく、体部が膨らみながら立ち上がる。

瓦では平瓦 II B 類 a2 タイプ（第 50 図）、丸瓦 II B 類 a タイプなど、鉄製品では鉄鎌、鉄滓があり、他には砥石、漆紙文書、焼骨片がある。

鉄鎌は曲刃の鎌で、一般的に認められる右利き用のもの（第 49 図 7）と例の少ない左利きのもの（第 49 図 6）がある。2 点ともカマド内より出土した。

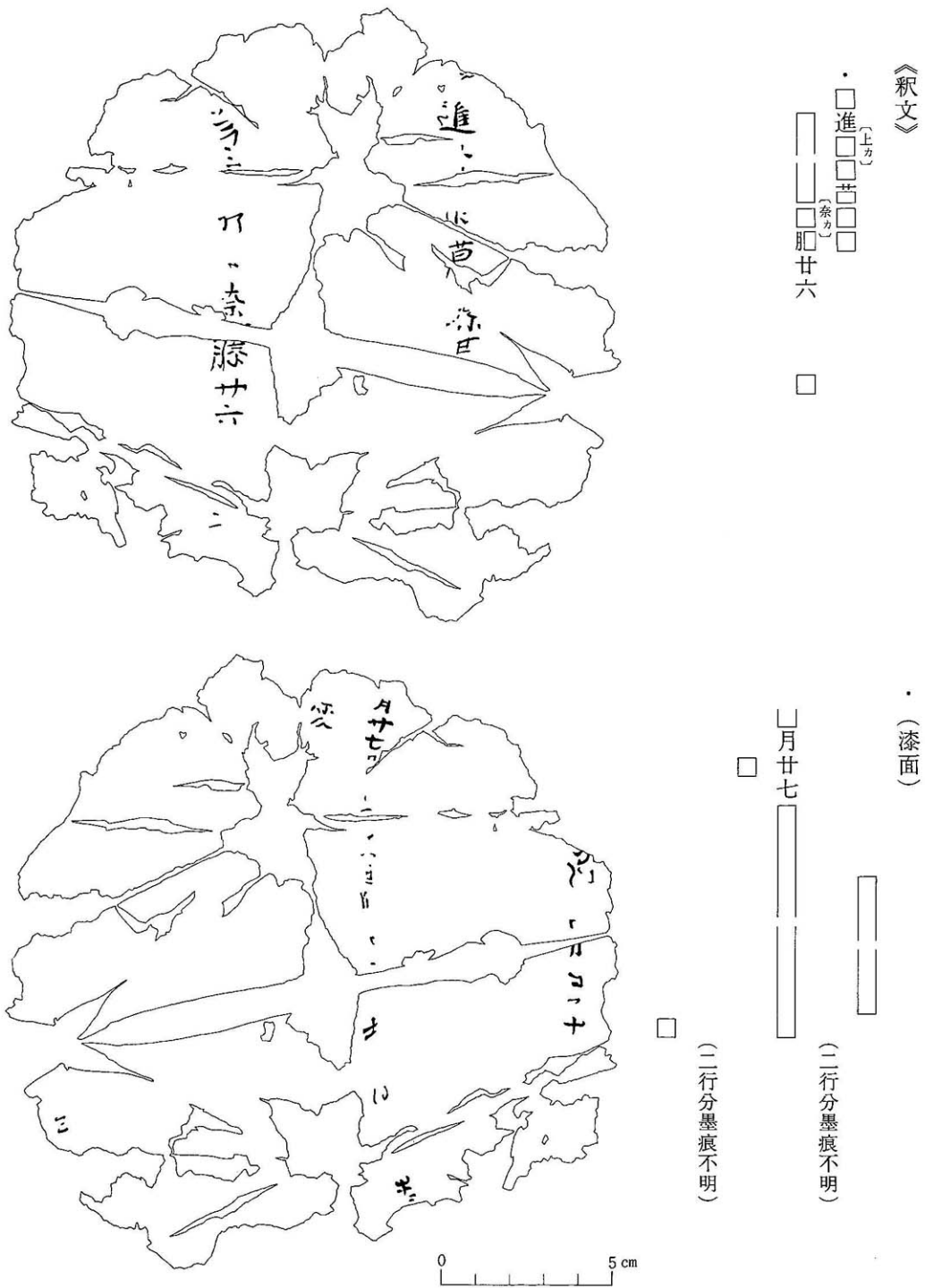


第 50 図 SI2161 竪穴住居跡出土遺物(3)

漆紙文書（第 51 図、図版 13-7）は、漆面を内側にして四つ折りにし、それをさらに数回折った状態で貼床から出土した。二つ折りの状態まで展開できたが、漆面が互いに癒着しているためこれ以上の展開はできない。完全に展開すれば直径約 18 cm の円形になる。文字は紙の両面に認められるが、墨の残存状況は極めて悪い。漆面の文字の大部分は表側から左文字で確認したが、2 行目の「月廿七」と 3 行目の 1 文字は紙が重なっていないため漆面から確認できる。図は完全に展開した状態を表側・漆面それぞれについて示したものである。表の文書は行間が広く、6.8cm を測る。文書の性格は不明であるが、「進口」の文字から貢進に関わる文書である可能性も考えられる。漆面の文書は、1・2 行目で行間 6.0cm、2・3 行間で 1.7 cm であるが、現状では 4 行しか確認できない。「月廿七」は日付とみられる。

S I 2162 竪穴住居跡（第 18・52 図）

調査区東部中央に位置し、第 3 層下の地山面で検出した。重複状況から S I 2163 よりも



第 51 図 SI2161 竪穴住居跡出土遺物(4)

新しく、S E 2165 よりも古い。またS B 2148 とは外延溝が一部重複する。しかし重複部分が少ないため、新旧関係を確認できなかった。

残存状況は比較的良く、壁は急に立ち上がり、壁高は最大 12cm ある。平面形は方形で、規模は西辺約 3.6m、南辺約 3.5m である。西辺は発掘東西基準線に対し北で東に約 10° 偏する。床は平坦で、古いS I 2163 を人為的に埋めて黄褐色粘質土で貼床している。カマドの位置は不明で、支柱穴はない。各辺には幅 40cm 前後、深さ 16cm 前後の周溝が巡り、南東隅から南東に向けて幅約 30cm、深さ約 20cm の外延溝が約 3.0m 延びる。西辺の周溝には平瓦・丸瓦・須恵器甕の破片が敷き詰められており、周溝に伴う施設と考えられる。堆積土は褐色土で、地山黄色粘土小ブロックを多量に含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物は床面・周溝・堆積土から出土した(第 53 図)。土器には土師器坏・甕(1)、須恵器坏(3)・稜(2)・蓋・甕(4~6)・壺がある。瓦には平瓦ⅡB類 a タイプ、平瓦ⅡB類 b タイプ、平瓦ⅡC類(7)、丸瓦ⅡB類 a タイプなどがある。他には鉄鏃(8)、鉄釘、砥石、漆塊がある。土師器坏にはロクロ調整で底部・体下部が回転ヘラケズリされたものが 1 点、須恵器坏には底部がヘラ切りのものが 18 点、底部・体下部が回転ヘラケズリされたものが 1 点(3)、糸切りのものが 1 点ある。土師器甕にはロクロを用いないもの(1)とロクロ調整のものがある。平瓦ⅡC類は一般には政庁第Ⅳ期に属するが、8は政庁第Ⅱ期の少数タイプである。



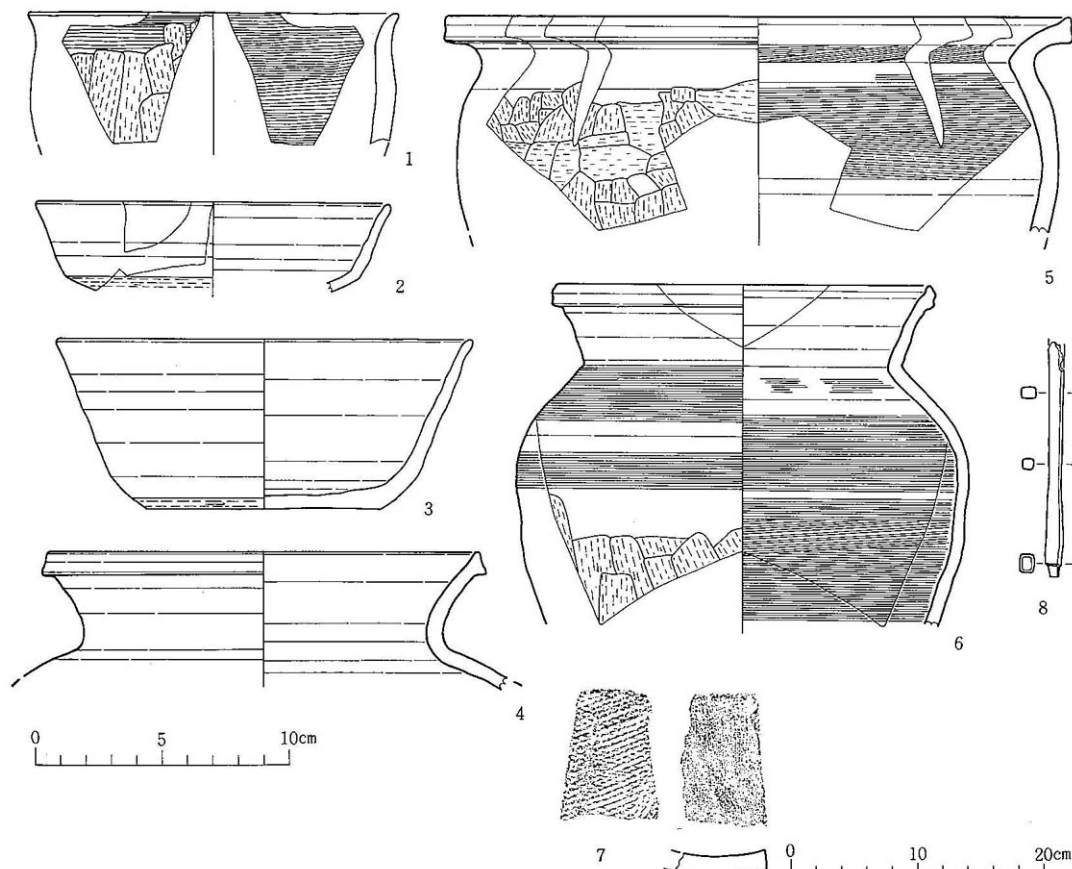
第 52 図 SI2162・2163 竪穴住居跡断面図

S I 2163 竪穴住居跡 (第 18・52 図)

調査区東部中央に位置し、第 3 層下の地山面で検出した。重複状況から見てS I 2162、S B 2148 よりも古い。北半をS I 2162 に、南半をS B 2148 に壊され、上部も削平されていたため、残存状況はあまり良くない。

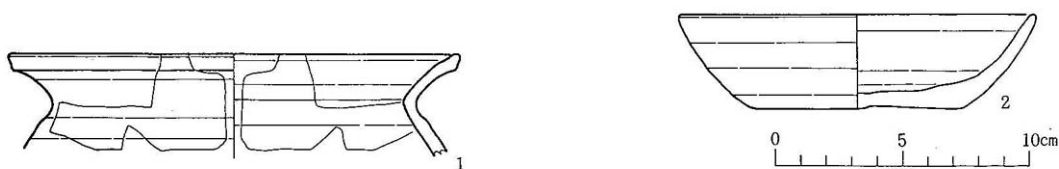
壁は急に立ち上がり、壁高は最大 8 cm ある。平面形は方形で、規模は南辺が約 4.0m である。南辺は発掘東西基準線とほぼ一致する。床は平坦で、黄褐色粘質土を 2~3 cm の厚さで貼床している。カマドの位置は不明である。各辺には幅 25cm 前後、深さ 8 cm 前後の周溝が巡り、南東隅から南東に向けて幅約 25cm、深さ約 15cm の外延溝が約 1.9m 延びる。東辺の周溝には丸瓦が敷設され、暗渠となっている。堆積土は褐色土で、地山小ブロックを多量に含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物は床面・周溝・外延溝・堆積土からロクロ調整の土師器坏・甕（第54図1）、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦、砥石、凝灰岩切石の破片が少数出土した。このうち土師器坏には



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	1層	土師器	甕	A1	非ロクロ調整、小型	8600	5	西周溝	須恵器	甕		大型、鉢形、手持ちケズリ、かき目	8600
2	1層	須恵器	稜塊		回転ヘラケズリ、SI2161-1層と接合	8600	6	床面	須恵器	甕		かき目、ケズリ	8600
3	1層	須恵器	坏	I	底部・体下部回転ヘラケズリ	8600	7	西周溝	瓦	平瓦	II C	政庁II期	8616
4	東周溝	須恵器	甕			8600	8	1層	鉄製品	鉄鏃			8622

第53図 SI2162 竪穴住居跡出土遺物



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	東周溝	土師器	甕	B2	ロクロ調整、中型	8600	2	床面	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8600

第54図 SI2163 竪穴住居跡出土遺物

底部がケズリのもの、土師器甕には内面黒色処理されたもの、須恵器坏には底部がヘラ切り
りのもの（第54図2）、回転ヘラケズリのものがある。平瓦にはⅡB類 a2タイプ、ⅡA類、
丸瓦にはⅡB類 aタイプがある。

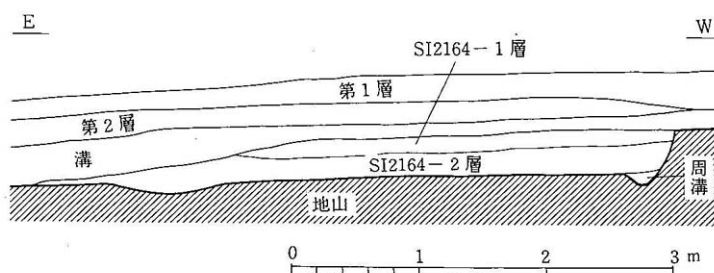
S I 2164 竪穴住居跡（第19・20・55図）

調査区南東隅に位置し、
第2層下の東西溝底面・地
山面で北半部のみを検出
した。S B2148・2149と
重複していずれよりも古
い。

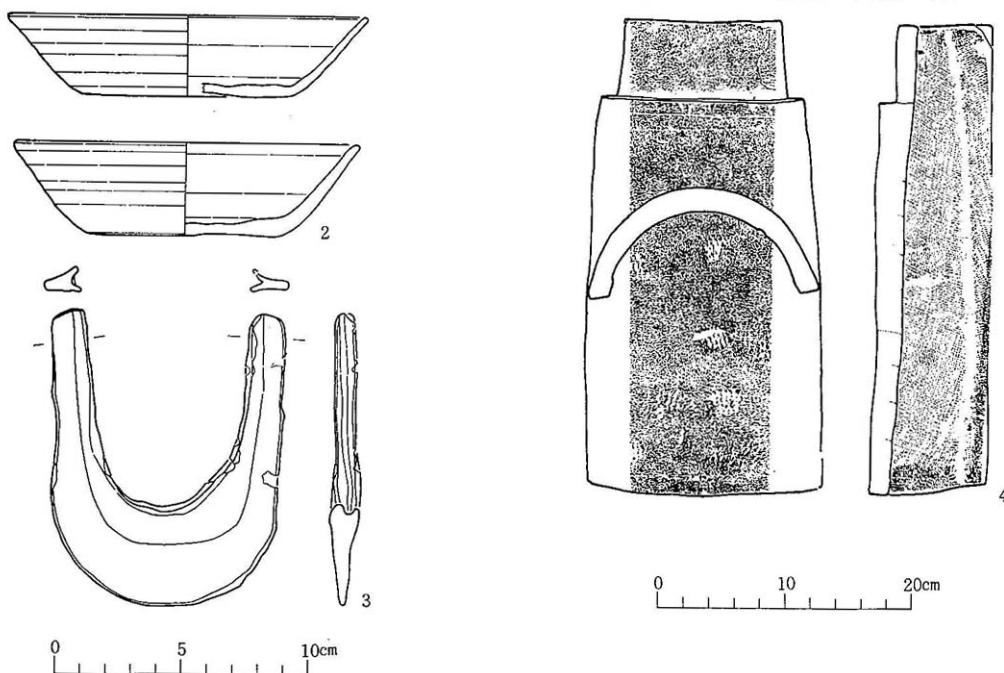
残存状況は良く、壁は急
に立ち上がり、壁高は最大
36cm ある。平面形は方形

で、規模は北辺が5m以上である。北辺は発掘東西基準線に対し東が北に約5° 偏する。床
面は平坦で、黄褐色粘質土を2～3cmの厚さで一部貼床している。

カマドの位置は不明である。北辺・西辺には幅35cm前後、深さ20cm前後の周溝が巡る。北



第55図 SI2164 住居跡断面図



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	2層	須恵器	坏	Ⅲ	ヘラ切り	8600	3	1層	鉄製品	鋤先		小形、U形	8622
2	2層	須恵器	坏	Ⅲ	ヘラ切り	8600	4	北周溝	瓦	丸瓦	ⅡBa		8617

第56図 SI2164 竪穴住居跡出土遺物

辺の周溝の一部では完形の丸瓦が2点組み合わせた状態で検出されたことから、丸瓦を敷設した暗渠であった可能性が高い。堆積土は褐色粘質土で、地山小ブロックを多量に含むことから人為堆積と考えられる。

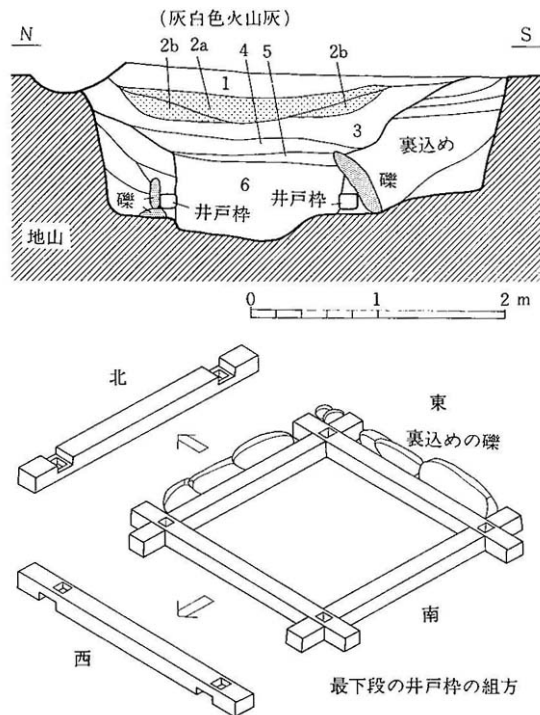
遺物は堆積土からロクロ調整の土師器坏・甕、へら切りの須恵器坏（第56図1・2）、須恵器高台坏・稜・蓋・甕、平瓦の破片、平面U字状で小型の鉄製鋤先（第56図3）、北周溝からは完形の丸瓦ⅡB類aタイプ（第56図4）が出土した。

（3）井戸跡

SE2165 井戸跡（第19・57図）

調査区東部中央に位置し、第3層下の地山面で検出した。重複状況から見てS I 2162 よりも新しい。

掘方の平面形はほぼ正方形で、規模は一辺約3.6m、深さ1.4m以上である。最下部の井戸枠が残っており、井戸枠は太さ14×12cm、長さ約2mの角材を井桁に組み、組み合わせた部分には隅柱を立てるために9cm四方のほぞ穴を開けている。井戸枠と接する裏込めには30～70cm前後の板状の自然石を接するように並べて隙間を粘土で埋め、その外側には拳大前後の礫、砂、地山粘土を多量に含む褐色粘質土で裏込めしている。井戸の内法は一辺約1.3mで、



第57図 SE2165 井戸跡断面図

深さは1.4m以上ある。現在のところ、多賀城跡では最も規模が大きい井戸である。

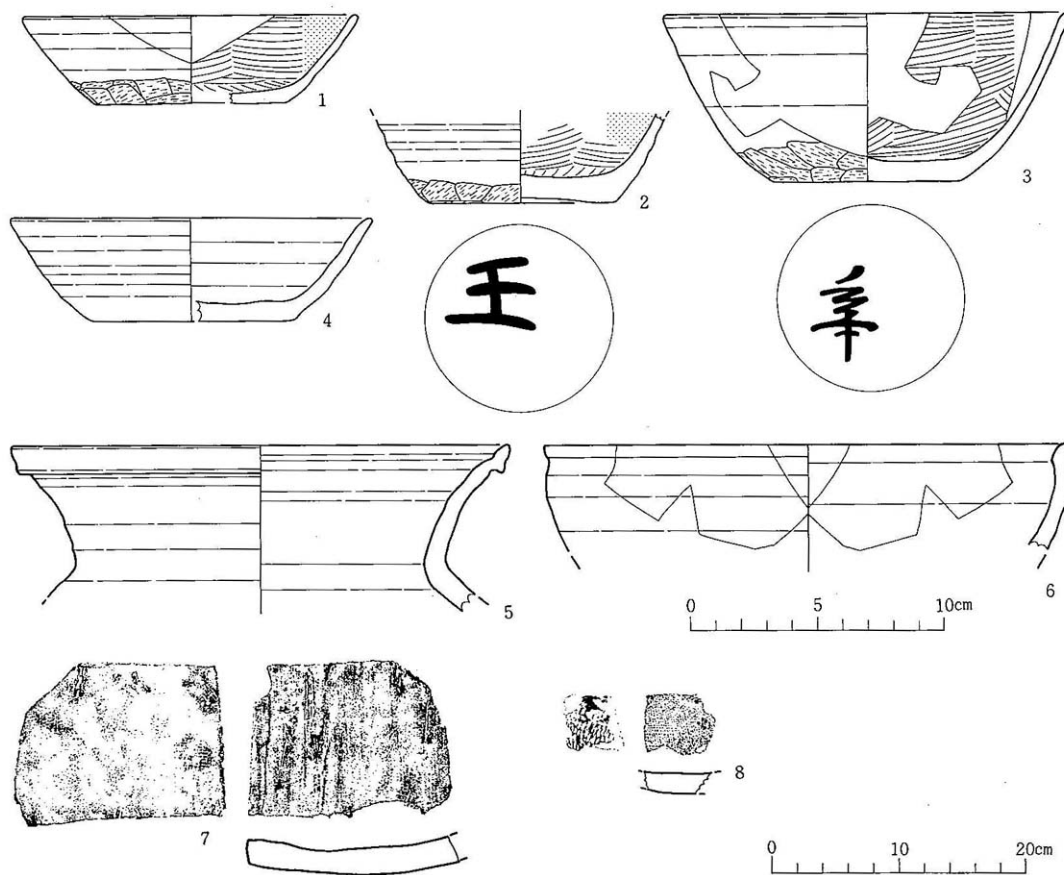
井戸内の堆積土の第6層には人頭大の礫が投げ込まれ、人為的に埋められている。ただし、第2層が再堆積した灰白色火山灰であり、第3層が基本層の第3層と類似し、第3～5層も自然堆積層であることから、井戸廃絶後に窪んだ状態であったことが知られる。

裏込めからは須恵器坏・蓋、平瓦、丸瓦が少数出土した。このうち須恵器坏には底部がへら切りのものが1点、平瓦には政庁第Ⅰ期の平瓦ⅠA類が1点ある。

第6層からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、平瓦、丸瓦、ウマまたはウシの歯が少量出土した。土師器坏は8点で、内訳は底部糸切り→底部外周・体下部手持ちへらケズリ2点（第58図2・3）、底部・体下部手持ちへらケズリ1点、回転へらケズリ2点、回転糸切1点、不明2点である。底部内面のへらミガキには横方向のも

の(第58図3)と放射状のもの(第58図2)とがあり、器形には底部が大きくて浅い坏と底部がやや小さくて深い坏(第58図2・3)とがある。なお2は「王」、3は「辛」と底部に墨書されている。須恵器坏は8点で、いずれも底部がヘラ切りである。平瓦には政庁第Ⅲ期のⅡB類bタイプ、「物」Aの刻印のある政庁第Ⅱ期のⅡB類などがある。

第5～3層からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・鉢(第58図6)・甕(第58図5)・壺、軒平瓦、平瓦、丸瓦、骨片、ウマの歯が少数出土した。土師器坏は17点あり、内訳は底部外周・体下部手持ちヘラケズリ1点(第58図1)、底部手持ちヘラケズリ3点、回転ヘラケズリ4点、回転糸切り3点、不明6点である。須恵器坏は17



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	特徴	箱番号
1	5層	土師器	坏	BⅡ	糸切り→底部外周・体下部手持ちヘラケズリ	8601	5	3層	須恵器	甕		8601
2	6層	土師器	坏	BⅡ	回転糸切り→底部外周・体下部手持ちヘラケズリ、墨書「王」	8601	6	3層	須恵器	鉢		8601
3	6層	土師器	坏	BⅡ	糸切り→底部外周・体下部手持ちヘラケズリ、墨書「辛」	8601	7	裏込	瓦	平瓦	ⅠA類(Ⅰ期)	8601
4	4層	須恵器	坏	Ⅲ	ヘラ切り	8601	8	3層	瓦	平瓦	ⅡC類(Ⅳ期)	8601

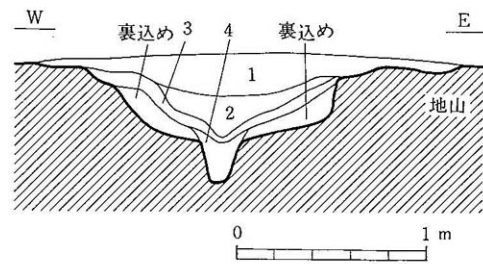
第58図 SE2165 井戸跡出土遺物

点あり、内訳は底部へラ切りが12点（第58図4）と主体を占め、他には糸切り→底部外周・体下部手持ちへラケズリ1点、底部・体下部手持ちへラケズリ2点、回転糸切り1点、不明1点がある。瓦には政庁第Ⅱ期の単弧文軒平瓦640、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類（第58図8）、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類a1タイプ、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類bタイプなどがある。

また、第2層からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・鉢・甕・壺、丸瓦、鉄滓、第1層からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壺、平瓦、丸瓦、不明銅製品小片が少数出土した。

SE2166 井戸跡（第19・59図）

調査区東部中央に位置し、第2層下の地山面で検出した。柱穴は平面形が円形、断面形がロート状で、規模は径約1.3m、深さ0.7mである。井戸枠は検出されなかった。裏込めは暗褐色土で地山小ブロックを多量に含み、井戸内の堆積土は黒褐色土である。



第59図 SE2166 井戸跡断面図

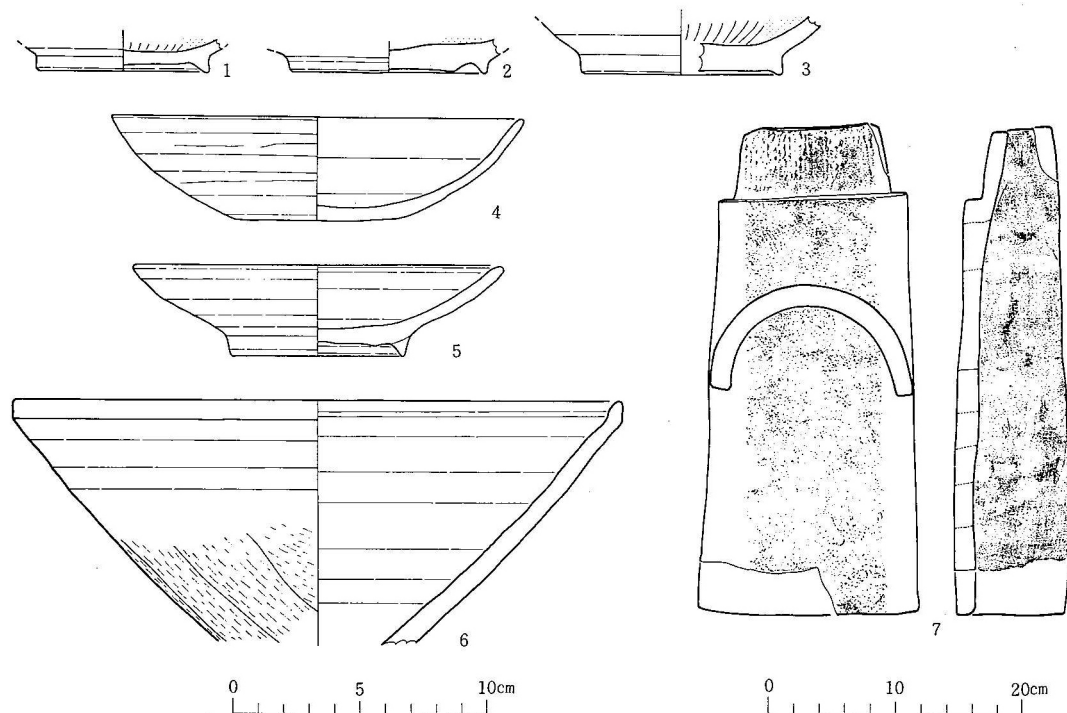
裏込めからは須恵器坏・甕の破片、堆積土からは土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・壺、須恵系土器坏・高台坏・鉢、平瓦、丸瓦、砥石、凝灰岩切石破片、骨片が少数出土した（第60図）。

このうち土師器高台坏は1が小型で、2・3が大型で器厚が厚く、底部が高台接地面近くまで下がる。後者は・の可能性もある。須恵系土器はいずれも胎土に0.5~1mm前後の砂粒を多く含み、やや赤味のある褐色を呈する。坏には口径16cm前後の大型品（4）と口径10cm前後の小型品があり、器厚も4mm前後と厚い。高台坏（5）も器厚が4mm前後と厚く、低い三角高台が付く。鉢（6）は体部が直線的で、口縁部が強く内側に折れ曲がる大型の鉢で、体下部がへラケズリされている。平瓦には平瓦ⅡB類aタイプが主体を占めるが、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類も少数ある。丸瓦には完形の丸瓦ⅡB類aタイプが1点ある（7）。

（4）土壌

SK2167 土壌（第4・61図）

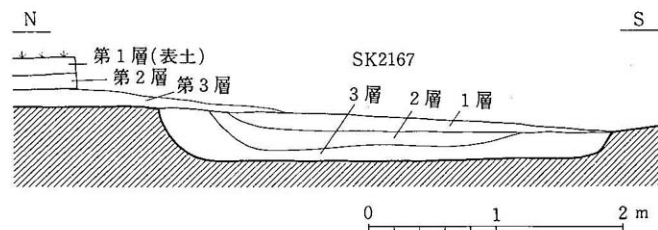
調査区北東部に位置し、第3層下の地山面で検出した。平面形はほぼ円形で、規模は径約3.1m、深さ約40cmである。壁の立ち上がりは急である。堆積土は3層に分かれ、1層が褐色土、2層が炭・土器を多く含む黒褐色土、3層がにぶい黄褐色粘質土で、地山小ブロックを多量に含むことから、人為堆積と考えられる。



番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	土師器	高台坏			8601	5	須恵系土器	高台坏		赤褐色、砂粒含む	8601
2	土師器	高台坏		回転糸切り	8601	6	須恵系土器	鉢		赤褐色、砂粒含む、体下部ケズリ	8601
3	土師器	高台坏		回転糸切り	8601	7	瓦	丸瓦	II B a	完形	8601
4	須恵系土器	坏	b	赤褐色、砂粒含む	8601						

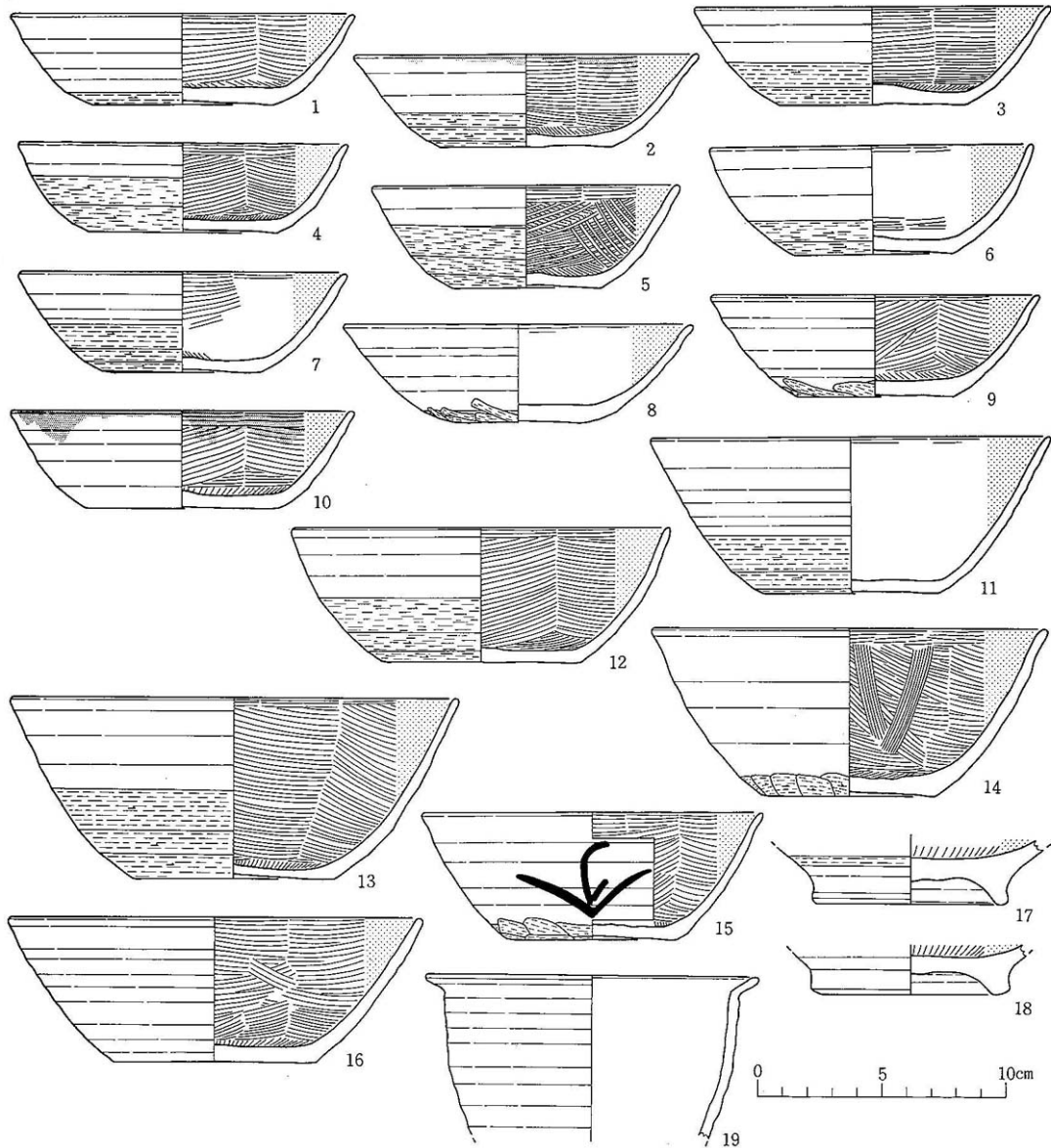
第 60 図 SE2166 井戸跡出土遺物

出土遺物は多く、土師器坏・高台坏・甕（第 62 図）、須恵器坏・盤・甕・壺（第 63 図）、灰釉陶器・、円面硯（第 63 図 15）・風字硯（第 63 図 16）、平瓦、丸瓦、刀子（第 63 図 17）、鉄滓、夾紵断片（図版 14-17）、漆紙断片、皮膜状の漆、凝灰岩切石、歯などがある。



第 61 図 SK2167 土壌断面図

このうち土師器坏はいずれもロクロ調整で、底部の調整のわかるものが 124 点ある。①回転ヘラケズリ（第 62 図 1～7・11～13）・②手持ちヘラケズリ（第 62 図 8～11・15・16）が各 49 点（39.5%）と主体を占め、③回転糸切りが 26 点（21%）とやや少ない。③で図示できるものはないが、①・②には口径が 13～14cm、器高/口径比が 0.26～0.33 のもの（第



番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	2層	土師器	坏	B I	静止糸切り一底部・体下部回転ヘラケズリ	8603	11	2層	土師器	坏	B I	底部・体下部回転ヘラケズリ	8604
2	2層	土師器	坏	B I	底部・体下部回転ヘラケズリ、煤・タール状付着物	8603	12	2層	土師器	坏	B I	底部・体下部回転ヘラケズリ	8603
3	2層	土師器	坏	B I	底部・体下部回転ヘラケズリ	8603	13	2層	土師器	坏	B I	底部・体下部回転ヘラケズリ	8603
4	2層	土師器	坏	B I	底部・体下部回転ヘラケズリ、胎土に雲母を多く含む	8603	14	1層	土師器	坏	B II	底部・体下部手持ちヘラケズリ	8604
5	2層	土師器	坏	B I	底部・体下部回転ヘラケズリ	8603	15	2層	土師器	坏	B II	回転糸切り一体下部手持ちヘラケズリ、墨書「介」	8603
6	2層	土師器	坏	B I	底部・体下部回転ヘラケズリ、胎土に雲母を多く含む	8603							
7	2層	土師器	坏	B II	静止糸切り一体下部回転ヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ	8603	16	2層	土師器	坏	B II	底部手持ちヘラケズリ	8604
8	2層	土師器	坏	B II	底部・体下部手持ちヘラケズリ	8604	17	2層	土師器	高台坏		高台部：肥厚	8604
9	2層	土師器	坏	B II	底部・体下部回転ヘラケズリ、漆状付着物	8603	18	1層	土師器	高台坏		高台部：肥厚	8604
10	2層	土師器	坏	B II	ヘラ切り一底部手持ちヘラケズリ、漆状付着物	8603	19	2層	土師器	甕	B2	ロクロ調整、小型	8604

第 62 図 SK2167 土壌出土遺物(1)

62 図 1～10) と、口径が 14～18cm、器高／口径比が 0.36～0.40 と前者よりも大型で深いもの (第 62 図 11～16) があり、底径はいずれも大きい。内面底部のへらミガキは不明 105 点 (① 6 点、② 13 点、③ 11 点、調整不明 70 点) を除けば、横方向のものが 124 点 (84% ; ① 42 点、② 30 点、③ 6 点、調整不明 46 点 ; 第 62 図 1～5・12～14) と主体を占め、放射状のものは 23 点 (16% ; ① 1 点、② 6 点、③ 4 点、調整不明 9 点 ; 第 62 図 10・16) と少な「。第 62 図 15 は体部に「介」と墨書されている。土師器高台坏の高台部は約 7mm と厚くて直立し、内面のへらミガキは放射状である。土師器甕はロクロ調整の甕が主体で、ロクロを使用しないものが少数あり、前者には内面黒色処理されたものが少数ある。

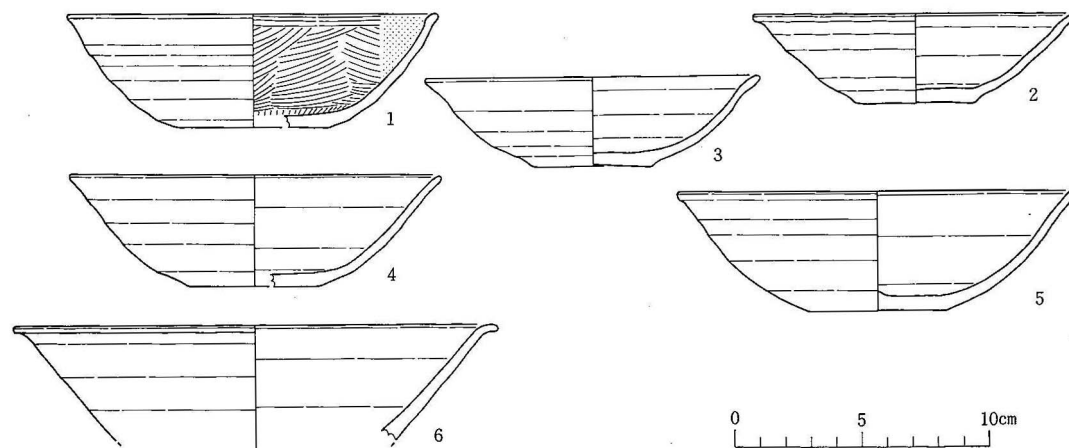
須恵器坏は 43 点あり、へら切り (第 63 図 3～7) が 20 点 (47%)、回転糸切り (第 63 図 8～11) が 13 点 (30%) と主体を占め、糸切り→底部外周・体下部手持ちへらケズリ (第 63 図 1・2) が 9 点 (21%)、糸切り→底部・体下部回転へらケズリ 1 点 (2%) と少ない。底部が大きく、体部が直線的で口縁部が外傾ないしわずかに外反するものが主体を占める。

平瓦には政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB 類が多く、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC 類を含まない。

SK2168 土壙 (第 37 図)

調査区中央東寄りに位置し、地山面で検出した。平面形は不整円形、断面形は鉢状で、規模は長径約 64cm、深さ約 10cm である。埋土は黒褐色土である。

出土遺物は少なく、第 64 図に図示した土師器坏、須恵系土器坏、青磁碗の他、須恵系土器坏、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦、鉄鎌? の破片が少数ある。土師器坏 (1) は底部が回転糸切り、内面のへらミガキは放射状で、底径が小さく、体部



番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	土師器	坏	BIII	回転糸切り	8605	4	須恵系土器	坏	A	胎土微細、黄褐色	8605
2	須恵系土器	坏	A	胎土微細、黄褐色	8605	5	須恵系土器	坏	A	胎土微細、黄褐色	8605
3	須恵系土器	坏	A	胎土微細、黄褐色	8605	6	青磁	碗		越州窯系	8605

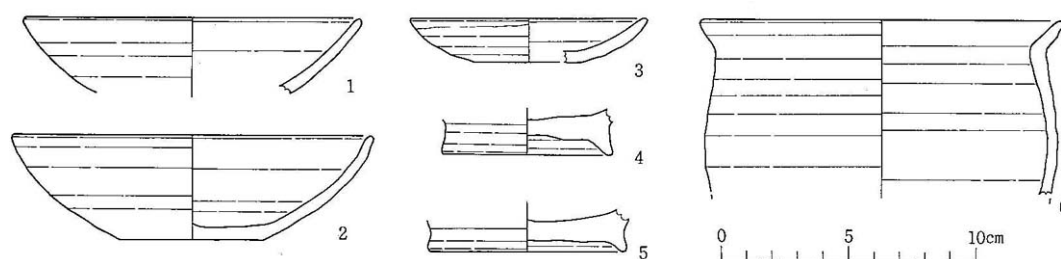
第 64 図 SK2168 土壙出土遺物

が膨らみながら立ち上がる器形である。須恵系土器坏（2～4）は胎土が微細で黄褐色を呈する口径13～16cm前後のもので、須恵系土器には口径12cm以下の小型坏・小皿を含まない。青磁碗（6）は亀井明德氏より越州系青磁との御教示をいただいた。

SK2169 土壌（第37図）

調査区中央東寄りに位置し、地山面で検出した。S I 2157 と重複し、これよりも新しい。平面形はほぼ円形、断面形は鉢状で、規模は径約90cm、深さ約10cmである。埋土は黒褐色粘質土で、炭化物を多く含む。

出土遺物は少なく、第65図に図示した土師器甕、須恵系土器小皿・坏・高台坏の他、須恵系土器坏、ロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・壺、鉄釘の破片が少数ある。須恵系土器はいずれも胎土に0.5～1mm前後の砂粒を多く含み、赤みのある褐色を呈する。



番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	須恵系土器	坏	b	胎土に砂粒・ガラス	8605	4	須恵系土器	高台坏	b	底部厚く、高台肥厚	8605
2	須恵系土器	坏	b	胎土に砂粒・ガラス	8605	5	須恵系土器	高台坏	b	底部厚く、高台肥厚	8605
3	須恵系土器	小皿		胎土に砂粒・ガラス	8605	6	土師器	甕	B2	ロクロ調整、小型	8605

第65図 SK2169 土壌出土遺物

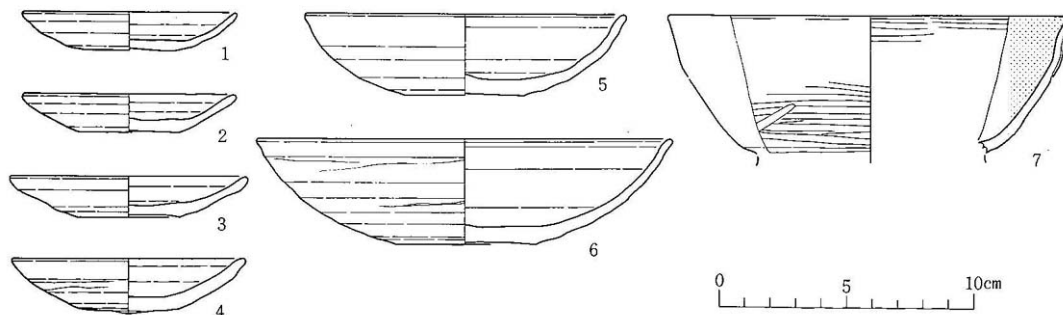
SK2170 土壌（第37図）

調査区中央東寄りに位置し、地山面で検出した。平面形は不整楕円形で、規模は長径約120cm、短径約80cm、深さ約25cmである。埋土は黒褐色粘質土で、炭化物を多く含む。

出土遺物は少なく、第66図に図示した土師器・、須恵系土器小皿・坏の他、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・壺、須恵系土器坏・高台坏・大型鉢、平瓦の破片が少数ある。須恵系土器小皿（1～4）・坏（5・6）はいずれも胎土に0.5～1mm前後の砂粒を多く含み、赤みのある褐色のものである。土師器・（7）はロクロ調整後に両面がヘラミガキされ、さらに内面が黒色処理されたもので、高台が付くと推定される大型の深・である。

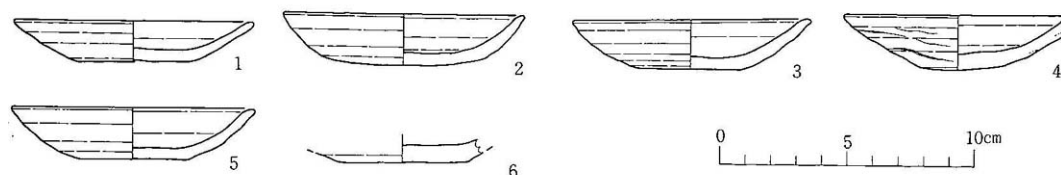
SK2171 土壌（第37図）

調査区中央東寄りに位置し、地山面で検出した。S I 2159 竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。平面形は不整楕円形で、規模は長径約100cm、短径約68cm、深さ約10cmであ



番号	種類	器種	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	須恵系土器	小皿	胎土に砂粒、黄褐色	8605	5	須恵系土器	坏	b	胎土に砂粒、赤褐色	8605
2	須恵系土器	小皿	胎土に砂粒、赤褐色	8605	6	須恵系土器	坏	b	胎土に砂粒、赤褐色	8605
3	須恵系土器	小皿	胎土に砂粒、褐色	8605	7	土師器	埴		ロクロ調整、両面ミガキ、内面黒色処理	8605
4	須恵系土器	小皿	胎土に砂粒、灰褐色	8605						

第 66 図 SK2170 土壌出土遺物



番号	種類	器種	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	須恵系土器	小皿	胎土に砂粒、赤褐色	8605	4	須恵系土器	小皿		胎土に砂粒、赤褐色	8605
2	須恵系土器	小皿	胎土に砂粒、赤褐色	8605	5	須恵系土器	小皿		胎土に砂粒、赤褐色	8605
3	須恵系土器	小皿	胎土に砂粒、赤褐色	8605	6	須恵系土器	坏	b	胎土に砂粒、赤褐色	8605

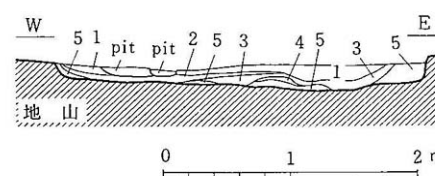
第 67 図 SK2171 土壌出土遺物

る。埋土は暗褐色粘質土で、地山粘質土ブロック・炭化物を多く含む。

出土遺物は少なく、第 67 図に図示した須恵系土器小皿・坏の他、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、須恵系土器坏の破片が少数ある。須恵系土器小皿（1～5）・坏（6）はいずれも胎土に 0.5～1mm 前後の砂粒を多く含み、赤みのある褐色のものである。

SK2174 土壌（第 9・68 図）

調査区西部に位置し、地山面で検出した。平面形は不整円形で、規模は長径約 2.9m、短径約 2.3m、深さ約 20cm である。堆積土は 5 層に分かれ、1 層が褐色土、2 層が炭を多く含む暗褐色土、3 層が黒褐色土、4 層が暗褐色土、5 層が地山ブロックを多く含むにぶい褐色粘質土で、人為堆積と考えられる。

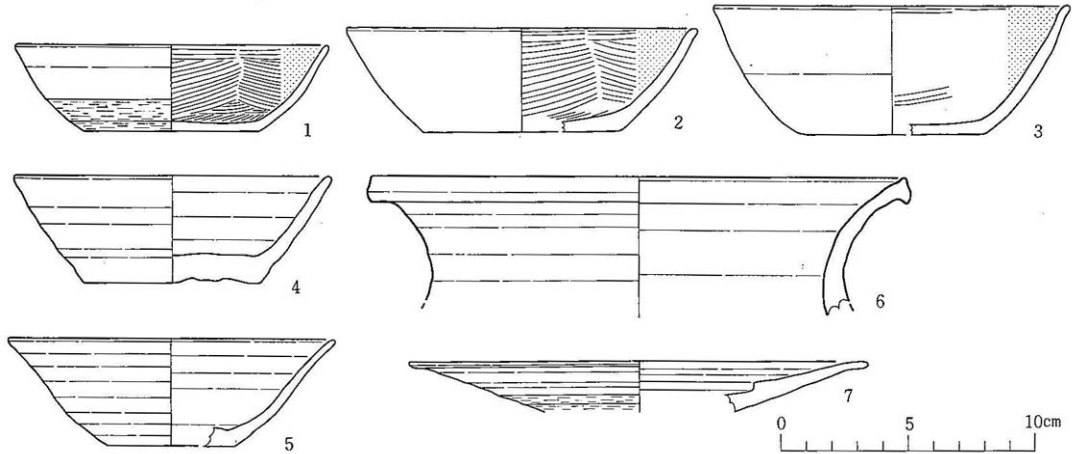


第 68 図 SK2174 土壌断面図

出土遺物は少なく、土師器坏（第 69 図 1～3）・高台坏・甕、須恵器坏（第 69 図 4・5）・

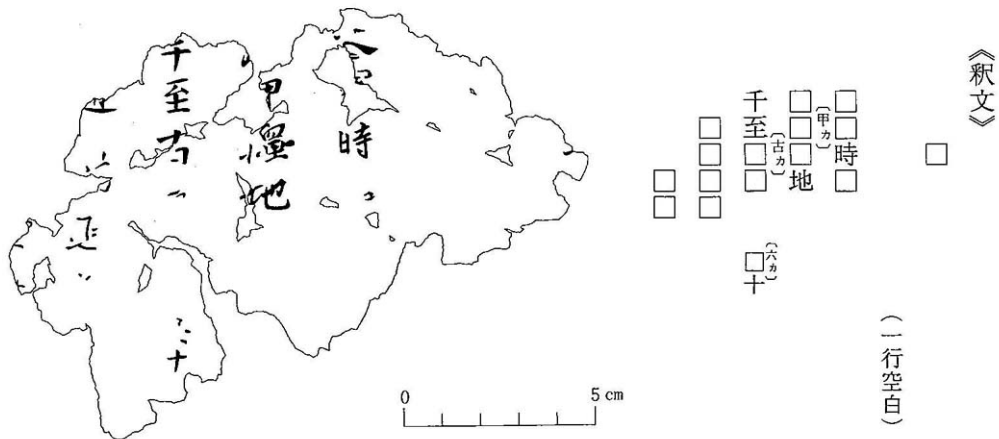
高台坏・甕（第 69 図 6）・壺、灰釉陶器段皿（第 69 図 7）、平瓦、丸瓦、凝灰岩切石、漆紙文書（第 70 図）、鉄滓、歯が少数ある。土師器坏には回転ヘラケズリのもの（1）、須恵器坏にはヘラ切りのもの（4・5）と回転糸切りのものがある。5 は底径が小さく、体部がわずかに膨らみ、口縁部が外反する。底部がヘラ切りのものでは少ない器形で、回転糸切りのものと類似する。

漆紙文書（第 70 図、図版 13-8）は、多数の破片となって出土したが、接合の結果直径



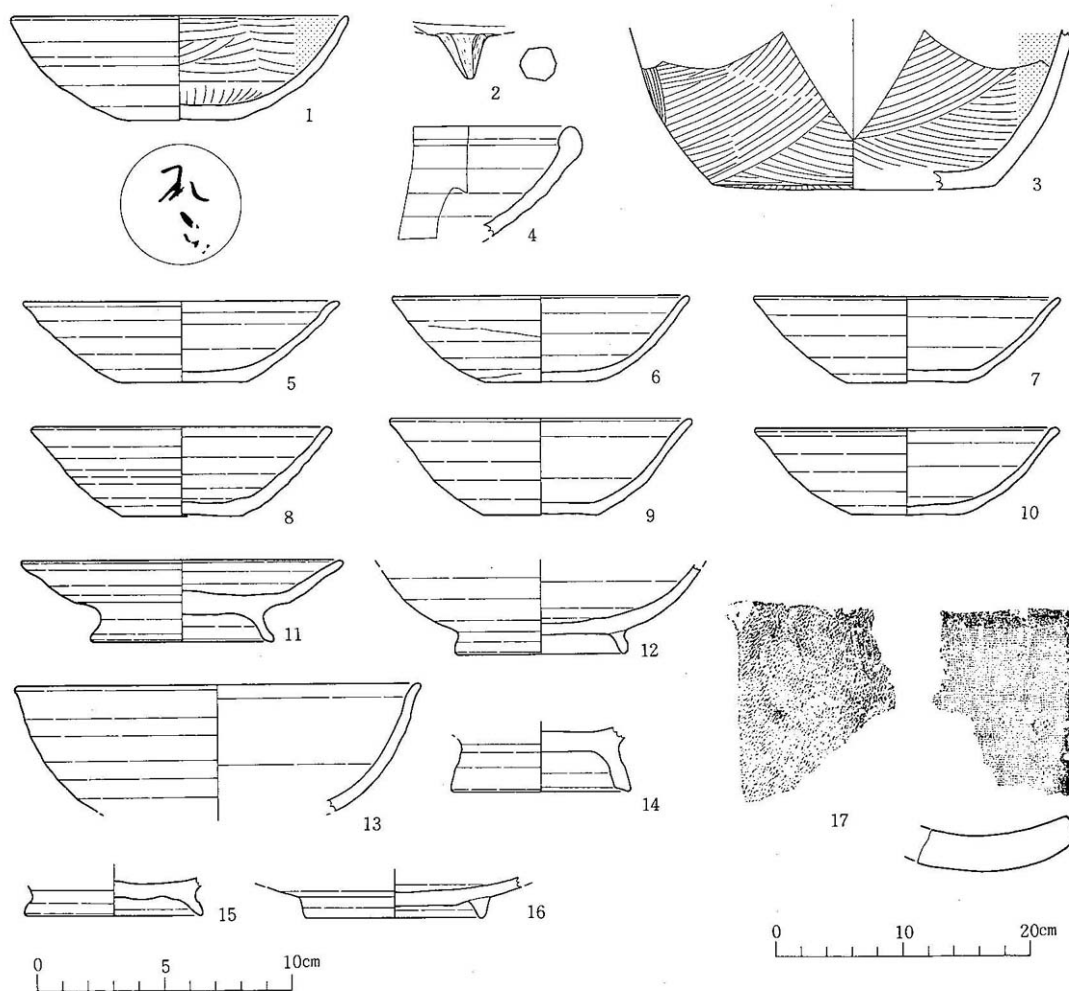
番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	土師器	坏	B I or B II	回転ヘラケズリ	8605	5	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8605
2	土師器	坏	B I or B II	ケズリ?	8605	6	須恵器	甕			8605
3	土師器	坏	B	磨滅、不明	8605	7	灰釉陶器	段皿		内面に明瞭な段	8605
4	須恵器	坏	III	ヘラ切り	8605						

第 69 図 SK2174 土壌出土遺物(1)



第 70 図 SK2174 土壌出土遺物(2)

約 16 cm の半円形に復元することができた。漆は文書の表に付着しているが、墨の残存状況は一部を除いてかなり悪い。行間は 2.3 cm 程度、文字の大きさは 1 cm 前後である。文書の性格は今のところ不明である。



番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	土師器	坏	B III	回転糸切り、底部墨書	8606	10	須恵系土器	坏	a	回転糸切り、胎土微細	8606
2	土師器			脚部：ケズリ、両黒	8606	11	須恵系土器	高台坏		回転糸切り、胎土微細	8606
3	土師器	鉢?		両面：底部：ミガキ、内面：黒色処理	8606	12	須恵系土器	高台坏		回転糸切り、胎土微細	8606
4	須恵器	鉢		籐鉢(西長尾5号窯併行)	8606	13	須恵系土器	埴		胎土微細	8606
5	須恵系土器	坏	a	回転糸切り、胎土微細	8606	14	須恵系土器	高台坏		回転糸切り、「足高高台」	8606
6	須恵系土器	坏	a	回転糸切り、胎土微細	8606	15	須恵系土器	高台坏		回転糸切り、胎土微細	8606
7	須恵系土器	坏	a	回転糸切り、胎土微細	8606	16	須恵系土器	高台皿		大型品	8606
8	須恵系土器	坏	a	回転糸切り、胎土微細	8606	17	瓦	平瓦	II C	政庁第IV期	8620
9	須恵系土器	坏	a	回転糸切り、胎土微細	8606						

第 71 図 SK2175 土壌出土遺物

SK2175 土壙（第4図）

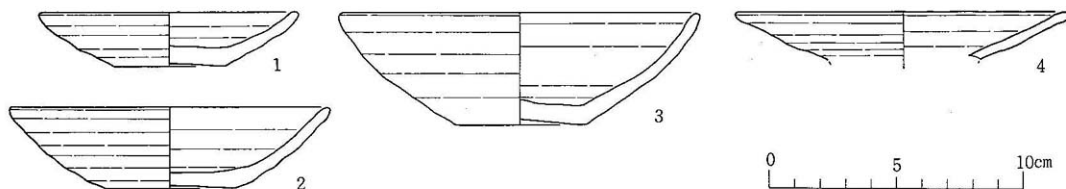
調査区西部に位置し、地山面で検出した。平面形は楕円形、断面形は浅鉢状で、規模は長径 1.8m、短径約 1.5m、深さ約 40cm である。埋土は黒褐色土である。

出土遺物は比較的多く、土師器坏・脚部（第 71 図 2）・鉢（第 71 図 3）・甕、須恵器坏・鉢・甕・壺、須恵系土器小型坏（第 71 図 5～10）・高台坏（第 71 図 11・12・14・15）・・・（第 71 図 13）・高台皿（第 71 図 16）、緑釉陶器、平瓦ⅡC 類（第 71 図 17）、平瓦ⅡB 類、丸瓦、凝灰岩切石破片がある。土師器坏は底部が回転糸切りで底径が小さく、内面が放射状にヘラミガキされ、体部が膨らみながら立ち上がるもの（第 71 図 1）が主体で、ヘラケズリされたもの、両面ヘラミガキ・黒色処理されたものを含む。須恵器鉢（第 71 図 4）は口縁部が肥厚し、胎土が良質で青灰色を呈し、丹波国篠窯の鉢に類似する。須恵系土器はいずれも胎土が微細で黄褐色を呈する。なお、第 71 図 1 は底部に墨書（2 文字）されているが、判読できない。

SK2178 土壙（第19図）

調査区東部、S I 2163 の南約 20cm に位置する小土壙で、第 3 層上面で検出した。平面形は円形、断面形は浅鉢状で、規模は径 20cm、深さ約 8 cm である。埋土は第 2 層に類似した黒褐色土で、炭・褐色土ブロックを多量に含む。

出土遺物にはロクロ調整の土師器甕、須恵系土器坏（第 72 図 2・3）・小皿（第 72 図 1）・高台皿（第 72 図 4）がある。須恵系土器はいずれも口縁部が 4mm 前後と厚く、胎土に 0.5～1mm 前後の砂粒を多く含み、赤みのある褐色のものである。



番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号	番号	種類	器種	分類	特徴	箱番号
1	須恵系土器	小型坏	b	胎土に砂粒、赤褐色	8606	3	須恵系土器	坏	b	胎土に砂粒、赤褐色	8606
2	須恵系土器	坏	b	胎土に砂粒、赤褐色	8606	4	須恵系土器	高台皿		胎土に砂粒、赤褐色	8606

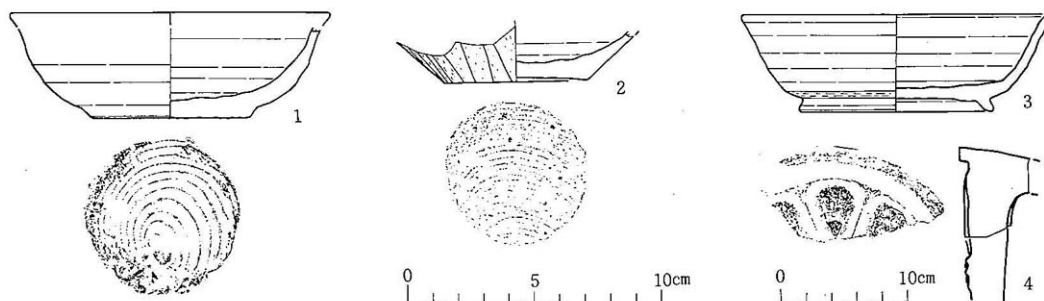
第 72 図 SK2178 土壙出土遺物

SK2181 土壙（第6図）

調査区西部に位置し、地山面で検出した。平面形は不整形、断面形は浅皿状、規模は長径 2.5m、短径 2.0m、深さ約 30cm である。重複状況から見て S B 2139～2941 よりも古い。

出土遺物にはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・鉢・甕・壺、平瓦ⅡB 類 a1 タイプ

が少数ある。このうち須恵器坏には底部が回転糸切りのもの（第73図1）、ヘラ切りのものが各2点ある。底部はいずれも大きく、糸切り痕の糸の間隔は広い。須恵器壺（第73図2）は底部が静止糸切りで、体部は明瞭な稜を持つように面的にヘラケズリされている。



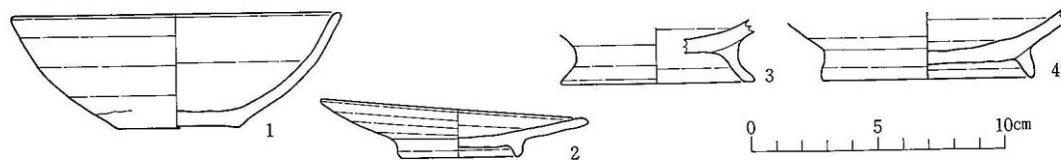
番号	遺構	種類	器種	特徴	箱番号	番号	遺構	種類	器種	特徴	箱番号
1	SK2181	須恵器	坏	回転糸切り	8606	3	SK2187	須恵器	高台坏	回転糸切り→回転ヘラケズリ	8607
2	SK2181	須恵器	壺	静止糸切り、手持ちヘラケズリ	8606	4	SK2190	瓦	軒丸瓦	重弁蓮花文 421	8620

第73図 SK2181・2187・2190 土壇出土遺物

SK2182 土壇（第12図）

調査区中央南端に位置し、地山面で検出した。SB2144・2146と重複し、いずれよりも新しい。平面形は円形、断面形は播鉢状で、規模は径約1.4m、深さ約70cmである。埋土は暗黒褐色土である。

出土遺物にはロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・壺、須恵系土器坏（第74図1）・高台坏（第74図3・4）・高台皿（第74図2）、灰釉陶器・平瓦、丸瓦、砥石、焼骨片がある。土師器坏は底部が回転糸切りのものが主体で、他には底部・体下部をヘラケズリしたもの、ロクロ調整の後に両面をヘラミガキ・黒色処理したものが少数ある。須恵系土器はいずれも胎土が微細で黄褐色を呈する。平瓦には政庁第IV期の平瓦ⅡC類が含まれる。



番号	種類	器種	特徴	箱番号	番号	種類	器種	特徴	箱番号
1	須恵系土器	坏	回転糸切り、胎土微細	8607	3	須恵系土器	高台坏	回転糸切り、胎土微細	8607
2	須恵系土器	高台皿	回転糸切り、胎土微細	8607	4	須恵系土器	高台坏	胎土微細	8607

第74図 SK2182 土壇出土遺物

SK2187 土壙 (第 12 図)

調査区中央西寄りに位置し、地山面で検出した。S I 2152・S X2192 と重複し、いずれよりも新しい。平面形はほぼ円形、断面形は鉢状で、規模は径約 80cm、深さ約 25cm である。底面およびその近くから平瓦などが集積されたような状態で出土した。遺物には須恵器高台坏 (第 73 図 3)、政庁第 I 期の平瓦 I A 類、政庁第 II 期の平瓦 II B 類、丸瓦がある。

SK2190 土壙 (第 12 図)

調査区中央南端に位置し、地山面で検出した。S B2147 と重複してこれよりも新しい。平面形は不整形、断面形は浅鉢状で、規模は長さ 1.8m 以上、幅約 0.8m である。埋土は褐色土で焼土を含む。出土遺物には底部・体下部手持ちへラケズリの土師器坏、ロクロ調整の土師器甕、底部へラ切りの須恵器坏、政庁第 III 期の重弁蓮花文軒丸瓦 431 (第 73 図 4)、丸瓦などがある。

SK2201 土壙 (第 38 図)

調査区東部北端に位置し、地山面で検出した。平面形は不整形、断面形は浅鉢状で、規模は長さ約 1.3m、幅約 1.0m、深さ約 10cm である。出土遺物は少数で、底部へラ切りと手持ちへラケズリの須恵器坏、漆が付着した布断片 (図版 14-18) などがある。

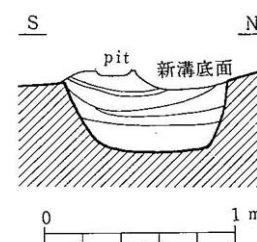
(5) 溝

SD2193 (第 9 図)

調査区西部の北寄りに位置し、地山面で約 4.5m 検出した幅 90cm、深さ 20cm、断面 U 字状の南北溝である。埋土は自然堆積したしまりの悪い褐色土である。出土遺物は少なく、底部・体下部がケズリの土師器坏 (第 76 図 1)、口縁部が外反する土師器高台坏 (第 76 図 2)、底部がへラ切りないし回転糸切りされた須恵器坏、黒笹 14 号窯式の灰釉陶器・(第 76 図 3)、鉄滓、墨痕のない漆紙断片などがある。

SD2194 (第 9・75 図)

調査区西部の北寄りに位置し、地山面で約 7.0m 検出した幅 90cm、深さ 45cm、断面 U 字状の東西溝である。S B2142 と重複してこれよりも古い。埋土は炭を多く含む黒褐色土である。出土遺物は少なく、ロクロ調整の土師器坏・高台坏 (第 76 図 4)・甕、須恵器坏 (第 76 図 5)・甕、丸瓦の破片が少数ある。このうち土師器坏



第 75 図

SD2194 溝断面図

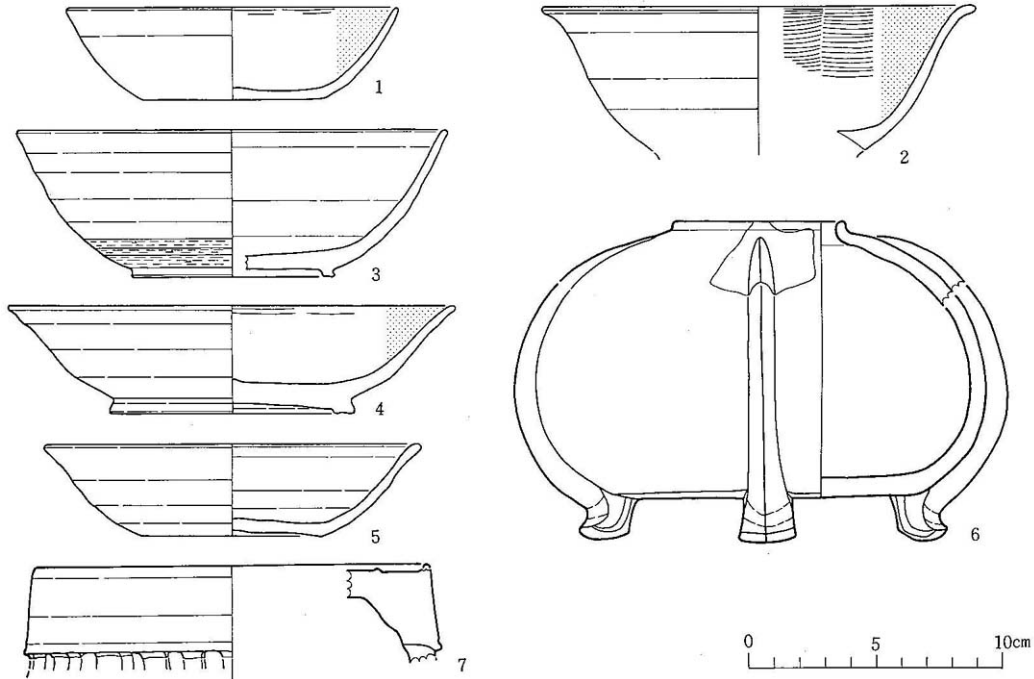
には底部・体下部がヘラケズリのもの、底部が回転糸切りのもの、
須恵器坏には底部が手持ちヘラケズリ、ヘラ切り（第 76 図 5）、回転糸切りのものがある。

SD2195（第 4 図）

調査区西部南寄りに位置し、地山面で 3.1m 検出した幅 1.0m、深さ 50cm、断面 U 字状の南北溝である。埋土は黄褐色粘質土で、地山ブロックを多く含み、人為堆積である。出土遺物にはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦、凝灰岩切石が少数ある。このうち土師器坏には底部が糸切りのもの、回転ヘラケズリのもの、須恵器坏には底部がヘラ切りのもの、底部・体下部が回転ヘラケズリのものがある。

SD2199（第 4 図）

調査区中央部に位置し、地山面で長さ 18m 検出した幅 1.6m、深さ 40cm、断面 U 字状の南



番号	遺構	種類	器種	特徴	箱番号	番号	遺構	種類	器種	特徴	箱番号
1	SD2193	土師器	坏	底部・体下部ヘラケズリ	8608	5	SD2194	須恵器	坏	ヘラ切り	8608
2	SD2193	土師器	高台坏		8608	6	SD2199	緑釉陶器	四足短頸壺	断面三角形の凸帯	8608
3	SD2193	灰釉陶器	壺	三叉トチン痕、黒笹 14 号窯式	8608	7	SD2200	硯	円面硯		8608
4	SD2194	土師器	高台坏	蛇の目高台	8608						

第 76 図 SD2193・2194・2199・2200 溝出土遺物

北溝である。埋土は褐色土で、自然堆積と考えられる。S B 2144～2146、S I 2152、S K 2182 と重複し、いずれよりも新しい。出土遺物は少なく、緑釉陶器、風字硯、平瓦、丸瓦の破片、ウマの下顎歯などがある。このうち緑釉陶器には多賀城跡で初めて出土した四足短頸壺の口縁～体上部破片（第 76 図 6 ; 図版 12-24）がある。陰刻花文が認められないものの、寛平 3（891）年に入寂した高野山二世真然僧正の骨蔵器（菅原編，1990）と同型式の猿投窯産のものとの御教示を榑崎彰一氏より頂いた。体部最大径・器高はやや不確実であるが、真然僧正の骨蔵器を参考に推定復元図を掲載した。平瓦には政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB 類 a1 タイプ、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB 類 b タイプなどがある。

S D 2200（第 4 図）

調査区中央部に位置し、地山面で長さ約 18m 検出した幅 0.8m、深さ 10cm、断面 U 字状の南北溝である。埋土は自然堆積したしまりの悪い褐色土である。S B 2142、S I 2151・2153、S D 2194 と重複し、いずれよりも新しい。古代・近世以降の遺物が出土している。古代の遺物の中には円面硯がある（第 76 図 7）。

（6）その他の遺構

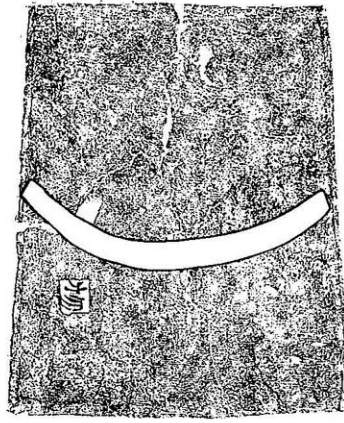
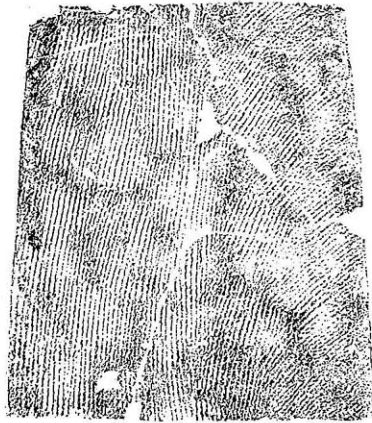
S X 2192 竪穴状遺構（第 9 図）

調査区中央西寄りに位置し、地山面で検出した。S B 2144、S I 2152、S K 2187 と重複し、いずれよりも古い。平面形は方形で、規模は西辺が 3.0m、北辺が 2.0m 以上である。方向は北辺で見ると発掘東西基準線に対し東が北に約 15° 偏する。壁の立ち上がりは西辺・南辺がやや急だが、北辺が緩やかである。平面形・規模が竪穴住居跡に類似し、重複して新しい S I 2152 と方向も一致することから、竪穴住居跡である可能性が高い。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平瓦、丸瓦、凝灰岩切石の破片が少数出土している。このうち土師器甕にはロクロ調整のもの、平瓦には政庁第Ⅰ期の平瓦ⅠA 類、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB 類 a2 タイプがある。

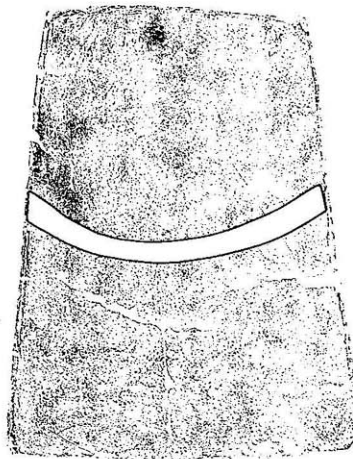
S X 2198 平瓦列（第 9 図）

調査区中央に位置し、地山面で検出した。完形の平瓦 4 点を凸面を上にして端部が重なるように縦に並べている。柱穴は平面形が楕円形、断面形が皿状で、長径 1.5m、短径 0.8m、深さ 10cm である。平瓦には政庁第Ⅱ期のⅡB 類 a2 タイプが 3 点、政庁第Ⅲ期のⅡB 類 b タイプが 1 点ある（第 77 図）。性格は不明である。



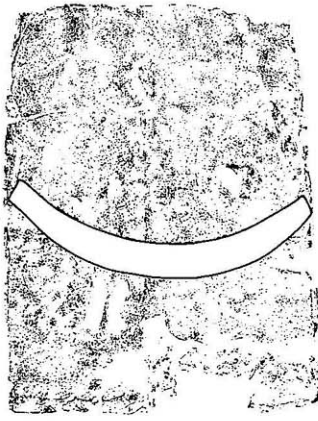
平瓦ⅡB類 a2 タイプ
 凹面に刻印 物
 平箱番号 8619

1



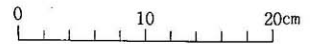
平瓦ⅡB類 a2 タイプ
 平箱番号 8619

2



平瓦ⅡB類 a2 タイプ
 平箱番号 8619

3



第 77 図 SX2198 平瓦列の出土遺物

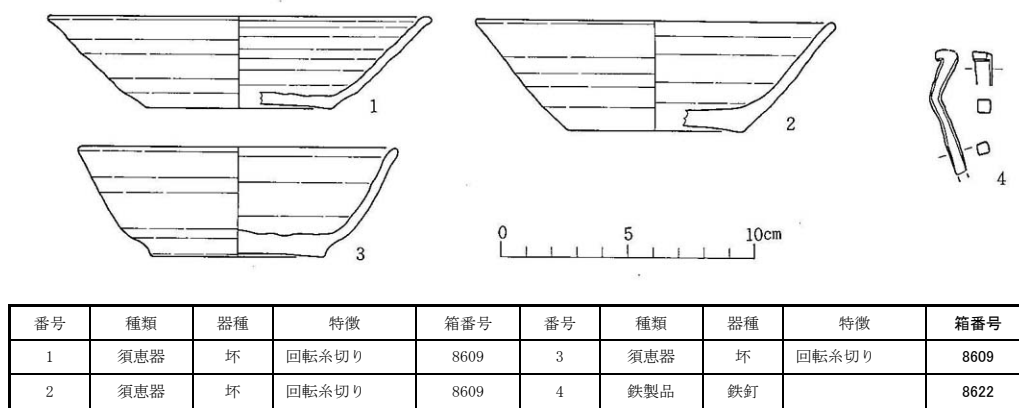
(7) 堆積層の出土遺物

第3層からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壺、平瓦、丸瓦、刀子・鉄鏃・鉄釘（第78図4）などの鉄製品が少数出土し、須恵系土器を含まない。土師器坏は15点あり、内訳は回転糸切り11点、手持ちへらケズリ4点で、底径は小さく、内面のへらミガキは放射状のものが主体を占める。須恵器坏は18点あり、内訳は回転糸切り6点（第78図1～3）、へら切り9点、手持ちへらケズリ3点で、底径の小さいものがある。

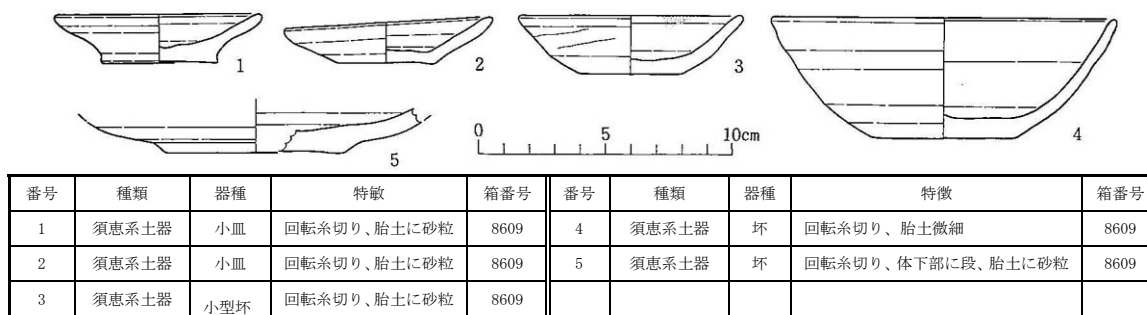
平瓦には平瓦ⅡB類の他、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類を含む。

第2層からはロクロ調整の土師器坏・・・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、須恵系土器小皿・小型坏・坏・高台坏・大型鉢、灰釉陶器・・・平瓦、丸瓦、鉄鏃・鉄釘？、鉄滓、砥石、骨片、歯が出土した。須恵系土器には色調が赤みのある褐色で、胎土に0.5～1mm前後の砂粒・ガラスを含み、器厚が厚い一群の土器がある（第79図1～3・5）。1・2は小皿、3は小型坏、5は大型の坏ないし大皿である。土師器坏は26点あり、内訳は回転糸切り20点、手持ちへらケズリ4点、回転へらケズリ2点で、底径は小さく、内面のへらミガキは放射状のものが主体を占める。須恵器坏は66点あり、内訳は回転糸切り12点、へら切り50点、手持ちへらケズリ3点、回転へらケズリ1点である。

第1層からは近・現代の陶磁器・瓦・鉄製品の他、古代の土器・瓦・鉄製品などが出土した。



第78図 第3層出土遺物



第79図 第2層出土遺物

2) 第 63 次調査

第 63 次調査において発見された遺構には、掘立式建物跡が建て替え分も含め 7 棟、竪穴住居跡 4 軒・井戸跡 2 基・土器埋設遺構 1 基のほか土壇 6 基・溝 2 条が検出されている。

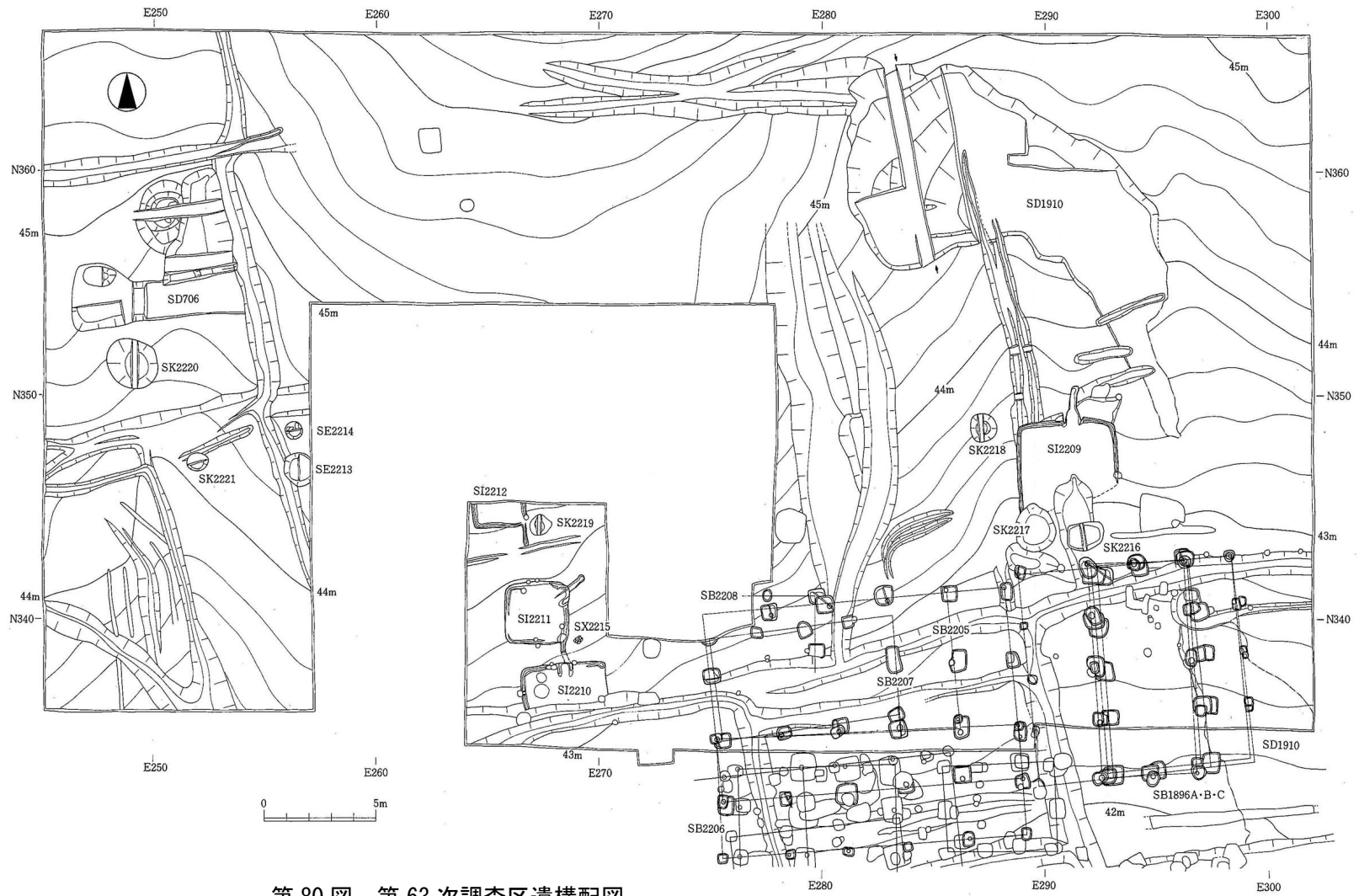
(1) 掘立式建物跡

S B1896A・B・C 建物跡 (第 81・82 図)

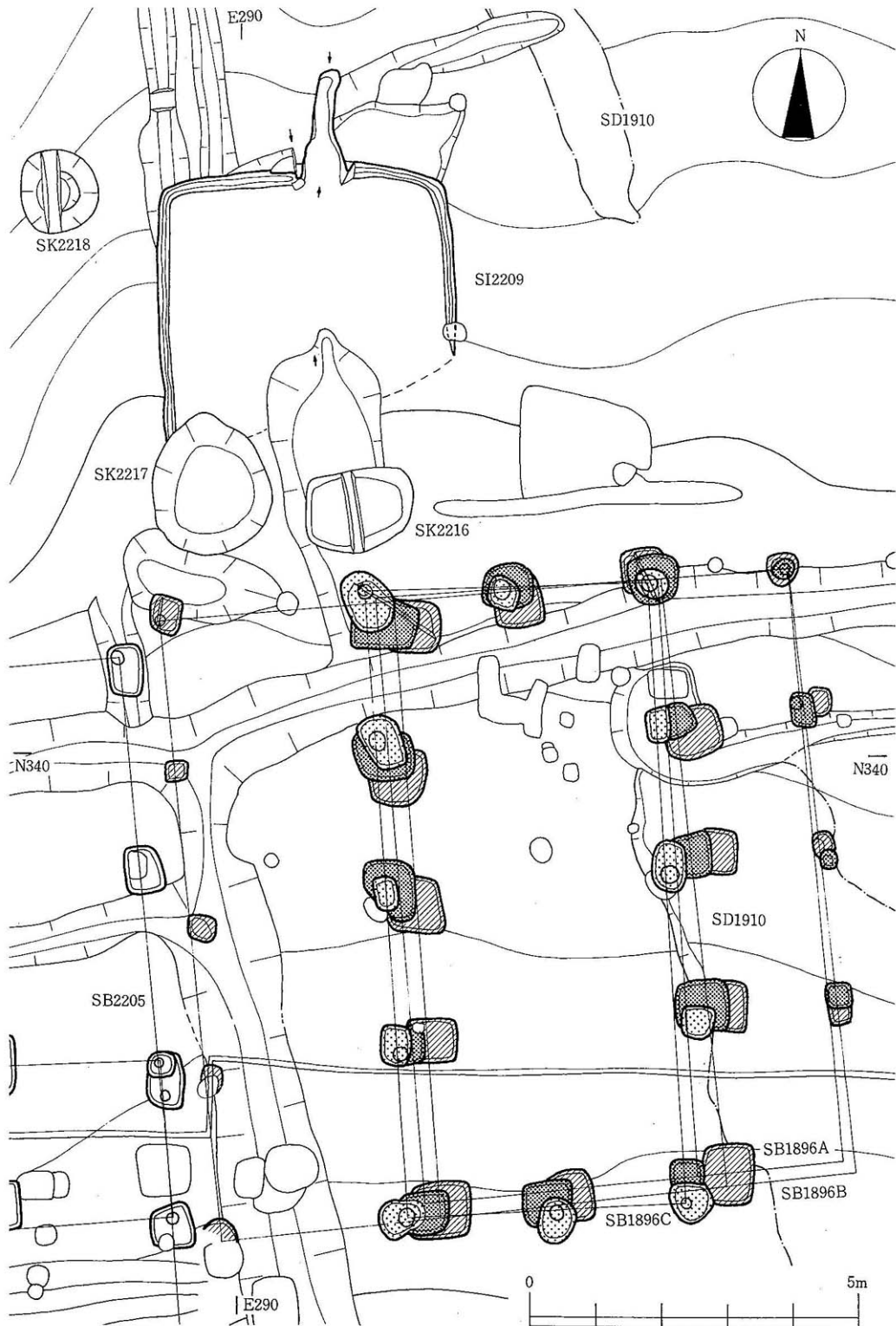
調査区東部南寄りから第 56 次調査区にかけて位置する南北棟建物跡である。2 度の建て替えがあり (A→B→C)、時期によって廂の有無や位置に違いが認められる。その構造は南北柱筋の方向の関係から、A が南北 4 間、東西 4 間で東西 2 面廂付き建物、B は南北 4 間、東西 3 間で東廂付き建物、C は南北 4 間、東西 2 間で廂が付かない建物と推定され、漸次簡略化の方向をたどる傾向にある。これらの柱穴は地山面および S D1910 溝堆積層で検出され、そのうち C の 10 カ所と B の東廂 2 ケ所、A の西廂 1 ケ所で柱痕跡が認められた。重複状況から本建物跡は S D1910 より新しいことが判明している。

平面規模は、柱痕跡が明確な C でみると、桁行が西側柱列で総長 9.58m、柱間は北より 2.33m・2.32m (推定)・2.47m (推定)・2.46m、梁行は南妻で総長 4.29m、柱間は西より 2.30m・1.99m である。A・B については、身舎は C とほぼ同様の規模と考えられ、廂の出は A・B の東廂が柱穴心々で約 2.0m、A の西廂が同約 3.4m と推定される。建物方向の南北発掘基準線に対する振れは、A では西側柱列・東廂・西廂が柱穴心々でそれぞれ北で西へ 5 度・7 度・6 度と推定され、B では西側柱列・東廂がそれぞれ 4 度 (推定)・5 度、C では西側柱列が 3 度となっている (註)。柱穴は身舎部分では A が一辺 0.70~0.91m の方形で、深さが 59cm、B では一辺 0.50~0.87m の方形~隅丸方形で、深さが 80cm、C では一辺 0.39~0.70m の隅丸方形で、深さが 87cm となっており、その平面形・規模は新しくなるにつれて方形が崩れ、小さくなる。廂部分は A・B の東廂が一辺 0.34~0.46m の方形、A の西廂が 0.38~0.53m で、身舎部分より小規模である。柱痕跡は C が径約 25cm、A の西廂・B の東廂とも径約 20cm となっている。柱穴の埋土は A・B・C とも地山混じりの黄褐色土が主体であるが、C では褐色味が強くなる。柱痕跡はにぶい黄暗褐色土で黄褐色の地山小ブロックを少量含む。

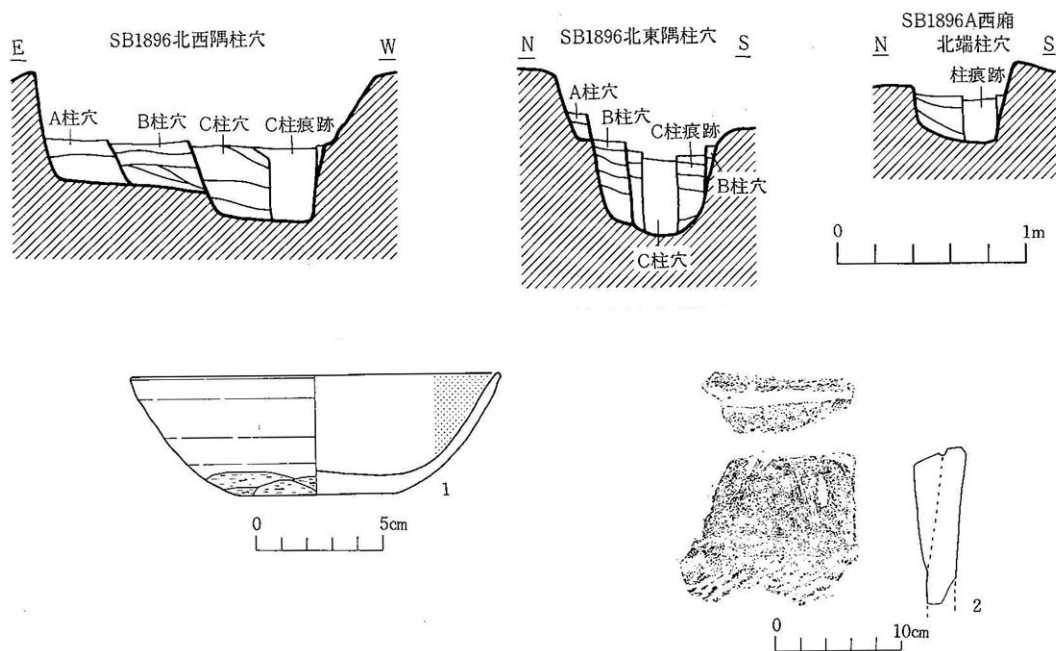
遺物は A~C の柱穴や柱抜き穴からロクロ調整の土師器や須恵器・瓦などが出土しており、このうち特徴が明らかな主なものとして B の柱穴から底部が回転糸切りの土師器坏、C の柱抜き穴から底部が回転糸切りのものとともに、手持ちヘラケズリが加えられた土師器坏 (第 83 図 1) や政庁第 II 期の平瓦 (同図 2) のほか少量の須恵系土器坏が出土している。



第 80 图 第 63 次調査区遺構配図



第 81 图 SB1896A~C 建物跡、SI2209 住居跡、SK2216~2218 土壌平面図



番号	出土地点	種類	備考	箱番号	番号	出土地点	種類	備考	箱番号
1	SB1896C 柱穴	土師器坏	回転糸切り→手持ちケズリ	11544	2	SB1996C 柱抜穴	軒平瓦	640 単弧文	

第 83 図 SB1890C 建物跡出土遺物

SB2205 建物跡 (第 84・85 図)

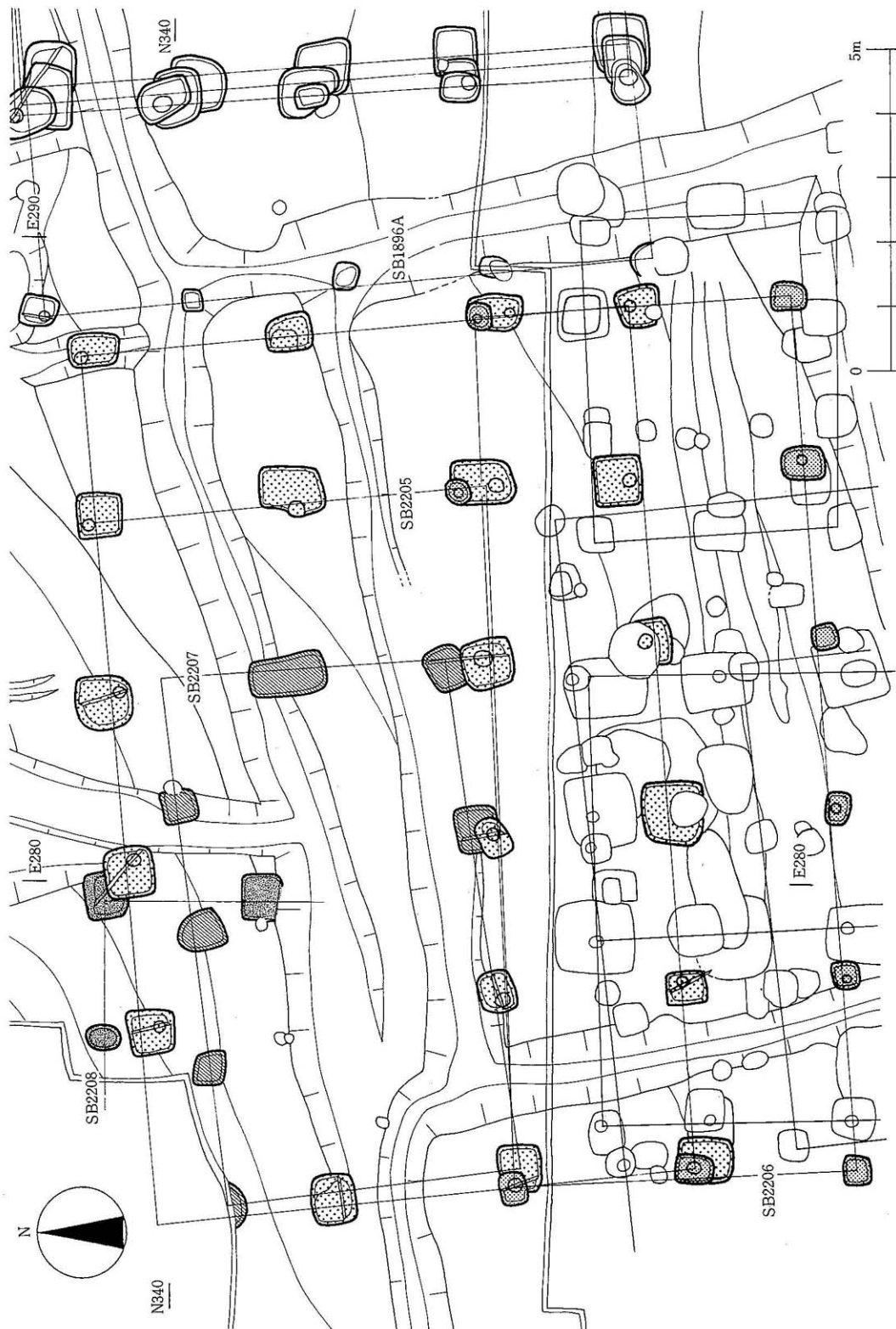
調査区東部南寄りから第 56 次調査区にかけて位置する東西棟建物跡である。東西 5 間、南北 3 間で、南側と東側に廂が付く。第 56 次調査の段階では本建物跡南半部分の柱穴の配置から SB1882・1883・1886・1897 として複数の建物とみたが、今回の調査の結果、本建物跡と後述の SB2206 建物跡の 2 つの建物にまとまることが確認された。柱穴は地山面で検出され、そのうち 15 カ所で柱痕跡が認められた。重複状況から SB2207・2208 より新しく、SB2206 より古いことが判明している。

平面規模は、桁行が南側柱列で総長 10.6m と推定され、柱間が西より 2.6m (推定)・2.63m・2.73m・2.71m、廂の出は 2.65m、梁行は東妻で総長 6.35m、柱間は北より 3.24m・3.11m、廂の出は 2.07m である。建物方向は東妻で見ると、発掘基準線に対し北で西へ 7 度振れている。柱穴は一辺 0.53~0.95m の方形で、深さが 35~90cm、柱痕跡は径 20~25cm である。柱穴の埋土は褐色ないしにぶい黄褐色土で黄褐色の地山小ブロックを含み、柱痕跡は褐色土が主体となっている。

遺物は出土していない。

SB2206 建物跡 (第 84 図)

調査区東部南寄りから第 56 次調査区にかけて位置する東西 5 間、南北 2 間の東西棟建物跡である。柱穴は地山面で検出され、そのうち 7 カ所で柱痕跡が認められた。SB2205 お



第 84 图 SB2205~2208 建物跡平面図

よび第 56 次調査で検出された S B1884・S B1888 と重複し、それらより新しい。

平面規模は桁行が南側柱列で総長 13.68m と推定され、柱間が西より 3.02m (推定)・2.70m・2.69m (推定)・2.72m (推定)・2.56m (推定)、梁行は西妻で総長 5.27m (推定)、柱間は北より 2.73m・2.55m (推定) である。建物方向は南側柱列で見ると、発掘基準線に対し東で北へ 5 度、北側柱列では同じく 3 度振れている。柱穴は長軸 0.37~0.51m の隅丸方形や楕円形で、深さが 40cm、柱痕跡は径 18~21cm である。埋土は柱穴・柱痕跡とも暗褐色土となっており、黄褐色の地山小ブロックの混入は明瞭でない。

遺物は出土していない。

S B2207 建物跡 (第 84 図)

調査区東部南寄りに位置する東西棟建物跡である。梁行 2 間に対し、桁行は北側で 4 間南側で 3 間となり、柱割りが異なる。柱穴は地山面で検出された。柱痕跡は認められない。S B2205 と重複し、それより古い。

平面規模は、桁行は北側柱列で総長 8.35m、柱間は等間とすれば 2.14m、梁行は東妻で総長 4.49m、柱間は等間とすれば 2.25m と推定される。建物方向は北側柱列で発掘基準線に対し東で北へ 8 度弱振れると考えられる。柱穴は一辺 0.49~0.76m の方形で、深さが 27~32cm である。埋土は褐色ないしにぶい黄褐色土となっている。

遺物は出土していない。

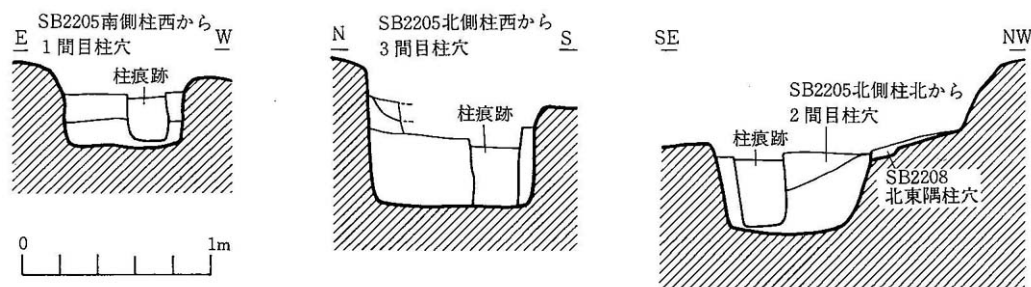
S B2208 建物跡 (第 84・85 図)

調査区東部南寄りに位置する東西・南北とも 2 間以上の建物跡である。柱穴は地山面で検出された。柱痕跡は認められない。重複状況から S B2205 より古い。

柱間は東西が 2.23m、南北が 2.40m と推定され、建物方向は発掘基準線にほぼ沿っていると考えられる。柱穴は一辺 0.63~0.70m の方形を基調とし、深さは 27cm である。埋土はにぶい黄褐色土が主体で、黄褐色の地山小ブロックを含む。

遺物は出土していない。

(註) 以下建物の規模や方向の計測値において推定とした場合、いずれも柱穴の心々を基準とした。



第 85 図 SB2205・2208 建物跡柱穴断面図

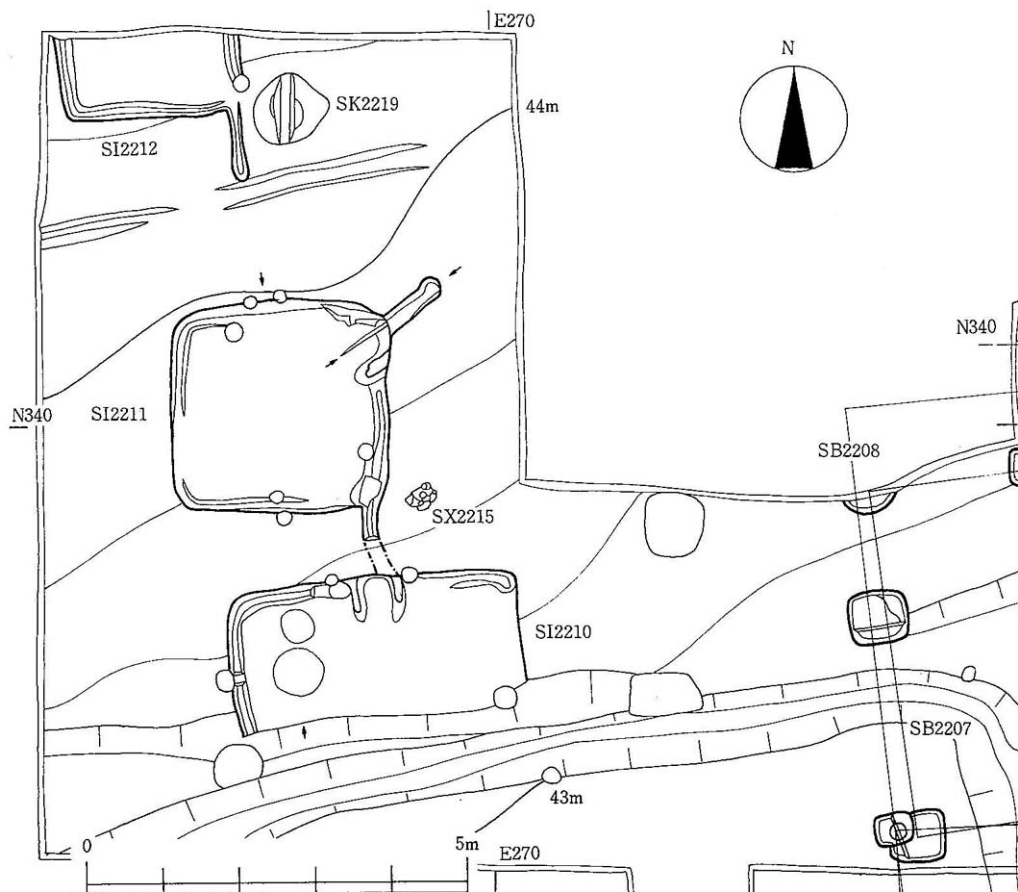
(2) 竪穴住居跡

S I 2209 住居跡 (第 81・86 図)

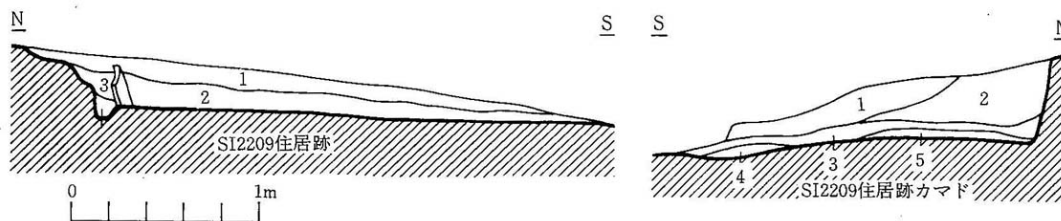
調査区東部の地山面で検出された。S K2217 土壙と重複し、それより古い。

平面形は方形をなし、規模は北辺が 4.5m、西辺が 3.9m 以上である。壁は立ち上がり之急で、高さは最も保存のよい北東壁で 33cm になる。床は地山でほぼ平坦となっている。周溝は断面が逆台形をなし、幅 10~25cm、深さ約 5cm で、住居内を全周する。カマドは北壁の中央やや東寄りに付設されたもので、その本体の大部分は住居外に突き出ており、粘土を素材とした両側壁の南端のみが住居内に張り出している。燃烧部の規模は幅 60cm、奥行き 75cm で、先端から延びる煙道は幅 30cm、長さは 1.0m である。住居内堆積土は褐色土で、地山の小ブロックを多量に含む状況から人為堆積と判断された。

遺物(第 87 図)は、床面から底部が回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリされた土師器坏(1)や非ロクロ調整で長胴形をなす土師器甕、底部がヘラ切りの須恵器坏(2・3)などのほか、政庁第一期の軒丸瓦(4・5)などが出土している。

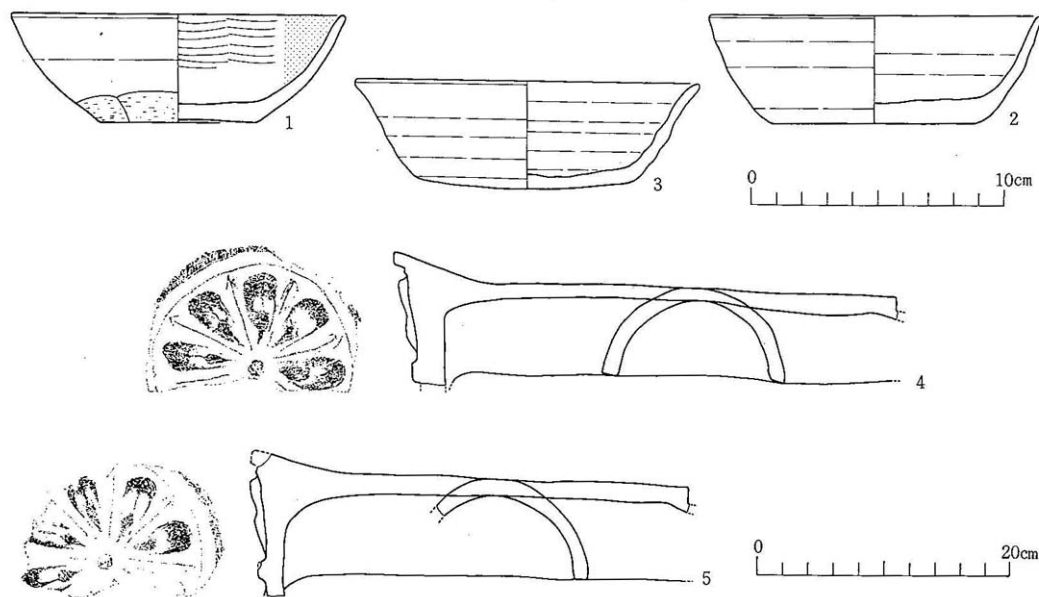


第 86 図 SI2210~2212 住居跡、SK2219 土壙平面図



SI2209 住居跡		SI2209 住居跡カマド	
層位	特徴	層位	特徴
1層	黄褐色土(10YR5/6)	1層	黄褐色土(10YR5/6) 地山粒少量含む
2層	褐色土(10YR4/4) 地山粒を含む	2層	黄褐色土(10YR5/6) 焼土・地山粒含む
3層	にぶい赤色土(7.5R4/4) 焼土	3層	暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土・木炭粒含むカマド崩落土
4層	周溝埋土	4層	暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土多量に含むカマド崩落土
		5層	黄褐色土(10YR5/6) 焼土・木炭少量含む

第 87 図 SI2209 住居跡断面図



番号	出土地点	種類	備考	箱番号	番号	出土地点	種類	備考	箱番号
1	SI2209-床	土師器杯	手持ちヘラケズリ	11544	4	SI2209-床	軒丸瓦	320 重弁蓮花文	11546
2	SI2209-床	須恵器杯	ヘラ切り	11544	5	SI2209-カマド	軒丸瓦	320 重弁蓮花文	11546
3	SI2209-床	須恵器杯	ヘラ切り	11544					

第 88 図 SI2209 住居跡出土遺物

S I 2210 住居跡 (第 88・89 図)

調査区中央南寄りの地山面で検出されたもので、南半は後世の溝によって失われている。重複状況から S I 2211 より新しい。

平面形は方形をなし、規模は北辺が 3.9m、西辺が 1.8m 以上である。壁の立ち上がりは急で、高さは最も保存のよい北西壁で約 17cm となっている。床は地山でほぼ平坦である。周溝は断面が偏平な「U」字形をなし、幅 15~25cm、深さ約 5cm で、住居北辺~西辺を巡る。カマドは北壁中央に砂質粘土を貼り付けてつくられている。燃烧部の規模は幅 40cm、奥行

き 60cm である。

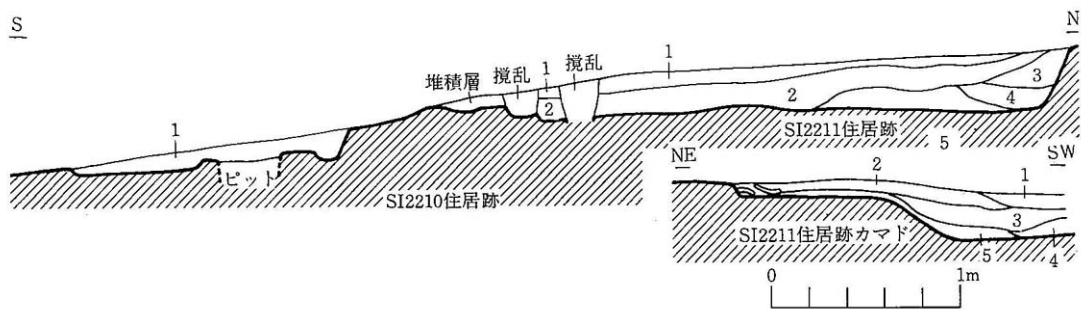
遺物はカマド内からロクロ調整の土師器坏や底部がヘラ切りの須恵器坏などが出土している。

S I 2211 住居跡 (第 88・89 図)

調査区中央南寄りの地山面で検出されている。S I 2211 と重複し、それより古い。

平面形は方形をなし、規模は北辺が 2.9m、西辺が 2.8m である。壁の立ち上がりは急で、高さは最も保存のよい北壁で約 28cm となっている。床は地山でほぼ平坦である。周溝は断面が偏平な「U」字形をなし、幅 15～25cm、深さ約 5～10cm で、住居の北辺東半を除く部分を巡る。また住居南東隅では、周溝から分かれた幅約 20cm、深さ約 5cm の外延溝が南に延びるのが確認されている。カマドは北東隅に付設されている。砂質粘土を貼り付けてつくられており、燃烧部の規模は幅 50cm、奥行き 65cm で、先端から延びる煙道は幅 25cm、長さは 90cm である。

遺物は床面から底部が回転ヘラケズリされた土師器坏や底部がヘラ切りの須恵器坏 (第 90 図 1) などが出土している。



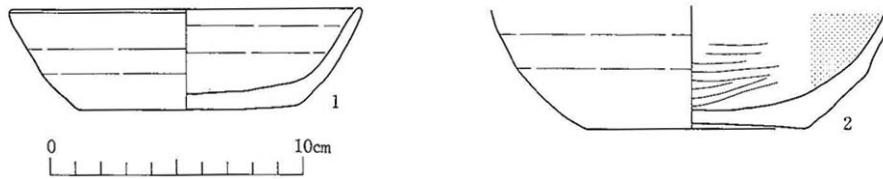
S I 2210 住居跡		S I 2211 住居跡		S I 2211 住居跡カマド	
層位	特徴	層位	特徴	層位	特徴
1層	にぶい黄褐色土(10YR5/4)	1層	にぶい黄褐色土(10YR6/4)	1層	にぶい黄褐色土(10YR6/4)
		2層	褐色土(10YR4/6)	2層	褐色土(10YR4/6)
		3層	褐色土(10YR4/6) 2層よりやや明るい	3層	褐色土(10YR4/6) 2層よりやや明るい
		4層	にぶい黄褐色土(10YR5/4)に黄褐色地山粒(10YR5/8)含む	4層	にぶい黄褐色土(10YR6/4)に黄褐色地山粒(10YR5/8)含む
		5層	にぶい黄褐色土(10YR6/4)	5層	褐色土(10YR4/4) 天井崩落土

第 89 図 S I 2210・2211 住居跡断面図

I 2212 住居跡 (第 88 図)

調査区中央南寄りの地山面で、南半部のみを検出した。

平面形は方形をなし、規模は南辺が 2.5m、西辺が 1.2m 以上である。壁の立ち上がりは急で、高さは最も保存のよい西壁で 13cm となっている。床は地山でほぼ平坦である。周溝は断面が偏平な「U」字形をなし、幅 17～25cm、深さ約 7～10cm で、住居検出部分を全周する。南東隅では、周溝から分かれた幅約 15cm、深さ約 5cm の外延溝が南に延びている。



番号	出土地点	種類	備考	箱番号	番号	出土地点	種類	備考	箱番号
1	SI2211-床	須恵器坏	へら切り	11544	2	SI2212-床	土師器坏	回転へらケズリ	11544

第90図 SI2210・2211 住居跡出土遺物

遺物は床面から底部が回転へらケズリされた土師器坏（第90図2）や底部がへら切りの須恵器坏などが出土している。

(3) 井戸跡

SE2213 井戸跡（第91・92図）

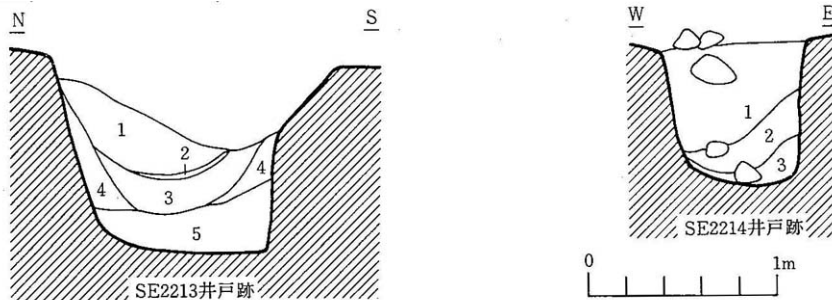
調査区西部の地山面で検出された素掘りの井戸である。平面は円形で、規模は上端径1.5m、下端同0.8m、断面は深さは0.9mの逆台形をなす。堆積土は褐色～暗褐色土で、4枚の層に分かれる。

遺物は堆積土からロクロ調整による土師器坏・須恵器坏・須恵系土器坏などが出土している。

SE2214 井戸跡（第91・92図）

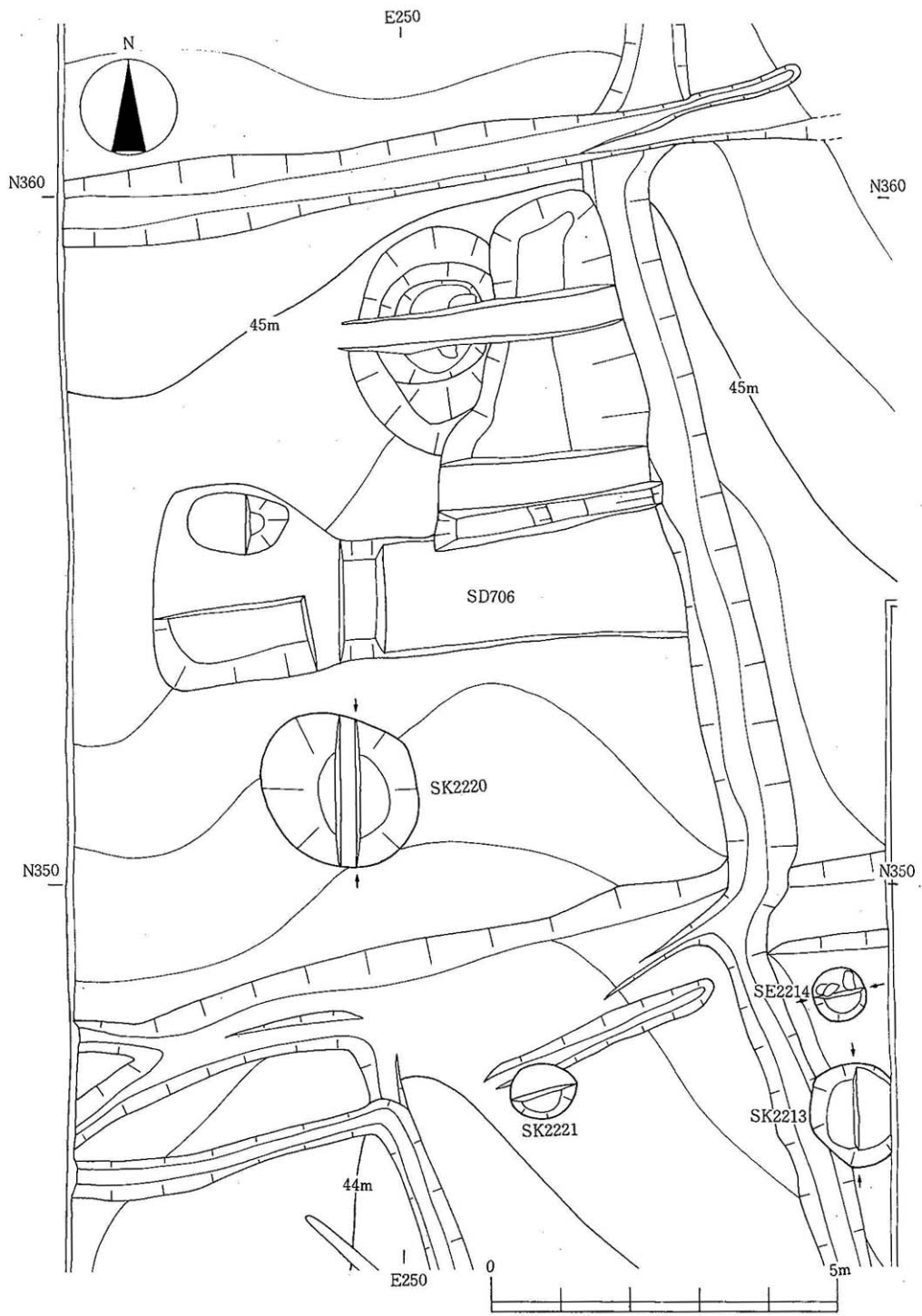
調査区西部の地山面で検出された素掘りの井戸である。平面は円形で、規模は上端径0.8m、下端同0.5m、断面は深さ0.9mの「U」字形をなす。堆積土は3枚に分かれ、第1層はにぶい黄褐色土層、第2層は褐色土層、第3層は厚い木炭層になっている。

遺物は出土していない。



SE2213 井戸跡		SE2214 井戸跡	
層位	特徴	層位	特徴
1層	褐色土(10YR4/6)	1層	にぶい黄褐色土(10YR5/6) 地山粒少量含む
2層	木炭層	2層	褐色土(10YR4/4)
3層	褐色土(10YR4/4)	3層	黒色土(10YR2/1)
4層	褐色土(10YR4/4) 地山小ブロック含む		
5層	暗褐色土(10YR3/4)		

第91図 SE2213・2214 井戸跡断面図



第 92 図 SE2213・2214 井戸跡、SK2220・2221 土壇、SD706 溝平面図

(4) 土器埋設遺構

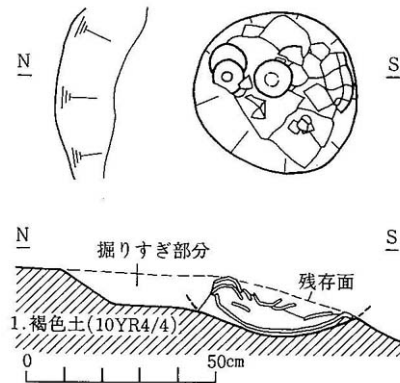
S X2215 土器埋設遺構 (第93図)

調査区中央南部の地山面で検出された土器の埋設遺構である。本来は土師器甕が横位の状態で、円形をなす掘り方底面に据えられたものとみられるが、現状では上部が削平されているため、甕の片面のみが残存しているにすぎない。掘り方は底面が甕の体部器面にあわせるように皿状に掘られたもので、残存径は約35cmである。器内部の土層は褐色土で焼土や木炭粒を含んでおり、層中から埋納された須恵系土器小型坏☆点・高台皿☆点・高台坏が☆点伴出している。またその周囲からも本来埋納されてあったとみられるものが出土しており、特徴のわかるものとして、須恵系土器小型坏4点・高台皿1点・高台坏が5点がある(第94図2～4・10・11・13～18)。

土師器甕は非ロクロ調整によるもので、体部はやや丸味をもち、口縁部が屈曲し短く外傾する鉢形をなす。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラケズリの後ナデ調整が施されている(1)。

須恵系土器小型坏は底部が回転糸切りで、体部はやや丸味をもって外傾する。口径9.2～10.5cm、底径3.3～4.7cmである。(2～10)。

須恵系土器高台皿は皿部が直線的に大きく開き、高台部は直立気味に立ち上がる。皿部は口径10.8～11.3cmであり、高台部は高台径5.3～5.7cm、高さ約1.5cmである(11・12)。須恵系土器高台坏(13～18)は高台部の破片である。高台は高台皿に比べ低く、「ハ」字状に開くものが多い。高台径は5.0～6.3cmである。



第93図 SX2215 土器埋設遺構

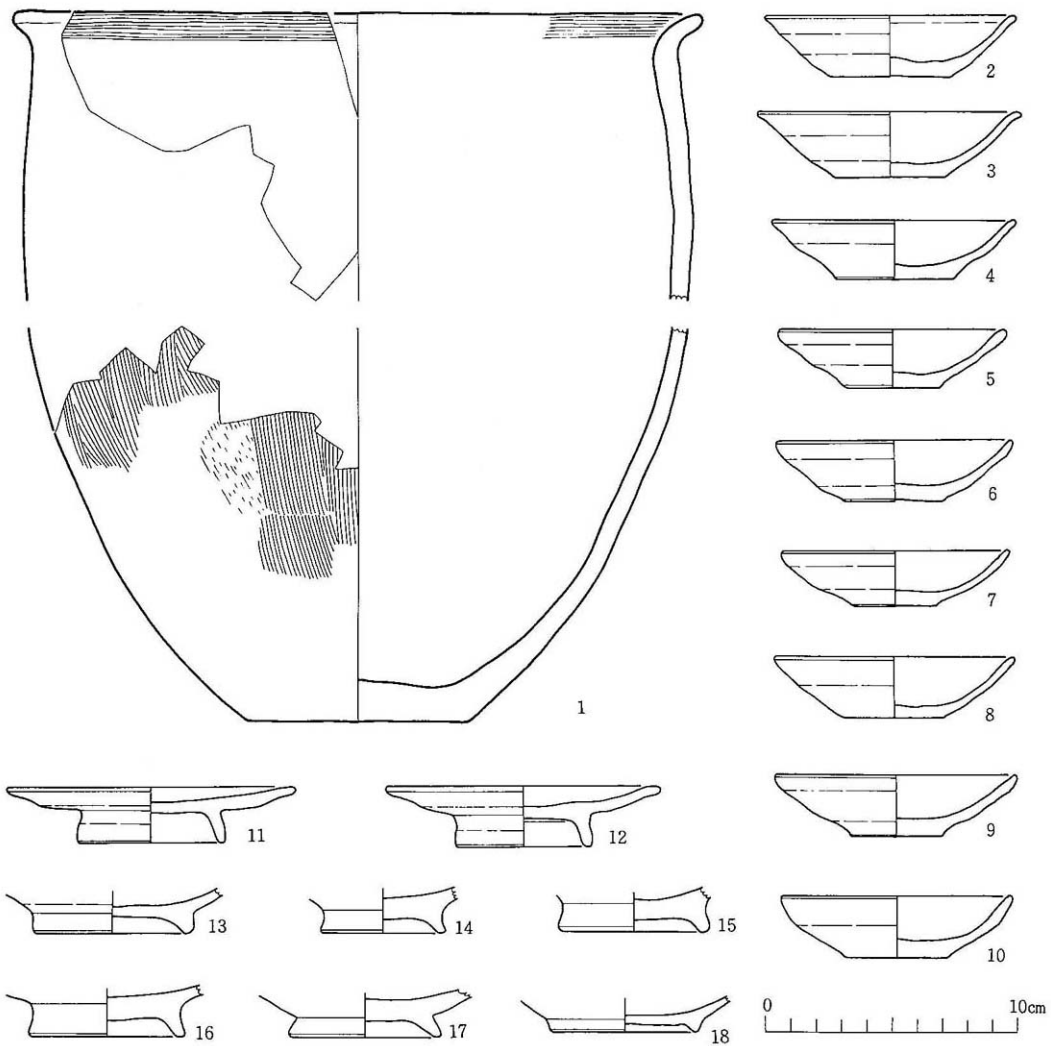
(5) 土壌

S K2216 土壌 (第81図)

調査区東部南寄りの地山面で検出された。

平面は東西に長い隅丸長方形をなし、規模は長軸1.7m、短軸1.2m、深さは17cmで、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は暗い褐色土が主体をなす。

遺物は堆積土からロクロ調整の土師器坏・甕、底部がヘラ切りの須恵器坏・蓋・甕、平瓦などが出土している。



番号	出土地点	種類	備考	箱番号	番号	出土地点	種類	備考	箱番号
1	SX2215	土師器甕		11546	10	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544
2	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544	11	SX2215	須恵系土器高台皿	胎土微細	11544
3	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544	12	SX2215	須恵系土器高台皿	胎土微細	11544
4	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544	13	SX2215	須恵系土器高台坏	胎土微細	11544
5	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544	14	SX2215	須恵系土器高台坏	胎土微細	11544
6	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544	15	SX2215	須恵系土器高台坏	胎土微細	11544
7	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544	16	SX2215	須恵系土器高台坏	胎土微細	11544
8	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544	17	SX2215	須恵系土器高台坏	胎土微細	11544
9	SX2215	須恵系土器小型坏	回転系切り、胎土微細	11544	18	SX2215	土師器高台坏	胎土微細	11544

第 94 図 SX2215 土器埋設遺構の土器

S K2217 土壇 (第 81 図)

調査区東部の地山面で検出されたもので、S I 2209 と重複し、それより新しい。

平面は不整形円形をなし、規模は径 1.8~2.0m、深さは約 50cm で、底面~壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は黒褐色土である。

遺物は出土していない。

SK2218 土壌 (第 81 図)

調査区東部の地山面で検出された。

平面は円形をなし、規模は径約 1.2m、深さは約 50cm で、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は黄褐色地山ブロックとなっている。

遺物は堆積土から須恵器甕が出土している。

SK2219 土壌 (第 88 図)

調査区中央南寄りの地山面で検出された。

平面は不整形円形をなし、規模は径 0.8～1.0m、深さは 20cm で、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は暗褐色土である。

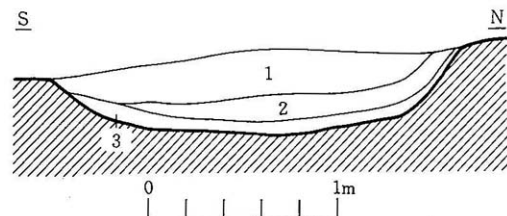
遺物は堆積土から土師器甕、底部がヘラ切りの須恵器坏・甕などが出土している。

SK2220 土壌 (第 91・95 図)

調査区西部の地山面で検出された。

平面は楕円形をなし、規模は長軸 2.4m、短軸 2.1m、深さは約 40cm で、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は黄褐色～灰黄褐色土で、3 枚に分かれる。

遺物は堆積土からロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕および須恵器甕・壺などが出土している。



層位	特徴
1層	褐色土 (10YR4/6)
2層	にぶい褐色土 (10YR4/3)
3層	にぶい灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山小ブロック含む

第 95 図 SK2220 土壌断面図

SK2221 土壌 (第 91 図)

調査区西部の地山面で検出された。

平面は楕円形をなし、規模は長軸 1.0m、短軸 0.8m、深さは約 30cm で、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は黒褐色土である。

遺物は堆積土から土師器高台坏・甕が出土している。

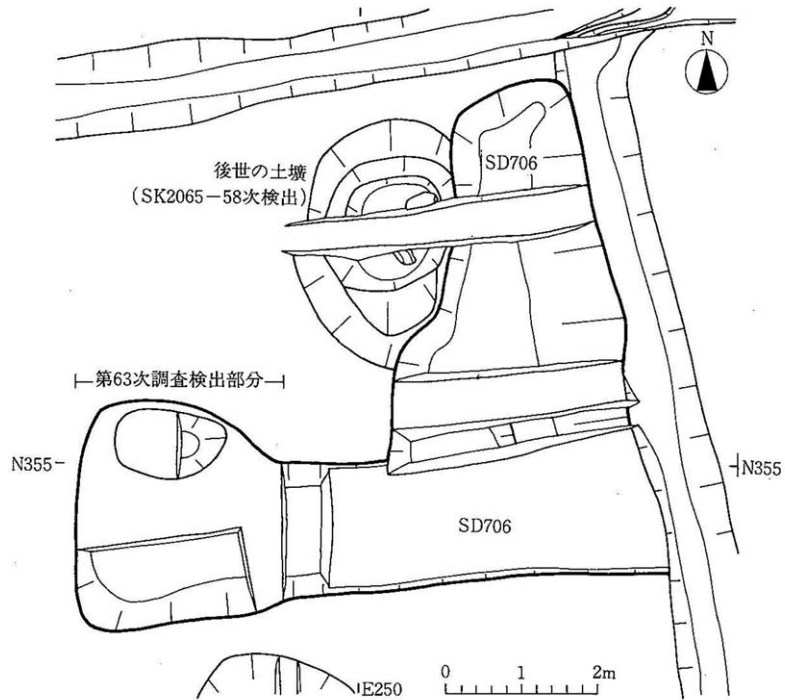
(5) 溝

SD706 溝 (第 91・96 図)

本溝は、これまでの調査により平安時代の S B 307 外郭東門の南約 30m のところから西

に延びるのが確認されている。今回の調査箇所は第56・58次調査で検出された溝東端の西側にあたる。検出の結果、溝はコーナーから約8m西のところで緩やかに立ち上がり、伸びが途切れるのを確認した。

規模は今回検出部分で幅約3m、深さは約30cmになり、これまで明らかになっている東側部分に比べると、やや膨らんだ形態になる。出土遺物はない。

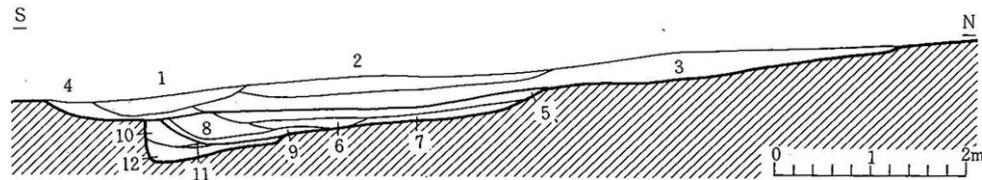


第96図 SD706 溝平面図

SD1910A・B・C溝 (第80・97図)

平安時代のSF300築地に伴う城内側の大溝で、調査区北部中央東寄りから東部を巡る。地山面で検出され、重複状況からSB1896より古い。これは不整合の層相からA・B・Cの3時期に分かれる。

規模はAでは上端幅が1.5m以上、下端幅が1.3m、深さ0.7mで、Bは上端幅が約4m、下端幅が約3m、深さが0.6m、Cは上端幅が約9m、下端幅が約7m、深さが0.4mとなっている。

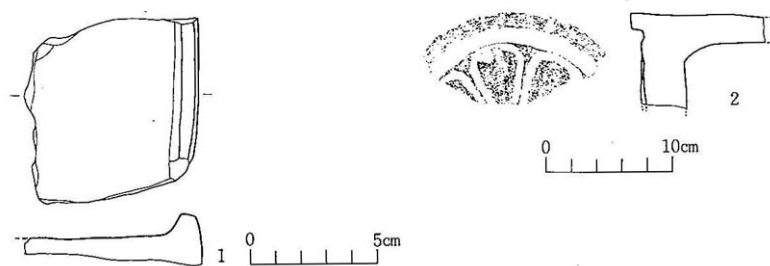


層位	特徴	備考	層位	特徴	備考
1層	灰白色土(10YR8/1) 灰白色火山灰層	C溝	7層	にぶい黄褐色土(10YR7/2) 泥土層	B溝
2層	黄褐色土(10YR6/6) 砂粒を含む		8層	明黄褐色土(10YR6/6) 地山崩壊土	
3層	にぶい黄褐色土(10YR5/3)		9層	灰黄褐色土(10YR6/2) 泥土層	
4層	灰黄褐色土(10YR5/2)	B溝	10層	黄褐色土(10YR6/6) 地山崩壊土	C溝
5層	褐色土(10YR4/4)		11層	灰黄褐色土(10YR5/2) 泥土層	
6層	灰黄褐色土(10YR6/2) 砂粒を含む泥土層		12層	明黄褐色土(10YR7/6) 地山崩壊土	

第97図 SD1910 溝断面図

堆積土は各溝とも黄褐色土や灰黄褐色土などが主体的にみられるほか、A・Bでは明黄褐色の地山崩壊土を含んでいる。またCでは最上位に灰白色火山灰層が堆積する。

遺物はB～C溝からロクロ調整の土師器や須恵器、政庁第一期の軒丸瓦（第98図2）・風字硯（第98図1）などの小片が出土している。このうちB溝出土の須恵器坏は底部がヘラ切りのものと回転ヘラケズリのものであり、C溝出土の土師器坏は底部が回転糸切りである。

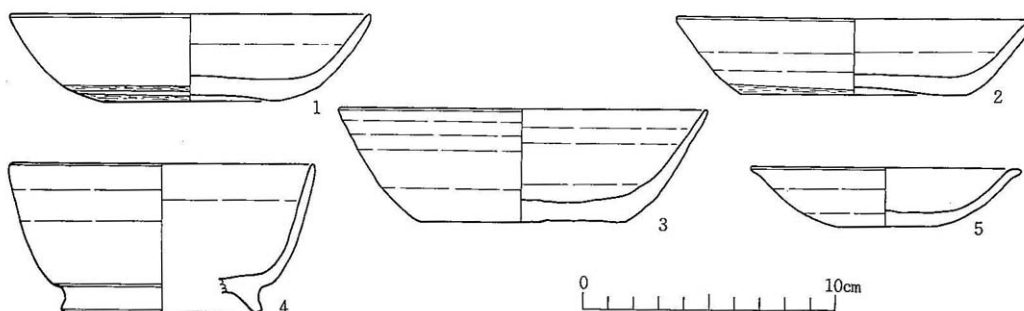


番号	出土地点	種類	備考	箱番号	番号	出土地点	種類	備考	箱番号
1	SD1910	風字硯		11544	2	SD1910	軒丸瓦	431 重弁蓮花文	11546

第98図 SD1910 溝出土遺物

(6) 堆積層出土の遺物（第99・100図）

堆積層から出土した主な遺物として須恵器坏・高台坏、須恵系土器坏、丸瓦などがある。須恵器坏は底部が回転ヘラケズリのもの（第99図1）・手持ちヘラケズリのもの（同図2）・ヘラ切りのもの（同図3）があり、前二者はともに底部の切り離しは回転糸切りである。高台坏（同図4）は底部が大きい椀形の坏にやや外反する高台が付く。須恵系土器坏（同図5）は口径が10.6cmの小型坏である。丸瓦はともにⅡB類で、政庁第二期の刻印「占」（第100図1）や「伊」（同図2）がある。



番号	出土地点	種類	備考	箱番号	番号	出土地点	種類	備考	箱番号
1	SN-51-2	須恵器坏	回転糸切り→回転ヘラケズリ	11544	4	SN-50-1	須恵器高台坏		11544
2	SN-51-1	須恵器坏	回転糸切り→手持ちヘラケズリ	11544	5	SS-55-1	須恵系土器小型坏	回転糸切り	11544
3	SN-60-1	須恵器坏	ヘラ切り	11544					

第99図 堆積層出土遺物(1)

4. 考 察

1) 第 6 2 次調査

第 62 次調査で検出された遺構には、建物跡 13 棟、竪穴住居跡 15 軒、井戸跡 2 基の他、土壇・溝などがある。このうち S I 2153・2160 竪穴住居跡、S K 2167 などの土壇などから、多数の一括土器群が出土した。以下では、土器の分類と一括土器群の年代的検討をまず行い、次に掘立式建物跡・竪穴住居跡・井戸跡・土壇などの時期の検討を行う。

(1) 出土土器の分類と一括土器群の年代的検討

【出土土器の分類】

第 62 次調査で出土した土器には土師器・須恵器・須恵系土器・施釉陶器がある。このうち土師器坏・甕、須恵器坏については製作技法や形態など、須恵系土器坏・小型坏・小皿については法量・胎土・色調などを基準として、以下のように分類された(第 100 図)。

[土師器坏]

A 類：ロクロを使用しないもの

B 類：ロクロ調整のもの

B I 類：底部または体下部が回転ヘラケズリされるもの

B II 類：底部または体下部が手持ヘラケズリされるもの

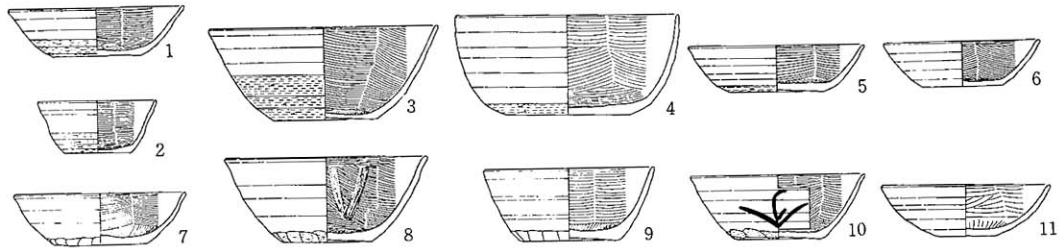
B III 類：底部が回転糸切りで、底部・体下部が再調整されないもの

A 類は小破片のため、器形・調整などの詳細は不明である。B I・II 類のヘラケズリの部位には、①底部全面と体下部、②底部外周と体下部、③底部、④体下部の四者があり、①が主体を占める。また器形には(1)底部が大きく、体部が直線的で口縁部がそのまま外傾してやや浅いもの、(2)深い・形のもの、(3)体部が膨らみながら口縁部が直立する・形のものなどがあり、B I・II 類では(1)が主体を占める。また、内面のヘラミガキは B I 類が底部を横方向→体下部を斜め方向→口縁部を横方向にヘラミガキし、内面を上から見ると底部周縁に沿った体下部が井桁状にヘラミガキされている。B III 類は内面を放射状→体下部を斜め方向→口縁部を横方向にヘラミガキしている。また、B II 類には B I・III 類両者のヘラミガキがある。

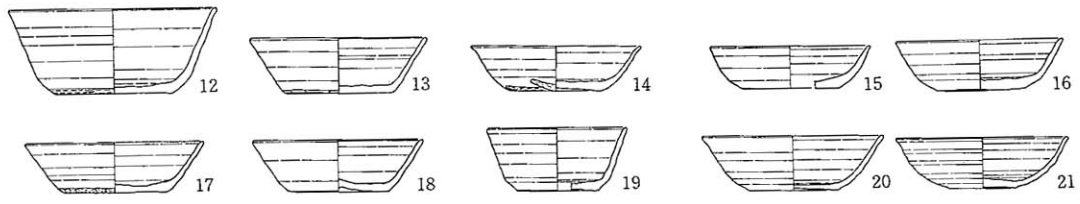
[土師器甕]

A 類：ロクロを使用しないもの

B 類：ロクロ調整のもの



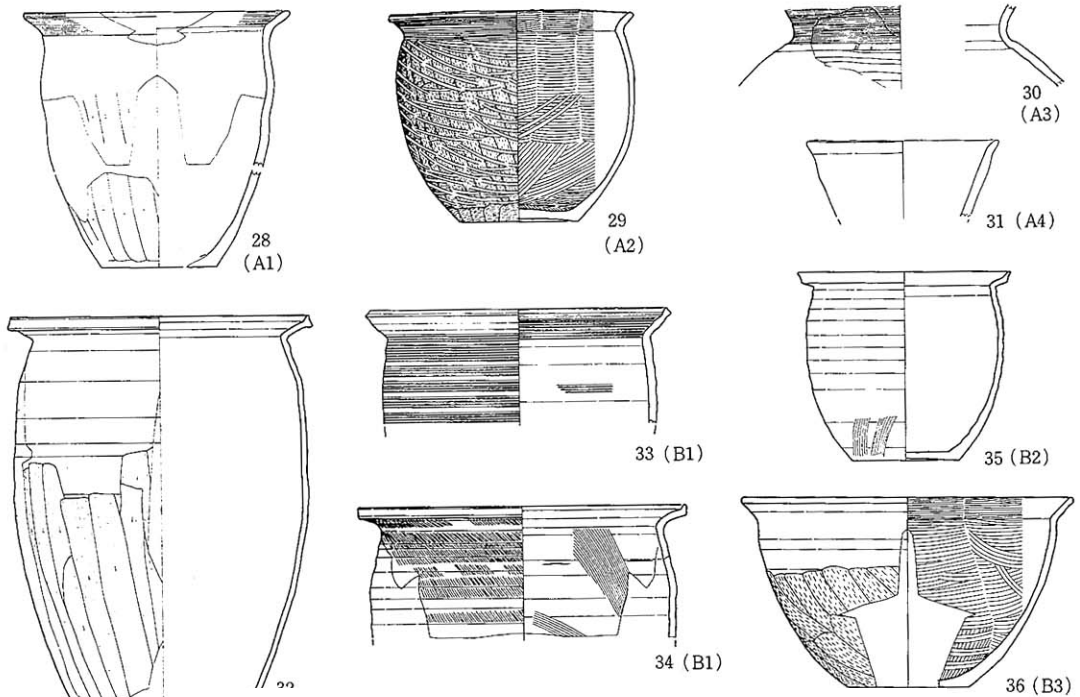
〈土師器杯〉B類：1～6、BⅡ類：7～10、BⅢ類：11



〈須恵器杯〉I類：12、Ⅱ類：13～17、Ⅲ類：18・19、Ⅳ類：20・21



〈須恵系土器杯・小型杯・小皿〉杯a類：22・23、杯b類：24、小型杯a類：25、小型杯b類：26、小皿：27



〈土師器甕〉

第100図 土師器杯・甕、須恵器杯の分類基準図

器形はA類では長胴のもの（A 1類）が主体を占め、他には胴部ほぼ中央が膨らむ寸詰まりのもの（A 2類）、球胴のもの（A 3類）、鉢形のもの（A 4類）がある。B類では長胴で大型のもの（B 1類）、長胴甕を寸詰まりにした器形で、胴部ほぼ中央が膨らむ中型のもの（B 2類）が主体を占め、鉢形のもの（B 3類）も少数ある。このうちA 1類とB 1類、A 2類とB 2類はそれぞれ基本的な器形が共通する。調整手法はA類ではナデ・ヘラケズリが一般的だが、ヘラミガキ・黒色処理するものも少数ある。B類の調整手法はロクロナデ、ヘラケズリが一般的だが、B 1類にはロクロ調整以前の叩き成形痕を残すものや回転刷毛目も少数ある。

〔須恵器坏〕

I類：底部または体下部が回転ヘラケズリされるもの

II類：底部または体下部が手持ヘラケズリされるもの

III類：底部がヘラ切りで、底部・体下部が再調整されないもの

IV類：底部が回転糸切りで、底部・体下部が再調整されないもの

II類のヘラケズリの部位には①底部全面と体下部、②底部外周と体下部、③底部全面、④底部外周、⑤体下部の五者があり、①が主体を占める。量的に少ないI類ではヘラケズリの部位は①のみである。器形には(1)底部が大きく、体部がシ線的で口縁部がそのまま外傾または外反するやや浅いもの、(2)底部が大きく、体部～口縁部が(1)と同様で深い・形のもの、(3)底部が小さく、体部がやや膨らみながら口縁部が直立またはそのまま外傾するやや浅いものなどがある。II・III類では(1)が主体を占め、IV類では(3)が多い。

〔須恵系土器坏・小型坏・小皿〕

口径11～16cm程、器高3cm以上、器高／口径比0.3～0.4程のものを坏、口径10cm前後、器高2～3cm程、器高／口径比0.2～0.25程のものを小型坏、口径9cm前後、器高2cm以下、器高／口径比0.15～0.2程のものを小皿と分類する。そして、これらは色調・胎土・器厚によって、色調が褐色～明褐色、胎土が微細で、口縁部の器厚が2～3mm程と薄いa類、色調が赤みのある褐色で、胎土に粒径0.5～1mmの砂・ガラス鉱物を多量に含み、器厚が口縁部で4mm程、底部で4～8mm程と厚いb類に細分される。坏・小型坏にはa・b類があり、小皿はすべてb類である。

【土器群の設定】

第62次調査ではS I 2153・2160 住居跡、S K 2167 土壌から須恵系土器を含まない一括土器群、S K 2168～2171・2175・2182 土壌などから須恵系土器を含む一括土器群が出土した(表2・3)。

このうちS I 2153 住居跡の埋土第1層からは土師器坏B III類の底部破片が2点、須恵器

土師器坏・須恵器坏は第Ⅰ・Ⅱ群土器とも体部が直線的で口縁部が外傾またはわずかに外反するものが主体を占め、底径が大きい。諛Ⅰ群土器では土師器甕A類が多く含まれ、B類の中には回転刷毛目が施されたり、ロクロ調整以前の叩き成形痕の残るものが目立つ。一方、第Ⅱ群土器では土師器甕A類の有無は不明確だが、あっても少ないと推定される。また、土師器甕B類の中には回転刷毛目が施されるものも少数含まれるが、ロクロ調整以前の叩き成形痕の残るものは含まれない。

一方、須恵系土器を含む一括土器群は、須恵系土器が①坏a類が主体となるSK2168・2175・2182土壙出土土器群、②小皿・坏b類が主体となるSK2169～2171土壙出土土器群に大別される。①を第Ⅲ群土器、②を第Ⅳ群土器と呼ぶことにする。第Ⅲ群土器は須恵系土器高台皿・高台坏を含まないSK2168土壙出土土器群とこれらを含むSK2175・2182土壙出土土器群に細分され、前者を第Ⅲa土器群、後者を第Ⅲb土器群と呼ぶことにする。なお、第Ⅲa土器群には越州窯系青磁碗、第Ⅲb土器群には丹波国篠窯跡群西長尾5号窯の篠鉢に類似する口縁部が肥厚した須恵器鉢（註1）、須恵系土器・、両面ヘラミガキした土師器鉢が共伴する（表3）。

【第Ⅰ群土器の年代的検討】

第Ⅰ群土器は土師器坏BⅠ・Ⅱ類、土師器甕B類、須恵器坏Ⅱ類を含むことから、「多賀城跡C群土器」（宮城県多賀城跡調査研究所，1982）に相当する9世紀前半代の土器群であることが知られる。

「多賀城跡C群土器」の一括土器群でかつ年代をある程度限定できるものに多賀城跡SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群（宮城県多賀城跡調査研究所，1991）がある（第101～103図）。この土器群は土師器坏がBⅠ・Ⅱ類を主体とし、BⅢ類を少数含む。土師器甕はすべてB類で、叩き成形痕・回転刷毛目は認められない。須恵器坏はⅢ類を主体とし、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類を少数含む。伊治城跡SI173住居跡、胆沢城跡SD114溝・SI471住居跡出土土器群と対比から、これらの土器群よりも新しく、上限年代は9世紀前葉に位置付けられている。天長9（832）年以降に作成された漆紙文書の共伴から、下限年代は天長9（832）年以降でもさほど隔たらない9世紀前半代に位置付けられている。

第Ⅰ群土器とSE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群は、①土師器坏がBⅠ・Ⅱ類、須恵器坏がⅢ類を主体とし、土師器甕B類を含む、②土師器坏・須恵器坏とも底部が大きく、体部が直線的であるなど、土師器坏・甕、須恵器坏の製作技法・器形が基本的には共通することから、両者は時間的に近接していると考えられる。

しかし詳細に見ると、第Ⅰ群土器とSE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群には以下の相違点が認められる。

①第 I 群土器では土師器杯 B III類を含まないが、S E 2101 B 井戸跡第 III 層出土土器群ではこれを少数含む。

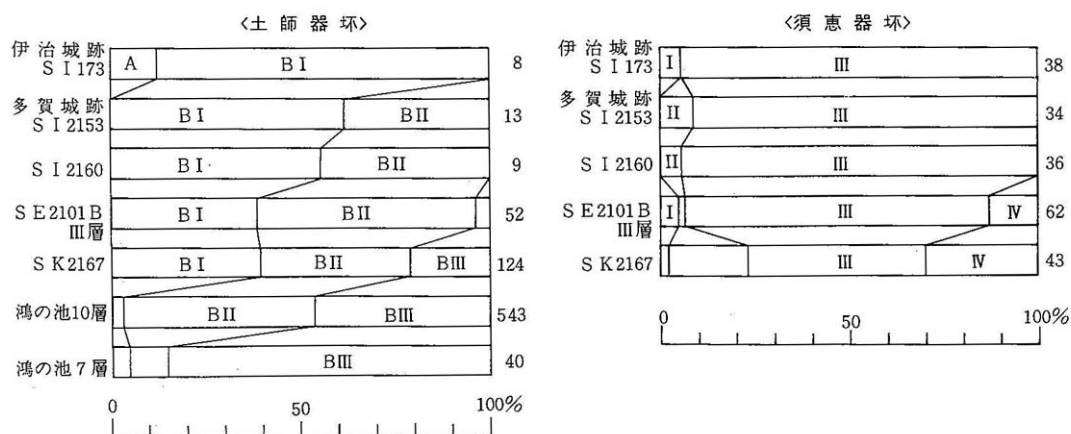
②第 I 群土器では土師器杯内面のヘラミガキは横方向だが、S E 2101 B 井戸跡第 III 層出土土器群では横方向のものを主体とするものの放射状のものを少数含む。

③第 I 群土器では土師器甕が A・B 類からなり、A 類も多く含まれるのに対し、S E 2101 B 井戸跡第 III 層出土土器群ではすべて B 類からなる。

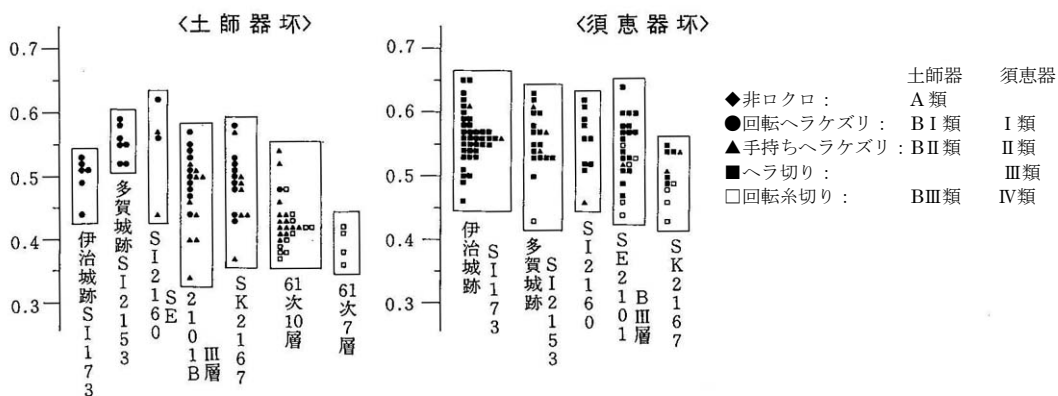
④第 I 群土器では土師器甕 B 類の中に叩き成形痕の認められるものを少数含むのに対し、S E 2101 B 井戸跡第 III 層出土土器群ではこれらは認められない。

⑤第 I 群土器では須恵器杯 IV 類を含まないのに対し、S E 2101 B 井戸跡第 III 層出土土器群ではこれを少数含む。

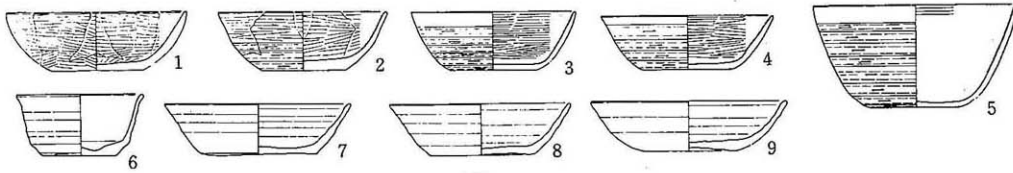
第 I 群土器に認められずに S E 2101 B 井戸跡第 III 層出土土器群に認められるような以上の相違点は、9 世紀後半代の土器群〔多賀城跡第 61 次調査（鴻の池地区）第 10 層出土土器群（宮城県多賀城跡調査研究所，1991）など〕に継承される要素であることから、第 I



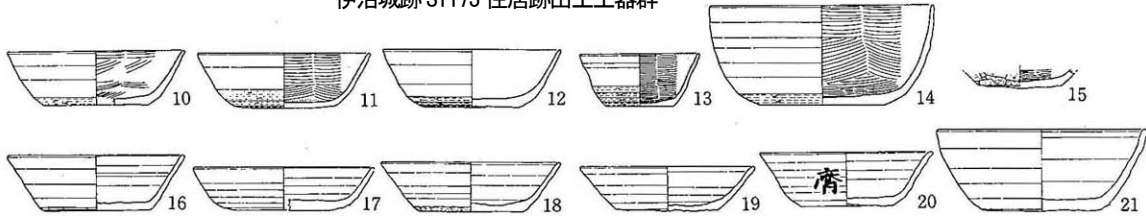
第 101 図 土師器杯・須恵器杯の構成



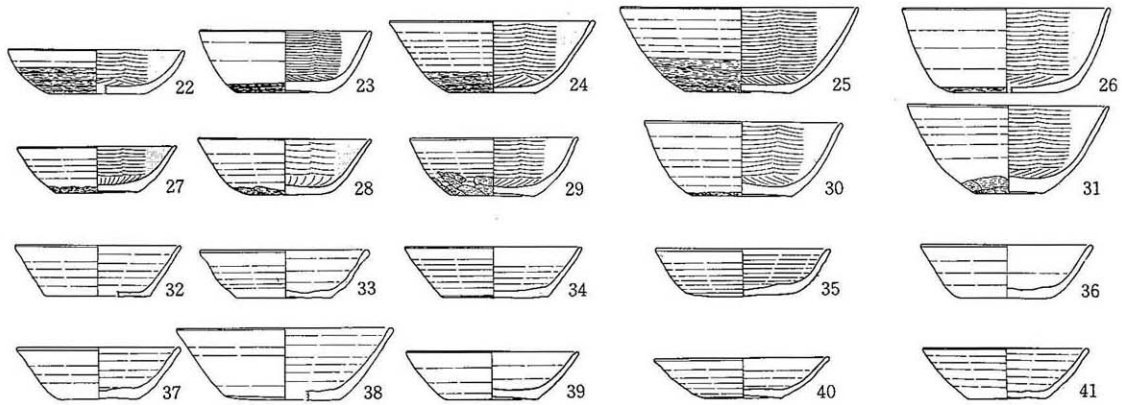
第 102 図 土師器杯・須恵器杯の底径／口径比



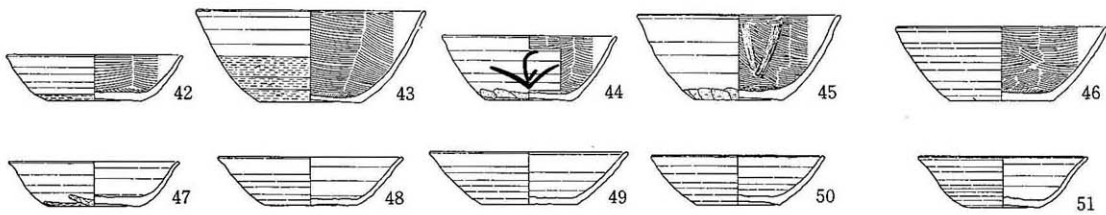
伊治城跡 S1173 住居跡出土土器群



多賀城跡 S12153 住居跡出土土器群(第I群土器)



多賀城跡 SK2167 土壙出土土器群(第II群土器)



多賀城跡 SK2167 土壙出土土器群(第II群土器)

- | | |
|----------------------------|----------------------------------|
| 1 : 土師器杯A類 | 6 : 須恵器杯I類 |
| 2~5、10~14、22~26、42・43 | 16~18、47 : 須恵器杯II類 |
| : 土師器杯B I類 | 7~9、19~21、32~38、48・49 : 須恵器杯III類 |
| 15、27、31、44~46 : 土師器杯B II類 | 40・41・50・51 : 須恵器杯IV類 |

第103図 第I・II群土器とその前後の主な土器群との比較

群土器がS E2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群よりも古いことが窺える。したがって、第Ⅰ群土器を9世紀前半でも古い頃（9世紀前葉頃）のものとすることができる。

なお、第Ⅰ群土器に類似する資料として、多賀城に近接する多賀城市市川橋遺跡第7次調査S K236土壙（多賀城市埋蔵文化財調査センター，1990）、多賀城と密接な関連を持つ築館町伊治城跡S I173住居跡（菊地，1991）、同S I158住居跡（菅原，1990）岩手県水沢市胆沢城跡S D114溝第3b層（水沢市教育委員会，1977）、同S I471住居跡（水沢市教育委員会，1980）出土の土器群などがある。

このうち、胆沢城跡S D114溝第3b層、S I471住居跡出土土器群は胆沢城跡創建期〔延暦21（802）年〕に遡る可能性のあるものとして位置付けられている。S D114溝第3b層出土土器群は土師器坏BⅠ・Ⅱ類、叩き成形痕を残す土師器甕B類、須恵器坏Ⅲ類、須恵器稜・を含むなど、第Ⅰ群土器と類似する（註2）。S I471住居跡出土土器群はロクロを使用しない有段丸底の土師器坏を伴っているが、同一の特徴を持つと考えられるものである（註3）。胆沢城跡創建期の土器群ではロクロを使用しない土師器坏は僅かであり、土師器ではロクロ調整のものが主体を占める。

したがって、第Ⅰ群土器は9世紀初頭以降、9世紀前半でも古い頃（9世紀前葉頃）のものとすることができる。

なお、上述の第Ⅰ群土器に類似する土器群のうち、伊治城跡S I173住居跡・市川橋遺跡S K236土壙出土土器群には長岡京期〔延暦3（784）～延暦13（794）年〕以降と見られる「壺G」（平城宮分類）が共伴しており（註4）、第Ⅰ群土器の上限年代は遡っても8世紀末までと考えられる。

【第Ⅱ群土器の年代的検討】

第Ⅱ群土器は①土師器坏がBⅠ～Ⅲ類、須恵器坏がⅠ～Ⅳ類からなる、②土師器坏BⅢ類、須恵器坏Ⅳ類もやや多い、③土師器坏内面底部のヘラミガキは横方向のものを主体として放射状のものを少数含む、④土師器甕はすべてB類で、A類はあっても少ないと推定される、⑤土師器甕B類に叩き成形痕が認められないなどが第Ⅰ群土器よりも後出的な要素である（第101～103図）。これらの特徴のうち①・③～⑤は前述の多賀城跡S E2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群と共通し、②はそれよりも後出的な要素である。

また、9世紀後半代に位置付けられる多賀城跡第61次調査第10層出土土器群（宮城県多賀城跡調査研究所，1991）と比較すると、この土器群は土師器坏がBⅠ～Ⅲ類から構成される点は第Ⅱ群土器と同様であるが、BⅢ類が多く、底径／口径比もより小さい（第101・102図）、初源形態の須恵系土器坏を含むなど、第Ⅱ群土器よりも新しい様相を示す。

したがって、第Ⅱ群土器は多賀城跡S E2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群と年代的に近い

いが、それよりもやや新しく、多賀城跡第 61 次調査第 10 層出土土器群よりも古く位置付けられ、9 世紀中葉頃と考えられる。

なお、第Ⅱ群土器は土師器坏が BⅠ・Ⅱ類を主体としながらも BⅢ類も多く含むこと、須恵器坏がⅢ・Ⅳ類を主体とすることから、「多賀城跡 C 群土器」（宮城県多賀城跡調査研究所，1982）と「多賀城跡 D 群土器」（同前）の過渡的様相を示している。

【第Ⅲ・Ⅳ群土器の年代的検討】

須恵系土器を含む一括土器群、一括土器群ではないが比較的資料的に良くまとまっていると考えられる土器群が多賀城周辺、多賀城跡で最近多く検出されている。多賀城市山王遺跡第 9 次調査千刈田地区 S X 543 土器溜め出土土器群（多賀城市埋蔵文化財センター，1991）、多賀城跡第 61 次調査鴻の池地区第 10・7 層出土土器群（宮城県多賀城跡調査研究所，1991）などである。また、古くより知られていた一括土器群には多賀城跡政庁跡 S K 78 土壙出土土器群（宮城県多賀城跡調査研究所，1982）、多賀城市高崎遺跡井戸尻地区出土土器群（高野，1991）などがある。第Ⅲ・Ⅳ群土器は須恵系土器を含む一括土器群であることから、これらの土器群と比較・検討する（第 104 図）。

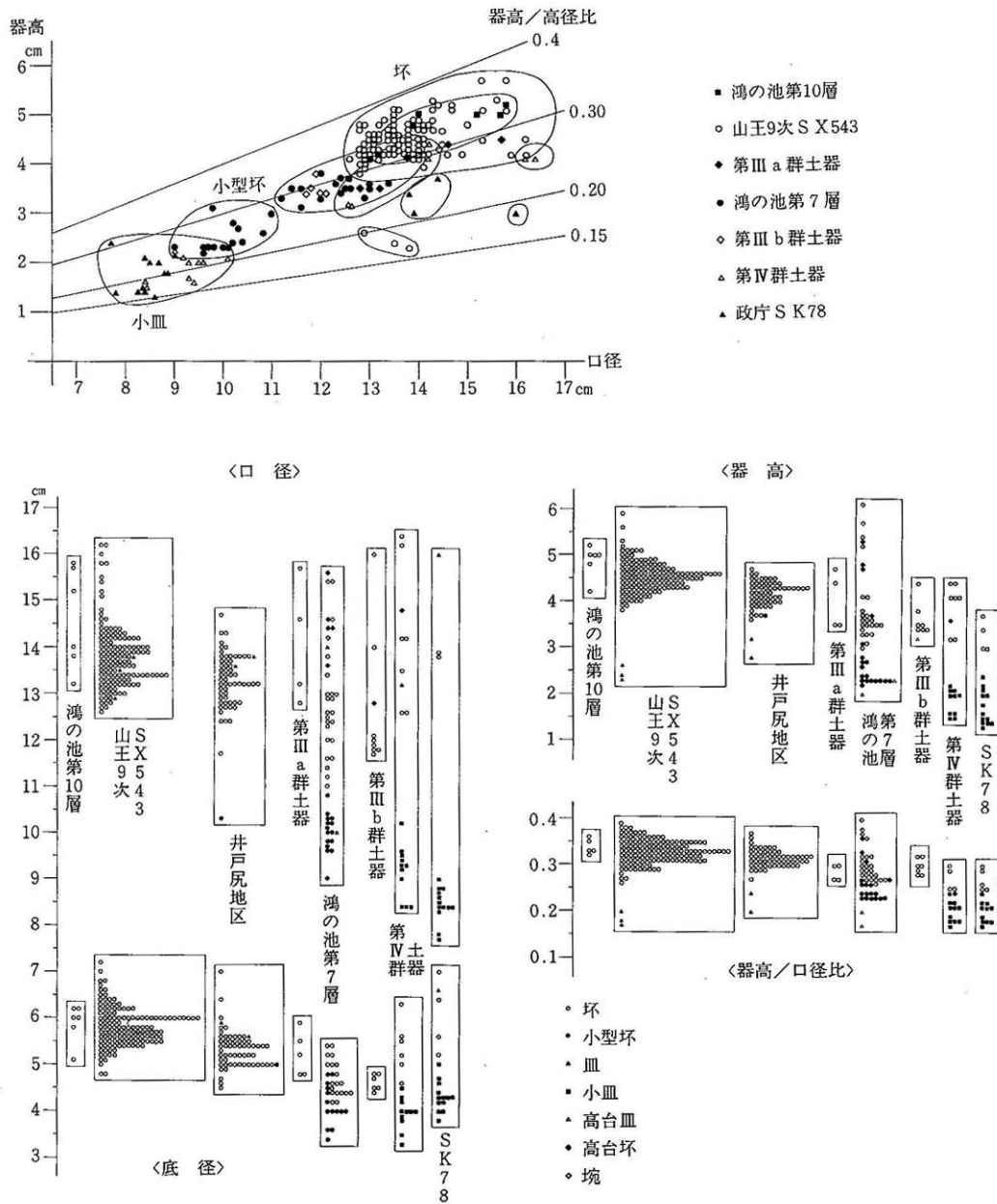
第Ⅲ a 土器群は須恵系土器小型坏・高台皿・・・を含まないことから、「多賀城跡 E 群土器」（宮城県多賀城跡調査研究所，1982）に相当する。土器組成や須恵系土器坏 a 類の器形・法量も山王遺跡第 9 次調査 S X 543 土器溜め・高崎遺跡井戸尻地区出土土器群と類似すること（第 104 図）から、これらと時間的に併行すると考えられる。

山王遺跡第 9 次調査 S X 543 土器溜め・高崎遺跡井戸尻地区出土土器群は、10 世紀前葉頃〔承平 4（934）年閏正月 15 日以前〕に降灰した灰白色火山灰との新旧関係は不明確であるが、土器組成、須恵系土器坏の法量などの様相が多賀城跡第 61 次調査第 10 層出土土器群よりも新しく、多賀城跡第 61 次調査第 7 層出土土器群よりも古いこと、多賀城跡第 61 次調査の第 9 層が灰白色火山灰であることから、灰白色火山灰の降灰前後の 9 世紀前葉頃の土器群と推定される（註 5）。したがって、これらと類似する第Ⅲ a 群土器もこの頃と推定される。

また、第Ⅲ b 土器群は須恵系土器小型坏 a 類を含まないが、須恵系土器高台皿・・・、やや小型の須恵系土器坏 a 類を含む点が多賀城跡第 61 次調査第 7 層出土土器群と同様であることから、これと時間的に併行すると考えられ、「多賀城跡 F 群土器」（宮城県多賀城跡調査研究所，1982）に相当する。多賀城跡第 61 次調査第 7 層出土土器群は灰白色火山灰（同調査第 9 層）よりも層位的に新しく、間に一枚別の堆積層があり、灰白色火山灰降灰直後にも須恵系土器小型坏を含まない土器群もあることから、灰白色火山灰の降灰した 10 世紀前葉よりもやや遅れ、10 世紀中頃以降に位置付けられている。

ところで、この 10 世紀中頃以降という年代は政庁最終末年代に近く、政庁の遺構期との

比較・検討が次に問題となる。政庁最終末年代については、政庁第IV期第3小期c小々期の建物が灰白色火山灰に覆われ、次のd・e小々期とも掘立式建物で、e小々期の建物が柱を抜かれずに自然に廃絶した可能性が高いことから、掘立式建物の耐用年数を考慮して最終末期であるe小々期は遅くとも10世紀後半には廃絶していたと考えられている(同前, 1982)。



第104図 須恵系土器杯・小型杯・小皿の法量

政庁第Ⅳ期第3小期c小々期が灰白色火山灰の上限年代である承平4(934)年まで続いていたと仮定すると、政庁第Ⅳ期第1小期の始まりである貞観11(869)年以降の65年間で、第3小期c小々期までの間に第1小期、第2小期、第3小期a小々期、b小々期、c小々期の5時期が存在することになる。平均すれば1小期(小々期)15年間となり、この推定を援用すればd小々期の終わりが950年頃、e小々期の終わりが965年頃となる。これはあくまでも試算であるが、掘立式建物跡の耐用年数がおおよそ20年間と一般に見られていることと考え併せれば、政庁終末期の年代を考える上で一つの目安となろう。

e小々期のSB187D西南門前殿柱穴出土の土器を改めて検討したところ、第Ⅲb群土器に相当する須恵系土器小型坏a類・高台坏などが含まれ、第Ⅳ群土器に相当する須恵系土器小皿は含まれていなかった。したがって、e小々期以前のd小々期には第Ⅲb群土器が使われていたと推定される。多賀城跡第61次調査第7層出土土器群が灰白色火山灰の降灰した10世紀前葉よりもやや遅れると見られること、e小々期の終末頃には第Ⅳ群土器が使われていた可能性が高いことから、第Ⅲb群土器は10世紀中葉頃と推定される。

また、第Ⅳ群土器は須恵系土器小皿を含み、「多賀城跡F群土器」(宮城県多賀城跡調査研究所, 1982)に相当する。この小皿は多賀城跡第61次調査第7層出土土器群に含まれる須恵系土器小型坏a類よりも法量が小さく(第104図)、器形・胎土・色調も異なる。同様の小皿が多賀城跡第61次調査第5・4層から出土していることから、第Ⅳ群土器は同調査第7層出土土器群よりも時間的に新しいことがわかる。また、政庁跡SK78土壇出土土器群は須恵系土器小皿を主体とし、須恵系土器坏b類を含むことから、第Ⅳ群土器と共通し、これと時間的に併行すると考えられる。政庁跡出土土器群の中では最も時期的に新しい特徴を持ち、政庁最終末期であるe小々期ないしそれ以降に用いられたと見られる。したがって、第Ⅳ群土器は10世紀中葉以降と考えられる。

(2) 掘立式建物跡の変遷と年代的位置付け

検出した掘立式建物跡は13棟である。このうち桁行・梁行とも規模不明なSB2149を除けば、残り12棟の建物は方向、規模(桁行・梁行規模、柱間寸法、柱穴の大きさ、柱痕跡の太さ)にばらつきが認められる。発掘南北基準線に対する方向を第一の基準にすると、以下のように分類される。

A群：北で西に5～14度程大きく偏する建物……SB2137・2139・2147

B群：北で東にわずか2度程偏する建物跡……SB2138

C群：北で西にわずか1～2度程偏するかほぼ一致する建物……SB2140～2146・2148
また建物の規模で見ると、以下のように分けられる。

①桁行5間、梁行3間で、身舎柱穴が一辺1.2～1.3m前後と大きい廂付きの建物・・・S B 2137 (A群)、S B 2144 (C群)

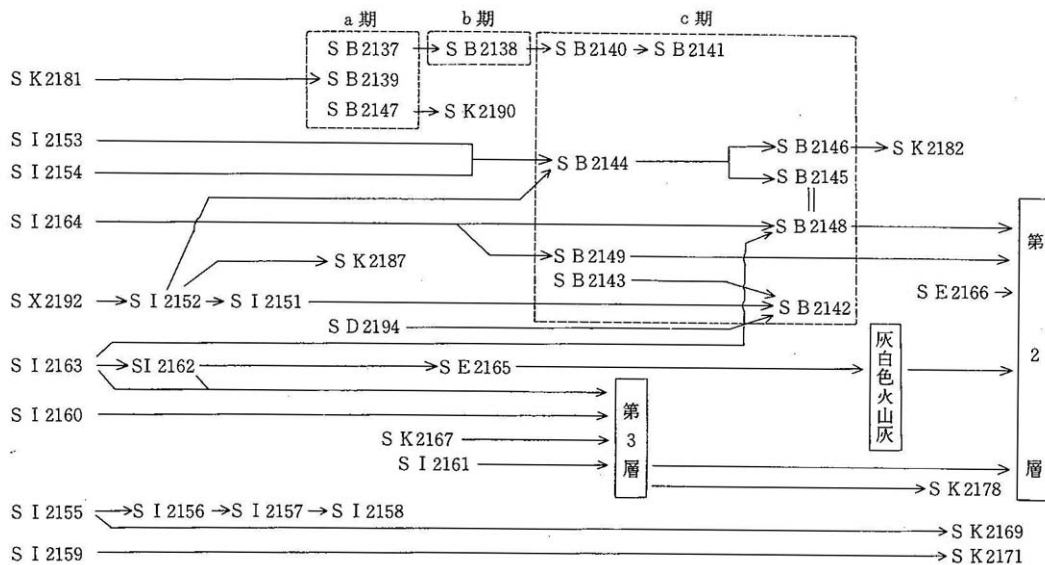
②桁行4～5間、梁行2間で、柱穴が0.6～0.8m前後、柱痕跡が径20～24cm程の中規模な建物・・・S B 2138 (B群)・S B 2141～2143 (C群) ; [S B 2139 (A群)]

③桁行2～3間、梁行2間で、柱穴が一辺0.6～0.8m前後、柱痕跡が径18cm程の小規模な建物・・・S B 2147 (A群)・S B 2140・2145・2146 (C群)

これらの建物跡は調査区西部～中央に多く分布し、東部では希薄である。重複状況(第105図)の検討から、以下の建物相互の新旧関係が明らかである。なお、S I 2150との新旧関係は不明だが、他の竪穴住居跡と重複する建物跡はいずれも建物の方が新しい。

[西部] S B 2137 (A群) → S B 2138 (B群) → S B 2140 (C群) → S B 2141 (C群)、S B 2139 (A群) → S B 2140 (C群) → S B 2141 (C群)

[中央] S B 2143 (C群) → S B 2142 (C群)、S B 2144 (C群) → S B 2145 (C群)、S B 2144 (C群) → S B 2146 (C群)



第105図 主要遺構の重複関係図

この新旧関係から明らかなように、重複する建物では桁行方向が発掘基準線に対して振れる建物 (A群) →わずかに振れるかほぼ一致する建物 (B群→C群) という変遷が窺える。また、S B 2145の南妻とS B 2148の北妻は柱筋がほぼ一致し、方向も同じことから、S B 2145・2148は計画的に配置された同時期の建物と考えられる。

したがって、重複関係・方向から見ると、建物については少なくとも以下の3時期が設定可能である。

a 期：建物の方向が北で西に 5～14 度ほど振れる。

規模の大きな西廂付き南北棟 S B 2137 と、中規模の S B 2139 と小規模の S B 2147 からなる。

b 期：建物の方向が東にわずか振れる。

中規模の S B 2138 1 棟のみからなる。

c 期：建物の方向が西にわずか振れるかほぼ一致する。

規模の大きな南廂付き東西棟 S B 2144、中規模の S B 2141～2143、小規模の S B 2140・2145・2146、中・小規模の S B 2148 からなる。

なお、c 期については規模の大きな南廂付き東西棟 S B 2144 から小規模の S B 2145・2146 へと大きく配置を変え、この付近での建物構成が大きく変化していることから、S B 2144 と S B 2145・2146 の 2 群に細分可能である。前者を c-1 群、後者を c-2 群と呼ぶことにする。S B 2148 は S B 2145 とともに計画的に配置されたと考えられることから、c-2 群に含まれる。また、S B 2142・2143 は重複して配置を大きく変えていることから、古い S B 2143 が c-1 群、新しい S B 2142 が c-2 群に含まれると考えられる。S B 2140・2141 は重複して規模が大きくなるもののほぼ同位置であり、同時期の建て替えの可能性もあることから、c-1 群、c-2 群どちらに含まれるかは不明である。

S B 2137 と出土遺物のない S B 2140 を除く建物は、柱穴から土師器甕 B 類を出土している。土師器甕 B 類は陸奥国では 9 世紀代に一般化したと考えられる。したがって、これらの建物はいずれも 9 世紀以降のものと考えられる。

a 期の S B 2137 の柱穴からは土師器高台坏が出土している。土師器高台坏は 9 世紀前葉頃に位置付けられる第 I 群土器と共伴して S I 2153 住居跡より出土している。したがって、S B 2137 は 9 世紀前葉以降と考えられる。また、a 期の S B 2139 は S K 2181 と重複してこれよりも新しい。後述のように S K 2181 は 9 世紀前半頃と考えられることから、S B 2139 は 9 世紀前半以降と考えられる。

c 期 c-1 群の S B 2144 は第 I 群土器が出土した S I 2153 と重複してこれよりも新しいことから、9 世紀前葉よりも古くはならない。柱穴からは土師器坏 III 類、須恵器坏 IV 類など多賀城跡 S E 2101 B 井戸跡第 III 層以降の土器群に含まれる土器などが出土し、柱痕跡・柱抜取穴からは須恵系土器が出土していないことから、9 世紀後半頃と考えられる。

c 期 c-2 群の S B 2142 は柱穴から政庁第 IV 期の平瓦 II C 類が出土したので、上限は貞観 11 (869) 年以降に位置付けられる。また、柱抜取穴より須恵系土器坏・小型坏・皿など第 III b 群土器が出土したので、下限は 10 世紀中頃～後半頃に位置付けられる。

したがって、a 期は 9 世紀前半以降、c 期 c-1 群は 9 世紀後半頃、c 期 c-2 群は 9 世紀

後半～10世紀後半頃と考えられる。b期はa期とc期c-1群との間に位置付けられることから、9世紀中頃と考えられる。

また、S B 2149は柱抜取穴から政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類が出土し、須恵系土器が出土していないので、貞観11(869)年以降の9世紀後半代に柱が抜かれたと考えられる。建物の方向が不明で遺構期の位置付けができなかったが、c期c-1群に含まれる可能性が高い。

なお、大畑地区北東部北半部では建物変遷が「A期」～「G期」の7つの小期に分かれている(多賀城跡調査研究所, 1991)。建物の方向とその年代的な位置付け、柱穴形状から見て対比させると、a期がD期、b期がE期、c期c-1群がE期、c期c-2群がE～F期に相当すると考えられる。

(3) 竪穴住居跡・井戸跡などの年代的な位置付け

【基本層】

第3層は第Ⅰ群土器を出土したS I 2160住居跡、第Ⅱ群土器を出土したS K 2167土壌の上を覆う。出土遺物は土師器がBⅢ類を主体とし、須恵器ではⅣ類が多く、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類を含み、須恵系土器を含まない。したがって、貞観11(869)年以降の9世紀後半代に堆積したと考えられる。

第2層は第Ⅳ群土器を含むことから、10世紀中葉以降と考えられる。

【竪穴住居跡】

竪穴住居跡は15軒検出されている。規模・構造・方向にばらつきと共通性があり、周溝や内部の排水施設に瓦や甕を敷設しないA群(S I 2152～2159・2161)と敷設するB群(S I 2150・2151・2160・2162～2164)とに大別される。A・B群とも平面形は長方形または方形で、A群には長辺3～4mと規模の小さいものから6～7mと大きいものまであり、B群には長辺4～4.6mと中規模のものから5～6mとやや大きいものまでである。

A群は一般的な住居跡だが、B群はあまり例のない住居跡である。B群のうちS I 2160 A・B住居跡は床面から鉄滓が出土し、焼け面を伴い、暗渠・周溝・外延溝を設けて内部の排水を良くして乾燥させるようにしていることから、鉄の小鍛冶を中心とする工房と考えられ、修復・拡張されながらかなり長期間使用されている。他のB群の住居も工房の可能性はある。

これらの住居は調査区の中央～東部に多い。中央には発掘南北基準線に対して西辺が北で西に5度程偏する住居が多く、東部には周溝に丸瓦を用いた住居が多いという傾向性が窺える。また重複状況(第105図)を検討すると、建物と重複する住居はいずれも建物よりも古い。これらの住居跡のうち、多量の土器を出土したS I 2153・2160住居跡について

はすでに検討を加えたので、これら以外の住居跡の年代について次に検討する。

S I 2151・2154・2159 は出土した土師器坏・甕、須恵器坏などの器形・技術的特徴が第 I 群土器と類似することから、9 世紀初頭～前葉頃と考えられる。S I 2152 は S I 2151 と重複してこれよりも古く、方向も同じことから、これに近い頃と考えられる。

S I 2155～2158 は相互に重複し、ここだけで少なくとも 4 時期の重複があることから、ある程度の時間幅が存在したと見られる。しかしいずれも方向が同じで、3 時期目の S I 2157 住居跡からは須恵器坏Ⅲ類が出土していることから、9 世紀前半頃と考えられる。

S I 2161 は出土した土師器坏・甕、須恵器坏の様相が第 II 群土器と類似することから、これと時間的に近接していると考えられる。ただし両者には須恵器坏Ⅳ類が含まれるが、第 II 群土器では底部が大きく、体部が直線的な器形であるのに対し、S I 2161 では底径が小さく、体部が膨らみながら立ち上がる後出的な器形のものを含む。また、9 世紀後半に位置付けられる多賀城跡第 61 次調査鴻の池地区第 10 層出土土器群（宮城県多賀城跡調査研究所，1991）と比べると、S I 2161 では土師器坏に B Ⅲ類が少ない、土師器坏の底径が大きく、体部が直線的である、須恵系土器坏・耳皿・鉢を含まないなど、鴻の池地区第 10 層出土土器群よりも古い要素を持つ（第 101・102 図）。したがって、S I 2161 は 9 世紀後半でも比較的古い頃と考えられる。

S I 2162・2163 は第 3 層に覆われ、土師器甕 B 類が出土していることから、9 世紀前半頃と考えられる。

S I 2164 は第 2 層に覆われ、土師器甕 B 類、底径の大きい須恵器坏Ⅲ類、須恵器稜・などが出土し、これよりも新しい S B 2149 の柱抜取穴から政庁第Ⅳ期の平瓦Ⅱ C 類が出土したことから、9 世紀前葉頃と考えられる。

S I 2150 は政庁第Ⅱ期以降の丸瓦Ⅱ B 類 a タイプを周溝に用いていることから、政庁第Ⅱ期以降に位置付けられる。

【井戸跡】

S E 2165 は第 2 層に覆われ、井戸内の自然堆積層上部（埋土第 2 層）に再堆積した灰白色火山灰があることから、10 世紀前葉よりも古いことが確実である。第 3 層との関係は不明確だが、井戸内の自然堆積層（埋土第 3 層）がこれと類似することから、これよりも古いと考えられる。井戸構築年代は、S I 2162 と重複してこれよりも新しいことから 9 世紀前半以降であり、井戸廃絶時に人為的に埋められた第 6 層から土師器坏 B I～Ⅲ類、須恵器坏Ⅲ類が出土し、第 II 群土器と様相が似ていることから、9 世紀中葉頃には廃絶されたと考えられる。

また、S E 2166 は須恵系土器小皿を含まないものの、須恵系土器坏 b 類を含み、共伴す

る須恵系土器高台坏・大型鉢も須恵系土器坏b類と同様に色調が赤みのある褐色で、胎土に粒径0.5～1mmの砂・ガラス鉱物を多く含む。こうした特徴は第Ⅳ群土器と共通することから、S E 2166の廃絶年代は10世紀中葉以降と考えられる。

【土壙】

土壙は多数検出され、主なものとして第Ⅱ群土器を出土したS K 2167、第Ⅲa群土器を出土したS K 2168、第Ⅲb群土器を出土したS K 2175・2182、第Ⅳ群土器を出土したS K 2169～2171についてはすでに年代的な検討を行った。そこで、ここではそれ以外の主要な土壙のうち、S K 2174・2178・2181・2187・2190について検討する。

S K 2174からは土師器坏BⅠ類、BⅠまたはⅡ類、須恵器坏Ⅲ・Ⅳ類、灰釉陶器段皿などが少数出土した。須恵器坏Ⅳ類、底径の小さい須恵器坏Ⅲ類が含まれることから、第Ⅱb群土器に似ており、年代的には第Ⅱb群土器と同様に上限が9世紀前葉、下限が9世紀第3四半期頃と考えられる。

S K 2178は須恵系土器小皿を含まないものの、須恵系土器坏b類・小型坏b類を含み、共伴する須恵系土器高台皿もこれらと同様に色調が赤みのある褐色で、胎土に粒径0.5～1mmの砂・ガラス鉱物を多く含む。こうした特徴は第Ⅳ群土器と共通することから、10世紀後半以降と考えられる。

S K 2181は糸切りの間隔の広くて底部が大きい須恵器坏Ⅳ類が出土したことから、9世紀前半頃と考えられる。

S K 2187は重複してこれよりも古いS I 2152が9世紀前葉頃と考えられることから、9世紀前葉以降と考えられる。

S K 2190からは土師器坏BⅡ類・甕B類、須恵器坏Ⅲ類、政庁第Ⅲ期の八葉重弁蓮花文軒丸瓦431が出土していることから、9世紀前半頃と考えられる。

【溝】

S D 2194はS B 2142と重複してこれよりも新しい。土師器坏BⅢ類、須恵器坏Ⅱ～Ⅳ類などが出土し、重複して新しいS B 2142が9世紀後半頃と考えられることから、9世紀中頃～後半頃と考えられる。S D 2195は土師器坏BⅢ類を出土していることから、9世紀後半頃と考えられる。この他多数の溝を検出したが、S D 2199・2200など多くの溝は出土遺物や埋土・方向からみて中世以降の新しい溝である。

【その他】

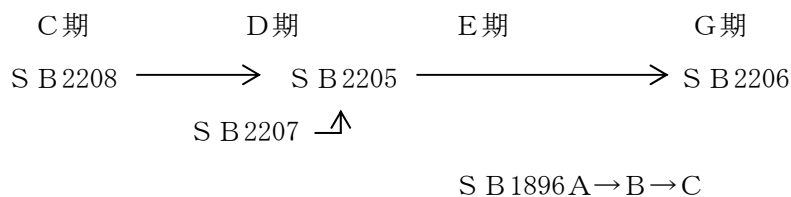
その他の主な遺構にはS X 2192 竪穴状遺構、S X 2198 平瓦列がある。前者は竪穴住居跡である可能性が高く、重複するS I 2152住居跡よりも古いことから、9世紀前葉頃と考えられる。また、後者は政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類bタイプを含むことから、9世紀代と考えられる。

2) 第 63 次調査

(1) 掘立式建物跡の変遷と年代

建物跡は調査区東南部において 7 棟検出された。これらは重複状況から S B 2207→S B 2205→S B 2206 や S B 2208→S B 2205、S B 1896 A→B→C の新旧関係を確認することができる。これらの建物跡の方向は、南北の発掘基準線にほぼ沿うもの (S B 2208) -①、北で西に 7～8 度振れるもの (S B 2205・S B 2207) -②、北で西に 4 度前後振れるもの (S B 1896 A・B・C・S B 2206) -③などがあり、少々ばらつきがみられるが、大きく 3 つのタイプに分かれるようである。出土遺物は少ないが、S B 1896 B の柱穴から回転糸切りの土師器坏、S B 1896 C の柱抜き穴からロクロ調整の土師器や須恵器とともに少量の須恵系土器坏が出土している。

このような新旧関係や建物方向、出土遺物の内容などを踏まえ、現在「B 期」～「G 期」の 7 つの小期に分かれる大畑地区北東部の建物変遷 (多賀城跡調査研究所年報 1991) に対比させ、その位置付けを検討すると以下のようなになる。



【C 期】 -① : S B 2208

S B 2208 は D 期に属する下記の S B 2205 と重複し、それより古い。また建物の方向をみると、北東隅を検出したのみで明確とはいえないが、南北の発掘基準線からの振れはほとんどないと推定されることから、D 期以前にあって傾きが近い「C 期」に属するものと考えておきたい。本期は政庁第 期 期の古い段階にあたる。

【D 期】 -② : S B 2205・S B 2207

S B 2205 は E 期に属する S B 1896 の西側にあり、近接する位置関係から S B 1896 A とは同時に存在しないことが明らかである。南北の発掘基準線に対して 7 度ほど西に振れることから、傾きに共通性をもつ「D 期」に含めることが可能である。またこの建物跡と重複するが、近似した方向を示す S B 2207 についても、大きくはこの時期に属すると考えられる。本期は政庁第 期の新しい段階である。

【E 期】 -③ : S B 1896 A・B・C

出土遺物の特徴がわかる建物跡のうち S B 1896 B については、柱穴から出土した土師器坏が 9 世紀後半代を中心とするとみられることから、その上限は同年代におさまる可能性

が高い。また後続するS B 1896 Cは、柱抜き穴から土師器や須恵器に伴って少量の須恵系土器が出土することから、9世紀末以降に廃棄されたもので、両者ともに機能した時期は、政庁第IV期のなかでも初期の段階である「E期」と推定される。この関係については、建物の方向からみても、南北の発掘基準線に対し、西に若干振れる点で同期のものと共通性があり、矛盾しない。このほか遺物は出土していないが、これらより古いS B 1896 Aについても、S B 1896 B・Cと同一性格の建物であることを考慮すれば、同期に位置付けるのが妥当であろう。

【G期】－③：S B 2206

S B 2206は重複状況からD期のS B 2205より新しく、建物の方向が南北の発掘基準線に対し西にやや振れる建物跡である。したがって方向からE期もしくは政庁第IV期の新しい段階であるG期のいずれかとみられるが、柱穴の形状が円形や不整形のものが多く、埋土が黒味が強い特徴をもち、黄褐色の地山ブロックを含まないことから「G期」に属するものと推定される。

(2) その他の遺構の年代

その他の遺構として竪穴住居跡・井戸跡・土器埋設遺構・土壇・溝がある。以下主なものについて年代の検討を加えることにする。

竪穴住居跡は4軒検出されている。このうちS I 2209・S I 2211・S I 2212は床面から回転ヘラケズリが施された土師器坏やヘラ切りの須恵器坏などが出土しており、9世紀前半代に位置付けられる。またS I 2210はS I 2211と重複し、それより新しいが、ヘラ切りの須恵器坏が出土していることから、9世紀代におさまるものと考えられる。

井戸跡は検出した2基のうちS E 2213では堆積土から土師器や須恵器とともに須恵系土器が出土しており、10世紀以降と推定される。S E 2214は出土遺物がなく、年代は不明である。

S X 2215土器埋設遺構では土師器甕と須恵系土器小型坏、同高台坏が出土している。このうち小型坏や高台坏の特徴が第62次調査Ⅲb群土器(本書p 97-99)に類似していることから、本遺構の年代は10世紀後半代と考えられる。

土壇は6基のうちS K 2216・2219～2221ではロクロ調整の土師器やヘラ切りの須恵器坏が出土し、かつ須恵系土器を伴わないことから、9世紀代を中心とする時期に位置付けておくことにする。その他S K 2217はS I 2209と重複し新しいことから9世紀前半以降、S K 2218は須恵器甕が出土しており古代のものと考えられる。

平安時代の外郭東門から城内側へ延びるS D 706溝は、今回出土遺物はなかったが、第

56・58次調査では土師器や須恵器とともに須恵系土器が出土していることから、下限は10世紀代に降る可能性がある。S D 1910 築地大溝は堆積土上位に灰白色火山灰が認められており、これまでの調査からみても10世紀前半代にはかなり埋まっていたことが明らかである。

5. まとめ

第62・63次調査の成果を整理し、従来の大畑地区東部の調査成果を併せてまとめると以下ようになる。

①第62・63次調査の結果、平安時代の大畑地区官衙の北端と南への伸びが押さえられた。官衙の北端は平安時代のS B 307 外郭東門に「」状に取り付くS F 300 築地から南に約30m離れて始まり、そこからさらに南へ約170m以上伸び、城内最大の官衙であることが明かとなった。

②第62・63次調査で検出した建物跡はいずれも平安時代のものであり、大畑地区では平安時代になってから建物が広範囲に多数分布し、建物の数も飛躍的に増えて何度も建て替えられていることが再確認された。

(注1) 京都府埋蔵文化財センターの松井忠春氏、京都市埋蔵文化財調査研究所の百瀬正恒氏とともに篠窯跡群出土の篠鉢と比較・検討した結果による。

(注2) S D 114 溝は植物遺体層を境として上層を3 a層、下層を3 b層として遺物を取り上げている。3 a層には内面が放射状のヘラミガキで、底径が小さい土師器坏B II類が含まれている。3 b層の土師器坏はB I類を主体にまとまりが見られた。調査者の佐久間賢氏とともに検討した。なお、S D 114 溝第2層は灰白色火山灰で、各層は自然堆積層で時間幅が大きいとの御教示を得た。

(注3) S I 471 住居跡ではロクロを使用しない有段丸底の土師器坏が伴うが、S D 114 溝第3 b層出土土器群と大筋では土器組成が共通すること、「乾漆製品」と報告されたものは漆紙であること(調査者の佐久間賢氏の御教示)から、出土した土器群は胆沢城創建期のもので、延暦21(802)年を遡るものではないと考えられる。なお、ロクロを使用しない有段丸底の土師器坏は、第I群土器に類似する伊治城跡S I 158 住居跡出土土器群にも伴っており、この土器群は伊治城跡S I 173 住居跡出土土器群に併行すると見られる。宮城県北～岩手県南部ではこうした土師器坏が僅かであるが9世紀初頭頃まで存続したと考えられる。

(注4) 市川橋遺跡、伊治城跡S I 173 住居跡出土「壺G」を長岡京跡、左兵衛府跡など平安京跡出土の「壺G」と実物同士で比較・検討した。長岡京出土品との比較・検討は向日市埋蔵文化財センターの山中章氏、長岡京市埋蔵文化財センターの木村泰彦氏、平安京・平安宮跡出土との比較・検討は京都市埋蔵文化財調査研究所の百瀬正恒・中村敦氏とともに行った。市川橋遺跡出土の「壺G」は口作りは薄手であるが、長岡京跡出土の「壺G」のうち秋山分類(秋山, 1986)のA群に形態・法

量が類似する。また、伊治城跡 S I 173 住居跡出土の「壺 G」は平安京左兵衛府跡出土のものと同様に類似すると報告されたが、平安京左兵衛府跡のものがナデ肩で体部がやや太身であるのに対し、S I 173 住居跡のものは肩に僅かながら稜が見られ、体部がより細身であるなど、これとは異なる。また、肩に明瞭な稜を持つものが主体を占める長岡京期のものともやや異なる。山中・木村氏によれば埼玉県台耕地遺跡出土のものに類似するという。両者とも長岡京期〔延暦 3 (784)～延暦 13 (794) 年〕を遡ることはなく、長岡京期かそれよりも僅かに年代が下るものと見られる。

(註 5) 須恵系土器坏を含み、須恵系土器小型坏を含まない「多賀城跡 E 群土器」は、灰白色火山灰の降灰前後の層位より出土するとされていたが(多賀城跡調査研究所, 1982)、層位関係の明かな一括資料に乏しかった。最近、多賀城市山王遺跡多賀前地区など多賀城外の遺跡で灰白色火山灰の降灰前と後の土器溜めなどからこれと同様の良好な一括資料が出土している。

引用文献

- 秋山浩三ほか 1986 「長岡京跡左京第 120 次」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 18 集
- 菊地逸夫 1991 『伊治城跡－平成 2 年度発掘調査概報－』(築館町文化財調査報告書第 4 集)
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』VII pp. 1～38
- 菅原祥夫 1990 『伊治城跡－平成元年度発掘調査概報－』(築館町文化財調査報告書第 3 集)
- 菅原正明偏 1990 『金剛峯寺真然廟』
- 高野芳宏 1991 「高崎遺跡 井戸尻(今村氏)地区の調査」『多賀城市誌 4 考古資料』pp. 471～485
- 多賀城市埋蔵文化財センター 1991 『山王遺跡－第 9 次発掘調査報告書－』(多賀城市文化財調査報告書第 26 集)
- 水沢市教育委員会 1977 『胆沢城跡－昭和 51 年度発掘調査概報－』
- 水沢市教育委員会 1980 『胆沢城跡－昭和 54 年度発掘調査概報－』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡政庁跡本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1990 『宮城県多賀城跡調査研究所年報』

Ⅲ 付 章

1. 関連研究・普及活動

平成4年度は多賀城跡の発掘調査の他に以下の関連研究や普及活動を行った。

(1) 多賀城関連遺跡の発掘調査

当研究所では多賀城に関連する古代遺跡について計画的な調査研究を行っている。本年度は多賀城関連遺跡第4次5カ年計画の4年度に当たり、宮城県加美郡宮崎町鳥嶋字東山から同町鳥屋ヶ崎字八幡裏にかけて所在する東山遺跡を対象に、本遺跡としては最後の調査である第7年次の調査を6月22日から9月10日まで実施した。その結果、8世紀後半から10世紀中頃にかけて機能した郡庁院の規模・建物配置・変遷を明らかにすることができた。これまでの調査から本遺跡は築地で囲ったなかに、郡庁院・正倉院・館・厨・建物群や工房が占める曹司からなる古代賀美郡衙であると推定されるに至った。多賀城以北の城柵が設置される地域で国・城柵・郡という支配形態のなかで郡衙の実態をとらえた意義は大きい。

調査面積は2地点合計、3,300㎡、事業費は12,000千円(50%国庫補助)である。この成果は多賀城関連遺跡調査報告書第18冊「東山遺跡Ⅶ」として刊行する。

(2) 多賀城の環境整備

平成4年度の環境整備事業は第5次5カ年計画の3年度に当たり、総事業費30,000千円(国庫補助50%)で実施した。対象地区は外郭北辺地区と外郭東門地区の奈良時代の築地と平安時代の築地で挟まれた地域である。高じない要は外郭北辺地区では誘導標識・ベンチ・案内板の設置など便益施設設置工であり、外郭東門地区では遺構養生のための盛土工と遠路設置工を行った。工事面積は約11,500㎡であった。そのほか約13,000㎡について、間伐などの修景工事を行った。

(3) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡で検出した建物跡等の諸遺構を保存・展示・活用することを目的として、他遺跡における類例とも比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺跡調査研究事業第3次5カ年計画の5年次の事業として、秋田城跡(秋田市)と下野国府跡(栃木県)に関する発掘データの収集を行なった(県単独事業)。

(4) 発掘調査等のデータベース化事業

多賀城跡の発掘調査・環境整備事業でこれまで蓄積してきた遺構・遺物などの資料(実測

図・写真・文献資料を含む)をパソコンで整理してデータベース化を測ることを目的としたもので、昨年度からの継続事業である(県単独事業)。

(5) 現地説明会の開催

発掘調査の結果を一般に公開するため、下記の現地説明会を開催した。

「多賀城跡第 62・63 次調査について」平成 4 年度 11 月 14 日 説明者 真山悟・柳澤和明

「東山遺跡第 7 次調査について」平成 4 年度 9 月 5 日 説明者 村田晃一・真山悟

(6) 他機関への発掘調査などの協力

木戸脇裏遺跡 国立歴史民俗博物館

一本杉遺跡 宮城県古川市教育委員会主体事業

伊治城跡 宮城県栗原郡築館町教育委員会主体事業

(7) 研究発表・論文など

進藤秋輝 「多賀城出土の漆紙文書」(『水茎』第 14 号)平成 5 年 3 月

丹羽茂 「多賀城跡の外郭区画施設」古代城柵官衙検討会 平成 4 年 10 月

「東北の大城柵ー多賀城跡ー」『教育宮城』1 月号 平成 5 年 1 月

真山悟・柳澤和明 「多賀城跡大畑地区の調査」

宮城県遺跡調査発表会 平成 4 年 12 月

第 19 回古代城柵官衙遺跡検討会 平成 5 年 3 月

村田晃一 「宮崎町東山遺跡第 7 次調査」

宮城県遺跡調査発表会 平成 4 年 12 月

第 19 回古代城柵官衙遺跡検討会 平成 5 年 3 月

(8) 講演など

千葉景一 「特別史跡多賀城について」東北管区警察学校 平成 4 年 6 月

「近世の村のようす」河北地区教育委員会 平成 4 年 7 月

「郷土史をめぐって」栗原郡栗駒町公民館 平成 5 年 3 月

進藤秋輝 「多賀城の発掘成果」東北歴史資料館第 18 回解放講座 平成 4 年 8 月

「角田市郡山遺跡を巡る諸問題」角田市教育委員会 平成 4 年 5 月

「文化財行政における市町村の役割」女川牡鹿雄勝三町合同文化財研究
平成 4 年 5 月

「古代の城柵ー桃生城ー」河北地区教育委員会 平成 4 年 6 月

「多賀城とその周辺の町並みについて」宮城県教育庁文化財保護課
平成 4 年 7 月

「宮城の文化と風土」宮城いきいき財団 平成 4 年 10 月

「特別史跡多賀城について」宮城県教育研修センター 平成 4 年 10 月

	「隠された『多賀城』の謎」多賀城市教育委員会	平成4年10月
	「多賀城と大崎地方の官衙」宮崎町文化財保護委員会	平成4年11月
	「陸奥国の成立と展開」仙台印刷団地連合組合	平成4年11月
	「多賀城と岩切城」仙台市岩切市民センター	平成4年11月
丹羽 茂	「多賀城関連遺跡の調査」東北歴史資料館第18回開放講座	平成4年8月
	「多賀城跡発掘における考古学の考え方」ソニー仙台テクノロジーセンター	平成4年12月
真山 悟	「多賀城をめぐる生産」東北歴史資料館第18回開放講座	平成4年8月
村田晃一	「宮崎町東山遺跡の調査」宮崎町文化財保護委員会	平成4年11月

(9) その他

千葉景一	史跡志波城跡保存整備委員・郡山遺跡発掘調査指導委員・多賀城市文化財保護委員・わくや万葉里づくり整備委員
進藤秋輝	秋田城環境整備指導委員・払田柵跡環境整備指導委員・名生館官衙遺跡発掘調査指導委員・根岸遺跡調査指導委員・大戸窯跡群調査指導委員・関和久上町発掘調査指導委員・わくや万葉里づくり整備委員・石巻市史執筆委員・胆沢城跡保存計画策定委員
丹羽 茂	名生館官衙遺跡発掘調査指導委員

2. 研究成果刊行物

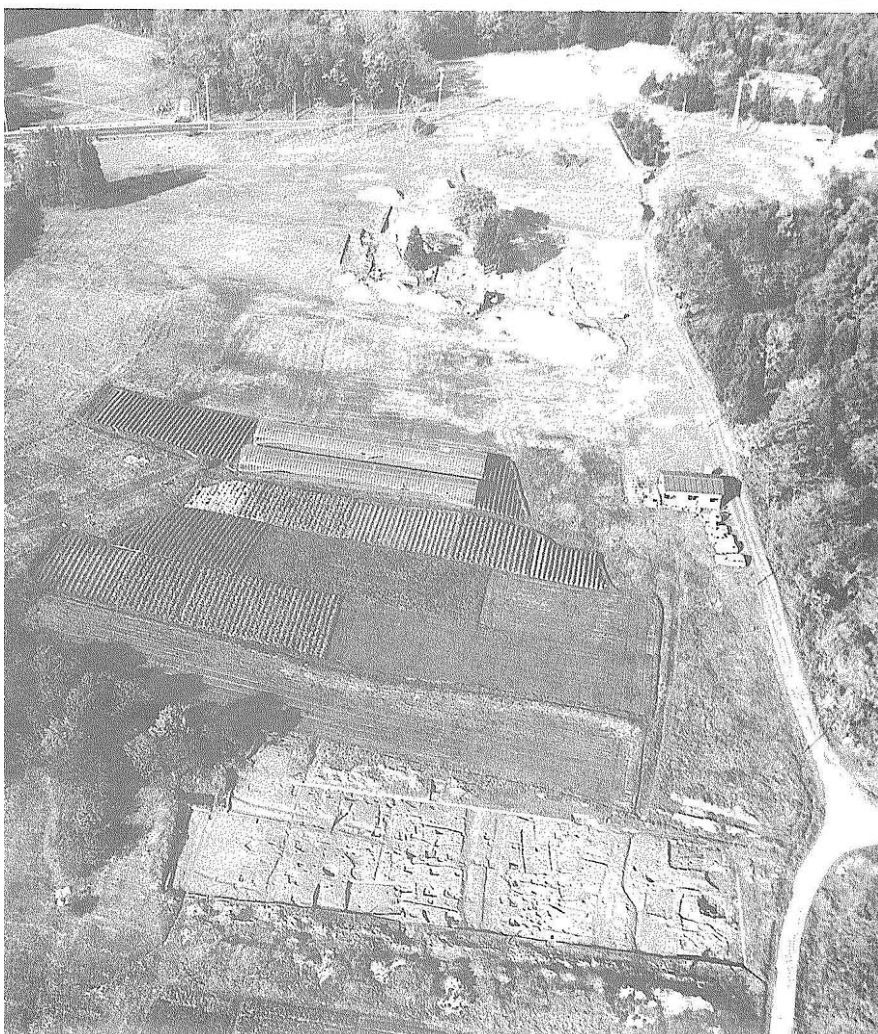
- (1) 『多賀城跡』 宮城県多賀城跡跡調査研究所年報・1992 1993. 3
- (2) 『東山遺跡』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第8冊 1993. 3

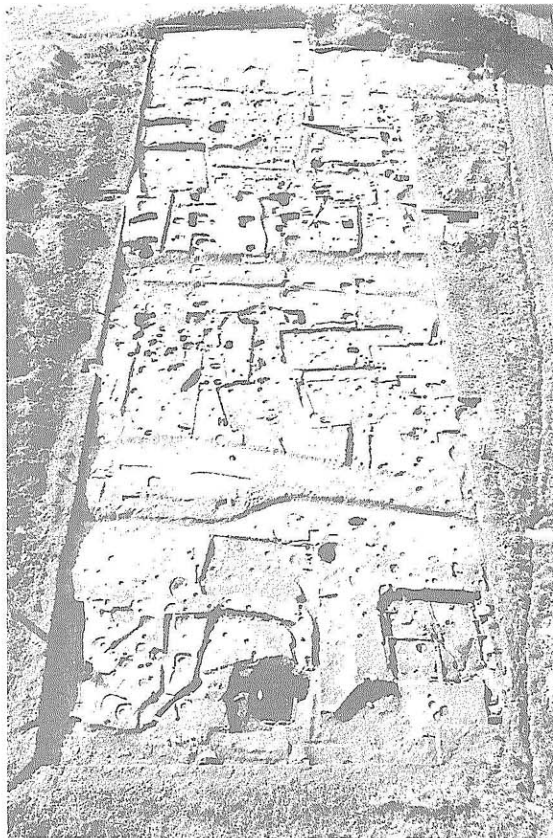
図版 1

上：外郭東門・大畑地区
遠景(北上空から)
手前：第 63 次調査区
奥：第 62 次調査区
作貫・政庁地区



下：第 62・63 次調査区
遠景(南上空から)
手前：第 62 次調査区
奥：第 63 次調査区





図版2 第62次調査区全景

上左：西から

上右：東から

下：北から



図版3 第62次調査の検出遺構

上左：調査区西半部(東から)

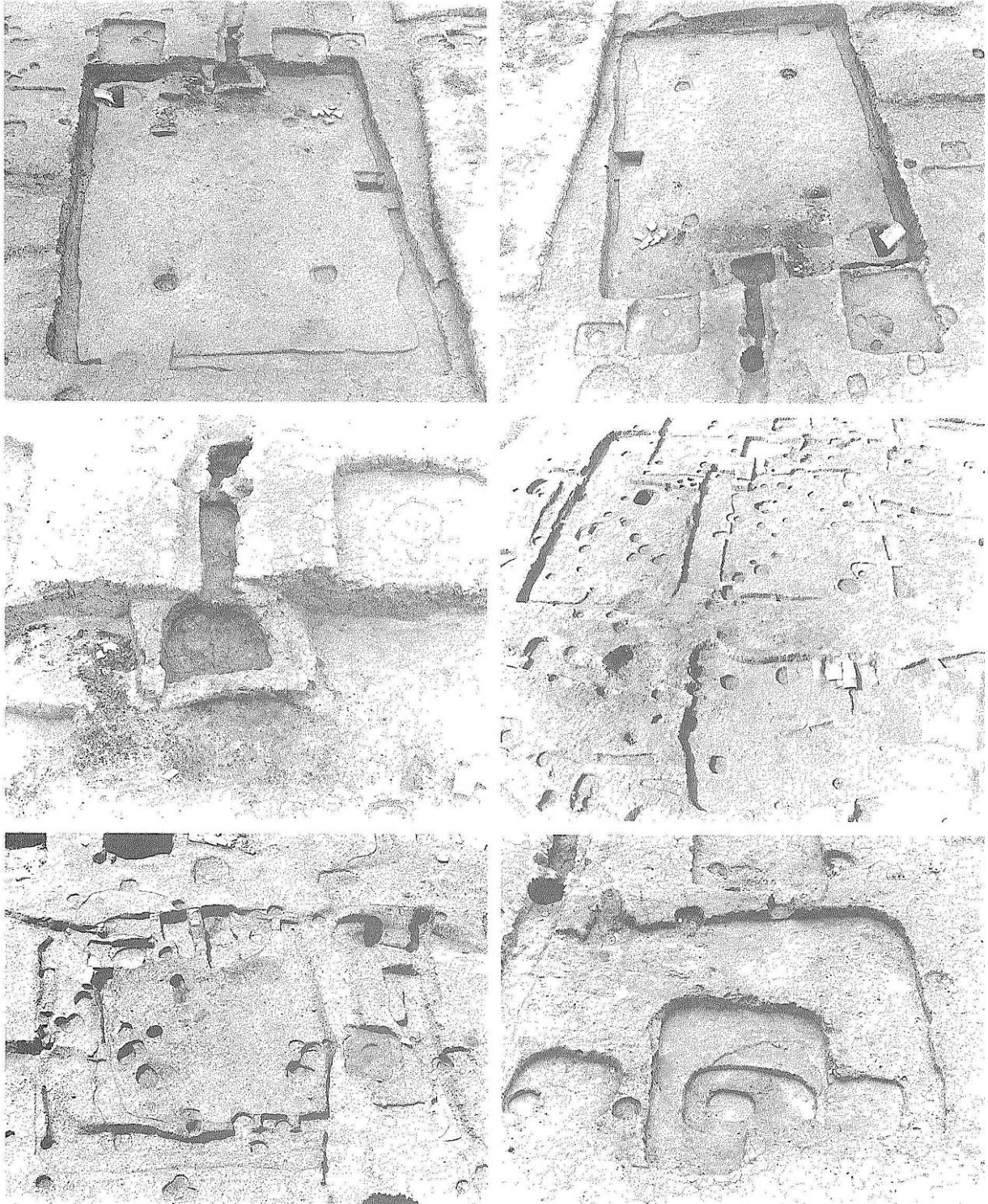
上右：調査区東半部(西から)

中左：調査区中央部(西から)

中右：調査区中央部(北から)

下左：調査区中央部(北から)

下右：調査区東端部(北から)



図版4 第62次調査検出の竪穴住居跡(1)

上左：SI2153 竪穴住居跡(西から)

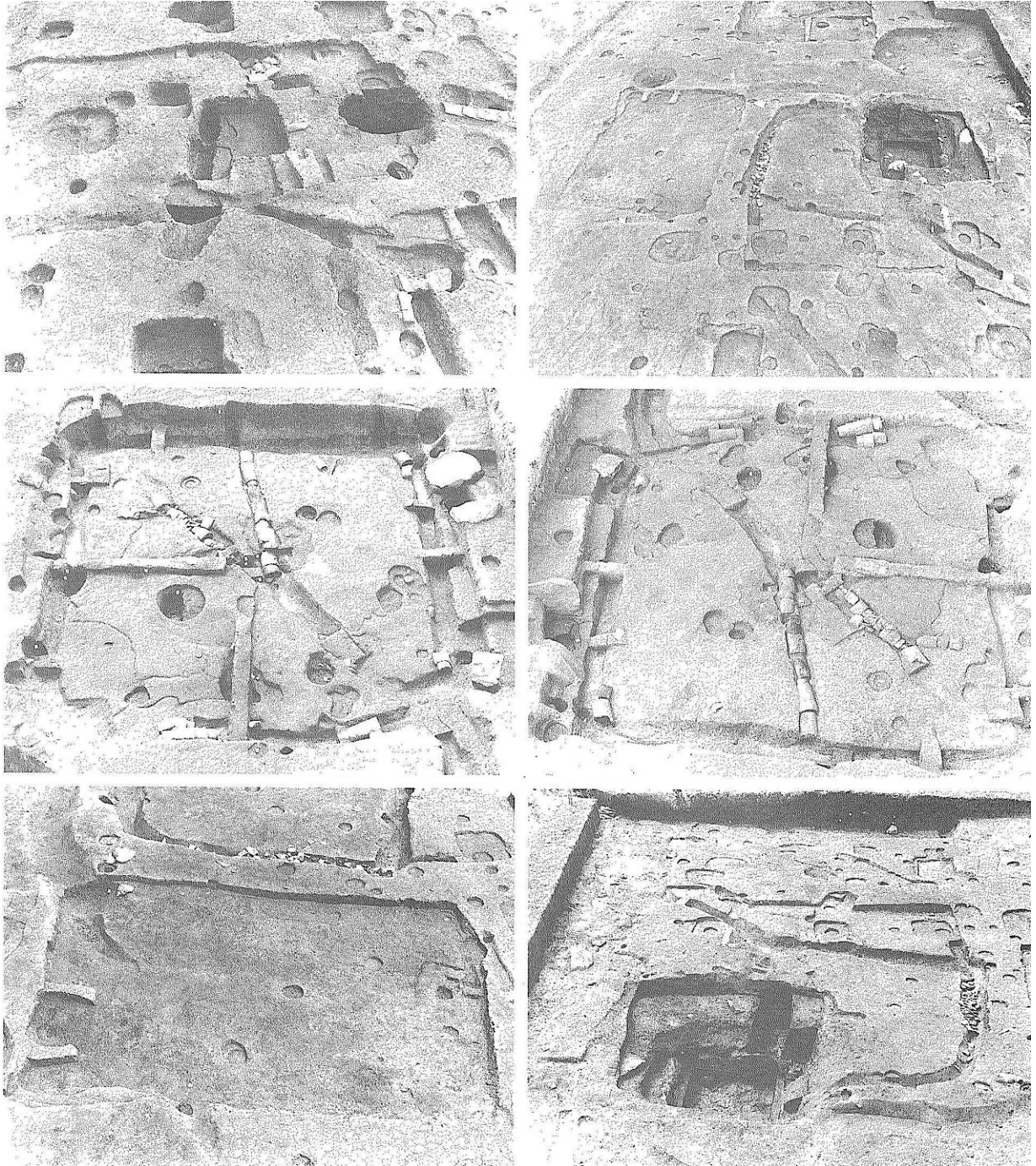
上右：SI2153 竪穴住居跡(北から)

中左：SI2153 竪穴住居跡カマド(西から)

中右：SI2155~2159 竪穴住居跡(南から)

下左：SI2151A・B 竪穴住居跡(北から)

下右：SI2154 竪穴住居跡(東から)



図版5 第62次調査検出の竪穴住居跡(2)

上左：SI2152 竪穴住居跡、SX2192・2198(北から)

上右：SI2160~2163 竪穴住居跡、SE2165・2166 井戸跡(南から)

中左：SI2160 竪穴住居跡(東から)

中右：SI2160 竪穴住居跡(西から)

下左：SI2160 竪穴住居跡(西から)

下右：SI2162~2164 竪穴住居跡、SE2165 井戸跡(北から)



図版 6 第 62 次調査検出の井戸跡など

上左：SE2165 井戸跡全景(西から)

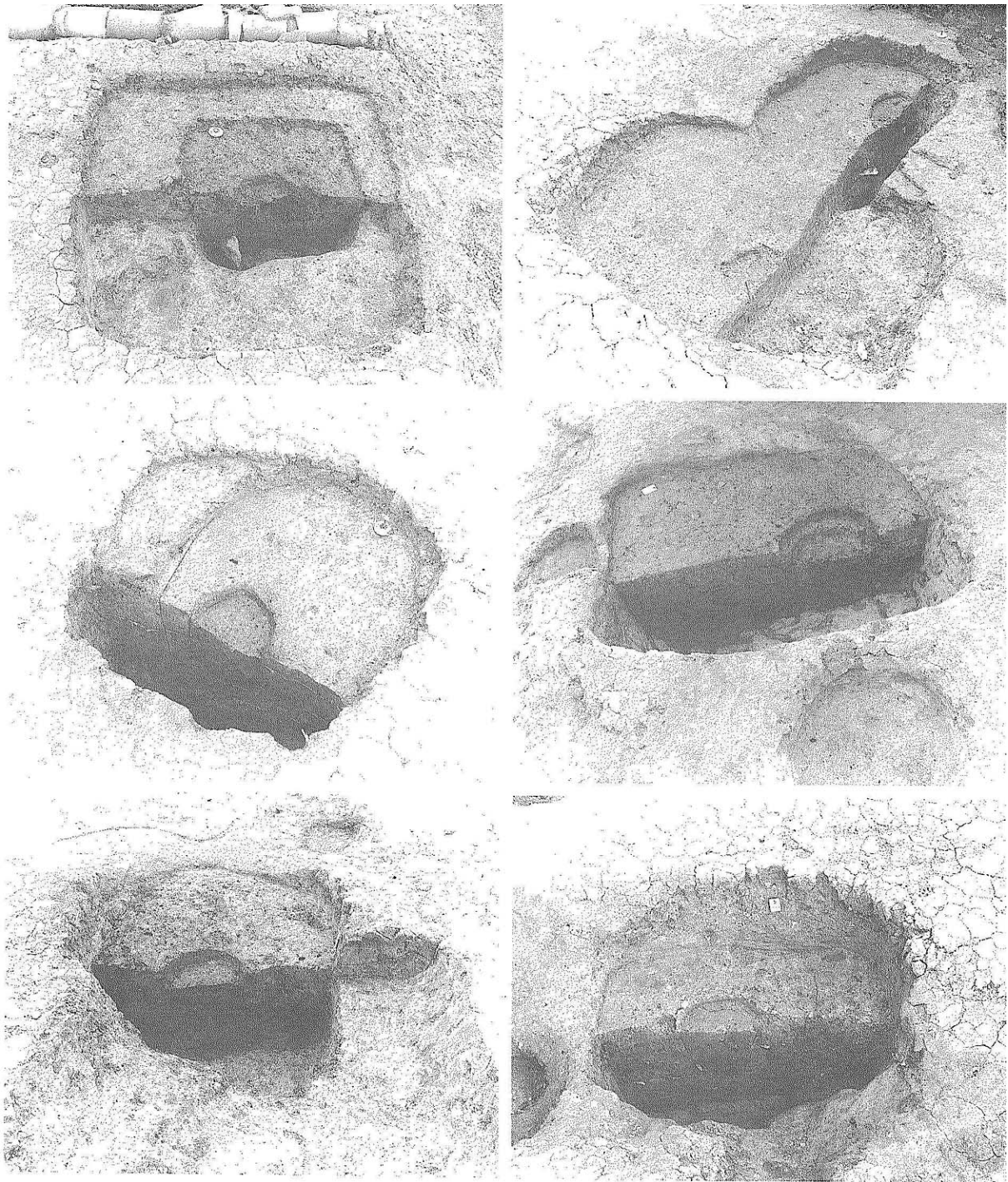
上右：SE2165 井戸跡全景(北西から)

中左：SE2165 井戸跡埋土の堆積状況(北西から)

中右：SE2165 井戸跡の井戸枠東半部と裏込め(西から)

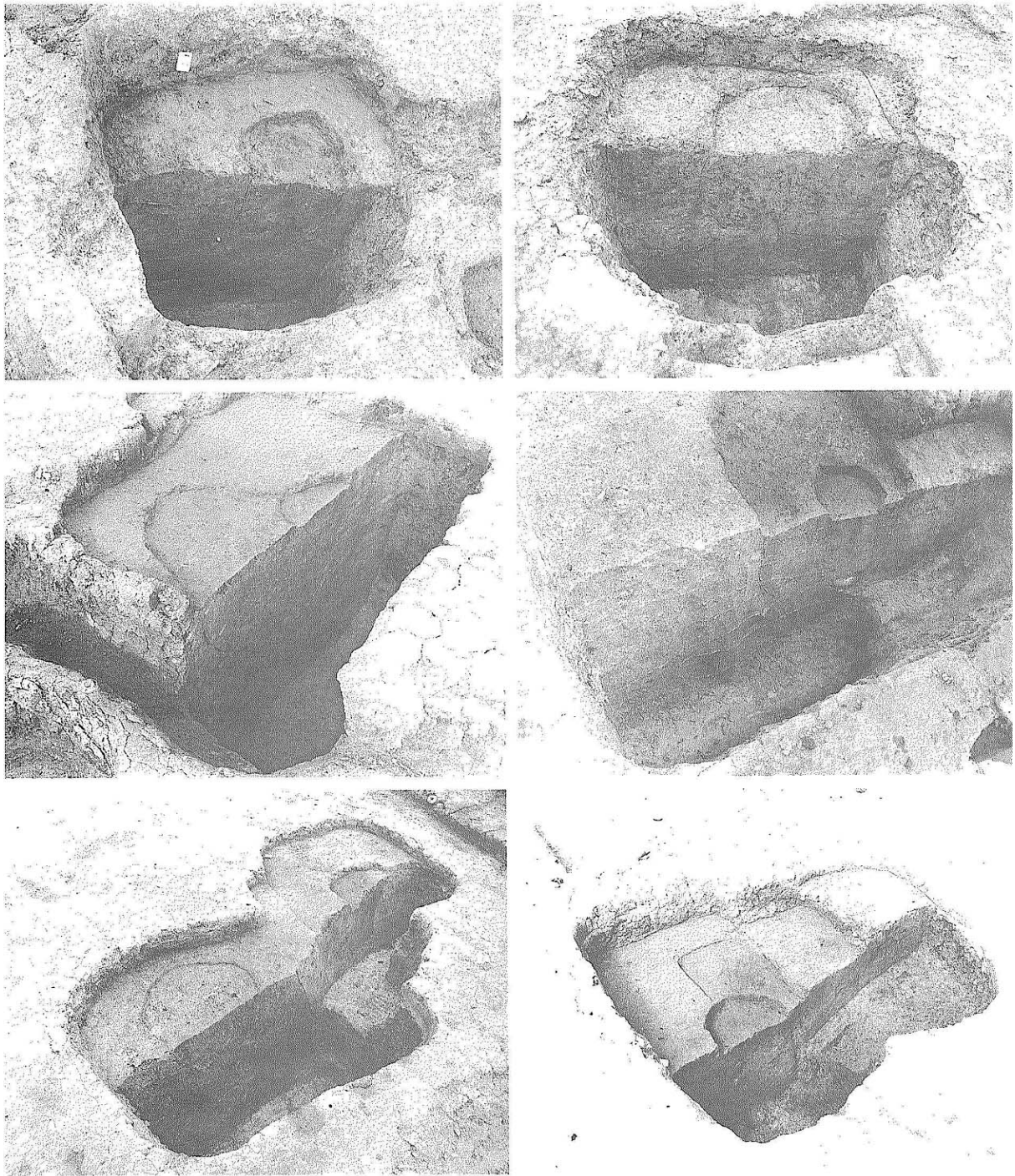
下左：SE2165 井戸跡の井戸枠の組方(北西部)

下右：SX2198 平瓦列(北から)



図版7 第62次調査検出の掘立式建物跡柱穴断面(1)

- 上左：SB2138 東側柱列南妻より1間目とSB2140 西妻棟通り下の柱穴断面
- 上右：SB2138 南東隅柱穴とSB2141 南側柱列東妻より3間目柱穴の断面
- 中左：SB2141 東妻棟通り下柱穴断面
- 中右：SB2142 北西隅柱穴断面
- 下左：SB2142 南東隅柱穴とそれより古いSD2194 溝の断面
- 下右：SB2143 西妻より2間目柱穴断面



図版 8 第 62 次調査検出の堀立式建物跡柱穴断面 (2)

上左：SB2143 南側柱列西妻より 1 間目柱穴断面

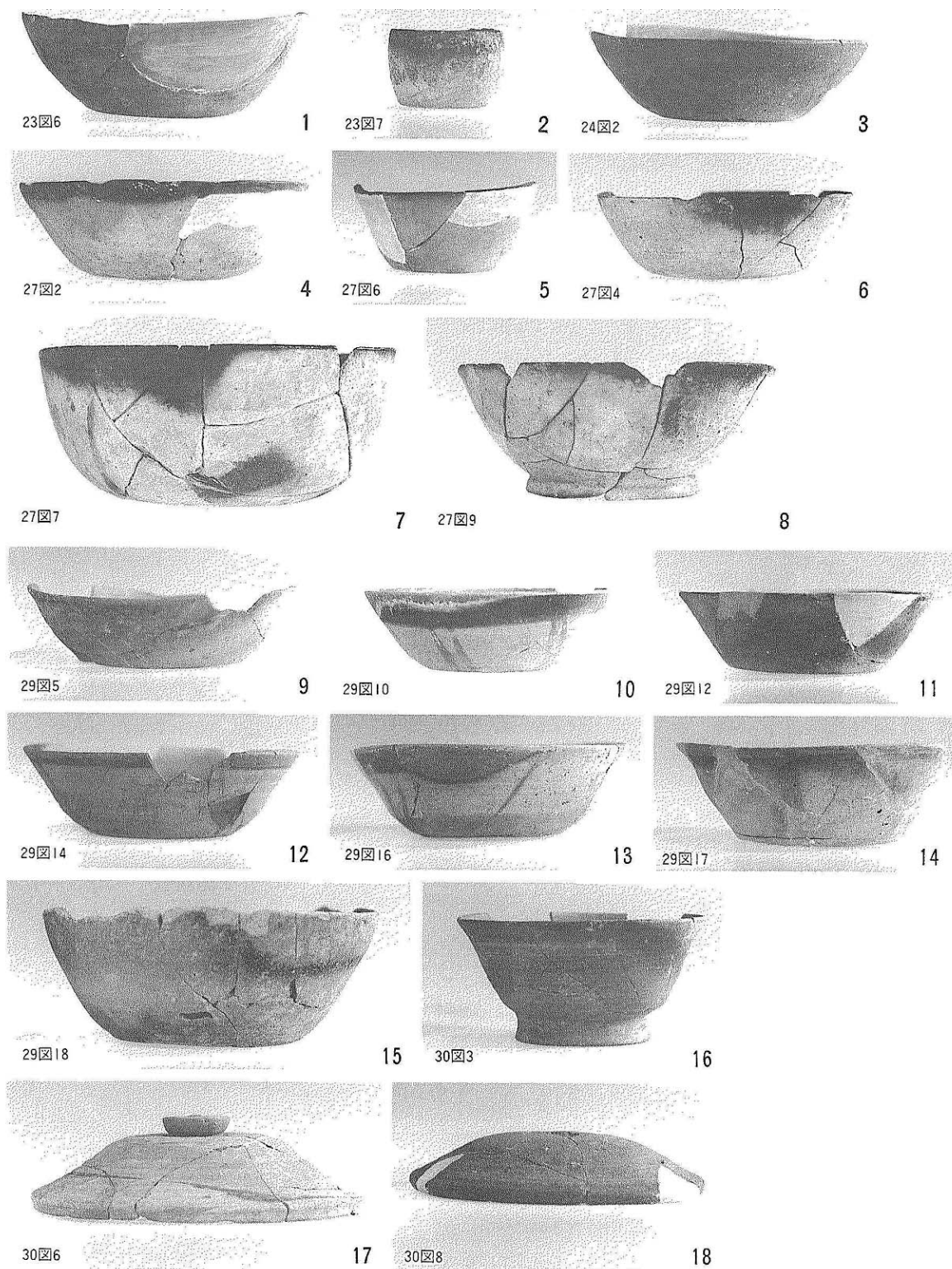
上右：SB2144 北西隅柱穴断面

中左：SB2144 身舎南西隅柱穴断面

中右：SB2144 身舎南側柱列西妻より 1 間目柱穴と SB2145 南西隅柱穴の断面

下左：SB2144 南廊西妻より 1 間目と SB2146 北側柱列西妻より 1 間目の柱穴断面

下右：SB2145 南側柱列南妻より 1 間目柱穴断面



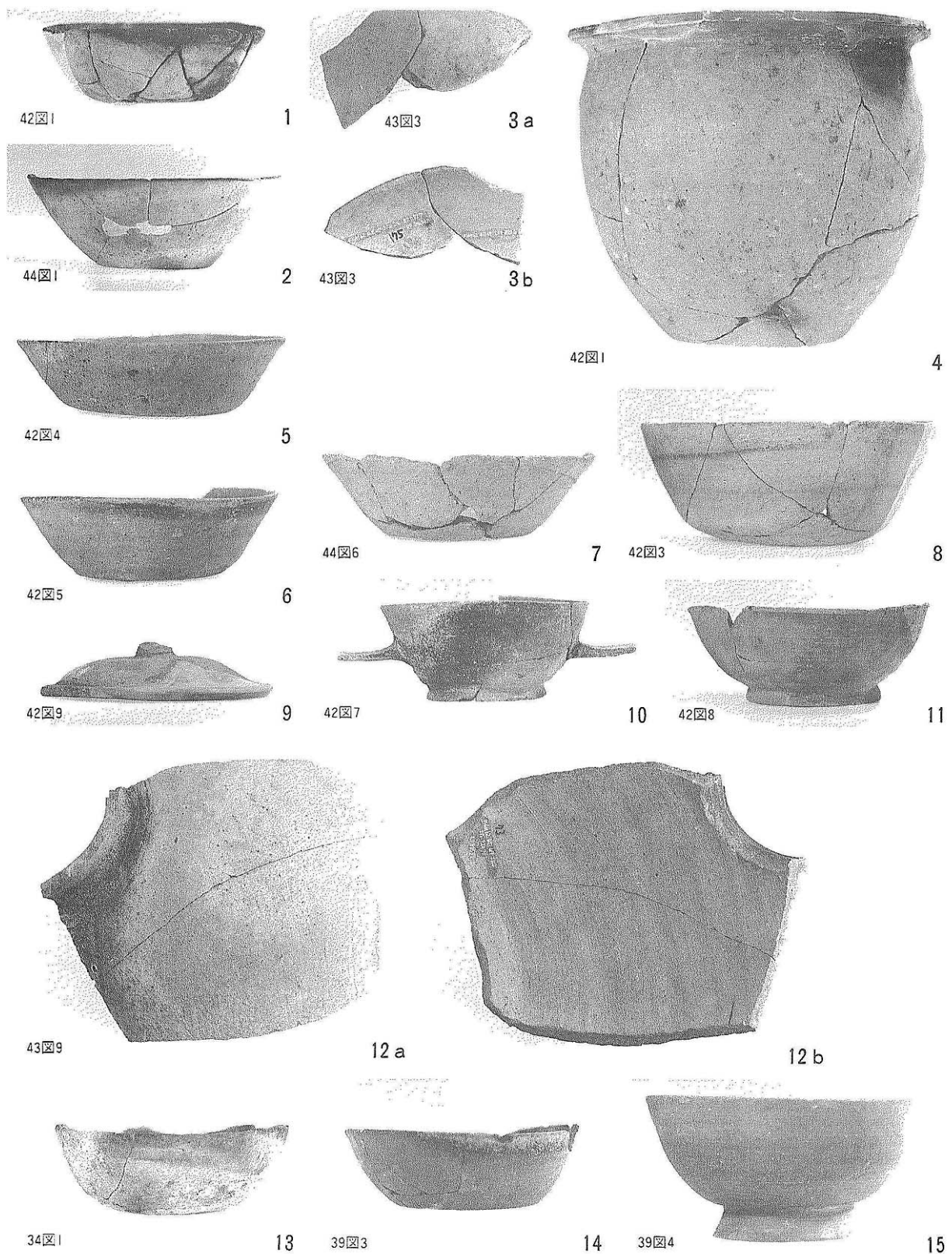
図版9 第62次調査出土の土器(1)

1~3 : SI2151 竪穴住居跡、4~8 : SI2153 竪穴住居跡

1・2・4~7 : 土師器杯、8 : 土師器高台杯

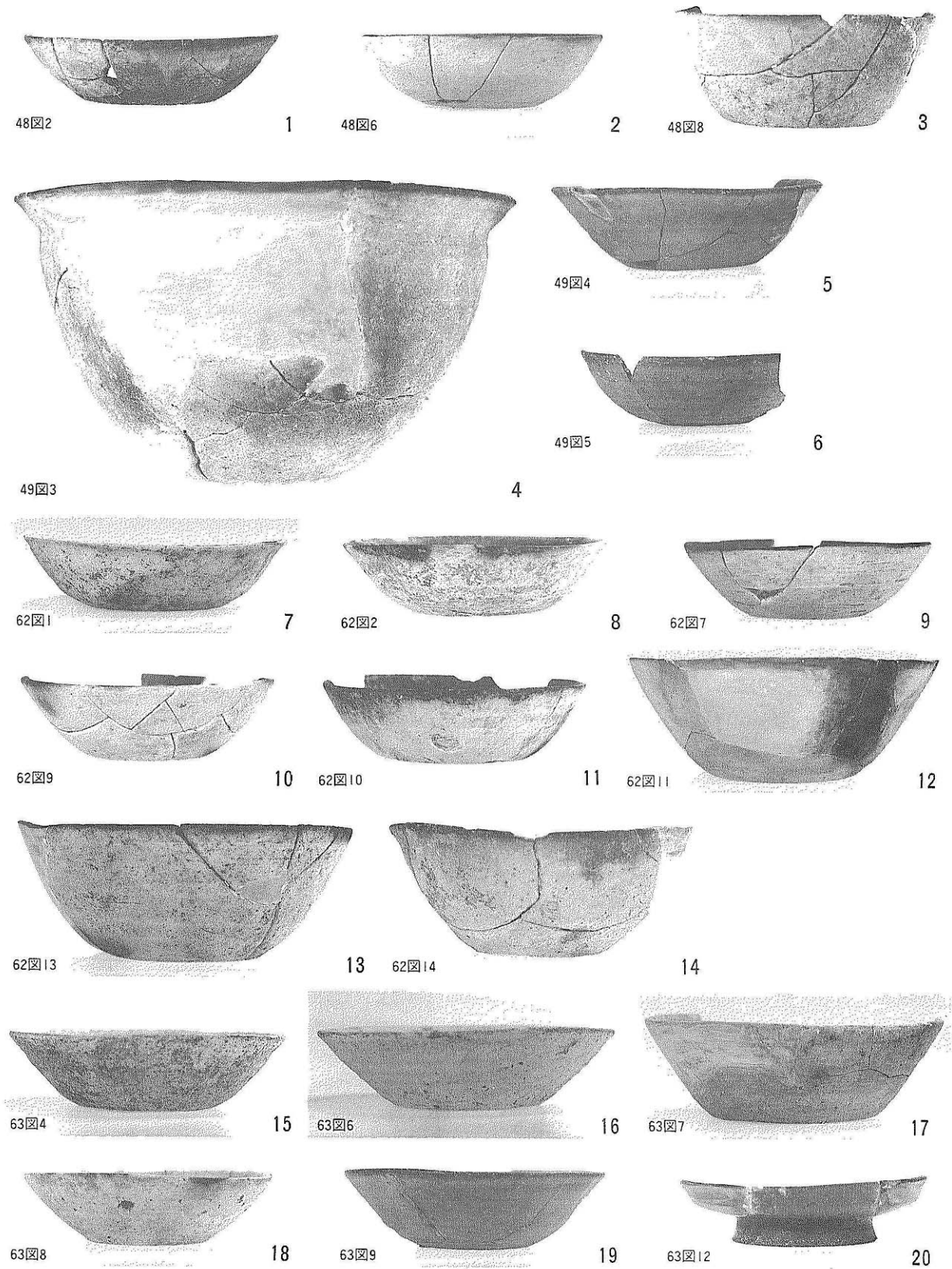
3・9~15・19 : 須恵器杯、16 : 須恵系土器杯、17・18 : 須恵器蓋

12 : 墨書「 」(「斎」の異体字)



図版 10 第 62 次調査出土の土器(2)

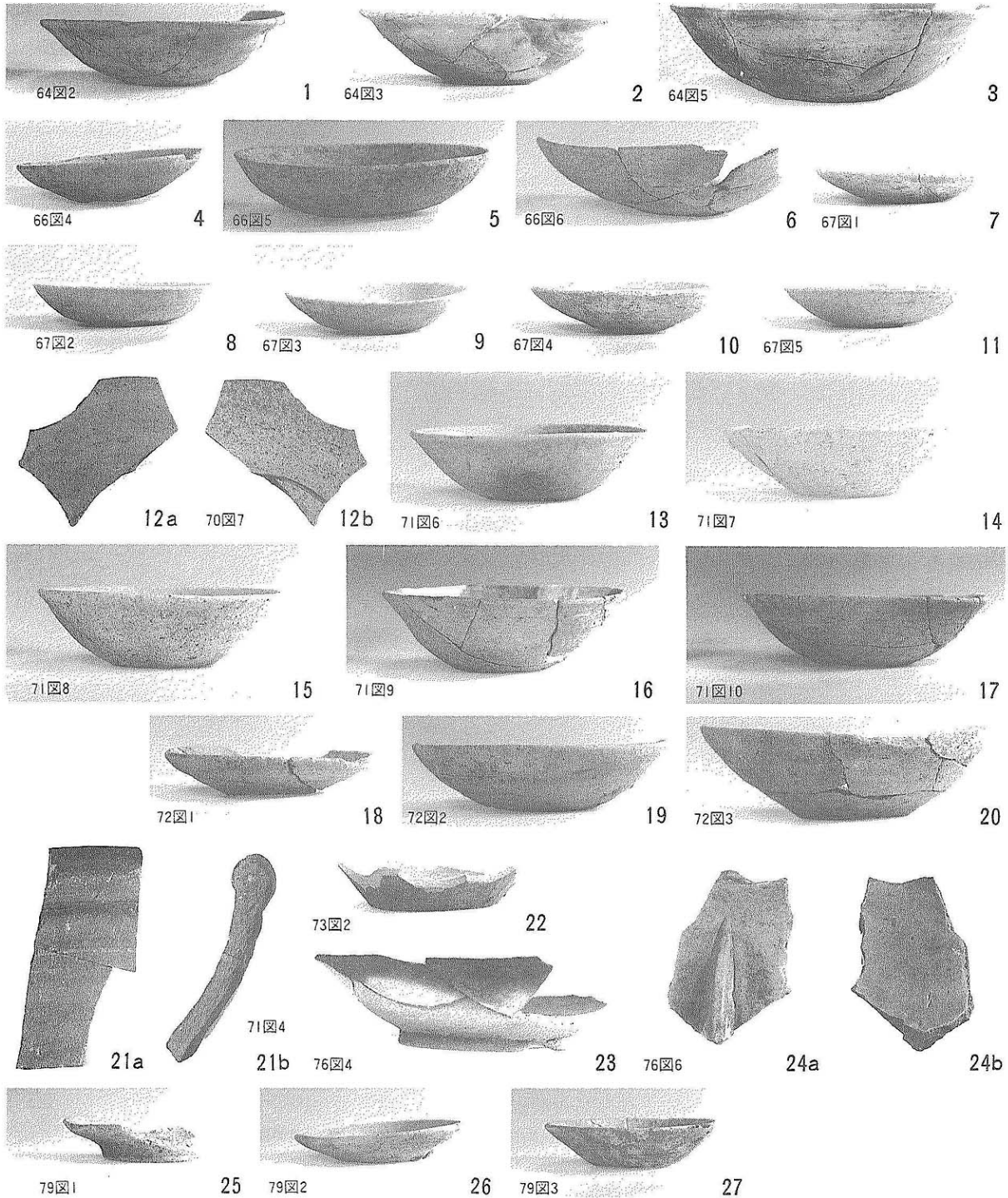
1~12 : SI2160 竪穴住居跡、13 : SI2145 竪穴住居跡、14・15 : SI2159 竪穴住居跡
 1・2・13 : 土師器杯、3 : 土師器皿、4 : 土師器甕、5~8・14 : 須恵器杯、9 : 須恵器蓋
 10 : 須恵器双耳杯、11・15 : 須恵器高台杯、12 : 須恵器横瓶(転用碗)



図版 11 第 62 次調査出土の土器(3)

1～6 : SI2161 竪穴住居跡、7～20 : SK2167 土壇

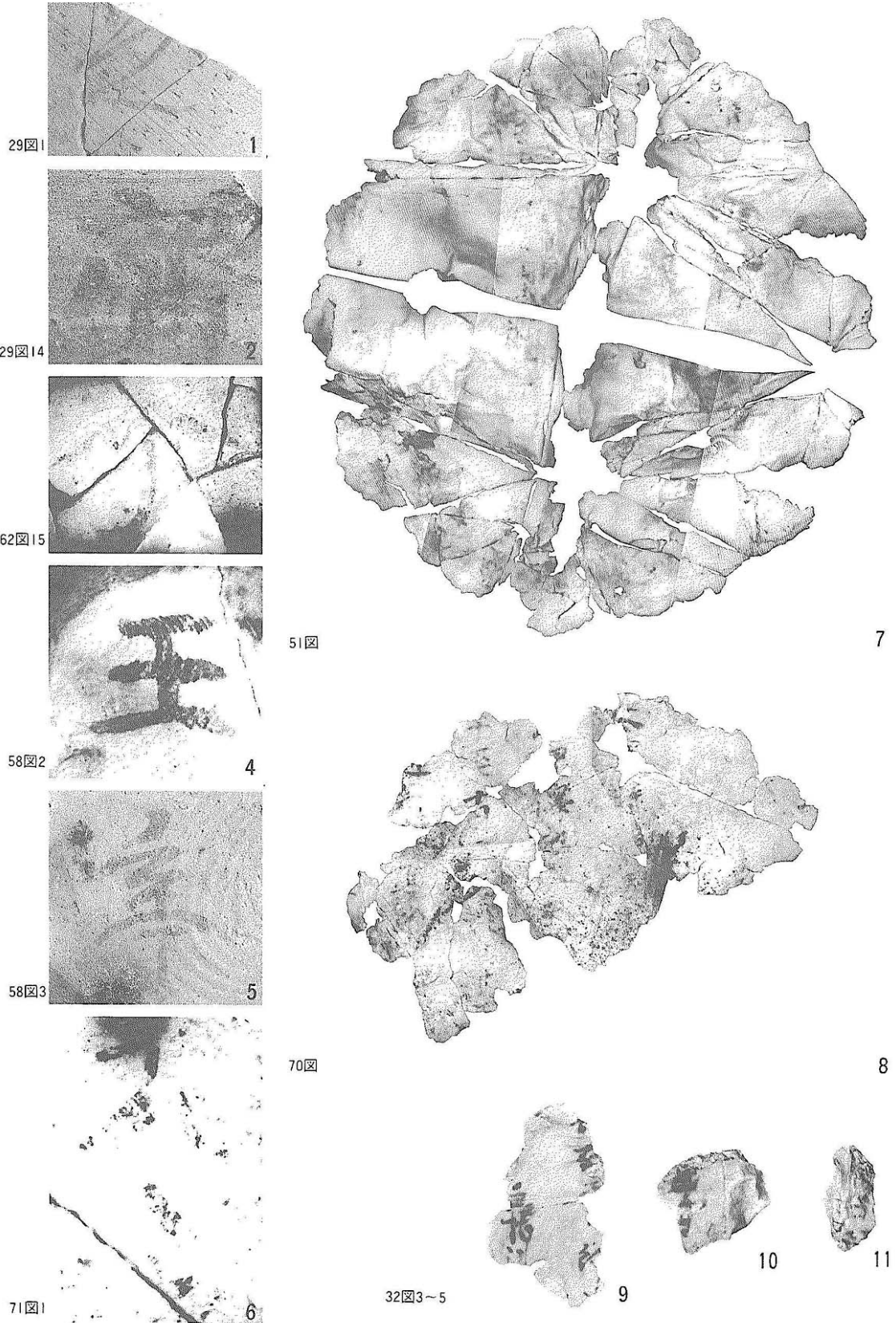
1～3・7～14 : 土師器杯、4 : 土師器甕、5・6・15～19 : 須恵器杯、20 : 須恵器盤



図版 12 第 62 次調査出土の土器(4)

1～3 : SK2168 土壙、4～6 : SK2170 土壙、7～11 : SK2171 土壙、12 : SK2174 土壙
 13～17・21 : SK2175 土壙、18～20 : SK2178 土壙、22 : SK2181 土壙、
 23 : SD2194 土壙、24 : SD2199 土壙

1～3・5・6・13～17・19・20 : 須恵系土器杯、18・27 : 須恵系土器小型杯 B 類
 4・7～11・25・26 : 須恵系土器小皿、21 : 須恵器鉢(西長尾 5 号窯併行篠鉢)
 22 : 須恵器壺、23 : 土師器高台杯、24 : 緑釉陶器四足短頸壺

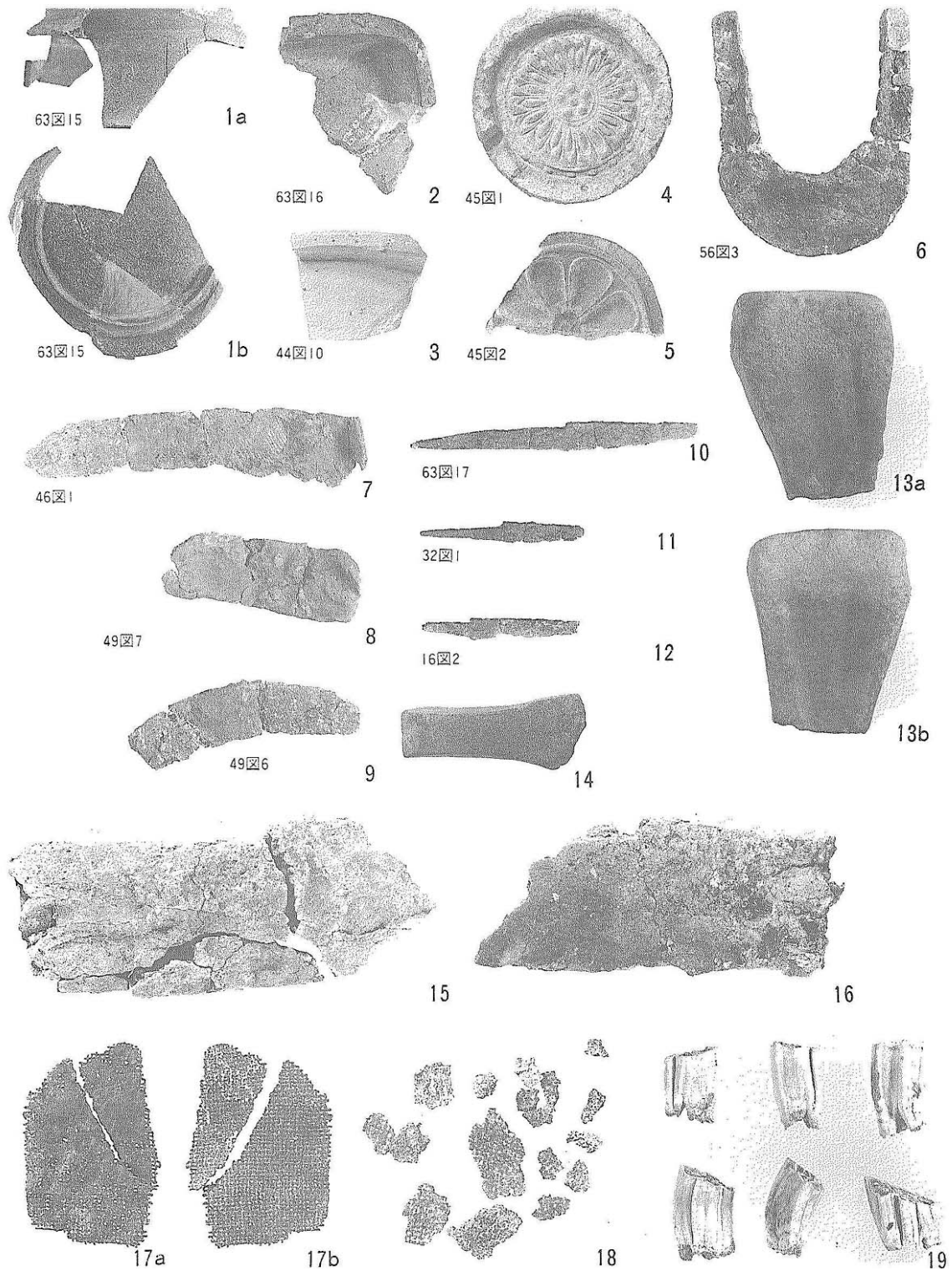


図版 13 第 62 次調査出土の文字資料

1・2・9~11 : SI2153 竪穴住居跡、7 : SI2161 竪穴住居跡、4・5 : SE2165 井戸跡 3 : SK2167 土壙、8 : SK2174 土壙、6 : SK2175 土壙

1~6 : 墨書土器、1 : 「足」、2 : 「𠄎」(「斎」の異体字)、3 : 「介」、4 : 「王」、5 : 「辛」

6 : 不明、7~11 : 漆紙文書



図版 14 第 62 次調査出土の硯・鉄製品など

1・2・10・17 : SK2167 土壙、3・5 : SI2160B 竪穴住居跡、4・7・14 : SI2160A 竪穴住居跡
 6 : SI2164 竪穴住居跡、8・9 : SI2161 竪穴住居跡、11・13・15・16・19 : SI2153 竪穴住居跡
 12 : SB2146 建物跡、18 : SK2201 土壙
 1 : 円面硯、2・3 : 風字硯、4 : 軒丸瓦 310A、5 : 軒丸瓦 431、6 : 鉄鋤先、7~9 : 鉄鎌
 10~12 : 刀子、13・14 : 砥石、15・16 : カマド天井凝灰岩切石、17 : 夾紵、18 : 布
 19 : ウマ上顎歯

図版 15

第 63 次調査建物跡

調査区南東部(東から)
手前は SB1896 建物跡

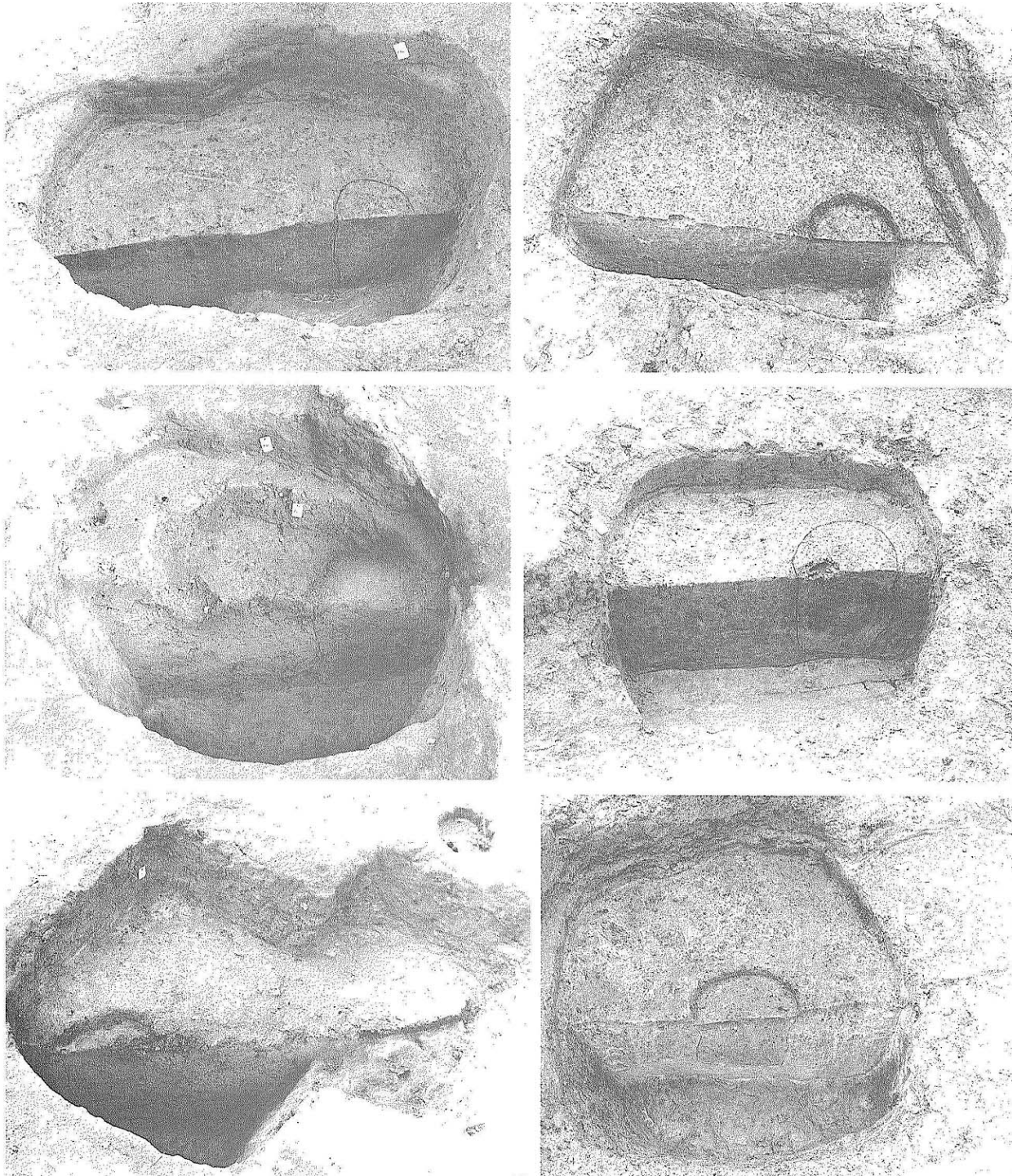


調査区中央南部(南から)
SB2205～2208 建物跡



SB1896 建物跡





図版 16 第 63 次調査建物跡柱穴

上段 左：SB2205 東廂南から 1 間目柱穴

右：SB2205 身舎南東隅柱穴

中段 左：SB2205 北側柱東から 2 間目柱穴

右：SB2205 南入側柱西から 1 間目柱穴

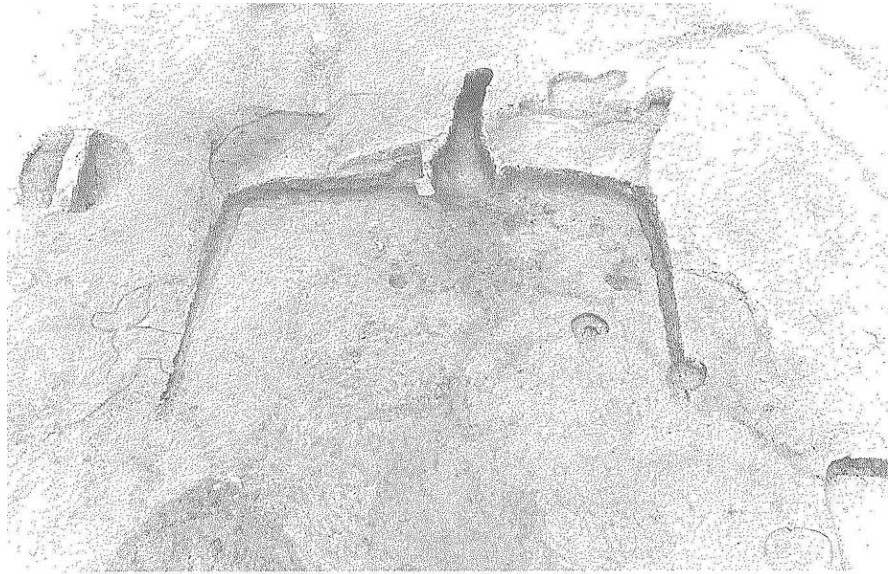
下段 左：SB2205 柱穴と SB2208 北東隅柱穴の重複

右：SB2205 柱穴と SB2207 南東隅柱穴の重複

図版 17

第 63 次調査住居跡
・ 土器埋設遺構

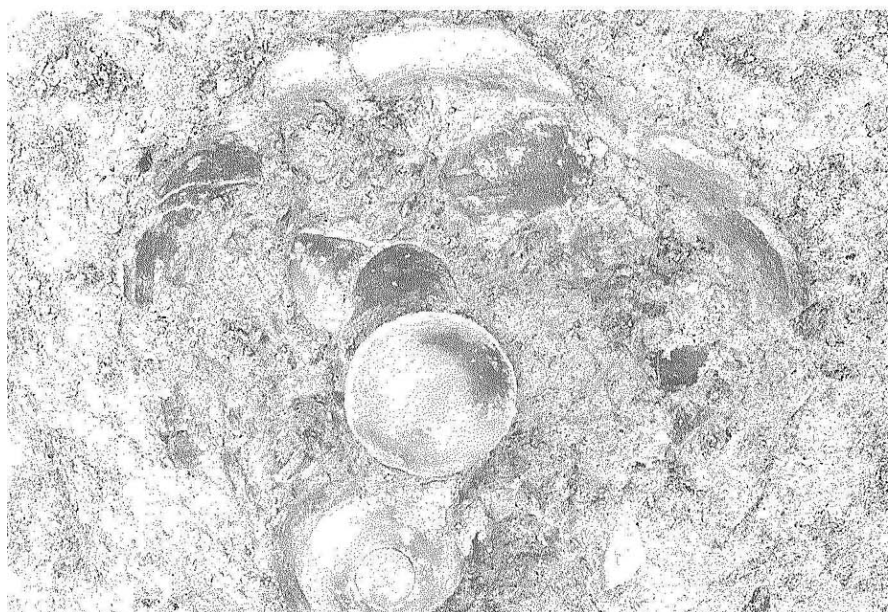
SI2209 住居跡



SI2210 住居跡(手前)
SI2211 住居跡(中)
SI2212 住居跡(奥)



SX2215 土器埋設遺構





图版 18

井戸跡・溝

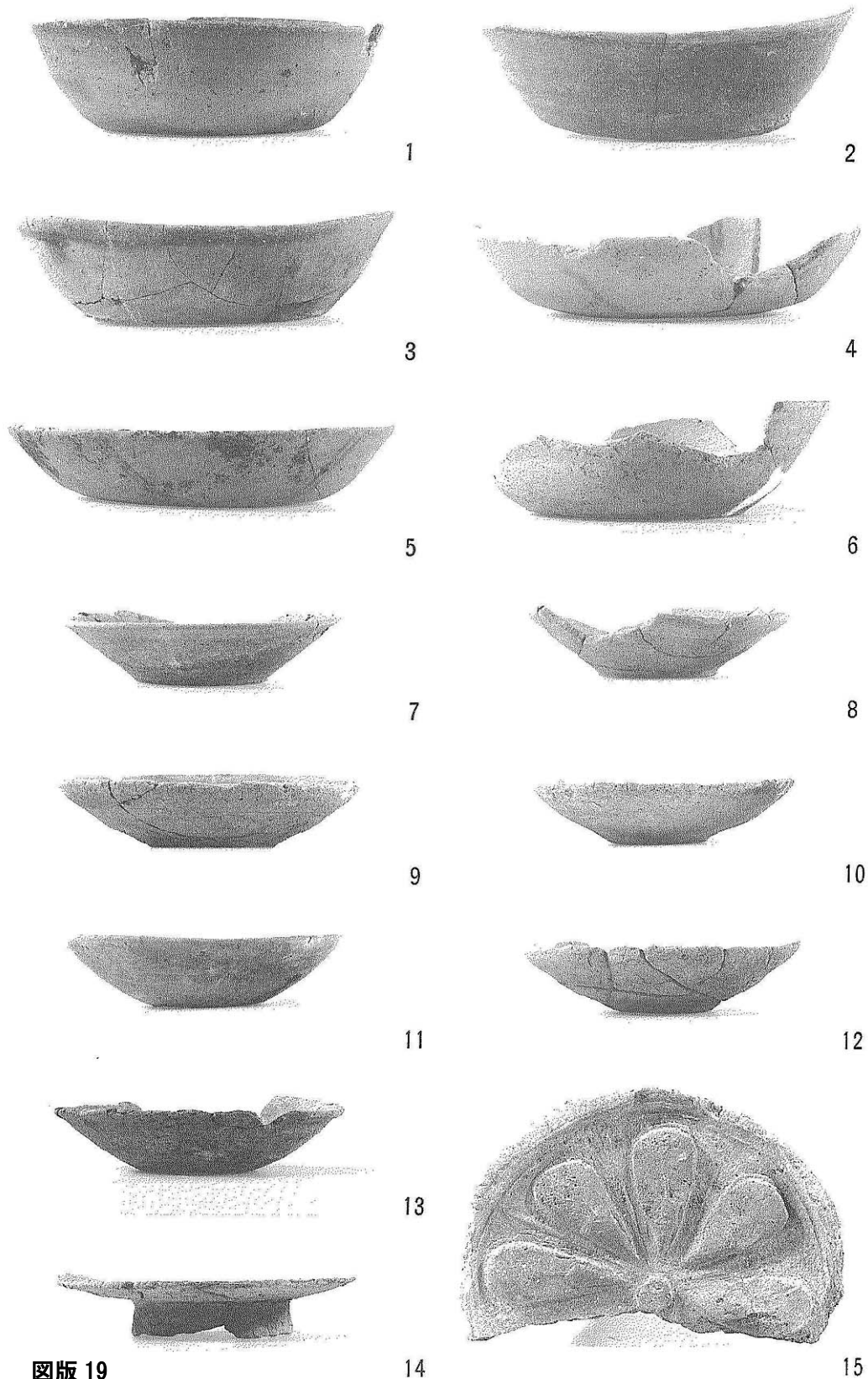
SE2213 井戸跡



SE2214 井戸跡



SD1910 築地大溝



图版 19

- | | | |
|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 1. 須惠器杯(第 88 图 2) | 2. 須惠器杯(第 88 图 3) | 3. 須惠器杯(第 90 图 1) |
| 4. 須惠器杯(第 99 图 1) | 5. 須惠器杯(第 99 图 2) | 6. 須惠器杯(第 99 图 3) |
| 7. 須惠系土器小型杯
(第 94 图 4) | 8. 須惠系土器小型杯
(第 94 图 5) | 9. 須惠系土器小型杯
(第 94 图 6) |
| 10. 須惠系土器小型杯
(第 94 图 7) | 11. 須惠系土器小型杯
(第 94 图 8) | 12. 須惠系土器小型杯
(第 94 图 9) |
| 13. 須惠系土器小型杯
(第 99 图 5) | 14. 須惠系土器小型杯 | 15. 軒丸瓦(第 88 图 4) |

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992

多 賀 城 跡

平成5年3月25日印刷

平成5年3月31日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所

多賀城市浮島字宮前 133

TEL (022) 368-0101

印刷所 小泉印刷株式会社
